

The International Forum for a Nuclear Free World



原発のない世界を求める国際協議会 報告書

2019年5月28日(火)～31日(金)

於：日本聖公会 東北教区主教座聖堂 仙台基督教会 (宮城県仙台市青葉区国分町)
茂庭荘 (宮城県仙台市太白区茂庭)

主催：日本聖公会 原発のない世界を求める国際協議会 実行委員会



原発のない世界を求める国際協議会特祷

すべてのいのちの源である神よ、わたしたちはあなたによって委ねられた被造物を治めよとのご命令に背き、自然資源を乱用し、原発事故によって自然と人びとの生活を破壊しています。どうか、これらの罪をお赦してください。わたしたちがあなたの愛に立ち帰り、苦難の中にある人びとをおぼえ、あらゆるいのちと共生できる原発のない世界を造り出す知恵と力をお与えください。主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

日本聖公会「原発のない世界を求める国際協議会」声明

日本聖公会は、2012年の第59（定期）総会決議「原発のない世界を求めて－原子力発電に対する日本聖公会の立場－」、および同年の日本聖公会宣教協議会「いのち、尊厳限りないもの」で原子力発電に対する姿勢を明確にしました。その具現化のために、2019年5月28日から31日まで、仙台基督教会および茂庭荘を会場にして、11教区の信徒、教区主教を含む聖職と、英国・米国・韓国・台湾・フィリピン各聖公会からの参加者、および日本キリスト教協議会平和・核問題委員会、そして管区正義と平和委員会、管区事務所各主事、実行委員、スチュワードを含む総勢68名が一堂に会し、「原発のない世界を求める国際協議会」を開催しました。

基調講演（仙台基督教会・一般公開）はドイツからミランダ・シュラーズ氏を招き、「エネルギー政策の大転換をしたドイツから」と題して、第二講演は川上直哉牧師から「十字架ヲ通ツテ光へ～苦難の中からの声・惨禍の中の祈り」と題して、また、台湾（頼榮信 ライ・ロンシン主教）、韓国（金基錫 キム・ギソク司祭）、日本（相澤牧人司祭）からの発題を受け、二度にわたるグループシェアリングを通して原発のない世界を求めるための学び、語り合いの時を持ちました。そして、参加者一同は、以下の声明を採択し、呼びかけます。

いのちの尊さを確認し、そのいのちを生きるために ～原発のない世界を求めて～

2011年3月11日の東日本大震災によって発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故やその被害は、それまでの安全神話を完全に打ち砕き、原子力発電は極めて危険なものであることを気づかせました。私たちはこの原子力発電の問題をいのちの尊厳から捉えることが、極めて大切であると考えています。

原子力発電は稼働する限り危険な放射性廃棄物を生み出し続けます。本当の安全とは何か。いのちあるものが生きる上での安全とは、危険な廃棄物をこれ以上増やさないとということでしょう。また、原子力発電を考える時、「核兵器」と「原子力発電」は「一つのコインの裏と表」であり、その技術はいつでも核兵器への転用が可能であることを意味し、平和に生きる権利を脅かします。

これ以上原子力発電に依存する経済優先の社会を続けるべきではなく、そのためには節電・省エネに取り組むことはもちろん、再生可能エネルギーへの政策転換を行い、新たな道を歩むべきでしょう。原子力発電は電気を作り出す過程の中で、地球温暖化の原因ともなっています。また、原発事故は起きると取り返しがつかず、他のどんなエネルギー源よりも危険であることを私たちは再認識しました。8年たった今も深刻な影響が残る一方、時が経つにつれ被災された方々の痛みや苦難を忘れがちな私たちがいます。原発のない世界を求める国際協議会特祷の中で「わたしたちはあなたによって委ねられ

た被造物を治めよとのご命令に背き、自然資源を乱用し、原発事故によって自然と人びとの生活を破壊しています。どうか、これらの罪をお赦しください。わたしたちがあなたの愛に立ち帰り、苦難の中にある人びとをおぼえ、あらゆるいのちと共生できる原発のない世界を造りだす知恵と力をお与えください」と祈りました。

原子力発電から解放された世界を目指す旅をし、「フクシマの出来事の証言者」であり続けていくために、私たちは以下のことを呼びかけます。

- ・ 東日本大震災がもたらしているさまざまな出来事を見つめ、証しし続けること。
- ・ 原発事故が起きれば、取り返しのつかない事態になることを認識し続けること。
- ・ 日本聖公会に「福島週間（仮称）」を創設し、“あの出来事”が語ることを聴き、学び、いのちを尊び、平和に生きる社会の実現へと歩み続けること。
- ・ 脱原発のための国内外のネットワークを強化・充実させること。
- ・ 未来を受け継ぐ次世代のために、原発による負の遺産をこれ以上残さないこと。
- ・ 各教区に自然エネルギーによるモデル教会をつくり、方向性を指し示すこと。
- ・ 各個教会が自然エネルギーへ転換する時の融資制度を、日本聖公会に設けること。
- ・ 宣教の5指標の一つである「被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること」に具体的に取り組むこと。

これらを通して原発のない世界を求める歩みを続けて行こうではありませんか。

荒れ野で叫ぶ者の声がする。「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。」

（マルコによる福音書 第1章3節）

2019年5月31日

日本聖公会「原発のない世界を求める国際協議会」参加者一同

原発のない 世界を求める 国際協議会 報告書

目次

原発のない世界を求める国際協議会特稿

「原発のない世界を求める国際協議会」声明

1. はじめに

- 1 1-1. メッセージ：日本聖公会の宣教と「原発のない世界を求める国際協議会」
日本聖公会 首座主教 植松 誠
- 2 1-2. メッセージ：「原発のない世界を求める国際協議会」に向けて
カンタベリー大主教 ジャスティン ウェルビー
- 3 1-3. 国際協議会会長挨拶 主教 上原 榮正

2. プログラム

- 6 2-1. スケジュール
- 8 2-2. 参加者名簿
- 10 2-3. 基調講演
「エネルギー政策の大転換をしたドイツから」
ミュンヘン工科大学 教授 ミランダ シュラーズ
- 28 2-4. 講演
「十字架ヲ通ッテ光へ～苦難の中からの声・惨禍の中の祈り～」
日本基督教団石巻栄光教会 牧師、東北ヘルプ 事務局長 川上 直哉
- 37 2-5. 発題 台湾聖公会 主教 ^{ライ ロンシン} 賴 榮信
- 38 2-6. 発題 大韓聖公会 司祭 ^{キム ギンク} 金 基錫
- 40 2-7. 発題 日本聖公会 司祭 相澤 牧人
- 45 2-8. グループシェアリングで話し合われた事柄
- 56 2-9. 礼拝説教／メッセージ
開会礼拝 首座主教 植松 誠
夕の祈り 大韓聖公会 議長主教 ^{ユ ナクジュン} 兪 樂 濬
昇天日 聖餐式 主教 磯 晴久
夕の祈り 主教 武藤 謙一
閉会聖餐式 主教 上原 榮正

	3. 関連資料
68	3-1. 5月27日 海外ゲストのフィールド・ワーク
70	3-2. 5月30日 被災地巡り
72	3-3. 参加者の声
74	3-4. パネル展示
76	3-5. スライド
92	3-6. おさらい資料「東京電力福島第一原子力発電所事故、そして今」
102	3-7. 持続可能エネルギーに関するアンケート結果報告書
114	3-8. 記事掲載 Anglican Communion News Service キリスト新聞 日本聖公会 教区報 日本聖公会 管区事務所だより
136	3-9. 東日本大震災から国際協議会までの歩み
138	3-10. 声明、他
143	4. 協議会収支報告
145	5. あとがき



メッセージ:

日本聖公会の宣教と「原発のない世界を求める国際協議会」



日本聖公会 首座主教
ナタナエル 植松 誠

主に在る兄弟姉妹の皆様の上に主の平和がありますように。

去る2019年5月28日～31日、私たち日本聖公会は、仙台の地で「原発のない世界を求める国際協議会」を開催し、すべての教区から主教、聖職、信徒、管区の諸委員、スタッフ、他教派代表の方がそれに参加しました。また、世界の聖公会からも多くの方々が参加してくださいました。講師にミランダ シュラーズさん（ドイツ・ミュンヘン工科大学教授）、また川上直哉牧師（東北ヘルプ・日本キリスト教団石巻栄光教会）をお招きできたことは、大きな喜びでした。協議会の内容については、この報告書の中で詳細に述べられることと思いますので、ここではそれについてはお話ししません。

協議会の最中、海外からのゲストの方々と何度も話し合う機会がありました。その中で、何人かから、日本聖公会にとって、この協議会はどのような意味があるのかということをお問われました。別の言葉で言うならば、日本聖公会の福音宣教の中で、この会議の位置づけ、また、この会議を通して、日本聖公会は日本国内で、また世界の聖公会に何を伝えようとしているのかということでした。その方々が、本国に帰って報告する時に、単にこの協議会のことだけではなく、その背景となる日本聖公会の宣教の精神、神学のようなことも伝えられるようにということだったと思います。

あるゲストは、東日本大震災による東京電力福島第一原発事故が起きたが故に、原発の問題が日本聖公会の中で取り上げられているのかと聞いてきました。私はそれに対して、それはもちろん否定できないが、それよりずっと以前から、日本聖公会の宣教の課題として、この問題が起きた時には当然取り組まざるを得なかったと話しました。

それは、1995年の山梨県清里での宣教協議会にまで遡ります。戦後50年を迎えた日本聖公会が、それまでの過去を振り返り、反省と悔い改めに立って、日本聖公会の戦争責任を告白しました。そして、翌年の日本聖公会総会においては、それに基づいた「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」が採択されました。この時の宣教協議会での協議の内容や総会での宣言が、日本聖公会の隅々にまで伝えられ、皆でそれを共有できたかということ、決してそのようにはならなかったというのが真実であったと思います。そのために、2012年9月、浜名湖畔で開かれた日本聖公会宣教協議会では、再度、そこに脚光を当てて、今の私たちの日本聖公会として、何をどのように宣教するかが真剣に話し合われたのではなかったでしょうか。

1995年の宣教協議会、また2012年の宣教協議会を経て、その後の宣教の「成果」については、いろいろな考え方や評価はあると思います。しかし、私がこの14年間、首座主教として、海外の諸教会、また国内の諸教派・諸宗教と関わってきた中で、日本聖公会の宣教の根底には、いつもこれらの宣教協議会での理念が息づいていたと思います。それは、「私たちを平和の器にしてください」ということと、私た

ちが、「社会の中で差別されている人たち、小さく弱くされている人たち、周辺化された人たちと共に歩む」ということでした。日本聖公会の平和を求める活動、日韓の問題、沖縄の問題、部落差別問題、また自然災害時での被災者支援活動、例えば東日本大震災における「いっしょに歩こう！プロジェクト」などへの取り組みは、この基盤に立ってきたのだと私は思っています。そして、また、そのような理念を生きるために、私たちは教会の礼拝、信仰生活、奉仕、学びについても様々な試みを続けてきたのだと思います。

1995年日本聖公会宣教協議会以降、このような日本聖公会の宣教の理念と活動は、海外でも高く評価されてきました。日本聖公会は世界でも小さな管区ではありますが、世界の聖公会に寄与できたことは大きかったと私は信じています。協議会中、海外からの参加者との話し合いの中で、今回の協議会は、1995年以降の日本聖公会の歩みの中で、私たちが希求してきたひとつの確固たる宣教の理念に則ったものであることを確認できたと思います。

「原発のない世界を求める」ことは、これからも日本聖公会が国内で、また世界の教会に提唱していくべき大事な宣教の課題だと思います。

「原発のない世界を求める国際協議会」に向けて

悪から遠ざかり、善を行ない、平和を願って、これを追い求めよ。

(ペトロの手紙1 3:11)

原発のない世界を求める国際協議会に集まっておられる皆さまに、ご挨拶を申し上げます。この協議会は、世界に平和と安全をもたらし、核という脅威やその危険から脱却し、真に人間らしい社会へと人々を集めようとする先駆的働きで、称賛に値します。これは、神さまがその子供たち、つまり私たちに対して望んでおられることです。

皆さまはこれまで、広島、長崎、そして福島その他において、核による悲惨な苦しみを受けて来た人々の苦しみを和らげるべく、倦むことのない努力をして来られました。しかしながら、こうした核災害の影響は今もなお、人々の生活に悲惨な影を落としています。平和を求め、神さまが創られたこの世界を、皆さまが一つになって守ろうとするこの取り組みに対して、私は心からの賞賛を送りたいと思います。これらの取り組みは、神さまが私たちに求めておられる、私たちの使命でもあります。

皆さまは、原子力政策や軍需産業を取り巻く諸問題に対処すべく集まっておられますが、私たちも皆さまと共にあります。この国際協議会は実に時代の必要に適ったもので、皆さまの集まりに対しお礼を申し上げます。この神さまからの召命に、皆さまが誠実に応えることができますよう、神さまが勇気を与えて下さることをお祈りいたします。

私たちの属するアングリカン コミュニオンは、国や民族の隔てを越えて私たちを結び合わせてくれます。今も核による災害によって傷み、悲しんでいる人々のために共に祈ると共に、今後の世界の安全と平和のために、共に取り組んでいかねばならないことを、改めて認識したいと思います。

全能の神が皆さまを祝福し、平和を賜りますことを・・・。

+ Justin Cantuar:



ジャスティン ウェルビー
カンタベリー大主教
イングランド全土ならびにメトロポリタン首座主教
ロンドン、ランベスパレス

※この文章は国際協議会開催に寄せて2019年1月に送られたメッセージです

国際協議会 会長挨拶：

「原発のない世界を求める国際協議会を終え、報告書作成に当たって」

主の平安をお祈りします。

2019年5月28日～31日、仙台の茂庭荘を会場にして、68名の参加者と共に、「原発のない世界を求める国際協議会」が開催されました。

基調講演では、ミランダ シュラーズ博士から、「エネルギー政策の大転換をしたドイツから」のお話を伺い、日本は自然に恵まれた環境にあり、再生可能エネルギーへ転換しても、十分にエネルギーを賄えることを学びました。

次に、東日本大震災の際に立ち上げられた被災者支援ネットワーク・東北ヘルプの事務局長・川上直哉牧師から、被災者の声をお聞きしました。その後、台湾、韓国、日本から発題を頂き、グループに分かれて討議を行い、最後に参加者によって声明文を作成しました。

声明文作成の討議では、多く意見が出されましたが、表明の有り方によっては、被災者を傷つけることにもなるという参加者の意見もあり、最終文案は「原発のない世界を求める国際協議会実行委員会」に委ねられ、今回の声明となりました。

ところで、沖縄戦では戦争体験者の多くが、あまりの戦争の悲惨さ故に、家族にも語り伝えていません。体験者が高齢化し減少していく中、戦争の風化と平和の尊さが叫ばれ、体験者の声を残す努力がされております。

今回の福島原発事故でも、被災者に寄り添うと共に、被災の実態が看過されることなく、原発の危険や放射能被害の恐怖が風化され、忘れ去られることがないように祈ります。この報告書が、原発への警鐘、私たちの生活と自然や環境への配慮を考える端となればと願います。

最後に、国際協議会の準備と開催、開催中のご苦勞、報告書の作成など、実行委員会とご参加下さった皆さまのご協力、ご努力に感謝を申し上げます。



2 プログラム

- 2-1. スケジュール
- 2-2. 参加者名簿
- 2-3. 基調講演
「エネルギー政策の大転換をしたドイツから」
ミュンヘン工科大学 教授 ミランダ シュラーズ
- 2-4. 講演
「十字架ヲ通ッテ光へ～苦難の中からの声・惨禍の中の祈り～」
日本基督教団石巻栄光教会 牧師、東北ヘルプ 事務局長 川上 直哉
- 2-5. 発題 台湾聖公会 主教 ^{ライ ロンシン} 賴 榮信
- 2-6. 発題 大韓聖公会 司祭 ^{キム ギソク} 金 基錫
- 2-7. 発題 日本聖公会 司祭 相澤 牧人
- 2-8. グループシェアリングで話し合われた事柄
- 2-9. 礼拝説教／メッセージ
 - 開会礼拝 首座主教 植松 誠
 - 夕の祈り 大韓聖公会 議長主教 ^{ユ ナクジュン} 兪 樂 濬
 - 昇天日 聖餐式 主教 磯 晴久
 - 夕の祈り 主教 武藤 謙一
 - 閉会聖餐式 主教 上原 榮正



スケジュール

5月28日（火）			5月29日（水）		
			7:00	朝食 ※ビュッフェ形式 ※8:30終了	レストラン けやきの杜 (ひろせ館1F)
			9:00	朝の祈り ・司式：小野寺 達司祭 ・メッセージ： ジョエル パチャオ主教	大会議室 (なとり館1F)
			10:00	講演 川上直哉師	大会議室 (なとり館1F)
			12:00	昼食	レストラン けやきの杜 (ひろせ館1F)
13:00	集合・受付	仙台基督教会	13:30	発題 ・台湾（賴 榮信 ^{ライ ロンシン} 主教） ・韓国（金 基錫 ^{キム キソク} 司祭） ・日本（相澤 牧人司祭）	大会議室 (なとり館1F)
14:00	開会の祈り 基調講演 ※一般公開 ミランダ シュラーズ師	仙台基督教会	15:30	グループシェアリング①	第1～7会議室 (なとり館1F)
17:00	茂庭荘へ移動		18:00	夕の祈り ・司式：北澤 洋司祭 ・メッセージ： ユ ナクジュン ^{ユ ナクジュン} 俞 樂 潛主教	大会議室 (なとり館1F)
18:00	開会礼拝 ・司式：越山 哲也司祭 ・説教：植松 誠主教 オリエンテーション	茂庭荘 大会議室 (なとり館1F)	19:00	夕食	レストラン けやきの杜 (ひろせ館1F)
19:00	夕食	レストラン けやきの杜 (ひろせ館1F)	20:00	持ち寄りパーティー	大会議室 (なとり館1F)
20:00	交流会	大会議室 (なとり館1F)			

5月30日（木）		
7:00	朝食 ※ビュッフェ形式 ※ 8:30 終了	レストラン けやきの杜 (ひろせ館 1F)
9:00	聖餐式（昇天日） ・司式：吉田 雅人主教 ・説教：磯 晴久主教 ・補式：瀬山 会治司祭 越山 哲也司祭 柳原 健之執事	大会議室 (なとり館 1F)
10:00	グループシェアリング②	第3～7会議室 (なとり館 1F)
12:30	昼食	レストラン けやきの杜 (ひろせ館 1F)
13:30	自由時間 被災地巡り ※希望者 (候補地 関上地区、荒浜地区)	
17:30	声明全体討議	大会議室 (なとり館 1F)
18:30	夕の祈り ・司式： ウイルソン ウォーレン司祭 ・説教：武藤 謙一主教	大会議室 (なとり館 1F)
19:00	フェアウェル パーティー	屋外BBQ

5月31日（金）		
7:00	朝食 ※ビュッフェ形式 ※ 8:30 終了	レストラン けやきの杜 (ひろせ館 1F)
9:00	声名採択	大会議室 (なとり館 1F)
9:30	閉会聖餐式 ・司式：植松 誠主教 ・説教：上原 榮正主教 ・補式：柴本 孝夫司祭 越山 哲也司祭 渡部 拓執事	大会議室 (なとり館 1F)
10:30	解散	
11:00	茂庭荘から仙台駅へ出発	

エネルギー政策の大転換をしたドイツから

ミランダ シュラーズ

ミュンヘン工科大学 教授

2019年5月28日

※以下は、基調講演の録音を原稿に起こし、更に報告書のために書き直したものです。「高速増殖炉」などを初めとする言い難い言葉や、化学、物理の分野の専門用語に苦慮しながらも、流暢な日本語での講演でした。母語が英語で、ドイツ語に堪能なミランダ博士の表現には興味深いものがあり、書き直すにあたっては、なるべくミランダ博士の言葉を尊重しようと心がけました。また、ミランダ博士は、講演のために作成したスライドを快く渡してくれました。スライドには全く手を加えておりませんが、紙面の都合上ご理解ください。

皆さん、こんにちは。こんなに立派な教会で講演することが出来て、とても嬉しく思っています。また、こんなにたくさんの方に来て頂いて、ありがとうございます。

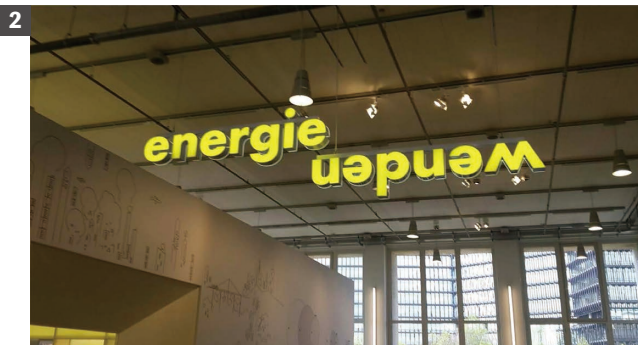
私はアメリカ人で、ドイツに住んでいます。毎日ドイツ語で話をしていますが、母国語は英語です。今日は日本語でお話しをしますが、日本語はなかなか使う機会がないので少し心配です。言葉が思い出せない時は、皆さん手伝ってください。通訳の方も、間違った時は訂正をして通訳をしてください。

2011年3月に非常に暗い出来事があり、このことがあって私は今ここで話をしてしています。ドイツも、日本と同じように原子力との関わりには長い歴史があります。そして、日本と良く似ている所もありますが、違う所もあります。ですから、お互いに学び合えるので

はないかと思います。今日は、一緒に考える良い機会にしましょう。

スライド2：まず、ドイツ語の勉強をしましょう。これはドイツの博物館で撮った写真です。私はドイツの南にあるミュンヘン市で教えていますが、ミュンヘン市には大きな博物館があります。その博物館が特別な展示会をしました。私はその展示会のアドバイザーでした。写真に energie wenden (エネルギー ヴェンデン) と書いてあります。energie (エネルギー) は皆さんわかんと思います。wenden は「転換」という意味です。wenden が逆さまになっているのは、私たちのエネルギーに対する考え方を大きく転換しなければ、将来が大変なことになるのではないか、という考え方を示しています。

スライド3：ドイツでは、エネルギー転換が大切な政策の一つになりました。エネルギー転換という時、いくつかの転換を同時に考えなければなりません。なぜなら、原発を長年使って来た国が脱原発に政策転換をすると、当然他のエネルギー供給について考える必要が出て来るからです。かといって、石炭を使うのも良くない。ですから、原発の話と、地球温暖化の話、再生可能エネルギーの話、あるいは、今日会場まで車で来た方、何人いますか？燃料は電気ですか？ガソリンですか？運輸の転換も必要です。そして、この建物にはエアコンがついていますが、その転換も必要ですね。つまり、ドイツでエネルギー転換の話をする時、そこには色々な意味が含まれます。今日は、全部の話に触れることは出来ませんが、特に脱原発の話と、再生可能エネルギー導入の話と、最近の新しい政策である脱石炭の話をしてします。ドイツが今、どこに向かっているかということ、「新しいエネルギーの世界」への転換です。つまり、再生可能エネルギーへの転換に加え、エネルギーをなるべく使わない世界への転換です。



4

原子力は1960年代に受け入れられました。

最初の原子力発電所は1969年に操業を開始しました。



スライド4：まず歴史から始めましょう。

ドイツも日本も工学の進んでいる国ですね。この会場に工学者はいますか？多分、何人かいらっしゃるとは思います。日本はドイツと一緒に、工学の国とされています。1960年代は、大変な戦争を乗り越えてドイツも日本も新しい国を作ろうとしていた頃だったと思います。新しい国づくりのために、新しい技術を取り入れようとしていました。その1つが原子力です。

スライド右側の写真はドイツで最初に造られた原発で、1966年に完成しました。会場に韓国の人たちもいらっしゃいますが、ドイツは韓国と同じように、1つの国が2つに別れていました。西と東があって、スライド左側の写真は、東ドイツにあった原発です。これは、ドイツの歴史の中で非常に大切なことなのですが、西と東がありましたから、競争もありました。そして、この競争は経済的な競争だけではありませんでした。冷戦があって、どちらの国がより強くなるのか、どちらかの国が核兵器を使うようになるのではないかと、などという心配を、人々が少しずつ持つようになりました。1960年代は、ドイツ人のほとんどが原子力を推進していました。日本もそうだったと思います。多くの人が、この技術は将来的にも素晴らしいものだと思っていました。しかし、1960年代は前向きな時代だけではなく、色々な意味で世界情勢が大きく動いた時代でした。ベトナム戦争があり、学生運動や女性の運動が活発になった時代です。それまでの国の政策に対し、疑問を抱く人たちの声も大きくなりました。

スライド5：スライド左の写真は、私の住んでいるミュンヘン市での抗議活動の写真です。1960~70年代に入ると、やはり原子力はそれほど素晴らしいものではない、という考え方が少しずつ社会の中に広がって行きました。この頃、ミュンヘン市に Wackersdorf という核再処理工場を作ろうとしていました。これは、そ

5

Wackersdorfの核再処理工場の計画に 反対してミュンヘンで抗議行進

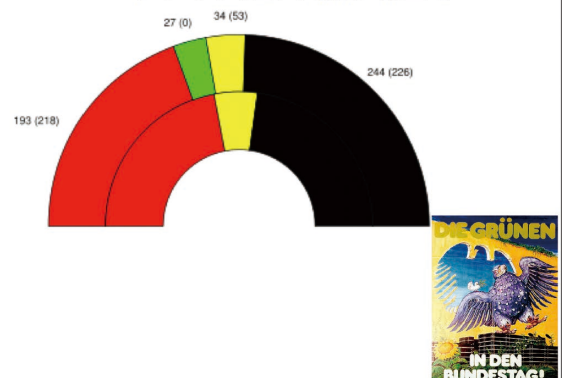


の反対運動の様子です。今では考えられない位大勢の人が反対の声をあげました。

右の写真は、最近作られた映画のポスターです。Wackersdorfの反対運動の歴史を、若い人たちに紹介しています。次の世代に、なぜWackersdorfの核再処理工場建設計画に反対をしたのか、どうしてこれが危険なと思ったのか、ということを紹介しています。ドイツは冷戦があり、西と東に別れていました。そして、1980年代になるとアメリカが核兵器をドイツに置いておくことを決めました。写真のような反対運動は、色々な反対の動きに発展しましたが、その1つは「原子力は私たちの近くには建設して欲しくない」という動きです。原発は危険なと思ったからです。もう1つは「原発があるとすぐに核兵器が作れるから、戦争との関わりが心配」というものです。特に当時は東西に別れていたもので、いつ戦争になるかという心配がいつも頭にありました。

6

1983年ドイツ連邦議会選挙



スライド6：1983年になると、「緑の党」がドイツの国会、ブンデスターグに入ることが出来ました。ブンデスターグに入った時は、このグラフの通りでした。黒が「キリスト民主党」です。キリスト民主党は常に原発を推進していて、ビジネスと関係の強い党でした。

そして赤が「社会民主党」、労働者の党でした。この頃の社会民主党の原発に対する考え方は、キリスト民主党とそれ程変わりなく、原発は必要だと考えていました。あとは黄色の小さな党がありましたが、そこに初めて緑の党が入って来て、27議席を占めました。緑の党は小さな党で、ほとんど影響力のない党だろうとみんな思っていました。しかし、緑の党がブンデスターグに入って、随分ドイツの政治文化を変えました。

どこを変えたかという点、ブンデスターグではみんながこの会場のように座っていて、その頃は男性だけでしたので、みんな黒っぽい服を着ていました。そこに3人の女性が花を持って入って来て、緑の党の男性たちもスーツではなくて、ブルージーンズとTシャツを着て、全然違う文化をブンデスターグに入れました。このような外見の違いだけではなく、話し方やその内容も変わりました。核兵器をドイツに入れるとまた戦争になるのではないかと、原発をもっと作ると危ないのではないかと、などの議論をドイツ議会に持ち込みました。

7



チェルノブイリ原発事故 1986



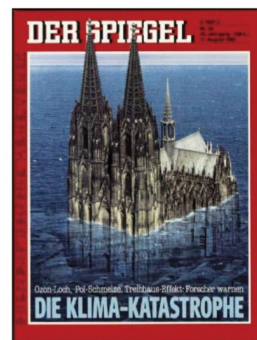
スライド7：1986年、チェルノブイリの原発事故が起きました。原発が爆発をして、こんなことは信じられない、と世界中がびっくりしました。しかし、「ソ連の技術だから事故が起きた」という考え方が主流でした。キリスト民主党、社会民主党にも、「これはソ連の技術だから。ドイツの原発ならこういうことは起こり得ない」という声がありました。しかし、何かが変わり始めました。

DER SPIEGELという雑誌があります。これはニュースの雑誌で、多くの人が読んでいます。スライドは1986年のDER SPIEGELの表紙です。何が書いてあるかというと、まず（左画像）Ausstiegは「脱」、kern-energieは「原発」です。"Ausstieg aus der kern-energie?"です。「脱原発になりますか?」という意味

です。1986年のニュース雑誌が、表紙の関連記事にこのようなことを書いています。中央の画像のANGST, ドイツ語の「怖い」、「私は心配している」という意味です。右の画像に書いてあるのは、"Mörderisches Atom", 「人間を殺す原発」と書いてあります。つまり、チェルノブイリの事故がドイツの中の議論を変えたのです。チェルノブイリはソ連にあります、ドイツにも原発がたくさんあります。そしてドイツはソ連からそれほど離れていませんから、やはり危ないのではないかと、というような話が出て来ました。先ほどの社会民主党が、脱原発が必要だと言い始めました。そうすると、ドイツ議会の半分近くが脱原発と言い始める。ここは日本と大きな違いですね。日本ではチェルノブイリはもちろん、皆さんも（福島の事故を）経験したと思いますが、ドイツほどのインパクトは日本にはなかったように思います。日本にもそういう脱原発の動きも一応ありましたが、小さかった。

8

June 1986 *Der Spiegel* special issue: The Climate Catastrophe



スライド8：この画像も1986年のDER SPIEGELですが、「Klima-katastrophe」と書いてあり、地球温暖化の話題が載っています。1986年代に地球温暖化の問題と原発の問題を掲載した、大切な雑誌です。ドイツではこの頃から社会の中でこういう議論が活発になり、「原発はやはり必要だ」「原発は近代的だ」という議論に加え、「脱原発は必要だ」という議論が始まりました。地球温暖化の問題が少しずつみんなの意識にのぼり始めたのです。この表紙の写真はどこか分かりますか?とても有名なケルン大聖堂です。ケルン市はドイツの西側、オランダに近い所にあります。この教会は1200年くらいに建てられたとても綺麗な教会です。象徴的に水の中に建っています。なぜかという点、もし地球温暖化が進んで海の水位が高くなると、ドイツの将来がこうになってしまうのではないかとという心配が、話題に上ったからです。

社会民主党と緑の党連合(1998-2005年)の 新しいエネルギー政策

原子力発電の廃止
エコ税
再生可能エネルギー法



Joschka Fischer

スライド9：私は政治学を勉強しているので、政治の話にも触れたいと思います。1986年にチェルノブイリ原発事故がありました。ドイツがすぐに脱原発をしなかった理由は、キリスト民主党がずっと政権を持っていたからです。しかし1998年に初めて社会民主党と緑の党の連合が出来て政権が変わり、政策も変わりました。それで、ドイツが脱原発を決めることが出来たのです。社会民主党・緑の党連合がこの頃にドイツの政権を担わなかったら、こういう転換はなかったと思います。政治連合が政権を持ち、原子力会社と折衝し始める。折衝を始めてから2年もかかりましたが、2000年になると、やはり脱原発をしようということになりました。すぐには脱原発にならないのですが、20年以内に脱原発をしようということになりました。

写真の人物はJoschka Fischerという男性で、ドイツ人ならみんな知っています。彼は緑の党からの当時の外務大臣で、とても人気のある政治家でした。緑の党の皆さんだけではなく、大体どこの党の人も彼を支持していました。多分彼が影響力のある外務大臣だったからだと思います。他にその頃ドイツの政策で変わった大切なことは、「エコ税」を導入したことです。エコ税というのは環境税のことです。ドイツは、電気が非常に高いのですが、それはエコ税があるからです。ガソリンも高い。これもエコ税があるから。どうしてかという、電気を使う、あるいはガソリンを使うと公害が起きます。緑の党は、エネルギーのコストを高くすると、みんながエネルギーをもっと大切に使うようになるのではないかと考えました。エネルギーの使い方に配慮をするようになって、エネルギーの効率性が高くなる。ですから、これは脱原発を決めただけではなくて、エネルギーの使い方を変えようとする政策でもあります。大切なことでした。

もう一つ大切なことは、再生可能エネルギーを推進する政策が必要だ、ということを決めたことです。2000年に入ると、脱原発の法律と、再生可能エネルギーを

推進する法律を作りました。ドイツのエネルギー転換にとって非常に大切な時期でした。

スライド10：政治は、変わることがあります。2005年になると社会民主党・緑の党連合が、キリスト民主連盟と社会民主党連合に転換する。転換しても、キリスト民主党はずっと「原子力はやはり必要」だと言っていました。1990年くらいから続くキリスト民主党の、なぜ原発が必要かという説明は、エネルギーの安全性だけではなく、地球温暖化を考えるとやはり原発は必要だ、というものでした。2005年になると、ドイツのエネルギー政策が、「やはり地球温暖化対策に力を入れなければならない」と変わりました。エネルギーの効率性を高めたり、再生可能エネルギーをもっと増やす、そういう政策を取り入れたのですが、一方で地球温暖化対策もしなければならない、だから原発は必要だ、そういう議論になります。日本でも同じような議論があります。2005~2009年は社会民主党とキリスト民主党の連合でした。社会民主党は脱原発、キリスト民主党は原発推進だったので、変化はありませんでした。しかし、2009年になるとキリスト民主党と自由民主党が連合を作り、両党とも脱原発はだめと考え、原発の運転期間を延長する法律を作りました。2010年の10月になると、脱原発の法律から一歩後退し、原発の運転期間を延長することにしました。新しい原発を作るのではなくて、今の韓国とちょっと似ている政策だと思いますが、すでにある原発の運転期間を延長しようという法律にしました。

Gorlebenの市民が核廃棄物最終処分場の 建設に反対する



www.linkeblogs.de/hiksch/2012/02/anti-atom-protest-in-berlin-gorleben-darf-kein-endlager-werden

スライド11：やはり反対の声があがりました。その一つは、ゴアレーベン（Gorleben）という市でのことです。1970年代になると、政府から放射性廃棄物をどうするかという問題が出て来ました。色々な研究をして、ゴアレーベンという所に高レベル放射性廃棄物最終

処分場を作ることに決めました。ゴアレーベンは、今はドイツの真ん中にありますが、当時は東西ドイツの国境のすぐ近くにありました。多くの場合、放射性廃棄物処理場は国境の近くに作ります。ゴアレーベンも国境の近くにありましたので、東西ドイツが統一して、ドイツのちょうど真ん中に位置するようになりました。ゴアレーベンの人々は、原発の運転期間延長の決定についてもすごく懸念をしていたのですが、やはり、最終処分場の建設に反対をしました。

12 新しいイマジネーション: Kalkar 高速増殖炉は新しい所有者を見つけ、生まれ変わる



スライド12: これはもう少し前の話ですが、オランダとの国境近くにある Kalkar に高速増殖炉を作ろうとしました。1980年代になるとあまりに強い反対の声があがったので、クーリングタワー（冷却塔）を造ったものの、一度も使われませんでした。1990年代、東西ドイツの統一後にオランダの投資家がここを買って、高速増殖炉のかわりにこのような遊園地を作りました。私は、日本人のグループと一緒に見学をしたことがあります。その時、工学者のおじいさんが私たちをガイドしてくれました。彼は、本当はこれを高速増殖炉として使いたかったと考えていた人でした。私たちの考え方は彼に言えませんでした。私たちのように、こんなに興味を持って話を聞きに来る人が少なかったので、喜んで私たちを迎え、色々話してくれました。一つ、彼の話を聞いて、ハッとしたことがあります。もしこれが高速増殖炉になっていたら、多分300人も雇用出来なかったと思います。今、この遊園地では3000人くらい働いています。ですから街にとっては、こちらの方が良かったと言えます。綺麗ですよ。壁面にアルプスが描かれていて、楽しい所です。ちょっと話が飛びました。2010年の10月の話に戻ると、ドイツで原発の運転期間延長の決定があった数ヶ月後、福島が事故が起きました。

スライド13: 私は2007年にドイツに引っ越し、2008年に環境委員会に入りました。環境委員会では、約20名の委員が、ドイツがもっと考えるべきだと思う環境問題を取り上げました。私たちは2008年に初めて集まり、どんなテーマを取り上げるか議論しました。そして、「100%自然エネルギーは可能ではないか」というレポートを書くことにしました。2009年に自然エネルギーの可能性に関する研究を始めて、2011年2月にその報告書「100%自然エネルギーは可能である」を出しました。その報告書を環境大臣に提出した所「はい、ありがとうございます」と受け取り写真を撮りましたが、多分その報告書はそのまま引き出しに入れられたままで、すぐには読まれなかったと思います。しかし、福島の事故が起これ、ドイツは原発の運転延長を決めた頃だったので、その引き出しを開けて報告書を取り出し、これはやはり考えるべきだ、ということになりました。政策の準備過程を考えると大切なことだと思います。なぜなら、何か事故が起きた時には、政治家はすぐに何かを決断する必要が出て来るからです。私たちの提出した報告書に書かれているような計画が引き出しにあると、「あ、これは利用出来る」ということになる。政治学の中で私たちはwindow of opportunityという言葉を使います。危機になると窓が開く、窓が開くと新しい政策をその窓から入れられる、という意味です。多分、福島はドイツのそういう窓口になったのだと思います。

14



スライド14: この講演の前に会場にいた方と話をしました。その中で「3月11日はどこにいましたか?どんな情報が入りましたか?」と尋ねました。私は色々日本に関わっていたので、その日、テレビ局や新聞社、雑誌社などから連絡があり、日本の現状についてインタビューを受けました。3月11日から何日間かはテレビ局に住んでいるような生活をしていました。私はテレビ局にいましたから日本の放送を毎日、全部、何時間もフォローすることが出来ました。もしかしたら、私の方が皆さんよりも情報を得ていたかも知れません。

皆さんはその頃電気がなくて、あるいは忙しくて、何がどうなっているか、十分な情報を得ることが出来なかったのではないのでしょうか。スライドのようなテレビ放送を見ると、ドイツ人のほとんどがチェルノブイリの原発事故を思い出し、これは前に見た映像だ、というような気持ちを抱いたと思います。

15

原子時代の終わり



スライド15：右側はDER SPIEGEL、左側はL'Hebdoというフランスの雑誌ですが、どちらにも同じようなことが書かれています。どちらも題名は「原子力時代の終わり」です。福島事故があって、原発の終わりを意味しています。ドイツでは、「福島は日本、ソ連ではない。ドイツと同じような工学の進んでいる国、技術の進んでいる国、安全性の高い国、原発事故の起こるはずのない国日本でこのような事故があったのなら、もしかしたらドイツでも同じ可能性があるのではないか」という心配が多くの人に起こりました。10年前には、ドイツ人の50%くらいが原発を推進していました。しかし、福島事故後は、少なくとも80%、もしかしたら90%位の人が脱原発に方向転換をしたと思います。

16

2011年3月26日にミュンヘンで抗原子力エネルギー抗議



スライド16：スライド5の白黒写真と同じ場所ですが、福島事故後、2011年3月26日に原子力エネルギー

ギー反対の動きがありました。私がお見せしたいのは、これはベルリンではなくミュンヘンだということです。ベルリンでしたら、毎日、何かしらの抗議活動があるので、抗議活動を見なかったらどうぞ、ベルリンに行ってください。でも、ミュンヘンはビジネスの街、あるいは大学の街で、それほど政治的な街ではありません。けれども、写真のような大きな抗議活動がありました。ドイツでは原発の運転延長ということを決めていましたが、福島事故があって、改めてこれは嫌だということになったのです。

17

その国の原子力政策に抗議する (Spiegel写真2011年5月)



スライド17：これは、原子力政策に対するベルリンでの抗議活動です。やはりミュンヘンより大きい。バラク・オバマ前アメリカ大統領がベルリンに来た時には、25万人くらいの人が集まりましたが、この抗議活動にも同じくらいの人が集まりました。

18

ドイツにおける核廃棄物管理政治への抗議 2012年2月 Berlin



Photos: Uwe Hirsch.

スライド18：この写真は2012年2月のベルリンです。冬なので結構寒いと思います。原発を延長すると、放射性廃棄物の量も多くなります。そうすると放射性廃棄物をどうするかも考えなければなりません。2011~12年の間に、原子力政策がまた変わりました。やはり延長をやめて、「脱・脱・脱原発」になりました。「脱・

脱原発」は、2010年10月の決定です。2011年の夏になると、「脱・脱・脱原発」になりました。それだけではなくて、ドイツはゴアレーベンを高レベル放射性廃棄物の最終処分場に決めたことも、「脱」にしました。なぜなら、ゴアレーベンに住んでいる人たちが、「ゴアレーベンという所は、放射性廃棄物の処理場に適さない」と主張したからです。ゴアレーベンは砂地が多いのです。砂地が千万年も安全に放射性廃棄物を保管出来るのかという心配があります。それで、2011~12年の間にドイツの政策が変わり、もう一度最初からどこに処分場を作るかを考え直しましょう、ということになりました。「白い地図」という言葉を使っていますが、白い地図というのは、地図の中の「ここにするか、あそこにするか」という候補地をなくして、全国を一回くまなく調べて、一番安全な所をまず決めましょう、政治的に決めるのではなくて、やはり安全性から考えて決めましょう、ということです。本当に安全に出来るかどうかはまた別の話ですが、私たちが現在持っている限りの技術で、どこが適しているのか、それを、今ドイツは考えています。

19

原子力利用に対する母親達の反対



スライド19:福島事故があって、一つ変わったのは、エネルギーに関心を持つドイツと日本人たちの交流です。福島事故後、ドイツでは日本に対する関心が高くなりました。逆に、日本のドイツに対する関心も高くなりました。日本からドイツに来る人の数が増えました。この写真、とても好きなのですが、お互いに、原発事故が起きると健康的な問題が起きるのではないかと、子どもたちへの影響はどうか、というような心配を抱えた、ドイツと日本のお母さんたちが交流している写真です。「Mütter Gegen Atomkraft」は「お母さんたちは原子力に反対」という意味です。

スライド20：もう一つの例ですが、これは、「さよな

20

さよならゲンパツデュッセルドルフと反原子福 Sayonara Genpatsu Dusseldorf and Anti-Atom Fuku



<https://www.antiatom-fuku.de/test-01.html>

らゲンパツデュッセルドルフ」と「反原子福」というグループがデュッセルドルフ市に集まった時に撮った写真です。脱原発という考えがドイツにも日本にも広がっていることが分かります。

スライド21：2011年になって、私は「安全なエネルギー供給のためのドイツ倫理委員会」のメンバーになりました。この倫理委員会はメルケル首相が組織しました。メルケル首相は物理学者。多分、その頃の物理学者の多くは原発推進だったと思いますが、彼女自身が原発を推進しているのか、していないのいか、私にはわかりません。でも、彼女は政治家です。福島で原発事故が起きて、ドイツの原発運転期間延長の決定は間違いだったということが分かり、この倫理委員会を作りました。

22

ドイツ 安全なエネルギー供給のための倫理委員会

原子力(技術)の専門家ではなく、社会の代表としてのメンバー選定

政治家(6名)	学識経験者(8名)	その他(3名)	
委員長: クラウス・テプファー (CDU, 元環境大臣)	副委員長: マティアス・クラ イナー (ドルトムント工科大学教 授、ドイツ研究機構代表)	ヴァイマー・リュッベ (哲学者、ドイツ倫理評 議会 議員)	ウルリッヒ・フィッシャー (プロテスタント教会 バーテン地区監督)
クラウス・ヴォン・ドナーニ (SPD, 元教育大臣)	ウルリッヒ・ベック (ミュンヘン大学社会学 部教授(退職))	ルシア・ライシュ (経済学者、コペンハー ゲン・ビジネス・スクール教 授)	ラインハルト・マックス (ミュンヘン・フライジン グ地区の司牧)
アロイス・グリュック (CDI, ドイツカトリック教中 央委員会委員長)	ヨーク・ハッカ (自然科学者アカデミー「レ オポルディーナ」の会長)	オルトウィン・レン (社会学教授、バーテ ン・ヴォルテンバルク州議 会持続可能な環境づの 諮問委員会 会長)	ユルゲン・ハムプレヒト BASF(総合化学製 造会社)取締役
フォルカー・ハウフ (SPD, 元研究技術大臣)	ラインハルト・ヒュッセル (ドイツ地球科学研究セン ターボツダム所長)	ミランダ・シュラース (政治学者、ベルリン自 由大学環境エネルギー 政策研究所 所長)	
ヴァルター・ヒルハ (FDP, ドイツユネスコ委員 会会長)			
ミハエル・ヴァリアディアス (SPD, 鉱山、化学、エネル ギー労働組合 組合長)			

スライド22：多分、ドイツの文化の一つだと思いますが、何か難しい政治的な問題が出てくると、こういう委員会を作ります。なぜなら、民主主義の中では色々な声を聞かなければならないからです。この委員会は17人で構成されているのですが、皆さん面白いと思うかもしれませんが、カトリックの神父と、聖公会の主教がメンバーに入っていました。どうして教会の代表

者がメンバーに入ったかという、1970年代、緑の党が脱原発を言い始めるのと同じ頃、教会も脱原発を言い始めたからです。何よりも平和の問題だからです。この倫理委員会が組織された時期になると、「原子力は次の世代にも問題を残す、私たちが原発の電気を使ってエアコンを使ったり、コンピュータゲームをしたり、楽しんでいるかもしれませんが、放射性廃棄物の問題は次の世代の問題になるので、これは倫理的な問題である」と、教会が言い始めました。委員会のメンバーには教会の代表者以外、昔政治家だった人、あるいは色々な党の代表者、それに私のような大学の教授がいました。また、消費者の代表もいました。

23

倫理委員会のレポートの内容

- 原子力発電所の安全性は高くても、事故は不可能ではない
- 事件になった場合はほかのどんなエネルギー源よりも危険である
- 次の世代に廃棄物処理などを残すのは倫理的問題がある
- 原子力より安全なエネルギー源がある
- 地球温暖化問題もあるので化石燃料を使うことは解決策ではない
- 再生可能エネルギー普及とエネルギー効率性政策で原子力を段階的にゼロにしていくことは将来の経済のためにも大きなチャンスになる

スライド23：倫理委員会のレポートの内容をまとめたものをここに書きました。この倫理委員会のレポートには、エネルギー問題とはどういう問題なのか、エネルギーというのはただ使っているものではなくて、エネルギーは私たちの生活の中心にあるものである、生活の中心にあるので、エネルギーが社会の中でどのような影響力を持っているのか、環境にどのような影響を及ぼすのか、どのエネルギーを使うかは、私たち自身が決定すべきものである、というようなことが書かれています。しかし、私たちは、このようなことを普段あまり考えずに生活をしているように思います。

この倫理委員会で、私たちが最初に議論したのは、エネルギーとはどういうものか、どうしてエネルギーが必要なのか、ということです。エネルギーのない生活はどうでしょう。エネルギーのない生活がダメならば、どのようなエネルギーを使うべきか。石炭を使った方が良いか、原子力を使った方が良いのか、オイルを使った方が良いのか、再生可能エネルギーを使った方が良いのか。こういう風に考え始めるとすぐに、エネルギーを作るにはやはり色々な技術が必要で、色々な危険性があることに気づきました。石炭だったら、鉱山で命を落とす人が大勢います。あるいはガスとかオイルの

採掘で、やはり色々な事故があります。原子力だったらそんなに頻繁に事故は起こりせん。しかし、事故が起きた場合、その大きさが怖い。長期的な影響があるかもしれません。今の世代だけではなくて、次の世代への影響もあるかもしれません。そういうことを考えると、自然エネルギーより良いエネルギーはないのか、という議論になりました。エネルギー問題を考えると、やはりエネルギーのない生活に戻るのは難しい。それが目標ではありません。目標は、一番安全で一番環境に影響の少ないエネルギーにする必要があるのではないか。もちろん、エネルギー転換をすると、お金もかかる。高いものです。早くこの転換をするためにはどうすべきかを考えなければいけませんが、やはりエネルギー転換は必要です。このような意見を交わしました。

先程話した環境委員会が、100%自然エネルギーは可能であるというレポートを出しました。他のグループもそのようなレポートを書いています。私たちだけではなくて、色々な研究所からも、100%自然エネルギーは可能であるというレポートが出されました。私たちも倫理委員会のレポートの中で、「10年以内の脱原発を目指しましょう。そして、脱原発を進めながら自然エネルギーの量を増やしましょう。経済の安定も可能です」と書きました。

24

倫理委員会の公開イベント



スライド24：委員会のメンバー17人だけでなく、色々な専門家を招いて意見を聞いたり、あるいは原子力発電所のある市町村や、その会社に勤めている人を招いて議論しました。なぜなら、エネルギー転換をすると原発で仕事をしている人たちの生活に影響がある、原発に勤めている人たちの命も考えなければならないからです。もし脱原発を進めるのなら、どうやってその町に違う何かを作れるのか、どうやって新しい雇用を生むのか、というようなことも考える必要があること

がわかり、こういう町への投資の必要がある、という議論になりました。

25

ドイツの原子炉停止計画

2011 7 + 1 Shut down after Fukushima (approx. 40% of German nuclear capacity)
 2015 Grafenrheinfeld (7-8%)
 2017 Grundremmingen B
 2019 Philippsburg 2
 2021 Grohnde, Grundremmingen C,
 • Brokdorf
 2022 Isar 2, Emsland,
 Neckarwestheim 2



スライド25：スライドにある通り、脱原発の計画が出来ました。2010年には原発が17基ありました。2011年には、安全性の問題があって1基、福島の前で停止していました。2011年にメルケル首相が決めたのは、古い7基を停止すること、残りの原子炉を段階的に停止することでした。2015年に1基停止して、2017年にも1基、今年も1基停止して、2021年と2022年に最後の6基を停止します。2022年になると、原発ゼロのドイツになります。これまで東ドイツの話をして来ましたが、現在東ドイツには原発がありません。かつてこの地図の右上にありましたが、ドイツが統一したとき東ドイツにあった原子炉は西ドイツの安全基準を満たさなかったため、すぐに全部停止しました。面白いのは、停止すると廃炉技術の研究が必要になります。ですから、脱原発を決めると廃炉のための仕事がたくさん出来るということが分かりました。専門家・技術者が長く必要になる。先程紹介したゴアレーベンには、使用済み核燃料と放射性廃棄物の中間貯蔵施設があります。現存する放射性廃棄物処理の関連施設をどうするかという問題も出て来ます。将来、このための技術も必要になります。ですから、私は学生にいつも「原子力に興味があるのなら、廃炉のためにも、あるいは放射性廃棄物処理のためにも将来専門家や技術者が必要ですから勉強してください」と言っています。

スライド26：日本とドイツの似ている所は、脱原発を推進したい人は、再生エネルギーを推進したい人でもあるということです。これは、私の大好きな写真です。左側は奥さんのウルスラ スラデックさん。右側がマイケル スラデックさんです。ドイツに黒い森というのがあるのですが、その真ん中にSchönauという街があって、原子力からの電気を使っていました。1986年のチェ

26

Pioneers at the local level:
 Ursula Sladek, Schönau・地方レベルでの再生可能エネルギーの先駆者:ウルスラスラデック、Schoenau



https://www.ews-schoenau.de/fileadmin/content/images/Mitwissen/Pressemitteilungen/ursula_michael_sladek_EWS.jpg

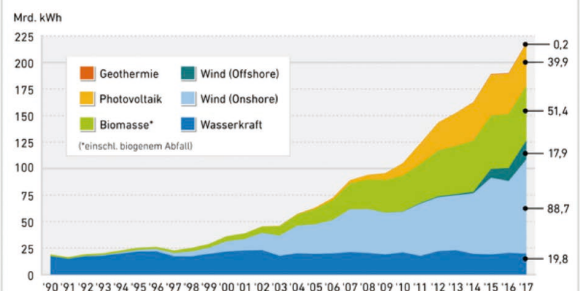
ルノブイリ事故後、この二人が再生可能エネルギー推進の動きを始めました。この二人が、『やはり私たち自身が問題の一つである。いつも政治家に「あんたたちダメだよ」と言っているけれど、本当にダメなのは私たち。なぜかと言うと、私たちは原子力の電気を使っているから。だから、私たちは、自分で、街で、再生可能エネルギーを取り入れましょう』という動きを始めました。長い話なのですが、色々な政治的な議論があり、裁判をする必要もありました。なぜかと言うと、再生可能エネルギーを作ると送電線を使う権利がないと困る。日本も今、九州電力が同じ問題を抱えていると思いますが、再生可能エネルギーをたくさん作っても、送電線が利用出来ないと困る。この二人にも同じような問題があって、何をしたかと言うと、送電線を買いました。送電線を買うために裁判をして、権利を得ました。権利を得て、送電の会社も作って、それに電気の会社も作って、今はドイツの5番目のエネルギーの会社になっています。この二人は、ドイツの中で大きな役割を果たしました。面白いと思うのは、このご夫婦は、特別な人たちではなく、ごく一般的なご夫婦だったことです。その二人が、その町を全部再生可能エネルギーに転換したのです。

27

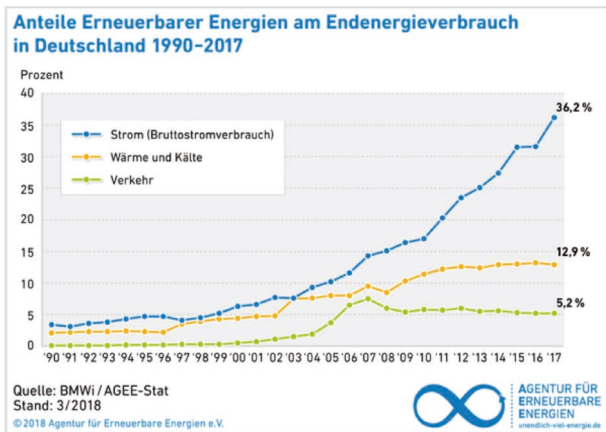
Increasing Share of Renewables in the Electricity Mix 1990 - 2017

Stromerzeugung aus Erneuerbaren Energien in Deutschland 1990-2017

2017 wurden rund 218 Milliarden Kilowattstunden Erneuerbarer Strom erzeugt. Das ist ein Wachstum von 15 Prozent gegenüber dem Vorjahr und entspricht einem Anteil von etwa einem Drittel an der gesamten Bruttostromerzeugung.



Share of Renewables in Final Energy Consumption in Germany 1990-2017



スライド27：チェルノブイリ原発事故が起こった頃のドイツでは、再生可能エネルギーは3%以下で、そのほとんどが水力でした。2000年に再生可能エネルギーの法律、FIT（Feed-in Tariff 固定価格買取制度）を作りました。再生可能エネルギーを作ると、決まった値段で売ることが出来る、それが20年間の契約（買取期間）にありました。このFITの法律を作り、再生可能エネルギーの量がどんどん増加しました。2018年は、すごく天気の良い1年間でしたが、電気の40%くらいが再生可能エネルギーから作られました。2000年の6%と、2018年の39%の再生可能エネルギーを考えると、本当に短い期間でこれ程大きな変化をしました。

スライド28：しかし、まだ問題があります。この講演の始めに言いましたが、エネルギー転換について考えるとき、再生可能エネルギーを使う分野についても考えなければなりません。ドイツの電力総消費に占める再生可能エネルギーの割合（グラフ青）はどんどん伸びています。しかし、冷暖房など熱消費（グラフ黄）に占める割合はまだ不十分です。ガスとか油を転換し

て、再生可能エネルギーをもっと利用すべきです。また、交通部門（グラフ緑）ですけれども、車はまだオイルを使いすぎています。ですから、今のドイツでは電気だけではなくて、他の分野にももっと再生可能エネルギーを取り入れなければならぬと思います。

スライド29：エネルギーを使うと、Justice（正義）の問題も出て来ます。日本の1つの大きな問題に、高齢化が進み、田舎は過疎化が進み、経済が弱くなっている点があります。この問題はだんだんと大きくなってきています。ドイツにも同じ傾向はありますが、日本ほどではありません。私は外国から見て、日本は人口が大都市に集中し過ぎる傾向があると思います。東京、あるいは大阪、仙台もあります。ドイツはそうではなくて、一番大きな街はベルリンですが人口は400万人。私が住んでいるミュンヘンは150万人。あまり大きな都会はありません。あちこちに住んでいます。それだけではなく、やはりどこに投資しているかということですが、ドイツは税収入を回します。税金を使ってFITを利用して、田舎に投資しています。この写真は牧場です。田舎に行くと立派な牧場がたくさんあって、都市よりも豊か。田舎に住んでいる人たちの方が、いい生活をしている。これは、私の大学院生が撮った写真ですが、最近日本でも見る事が出来ますが、田舎に行くとどこでもこのような光景が見られます。1990年くらいから少しずつ進み、2000年になるとみんな屋根の上にソーラーパネルをつけています。これは、田舎を支えている1つでもあります。

スライド30：エネルギー転換は電気だけではなくて、色々な分野の転換が必要です。ドイツでは、エネルギー転換は脱原発だと考えますが、それだけではなくて、地

スライド30：エネルギー転換は電気だけではなくて、色々な分野の転換が必要です。ドイツでは、エネルギー転換は脱原発だと考えますが、それだけではなくて、地

Renewable Energy: Rural Economic Opportunity



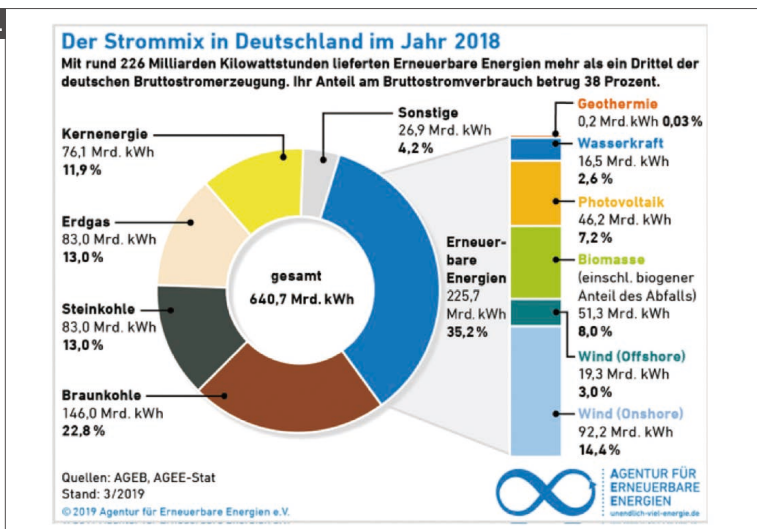
エネルギーおよび気候変動計画の目標

	Reduction of nuclear energy	Share of Renewable Energy		Reduction GHG-Emissions	Reduction of Energy Demand			
		Gross final energy	Electricity Production		Primary Energy	Domestic Heat	Final Energy Transport	Electricity Demand
2015	-47%							
2017	-56%							
2019	-60%							
2020		18%	35%	-40%	-20%	-20%	-10%	-10%
2021	-80%							
2022	-100%							
2025			40-45%					
2030		30%	50%	-55%				
2035			55-60%					
2040		45%	65%	-70%				
2050		60%	80%	-80% bis 95%	-50%	-80%	-40%	-25%
Basis	2010	-	-	1990	2008	2008	2005	2008

球温暖化にも関わっています。ドイツは2050年までに1990年と比べて二酸化炭素を80~95%削減する目標を立てています。このためには、電気の80%を再生可能エネルギーから作らなければならないと言われています。私は、これでは足りないと思っています。100%にならないとダメだと思います。なぜかと言うと、電気が一番転換しやすい分野だと思うからです。飛行機を考えると、100%電気の飛行機は難しいと思う。バイオガスを使っても、出来ないことはないと思いますが、やはり、二酸化炭素を排出しなければならない分野がまだまだありますから、やはり電気が100%にならないとダメだと思います。これは2011年か12年に作った計画ですが、2020年までに電気の35%は再生可能エネルギーから作るという計画です。今はもう38~40%くらいを作っているのです、この目標は低すぎる。これ面白いですよ。ドイツが目標を作ると、再生可能エネルギーの場合、必ずその目標を追い越す。保守的すぎますか？2025年までに40%、2035年までには55~60%。多分これは、2032年くらいには達成出来るのではないのでしょうか。これを見ると、私は、日本はドイツよりも再生可能エネルギーの可能性があると思います。太陽もあって。ドイツはほとんど太陽がありません。雨ばかり。風はもっとすごいでしょ。日本で風が吹くときすごいエネルギーを作れる。温泉もあって、地熱もあって、多分日本の方がドイツより再生可能エネルギーの豊かな国だと思います。このスライドを見ると、ドイツは今以上に再生可能エネルギーの可能性があるとします。全体のエネルギーの60%が再生可能エネルギーから作られるべきです。

スライド31：2018年のドイツの電気の話ですけれど、これ(円グラフ青)が再生可能エネルギーです。このグラフの数字はちょっと違う、38%と書くべき。ここ(グ

31



ラフ黒・茶)は石炭ですが、これが一番大きな問題です。ドイツが、自然エネルギーをたくさん作って地球温暖化対策を推進する国というイメージを外にアピールはしていますが、実際は、ヨーロッパで一番二酸化炭素を出している会社がドイツにあります。なぜかと言うと、石炭を使っているから。石炭には石炭(グラフ黒)と褐炭(グラフ茶)があります。ドイツが世界で一番褐炭を使っている国です。非常に二酸化炭素を出すひどいエネルギーです。ですから、脱石炭が次の政策にならなければなりません。

32

核廃棄物管理に関心を持つ市民団体



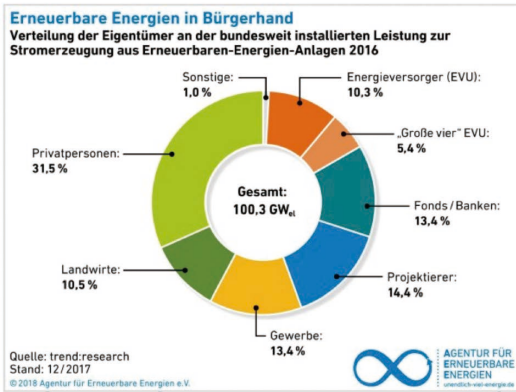
Photo: Miranda Schreurs

スライド32：これは、Braunschweiger (地名)の写真ですけれども、この赤い上着の男性ポールコッホさんはドイツの教会の活発な人です。よく講演会を開き、グループを集めて話をしてしています。私は彼の教会で講演をするときは、福島事故について、写真を見せながら紹介をします。ドイツでは日本のことを紹介し、日本ではドイツのことを紹介します。彼はよく日本からのグループを紹介したり、日本の人と交流したりしています。彼がすごく心配しているのは、彼の地域の周りにゴアレーベンがあって、放射性廃棄物処理場がいくつもあります。どちらも色々な問題があるので、その教育活動を皆さんとやっています。

スライド33：これは、再生可能エネルギーの所有者別割合です。面白いのは、大きな会社ではなくて、ほとんど個人、つまり私たちのような個人が再生可能エネルギーに投資していて、私のは風力よとか、これは私のソーラーパネルよとか、皆がプライドいっぱい話しています。

スライド35：Asseは塩の鉱山でしたが、1950~60年代に、最初の放射性廃棄物の地層処分場として、写真のように使われました。この缶の

再生可能エネルギーの所有者別割合



中に放射性廃棄物が入っていますが、保管するためにこれをボンと投げ落としていたのです。それで、缶とその中に入っているものが破損するなど色々なダメージを受けました。今、この缶がいつまで持つかという問題になっています。1950年代には、ここは水が出ないだろうと思われていましたが、やはり水がどんどん出て来ています。ですから、ドイツの持つ1つの問題は、以前に処理しようと思ったこの放射性廃棄物を、今後どうするかです。ここから全部取り出さなければならないのです。どうやって取り出すのか、その技術がない。そして本当は、これらが全部どこにあるのかもわかっていない。だからそれを見つけるのがまた問題なのです。

Asse 塩鉱山

- 以前の塩鉱山は、放射性廃棄物の深い地層処分場として使用された
- 塩鉱山の13の部屋に設置された放射性廃棄物
- 水漏れの問題



スライド36：こうした放射性廃棄物は、脱原発をすると大きな問題になってきます。廃炉にしなければならない。2014~16年に「高レベル放射性廃棄物処分委員会」という特別な委員会を作りました。私はこの委員会のメンバーではありませんでしたが、この委員会が700ページのレポートを作りました。私はこれを読まなければならないのですが、700ページにはずいぶん時間がかかりました。このレポートを読んで、放射性廃棄物をどうするか、やはり放射性廃棄物問題について新しく考えなければならないと思いました。ドイ

ツの歴史を考えると、放射性廃棄物の問題が起きると、反対の動きが強くなります。ゴアレーベンがドイツの脱原発の動きの中で、一番強い動きだったかもしれません。「ゴアレーベンには高レベル放射性廃棄物は入れません」という動きがとても強かった。なぜかと言うと、やはり政府を信頼することが出来ない、政府の言っていることは嘘ではないか、という疑問があったからです。政府から、これは安全な技術だという話をずっと聞いていましたが、Asse塩鉱山の問題がありました。あるいはチェルノブイリがあって、福島があって。どうして私たちは政府の言うことを信じられるのか。信じていないのです。

高レベル放射性廃棄物サイトの選定のための新たなスタート:3つの組織が設立されました

- 1.) Bundesgesellschaft für Endlagerung (BGE), (連邦放射性廃棄物機関)
- 2.) Bundesamt für kerntechnische Entsorgungssicherheit (BfE) (連邦放射性廃棄物処分庁)
- 3.) Nationale Begleitgremium (原子力廃棄物処分現場選定のための国家諮問委員会)

スライド37：こういう背景を考えると、やはり放射性廃棄物を処理するには、またあらためて審議をしなければならない。しかし「高レベル放射性廃棄物処分委員会」が出したレポートの中には、最終処分場を選定するには、また最初からやり直さなければならない、とありました。それで、今度は新しい委員会ではなく、スライドにあるような新しい機関を作ることになりました。連邦放射性廃棄物機関 (BGE) と、連邦放射性廃棄物処分庁 (BfE)、原子力廃棄物処分現場選定のための国家諮問委員会 (NB) という3つの機関です。3つ目の機関に私が入っていたので、紹介したいと思います。

スライド38:このNationales Begleitgremium (NB) というのは何かと言うと、プロセスの中で新に審議をするグループです。私たちは政府の手伝いをしているというよりも、政府がちゃんとやっているかどうかをチェックするグループです。このNBは今の所メンバーは12人ですが、18人になる予定です。この12人のメンバーは誰かと言うと、一人は、写真中央のクラウドステプファーさんです。彼はチェルノブイリ原発事故が起

NATIONALES BEGLEITGREMIUM

- 毎月のセッションが公開されます
- 1ヶ月に1回程度の公開ワークショップ
- ドイツ全土で開催される会議



こった時、環境大臣を務めていました。彼がこの委員会の長になりましたが、ドイツは委員会があると必ず男性と女性の委員長を選出するのですが、私がもう一人の委員長になりました。あとのメンバーは、この写真には全員は入っていませんが、写真左から二番目の女性、モニカ ミュラーさんは教会に勤めています。彼女は、教会のためのModeration（調停役）を担っています。色々なグループの中で難しい問題があると、彼女が色々な人を呼んで会話をさせる。どうやってこの問題を解決出来るか、という調停をします。彼女はだいぶ以前から、Asse塩鉱山の問題に関してもそういうグループの集まりや調停をしています。

市民の理解と信頼を得るには？

- 参加と議論の新しい形
- BfE情報プラットフォーム
- NBGの市民代表の参加（現在9人の中の3人、将来18人の6人に拡大）
- NBGの若い世代を代表するメンバーを抱える



スライド40：面白いのは、この人たちは「偶然の市民」と呼ばれています。原発あるいは放射性廃棄物に関連している人たちではありません。2016年か2017年に政府が決めたのは、7万人に電話をかけて、「こんにちは、すみません、放射性廃棄物に興味ありますか？放射性廃棄物ですけれども、ドイツの将来の大きな問題になって来ますので、委員会を作るんですけれども、その委員会のメンバーになることは出来ますか？」と聞くことです。その結果、300人が「はい、なんとか出来ます」と言ってくれて、このはいと言った300人が、自分たちの中から誰が代表として委員になるかを決め

ました。最初の「偶然の市民」がこの3人です。最近、他に3人が加わり、今は6人の市民がこの委員会に入っています。市民がこういう委員会に入ることがなぜ大切かと言うと、こういう人たちは専門家ではなくて、特別な立場を持っていない、あるいは特別な利益を持って委員になったのではなく、一般の人だからです。そうすると、政府の人間が「この技術は安全だから」と言う、偶然の市民が、「ちょっと理解出来ません。どうして安全だと思いますか？」あるいは「どうして私たちにその情報を伝えてくれないのですか？」「情報は伝えてくれましたが理解出来ません、これはなんの情報ですか？」「こういう情報を教えてくれていますが、私が知りたいのはあれです。」わからないから、本当に普通の質問をする。それが非常に大切。このテーマの中でずっと仕事をしている専門家は、こんな簡単なことも分からないのか、と思ってしまうのですが、そうすると、市民が自由に質問することを否定することになる。そうすると、本当に必要な質問をしなくなります。先程の700ページのレポートを書いた委員会のすごく素晴らしい所は、私たちが委員会を作る時に、普通の市民をメンバーに入れるべきだ、と言ってくれたことです。

Endlagerstadortauswahlgesetz（最終処分場選定法）の法案についての市民の関与



スライド41：私たちは2016年の12月に初めて会い、2ヶ月後には初めての大きなワークショップを開きました。ドイツに最終処分場に関する法案を作る過程だったので、私たちは、最初からこの過程を市民にオープンにした方が良く考えました。そこでワークショップでは、どういう計画が議論されているか、弱い所はどこにあるか、なにを变化するべきか、というような色々な意見を市民から集めて、その意見を政府に渡しました。このように、政府にちょっと影響を与えようとしています。

スライド42：この他にNBがしているのは、問題のあ

影響を受けた市民との地域会合 (Asse)

- AsseBegleitgruppeのメンバーと他の関心のある市民との会合
- 市民諮問機関との会合



る場所を訪ねて、影響を受けている地域に住んでいる人たちと話をし、心配ごとや、市民の考えを政府に伝えたりしています。まだ最初の時期なので、色々難しい所はありますが、これはやはり面白い、新しいやり方だと思います。

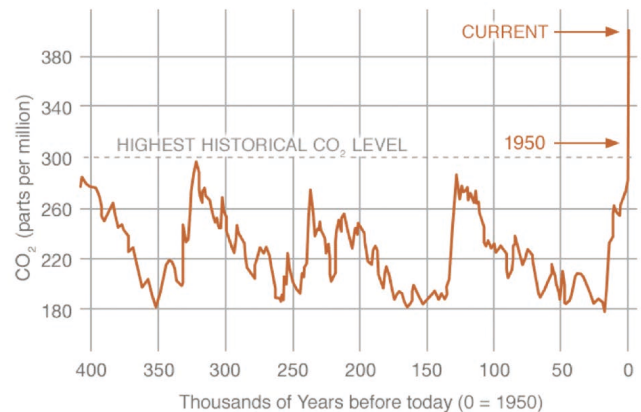
倫理的な次元、安全次元に焦点を当てる

核廃棄物の問題:

- 倫理的な問題
- 正義問題
- 世代間の問題
- 安全性の問題
- コミュニケーションの問題

スライド43：倫理的に安全なエネルギーを考えると、核廃棄物の問題も考えなければなりません。核廃棄物は倫理的なものであり、次の世代に影響するものでもあります。また、安全性の問題でもあるし、コミュニケーションの問題でもあります。次の世代を考えると、高レベル放射性廃棄物は100万年も安全に保管しなければなりません。100万年、想像出来ませんね。次の世代に、ここは危ないから掘ってはいけないよと伝えなければならぬ。100年前の日本語、皆さんはどれくらい読めますか？ 500年前の日本語は？ 1000年前の日本語は？ 2000年前だと、まだ文字は確立されていませんでした。5000年後に日本語がまだあるかどうか分かりません。英語があるかどうか分かりません。中国語になっているかもしれません。何語で書けばいいか。やはり言葉はやめた方が良くないかもしれない。何かシンボルを使った方が良くないかもしれない。例えば頭蓋骨はどうでしょう。今のティーンエイジャーは「かっこいい」と喜んでTシャツに使いますよね。あるいは、頭蓋骨と

か骨と言えばエジプトですよ。頭蓋骨や骨があると、きっと中に何かがあるのか興味を持って掘り始めてしまいますね。1つ面白い例を紹介しましょう。文字がだめなら絵を描くことにしましょう。ここに何かがあって、人間が立っていて、様子がおかしくなって、倒れる。それを左から順に描く。しかし右から左に読むと、寝ていた人が立ち上がり、具合が良くなって、ここはもしかしたら命を救う場所かもしれないと、解釈するかもしれません。本当に、どうやって次の世代に伝えていくのか、大きな問題です。このように、原発の危険は色々な所にあります。



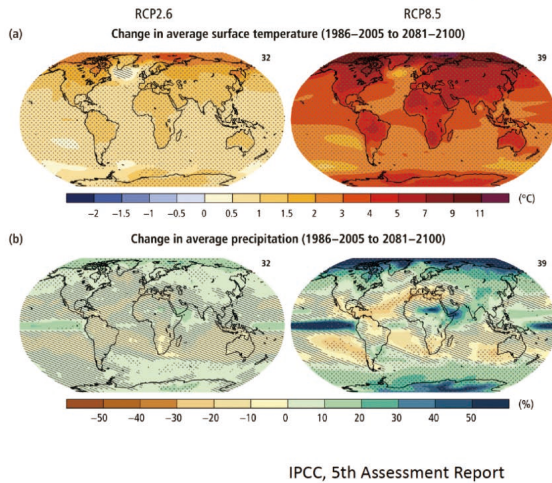
Source: NASA, <https://climate.nasa.gov/vital-signs/carbon-dioxide/>

スライド44：地球温暖化の問題もあります。これは40万年前のCO2量の変化を示したグラフですが、左端が40万年前のCO2レベル、右端が現在。現在は、この100万年の間に見られなかったようなCO2レベルになっています。1750年には280ppmのCO2でしたが、今は410ppmにもなっています。

スライド45：北海道が昨日39℃と聞きました。科学者たちは、今の世界は大体こういう世界(左上図『RCP2.6シナリオによる年平均地上気温の変化(1986-2005年平均からの偏差)』)になったと言っています。本当はもう少し、気温上昇のない青色であるべきですが、1850年より平均温度が1℃高くなりました。左上図は、平均1.5℃上昇した世界を表しています。これを見ると一番北の方が一番赤くなっていますが、平均気温が一番上昇した所です。将来は北海道に暑い日が増えると思います。なぜなら北海道が日本の一番北にあるからです。

もし、私たちの今のエネルギー政策が変わらなくすると、将来このような世界(右上図『RCP8.5シナリオによる年平均地上気温の変化(1986-2005年平均から

IPCC 5th Assessment Report



の偏差)』)になるかもしれません。今の気温より4～11℃高くなるかもしれません。これは100年の間に起こりうる変化です。私たちが今の生活を続けて、アフリカ、中国、インド、インドネシアが同じような生活レベルを望むとすると、何か策を講じなければ、将来はこういう世界(右上)になる可能性があります。こうなってしまうと、もうダメですよ、人間にとっては難しい時代を迎えています。

雨量も変わって来ます。雨がどれくらい降るかという色々なシナリオがありますが、左下図(『RCP8.5シナリオによる年平均降水量の平均変化率(1986-2005年平均からの偏差)』)が1.5℃気温が上昇した時の降水量の変化率を、右下が、3～5℃気温が上昇した時の降水量の変化率を表しています。

スライド46:なぜこうなるかと言うと、私たちが使うエネルギーの量が増えて、CO₂が増えているからです。このグラフを見ると、私たちが生きている時代に、こんなに多くなりました。黄色はヨーロッパ、紺はア

メリカ。赤の中国は1950年にはほとんどCO₂を排出していませんでしたが、今は世界の三分の一くらいを排出しています。日本は世界のCO₂の2.数%排出しています。ドイツも同じくらいです。

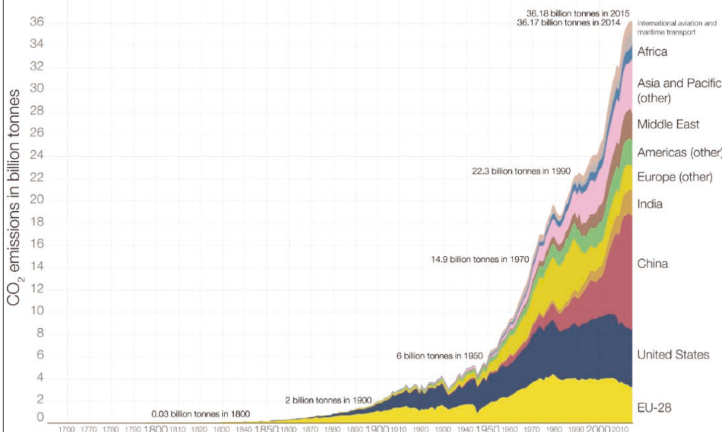
スライド47・48:2015年にはパリ協定が出来て、産業革命以前と比べた世界全体の平均気温の上昇が2℃、可能であれば1.5℃を超えないような政策を作ろうと計画しました。どうして1.5℃を上回らないようにと決めたかと言うと、1.5℃上昇すると島国がなくなる可能性があるからです。全部ではありませんが、太平洋アジア地区にある島国はほとんど海拔が低いので、危ないのです。

スライド49:IPCCという研究グループが2018年に出した特別な報告によると、地球温暖化を1.5℃に抑えるためには2030年までに2010年の地球温暖化ガスのレベルの半分くらいに減らさなければなりません。2017年のレベルと比べると70%くらい低くしなければならぬということです。つまり、10年の内に私たちのエネルギーの世界を、本当に短い間に変えなければならぬのです。

スライド50:これはドイツの政策に大きな影響を与えています。ドイツは10年以上前に、「脱原発をしながら2020年までにCO₂の排出量を40%削減する」と決めました。今の所は30.8%しか削減出来ていません。ですから、目標はまだ達成出来ていません。達成しないと、1.5℃の世界も危ない。このため、ドイツの現在の政策にまで変化が見え始めています。

Global CO₂ emissions by world region, 1751 to 2015

Annual carbon dioxide emissions in billion tonnes (Gt).



Braunkohle – nicht nur Gift für das Klima. Vattenfall-Tagebau bei Cottbus. Foto: Dirk Seifert - See more at: <http://umweltfaeraendern.de/2012/07/klimakatastrophe-jede-vierte-kilowattstunde-aus-braunkohle/#sthash.t17v9gm.dpuf>



スライド51:どういう変化かと言うと、脱原発をしながら、脱石炭もしなければならないということです。この写真は、ベルリンから100kmくらい離れ

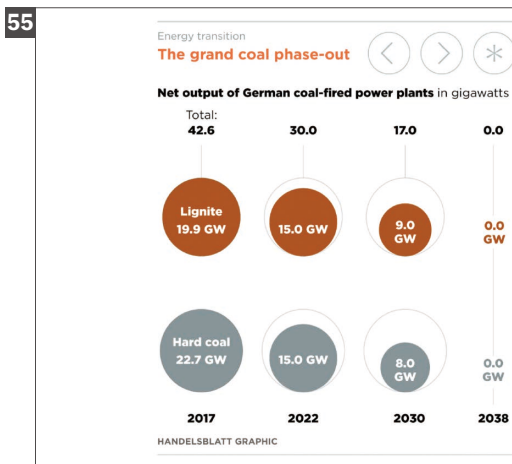
た場所ですけれども、信じられないくらい大きな石炭の採掘所です。写真に機械が写っていますが、この機械はこの教会の5倍くらいの大きさがあります。人間が横に立つと、小さくて見えないくらいです。

52 Commission for Growth, Structural Change and Employment (Coal Commission)



スライド52：ドイツはまた委員会を作りました。この委員会は、通称、石炭の委員会（Coal Commission）と言います。正式名称は「成長・構造変化・雇用委員会」です。

スライド53・54：この委員会は、私が委員を務めた倫理委員会と似ています。色々な政党に所属していた人たち、地域の知事、エネルギー・シンクタンク、あるいは企業からの人、環境グループからも何名か入っているのですが、色々な代表を呼んで、このような問題に関してどうするか議論し、計画を作り、そして、その計画を政治家に渡して、政治家がその計画を基に政策を作ることになります。



スライド55：何を決めたかという、脱石炭です。いつからか？ 今からすぐです。現在の石炭の使用量が左の円グラフに表されています。石炭と褐炭を合わせると40GWくらいですね。これは、ドイツの電気の40数%にあたります。これを、2022年までに30GW、2030年までに17GWまで削減し、2038年までには0にする計画です。すごいと思いますが、まだ足りません。



<https://www.zdf.de/nachrichten/heute/zeitplan-fuer-den-ausstieg-kohlekommission-ohne-vorfestlegung-100.html>

スライド56：これでは1.5°Cの世界には足りない、と環境グループが言い始めています。「もっと早く脱石炭をしなければならない。ドイツは豊かな国で、技術を持っている。2038年まで待っていては、ドイツが世界のモデルにはなれない」と主張しています。



スライド57：この場所では、色々な国から来ている学生と一緒に地球温暖化対策に取り組んでいます。これは、私も参加して行進をした時の写真です。

58 ドイツのHambacher林をブルドースして褐炭を抽出するというRWEGの計画への抗議。石炭の使用をやめよう!
Photo by Uwe Hicksch. October 6, 2018.



スライド58：ドイツでは、反対運動をする色々なグループが見られますが、これは、ハンバッハの森の近くでの反対運動の様子です。ハンバッハの森はとても古い森林ですが、褐炭の露天掘りによってその多くが失われてしまいました。エネルギー会社が、残った森

林を壊して褐炭を採掘しようとしています。抗議をして、裁判をして、現在の所は停止しています。これからどうなるかわかりませんが、脱石炭の政策を推進しようとしている所なので、森林を守ることが出来るかもしれません。

59

Fridays for Future 未来のための金曜日。学生は気候のためにストライキを続けます。



スライド59：これが最後のスライドです。「未来のための金曜日」(Fridays for Future)という動きがドイツに入って来ました。グレタ トゥーンベリ (Greta Thunberg) という名前の16歳の女性が始めた動きです。彼女はスウェーデンの学生ですが、「先生たちは地球温暖化のことをちゃんと私たちに教えていない。学校だけではなくて、組織全体が地球温暖化対策を大事にしていないということ、みんなに伝えたい」と言って、金曜日は学校に行かないとストライキを始めたのです。彼女のストライキが、どうしてこんなに大きな影響力を持ったかはわかりませんが、世界中に広がっています。ドイツで、何千人、何万人、何十万人の学生が集まって抗議し始めています。このグループが主張しているのは、「2038年までの脱石炭は、私たちの世代に対して足りません。もっとちゃんとやりなさい」です。このグループが出来て、ドイツで初めて、コンスタンツという町が「地球温暖化危機」というメッセージを出しました。政府も「これは危機だ」と言いました。イギリスの議会 (Parliament) も今は、気候災害 (Climate Disaster) という風に発言しています。若い学生たちのこういう動きを見て、私は、ちょっと将来

チャンスがあるかもしれないと思い始めました。なぜなら、若い学生たちがフレッシュな顔で世の中を見て、自分の将来がどうなるかとすごく怖がっている。さっきお見せしたスライドのように、平均気温が5℃、6℃、7℃と高くなっていく将来であればすごく危険ですから、今の政治家にもっと大きな声で、もっとやりましょうと言い始めています。脱原発とどういう関係があるかというと、原発に多くを投資すると、再生可能エネルギーにはあまり投資出来なくなる。原発が続くと、地球温暖化対策にあまり努力しなくなると思います。原発よりも再生可能エネルギーの方が、チャンスがあると思います。コストも低くなって来ています。再生可能エネルギーでしたら、どこでも作れる。原発はそうではない。だから、地球温暖化の問題、脱原発の問題は、一緒です。両方とも、再生可能エネルギーの世界の方がいいと示していると思います。

結び：今日は、長い話を聴いて下さってありがとうございました。皆さんとこのような時間を持つことが出来て、感謝をしています。

日本は、送電権などに関する制度がネックになり、最近ちょっと頭打ちになっていますが、確か2016年は世界で一番太陽光発電を導入した国だったと思います。また、先ほど話しましたが、日本は太陽光、水力、風力、地熱など、多様で豊かな天然資源を持った国です。技術も卓越しています。更に、日本の皆さんは省エネについてはドイツよりも積極的に取り組んでいます。

私は、ドイツでの研究や経験から、脱原発と再生可能エネルギーの普及は同時にできると確信しています。

世界諸国が、脱原発、再生可能性エネルギーへの転換への政策を進める中、日本にも大きな可能性があると思います。これからも皆さんと一緒に、脱原発、再生可能エネルギーの促進に向けて、一緒に歩いて行けたらと思います。どうもありがとうございました。

講師略歴

「ドイツ原子力・再生エネルギー政策」諮問委員を経て、現在はミュンヘン工科大学教授。専門は、公共政策、環境、気候変動。2011年にドイツ連邦政府によって設置された、「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」委員を務めた。委員会は、ドイツ政府にエネルギー転換への対策を提言。この提言を受け、ドイツ政府はエネルギー政策の大転換を決定。著書に、岩波書店『ドイツは脱原発を選んだ』、『地球環境問題の比較政治学』、『女性が政治を変えるとき (共著)』等。



- ①基調講演は公開で、仙台基督教会を会場に開催されました。参加者は、協議会の参加者を含め約 150 名。
- ②ミランダ シュラーズ博士。スライドを丁寧に説明しながらの、分かりやすい講演でした。
- ③時間が足りない程、活発な質疑応答がなされました。

十字架ヲ通ッテ光へ ～苦難の中からの声・惨禍の中の祈り～

牧師 川上 直哉

日本基督教団石巻栄光教会 牧師、東北ヘルプ 事務局長

2019年5月29日

1. 序

今私は、一つの聖書の言葉を思い出しています。

しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、憐れみと良い笑いに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。(ヤコブ書 3:17)

この講演において、私はフクシマをめぐる実際に目撃した事柄を、純真な思いをもって真摯にお伝えしたいと思っています。そして、私はこの講演の中でも平和を探し続けたいと思うのです。そうしますとどうしても、「平和」という言葉に引っ掛かりを感じるようになります。というのも、「平和のための核」というスローガンが眼前にせり出してくるように感じるからです。

2019年2月1日、米国聖公会は一つの声明を発表しました。それは中距離核戦力全廃条約をめぐる声明でした。米国聖公会はこの声明において、「原子力はただ平和目的にのみ用いられるべきものだ」と主張したのです。鍵語は「平和目的」です。この語は1976年に米国聖公会が公式に採択した言葉でした。ここで、今フクシマ事故の悲劇のただなかに立って、私たちは日本の原子力発電をめぐる歴史を振り返って見るべきだと思ふのです。

岸信介氏はその回顧録を出しています。1958年、すなわち日本の原子力政策が開始される前年の彼の回顧録を見ると、彼は「核兵器を保有する潜在能力を持つために、原子力発電所を持たなければならない」と、当時の首相として、考えていたことがわかります。あるいは福島第一原発事故による核災害が起こったまさにその直後、「私たちが新しいテクノロジーを手に入れるときにはいつも、こうした過酷事故は起こるものだ」と言い放った人がいます。この言葉は2011年3月末の新聞に掲載され日本でも報道されました。この言葉

を発したのはジョセフ・ヘンドリー博士でした。彼は1979年のスリーマイル事故が起こった時に米国原子力委員会の委員長であった人物です。彼の言葉に「平和」の響きを聞き取ることはできません。こういうわけで、私はどうしても、「平和目的のための核」という言葉に触れるとき、懐疑的な思いを抱かざるを得ないのです。

あの福島第一原子力発電所の事故以来、多くのエキュメニカルな活動家が私たちと良い関係を構築してくださり、一緒に「原子力から解放された世界」を目指す旅の仲間になってくださいました。そして2014年、「声明：核から解放された世界へ」を世界教会協議会が採択するところまで、私たちは辿り着いたのでした。この声明文において世界教会協議会は、「核兵器」と「原子力発電所」は「一つのコインの表と裏」であることを表明したのです。フクシマ事故、太平洋における核実験、そしてヒロシマ・ナガサキの惨禍を生き延びた人々の声を聞くとき、私たちはそう結論付けざるを得ない—そのように、世界教会協議会はこの声明文において断言しています。

「声明：核から解放された世界へ」が生まれて行く物語を、私はまず語りたいと思います。この物語は、犠牲者の声に聴くことの重要性を示すことでしょう。その後私は、フクシマの惨禍を生き抜く人々に寄り添う牧師たちの証言をご紹介します。そこから希望をご一緒に見出したいと願っています。

2. 神学的対話：「声明」が生まれるまでの物語

私は津波被災地の教会で牧師をしながら、仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク・東北ヘルプの事務局長を務めています。東北ヘルプ事務局長として、地震・津波・放射能の三重災害に被災した人々への支援に、私は携わってきました。牧師として、この災厄が被災者に臨んだことの意味を、私は探し求めてきました。

a. マウ博士と惨禍の中の祈り

3.11以来の悲劇の中で、旧約聖書の言葉が私に強烈なものとして迫っていました。フラー神学校の学長であるR.J.マウ博士が、私の旧約聖書の理解を展開してくださいました。彼は2013年の3月に東京で行われたシンポジウムで講演し、旧約聖書の神義論を展開してくださいました。マウ博士の講演は、「天災」と「人災」を含み持つものとして、摂理の概念を、実に適切な仕方であらうと掘り上げることに成功していました。疑いもなく、旧約聖書には多くの苦しむ人々が登場し、そして旧約聖書の中においてその人々への過剰に厳しい声が響いています。たとえば「神は傷つけ、また包み／傷つけ、また御手をもって癒される」(ヨブ記5:18)とある通りです。確かに摂理には「天災」と「人災」が含まれています。被災者に寄り添うとき、この言葉は私たちに受け容れがたいものとなるでしょう。しかし、この摂理論に私たちの思考の出発点を求めることは、きっとできるように思うのです。

マウ博士は、惨禍の中における祈りについて、その良いサンプルを旧約聖書の中に見いだせるのだ、と語りました。旧約聖書を引ながら、マウ博士は大胆にこう言ったのです。「真の祈りは絶望を含みこむ」と。この結論について、私は、そこに現された彼の強大な信仰に敬意を抱き、そこに一片の真理があることを認めることができます。しかし同時に、私は、彼の結論に完全に同意することを、ためらい続けています。

次第に、私たちにも被ばく地フクシマの実情が見え始めています。273名を超える子供たちが甲状腺がんになりました。多くの母親たちが深い不安の中にいます。そういう被ばく地フクシマに、教会があります。どうやって教会は、放射能問題に悩まされている犠牲者に向かって「祈りは絶望を含み持つ」と言えるのでしょうか。今、惨禍の中の祈り論を探すようにと招く声が聞こえる気がします。そして私は、世界教会協議会の「声明：核から解放された世界へ」が生まれ出されていく道程を、惨禍の中の祈りを探す歩みの中に見出すのです。

惨禍の中の祈り論の探求を思うとき、私は三人の神学者との対話を思い出します。その三人とは、中沢啓介博士、金容福博士、そして張允載博士です。

b. 中沢啓介博士

3.11の三重災害の後、中沢博士は東京で二つの講演を行いました。それは神義論を扱ったものでした。その講義の中で彼は「現代の神学者の無責任」を指弾しました。彼の主張はこうです。私たちはもう一度17世

紀に戻って考えなければならない。17世紀の間を通じて、新しい知的運動が哲学者たちによって生み出された。たとえばライプニッツなどがその典型である。その新しい知的運動は、科学技術の苗床となった。そう主張する中沢博士は、続けて、ちょうどヴォルテールのように、1755年のリスボン大地震によって提起された深い神義論的問いに言及しました。「神学者の誰も、この問いに適切な答えを提示していない」と彼は言い、そして、創世記とヘブル書を改めて解釈しなおすべきだと主張するのです。彼の結論は、ある種の自然神学のようなものとなります。つまり、「科学技術を伴った世界を神と共に管理する人間」という概念を打ち立て得る神学を、彼は提起しているのです。あるいは、彼の主張について「それは新しいタイプの“核時代に適合した神学”なのではないか」と思う向きもあると思います。しかし、私は思うのです。彼の神学的冒険は、未来に向けて一石を投じる貴重なものである、と。そのような感謝の思いを抱きつつ、しかし私は、なお、問いを抱き続けます。この神義論をもって、被ばく地フクシマのような惨禍の中で祈ることができるだろうか、という問いを抱くのです。この問いを、私は中沢博士に直接ぶつけたことがあります。その時、彼はこう言いました。「この神義論は現実の惨禍を経験している放射能汚染の福島で構築したものだ。しかし、これはその惨禍の犠牲者を念頭において構築したものではない。むしろ、君のような若い神学者を念頭に構築したものなのだ！」と。そして中沢博士は、私の問いについて、引き続き一緒に考え続けようと思わせてくださったのでした。

c. 評価と批判

ここで、マウ博士と中沢博士への批判を行い、その限界性を乗り越えてみたいと思います。そうすることで、お二人の成果の意味を確かなものとするために、です。

お二人は、神の位置を天から地へと移動させることに成功しています。お二人の神義論は、受肉の教理を展開するものとして理解することができるものです。

マウ博士の講演の中で引用されたあるエピソードを、私は忘れることができません。惨禍の渦中にいた、ある若い地方牧師のことを、マウ博士は話したのでした。その牧師はH.M.カイトルト博士といました。世界戦争の惨禍の中で苦しむ人々が、確かな信仰の告白をする。そういう告白を、カイトルト牧師は何度も耳にしたというのです。それを聞くカイトルト牧師自身は、悲劇を前にして自分の完全な無力さに直面していたそう

です。私は、3.11の三重災害の中で同様の話を語り合っていた多くの牧師を思い出します。こうした多くの事例が持つ意味は何でしょうか？私は思うのです。神は人の無能が露呈するところで「赦す者」としてご自身を顕現なさる、ということ。あるいは、人間の無能を赦す神への信仰の内に、人は御摂理を見てきたということ。そして、その無能を曝しているだけの人間がただそこにいるということを許す神への信仰の内に、人は神のご摂理を見てきたということ。それが、こうした証言の中に示されている意味だと思うのです。

原子力の問題を前に、自らの弱さを感じざるを得ない。被ばく地フクシマの教会は、そんな状態にあるようです。原子力の問題はあまりにも巨大で深刻です。それに対して、教会はあまりにも小さいのです。しかし教会は神を信じています。神が教会の弱さを赦し、被ばく地フクシマに立ち続けることを許しておられる。そのことを教会は信じているのです。私はこう信じているのです。被ばく地フクシマにある教会は、神のゆるしの御業を見るだろう、と。なぜなら、復活したイエスがご自身を教会の欠けの中にあらわされるだろうから、と。このヴィジョンに支えられ、私たちは主の祈りを新しく祈りなおすことができます。このヴィジョンの中で、傷ついた社会の中にある教会の存在意義を、私たちは再び新たに見出すことができます。

神の摂理を、天ではなく傷ついた大地に見出すことができるとき、そのときと、惨禍のただなかにある祈りを見出すことができるのでしょ。マウ博士と中沢博士は、適切な仕方で、私たちその地点まで導いてくれたのだと思います。

その上で、マウ博士の講演については、次のことが語られなければならないでしょう。つまり、惨禍の中にある時、私たちにはいつも、神や運命への怒りが沸き上がりがちだ、ということです。ここで創世記4章6節にある単純な問いが思い出されます。「あなたはなぜ怒るのか」という問いです。これは神からの声として聞こえてくるものです。それを聞くのは、人生の不条理に直面している人です。ここで私は考え始めるのです。「神や運命が私たちを惨禍の中に追い込むとして、私たちは神や運命への憤激を乗り越えることができるのだろうか」と、そう私は考え始めるのです。

中沢博士の講演についてはどうでしょうか。彼の主張をさらに展開するために、もう少し正確な歴史的視野を持たなければならない、と思います。私たちは17世紀に生きているわけではありません。21世紀に生きて

います。17世紀は近代主義の出発点でした。17世紀は「天才の世紀」と呼ばれているのです！それに対して、私たちは近代の終わりを生きています。17世紀、私たちは多くの要望を持っていました。欲望はその時、それをかなえるための手段よりも多かったのです。しかし今、私たちは恐ろしいほどの数の手段を手に入れました。しかし、私たちの欲望は、それほど増えていないのです。そして今、私たちは欲望と手段の位置をひっくり返してしまっています。21世紀の今、私たちはまず「どんな手段があるのだろうか」と考え、それから、その手段を用いるための欲望を選んでいくようになりました。これが私たちのみじめな21世紀の状況なのです。その結果、たとえば私たちは、原子力の奴隷となっている自分自身の姿を見出しています。これは近代主義の努力の果ての姿です。17世紀以来取り残してきた課題に、私たちはもちろん、取り組み始めなければなりません。しかし同時に、私たちはポスト・フクシマ時代の新しい課題の解決に着手しなければならないのだ、と、私には思われるのです。

d. 金容福博士と張允載博士

科学技術の展開に伴い、私たちはとてもたくさんの道具を持ち、手段を持ち、手立てを持つようになりました。しかし私たちは、未来に開かれた想像力をそれほど豊かにも肥沃にもできなかったのです。「それで、気が付いたら、私たちはテクノロジーの奴隷のようになっている」と私に語った人がいました。金容福博士でした。2013年、世界教会協議会の釜山総会に向けた話し合いをしていた時のことでした。その時、彼は「テクノクラシー」という言葉を用いました。それはエコ・エティカで用いられる新しい用語です。それは「テクノロジーの支配」という意味の言葉です。テクノロジーは「手続きと仕組み」として、その姿を現実世界に現します。ひとつつながりの手続きやシステムが巨大な複合体となって立ち現れると、それを誰も止めることができず、全ての人がそれに従わざるを得なくなり、そして苦しむ。まさにそれを、私たちは今、放射能をめぐる問題として目の当たりにしているのです。放射能災害によって膨大な数の人々が苦しめられました。次の放射能事故を防止する手立てを誰も持っていません。しかし、私たちは原子力政策を放棄することができないのです。原子力のために一連の手続きとシステムがあり、私たちはその奴隷となっている。そう気づかされます。私たちが向き合っているのは、「テクノクラシー」なのです。

金博士の指摘は、張允載博士の努力につながっていました。張博士は、「声明：核から解放された世界へ」の原稿を作成しようと努めていたのです。そしてその声明文は2014年に世界教会協議会によって採択されたのです。その声明文の原稿作成に当たり、張博士は、旧約聖書の「出エジプト＝エクソダス＝脱出」のイメージを用いたのです。

2012年12月6日、原子力問題をめぐる諸宗教者の会議が福島県で行われました。張博士はその会議で講演を行いました。その講演は、参加していた仏教徒を深く感動させるもので、タイトルを「核から解放された世界へのエクソダス」としていました。この講演において、彼は正しくも、「核兵器と核発電は同じコインの裏表である」ことを主張しました。私たちはその言葉を世界教会協議会が採択した声明文に見出すことができます。ここで重要なのは、張博士が「出エジプト＝エクソダス＝脱出」という言葉を選んだことです。「出エジプト＝エクソダス＝脱出」こそ、最終的にまとめられた声明文の基調となった言葉です。「原子力の問題を正しく見るとき、私たちはいつも、原子力に隷属している自分自身の姿を見出さざるを得ない」と張博士は講演で語りました。そして20世紀神学を参照しながら、「私たちはゴードン・D・カウフマンとサリー・マックファーグが提示した“核の時代のための神学”を超越しなければならない」と張博士は続けました。出エジプト記3章10節（来なさい、私はファラオのところあなたを送り、私の民・イスラエルの子らをエジプトから導き出させる）を引用し、原子力の犠牲者に注目し、その犠牲者にヤハウエが寄り添っていることを聴衆に想起させました。出エジプトの時と同様、ヤハウエは私たちを召喚し、テクノクラシーの桎梏に苦しむ人々のところへ向かわせる。それが今の時だ、と、張博士は語ったのです。聖書の物語を私たちの現在の事柄へと持ち込むことに成功した。それが張博士の成果でした。

張博士はまた、韓国の伝統的神学である民衆神学（韓国の苦しむ民衆の神学）へも注意を向けていました。私たちは実に多くのことを、2012年の福島の諸宗教者が集う会議で学びました。これが「声明：核から解放された世界へ」の出発点となったのです。その会議の中で、私は張博士に、惨禍の中にある犠牲者と共に祈るための方途を尋ねました。彼は私の質問の意図を十分に理解し、一緒にその答えを探そうと励ましてくれたのです。

e. 被ばく者の声

福島における張博士の講演を受けて、世界教会協議会のつながりの中にネットワークを作り拡大させて、核からの解放を目指す声明文を公式に採択させよう、という努力が続けられました。張博士の講演が声明文の核となりました。その声明文において、「放射能によって苦しむ声の一つ一つ聞く大切さ」が強調されるように、世界中のエキュメニカルな仲間たちと共に、私は努力を続けました。幸いなことに、声明文はそのことを以下のように強調したものとなりました。

「ヒバクシャ」と「ピポクジャ（韓国朝鮮人の原爆被害者）」が、そして、核実験場の犠牲者が、核時代からの脱出（出エジプト）を求めて叫んでいます。この声に聴きましょ。遺伝子の異変によって身体の形を変えられた人々がいます。核実験によって大地と海を毒された人々がいます。核事故（原発事故）によって農場や市街を汚された人々がいます。職場で被曝を受けるウラン鉱山や原発の労働者がいます。私たちは、核によって傷つけられたすべての人々の苦しみに、耳を傾けなければならなりません。

被ばく者に、まず、聴くこと—それこそが、原子力の問題を解決したいと願う私たちにとって、鍵となる事柄かもしれません。そのことは、世界教会協議会が核から解放された世界へ歩み出す最初の一步にも見られることです。1954年、世界教会協議会は第二回目の総会を米国エヴァンストン市で開催しました。この総会で、世界教会協議会は核実験の停止をはっきりと訴えました。この結論に至る過程で、放射線被ばくの犠牲となった人々の声が、強烈なインパクトを与えました。特に、日本基督教団が発表した公開書簡は大きな意味を持ちました。その書簡は3400名の署名を付したもので、世界の諸教会の議論に影響を与えたのです。この総会が開かれるほんの5か月前、日本の漁民が太平洋のビキニ環礁で被ばくしたのです。それは米国が水爆実験を行った結果でした。その惨劇の中から生き残った人々が挙げた声が日本の教会を動かし、そして日本基督教団が世界の教会を動かした。それが第二回目の世界教会協議会での核実験への反対という結論に結実したのです。

犠牲者の参加こそ、重要です。私たちはそのことを、残念な事例から学ぶことができます。世界教会協議会が開催したある国際会議で、この重要性が見逃されたという事例です。その国際会議は「思考・科学・未来」

と題され、1979年6月にマサチューセッツ工科大学で開催されました。そのちょうど4か月前、原子力発電所の過酷事故が米国のスリーマイル島で起こりました。それで、その原子力事故が学者と専門家の間に関心に関する多くの議論を激しく巻き起こしたのです。事故から4か月後に行われたこのマサチューセッツ工科大学での国際会議での議論は、明確な結論を得ることができませんでした。原子力に対する賛否両論が沸騰したからです。参加者の報告によると、そこには被害者の声を上げてくれる人がほとんどいなかったそうです。ただ一人、宇井純氏だけが例外でした。巨大企業の公害被災地、有機水銀の過酷な汚染地帯となった水俣の声を携えて、宇井氏はこの会議に参加していました。宇井は、自分自身が向き合っている事柄は世界への警鐘であると訴えました。そして彼は声を強めて「どんな方法でもいい、どんな態度でもいから、とにかく被害者の声を直接聴くように」と提言したのです。

1979年の会議の反省に基づき、世界教会協議会は、その次の会議をアムステルダムで開催することを決定し、そこにヒロシマとムルロア環礁の当事者の参加を求めることとしました。ムルロア環礁は、太平洋の核実験場となった場所にあるのです。このようにして、世界教会協議会は被ばく者の声に直接耳を傾け始めたのです。そうした歴史の一つの果実として「声明：核から解放された世界へ」が2014年に採択されたのです。

3. 福島でつらいこと、惨禍の中の祈り

a. 母親たちの声

ここで私は一つの物語を語りたいと思います。2014年3月、京都で、私はある母親と会っていました。彼女はかつて仙台に住んでいました。いま私たちがいるこの街です。しかし彼女はその時、三人の子どもたちと京都に住んでいました。あの恐ろしい原発事故が起こったすぐあと、多くの地域が汚染されました。ここ仙台も、汚染されたのです。それで彼女は子どもと一緒にすぐに避難したいと願いました。しかし彼女の夫は同意してくれませんでした。夫とは何度も何度も口論となり、そして彼女は離婚して、子どもたちを連れて両親のもとに身を寄せました。しかし、なお大きな問題がありました。彼女の両親の家は、福島県川俣町にあったのです。仙台よりも、原発事故現場に近い場所です。そこは仙台以上に汚染されている場所であることを知ってはいましたが、彼女にはほかに選択肢がなかったの

です。彼女は小さな詩を書き始め、そしてインターネットに投稿して発信し始めました。その詩を読んだ人々が彼女につながりました。そしてその人々から東北ヘルプの情報を得た彼女は、私たちの支援事業を知ってくださったのです。彼女は私たち東北ヘルプの放射能計測所に来て下さいました。計測所のスタッフが彼女とたくさん話をしました。そしてついに、彼女は汚染地帯から子どもを連れて離れることができたのです。

ここに彼女の詩を少し紹介します。

1. 福島でつらいこと

子どもらをガラスバッチという
役立たずのおまもりをつけさせ
戦場にいかせます。
町の中は除染のトラックが
コンビニにはみたことのない
男性が沢山いて
土の埃の匂いがします。
あちこちにビニールの
袋が積んであります。その
近くは給食センターだっけ

2. 福島でつらいこと

この時間目が覚める
こどもらの のう胞 大丈夫なのか
自問する

精一杯の自衛すら

あざ笑うような
現実を受け入れたら

大丈夫なのは時間の問題だと
分かり切ってる 答えから

わたしはどう行動したら いいのだろう

周りを裏切る形で 逃げ出そうか

3. 福島でつらいこと

実家の母は 放射能を気にしてる
実家の父は 国に騙されて福島で 生きるど

そんな二人は 日々喧嘩しながら
多分 等しく 被曝して

今もこの時間を 過ごしてる
被曝なんて して欲しくない
子供も大人も年寄りも 被曝なんて
ありえない
ありえない

4. 福島でつらいこと

汚染土壌の袋が山になってる脇を
ドイツの取材班が白い防護服であるいている脇を
我が子がランドセルを背負いあるいてくる光景に、
悩む、いや、絶句。・・・

5. 福島でつらいこと

鬱という 心のガンを患いました
被爆、離婚
子供らの 未来を壊しました

避難は愚行といわれ

子供らにのう胞をみつけ
真実が 本当に不確かだ
無責任な自分たちや
世の中が悔しくて
心のガンを患いました

放射能は まず一番弱い
わたしの心を 汚染した模様

6. 福島でつらいこと

親も子供も大切に
ある朝 69歳の母が
お前は子供らを守れと

自分はどちらも 守りたい
福島ではどちらも 同時に
守れないかもしれないから
どちらかを取るっていう
究極の選択を
親が子の 幸せをただただ願う
二者択一の究極の選択を
繰り返す

7. 福島でつらいこと

もう こうなったら

やっぱり 自分の信じる道を
生きるという 結論まで
三年以上毎日 悩みました

旦那にあわせ 周りにあわせ
行事や学校にあわせ 福島にあわせて
きました

最後は自分に あわせて
残りの人生を 生きてみたい
できるかな

彼女の詩には力があります。彼女が向き合っている現実が、そして、多くの母親たちが直面している現実が、そこによく表れています。

福島第一原発事故の直後、私は一つの聖句を思い出していました。それはマタイによる福音書2章13節でした。

『聲ラマにありて聞ゆ、
慟哭なり、いとどしき悲哀なり。
ラケル己が子らを歎き、
子等のなき故に慰めらるるを厭ふ』

この声は、福島にこだましています。慟哭と大いなる嘆きの声です。

b. 福島の状況（私の証言）

東北ヘルプの事務局長として、700回以上の面談を行い、180人以上の母親たちと20人以上の父親たちとお会いしてきました。そのお一人お一人のほとんどすべてが、2011年以降、その子どもたちに異変を見てきたという方でした。この面談結果を報告したところ、スペインの新聞「エル・ムンド」がこれを取り上げ、報道してくださいました。以下の通りです。

「あの災害が起こったとき、私はこの町を捨てるのができませんでした。いま私は娘の鼻血を心配しています。咽頭にできたのう胞の一種だと診断されています。泣くときに呼吸がうまくできないほど痛がるのです」。マキコは6歳の娘を持つ母親で、福島原発から50キロメートル北にある郡山市に住むが、娘を苦しめ続ける健康上の問題を語るときには絶望的になるのだ。

マキコの証言は、郡山であの核の災厄の後遺症に苦

しむ子供を持つ母親たちへの経済的・精神的な援助を行うNGOを立ち上げた日本キリスト教団の牧師カワカミ・ナオヤが毎日のように聞いている、多くの証言の一つにすぎない。福島原子力発電所を襲った津波から5年経ち、カワカミは、甲状腺癌、鼻血、頭痛、腫れ物、眼球陥没、血便など、放射能の恐ろしい影響を被り苦しみ続けているおよそ600人の子供たちについてのレポートを公表した。

私は福島県で出会った一人の幼い女の子を忘れることができません。彼女は2014年の末に、5歳の誕生日を目前にして、白血病で亡くなりました。彼女の死の前後、私は彼女の母親と5回、お目にかかりました。その後、この少女の母親と兄は沖縄に移住しました。その母親は私にこう言いました。「娘は幸せでした。なぜなら、たくさんの人が彼女を知って下さり、彼女の短かった人生を祝福してくださったからです。」

4. 「十字架ヲ通ッテ光へ」と希望

a. 希望と惨禍の中の祈り

私たち東北ヘルプは、一つのモットーを持っています。それは「Per Crucem ad Lucem（十字架ヲ通ッテ光へ）」というものです。一つの写真をご覧いただきます。災厄の中にある十字架が見えるでしょうか。これは希望の象徴です。これが「Per Crucem ad Lucem（十字架ヲ通ッテ光へ）」というものです。

先ほど引用しましたマタイによる福音書の嘆きの歌は、エレミヤ書31章16～17節に続いているものでした。それはこうなっています。

汝の聲をとどめて哭くこと勿れ
汝の目をとどめて涙を流すこと勿れ
汝の業に報いあるべし
彼らは其の敵の地より歸らん

希望は常にあるのです。私たちは希望の民です。私たちは復活と命の民です。私は今、福島からの希望を語りしたいと思います。

希望を語るにあたり、まず最初に、冒涇とも思われることから始めなければならないと思います。私はこう考えてみたいのです。つまり、「大惨禍の源にあると目される運命に対して、あるいは摂理に対して、あるいは私たちの神に対して、私たちは、その犠牲者と共に、救しを与えなければならない」ということです。「愛に

は恐れがない。完全な愛は恐れを締め出す」と第一ヨハネ4章18節にあったことを思い出します。その言葉に励まされて、とりわけ嘆息の中にいる人々のために、私はあえて「われらの神を救す」と言ってみたいのです。十字架において、天の父が闇の中に隠れてしまったかと思われたその時、イエスはその天の父を救したのではなかったか。そしてイエスは、三日の間の沈黙を耐えなければならなかったではないか。そのことを思うとき、惨禍の中でイエスは御父を救し、その摂理を救したのだと、敢えて考えることができると思うのです。そうするとき、私たちは祈りを新しく始めることができるでしょう。つまり、この線に沿って、主の祈りの意味を新しくとらえることができると思うのです。主の祈りには真剣な嘆願があります。つまり「私たちの負債を赦してください。私たちもまた私たちの負債を赦しましたように」という嘆願です。私たちは、自分の人生の不条理に対する怒りから解放されるその時まで、自分が直面している惨禍の全体像を見通すことはできないと思います。自分の人生に取り巻く不条理へと燃え上がる怒り。その怒りから解放されたとき初めて、私たちは「世界に負債ある者」である自分の姿に気づくのだと思うのです。

b. 負債あるフクシマと告白の意味

確かに、私たちはこの世界に対して「負債ある者」です。例えば、今日も継続して、汚染された土壌が上空から降下していると類推せざるを得ない、ということがあります。私は石巻市の牧師です。石巻市は原発事故現場から100キロ北にあります。今年、震災前と比べて500倍は高いと思われる放射能を含んだ土壌を見つけ、私たちは驚きました。専門家の調査によると、福島第一原発は2011年以来とても多くの種類の核種を放出しているそうです。そのうちのいくつかは微粒子状になっており、成層圏まで上昇気流に乗って舞い上がり得るといいます。ですから、そのうちの幾分かは成層圏で対流し、ある日、それは降下する。したがって、北半球に住む人々は自分の住む土地が福島第一原発由来の放射性物質によって汚染されていないかどうか調査する必要があると、その専門家は警鐘を鳴らしています。

事実、日本は、太平洋を膨大な量の放射性物質で汚染した歴史上4番目の国となりました。事故で放出された放射性物質の70%以上が太平洋に流れ出しました。また、計測不能な量の汚染水は原発事故現場から今も流出し続けています。

私たちは地球と未来に対して罪責ある者となりました。このことを告白しなければなりません。世界に対して無責任であり続けていることも、告白しなければなりません。この告白にこそ、未来へのチャンスがあると、私は信じています。弱くされ苦しんでいる犠牲者が心からの罪の告白をする。その時、私たちは「憐れみと真実は出会い、正義と平和が互いに口づけを交わす」という詩編85編の言葉の真実であることを見ることができるのだと思うのです。

聖書が語る「平和」とは何でしょうか。それは「シャローム」という語で言い表され、「幸せが完全であること」を意味しています。「誰か」あるいは「何か」が傷つけられたままに放置されることで、特定の誰かの平穏・安全が保たれる。そんなものは、偽物の平和です。原子力は「不完全な幸せ」の源です。核の周囲には、ただ「偽物の平和」だけがある。そして、犠牲者による罪の告白は、テクノクラシーが被る「偽物の平和」の化けの皮を剥ぐのです。ここに、希望がある。私はそう感じてなりません。

c. ミナマタとフクシマ

1979年の米国での国際会議の時と同じように、いま私たちはまた、有機水銀で汚染された水俣から何かを学ぶことができると思います。

有機水銀はあらゆる動物の脳を傷つけていきます。とりわけ胎児への影響は甚大です。そうして現れてくる病を、水俣病というのです。私たち日本人は、写真家のユージン・スミス氏がとった写真を忘れることができませぬ。彼は子どもを抱いた母の様子を活写し、それをまるで「ピエタ」のように提示しました。フクシマにとまったく同様に、日本政府と巨大企業は水俣で苦しむ人々に対して無責任を貫こうと努めました。一般世論もひたすら無関心を装いました。10年もの間、水俣の被害者は孤立し絶望と向き合っていました。そしてそれから、同じ水銀汚染が同じ悲劇を別の場所で引き起こしたのです。新潟水俣病です。その時、水俣を生き抜いてきた人々は新潟の人々に謝罪をしたというのです。この病を再び起こしてしまったのは、自分たちの力不足の結果だと、水俣の人々はお詫びをした。この謝罪は、尊敬と親愛という強力な絆を生み出し、そこに生まれた連帯が自体の解決への糸口を生み出していったのです。

水俣の事例を参照するとき、私は一つの声明文を思い出します。それは「声明：核から解放された世界へ」が世界教会協議会で採択されるちょうど100日前に、こ

こ仙台で行われた東日本大震災国際会議で採択された声明文です。その国際会議はフクシマの問題に取り組み苦闘する人々によって開催されました。4日間の議論を通して、この会議は「罪の告白」を声明文として発表したのです。それは国際会議としては異例のことだったと思います。しかしそれこそ、未来に向けて適切なことであったと私は信じています。その声明文において、私たちは核から解放された世界に向けたエキューメンカルな世界のつながりを広げる糸口を見出しうるからです。

5. 証言者と地域教会のつながり

実際、私たちはフクシマという課題の難しさに直面しています。起り続ける問題は矮小化され、人々の間の分断は深まり、そうして問題は深刻化しつつ見えなくなっています。母親たちはその子どもたちを守ることに困難を感じています。大切な人を亡くす人々は、言葉を失ってたたずむばかりです。

問題が悪化してゆくほど、牧師たちは自らの役割の重要性に自覚的になっていきます。その役割とは、証言者となることです。牧師たちはそのことを深く理解しています。「殉教者」の原意はギリシア語における「証言者」でした。尊敬する牧師仲間たちは、この言葉が含意するその意味を、それぞれの胸の内に豊かに意識しています。

確かに、証言者の役割は重要なのです。苦しみの中にある人々の声は、いつしか声なき呻吟と化してしまうからです。その時、その声を聞く人は、ほとんどいません。そうして無関心が広がり、苦しみにある人はさらに苦しむことになる。

もう一つ、思い出したことがあります。2012年のことです。私は浪江町の副町長とお目にかかる機会がありました。2万人が強制避難させられた、原発から30キロ圏内の浪江町は、その仮設役場を二本松市に構えていました。その仮設役場は、無数の嘆息であふれていました。毎日の怒りと不安に非常に多くの人々がさいなまれていたのです。私はそこで、副町長と3時間にわたって話し合いました。副町長は穏やかに話し続けましたが、数回、その怒りをあらわにしました。「原発の再稼働について、どう思われますか」と尋ねたときもそうでした。その時、日本政府は西日本にある原発の再稼働の是非をめぐる議論を進めていたのです。副町長は怒りをあらわにし、そしてこう言いました。「日本政府が再稼働をするかどうかは、どうでもいい。し

かし、ひとつ我慢ならないことがある。その議論を、まるで私たちの悲劇を全く見ないようにして進めている。これは許せない」。彼の訴えを聞きながら、十字架上に響き渡ったあの叫びが私の胸にこだましたように思います。つまり「エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ」という叫び声です。この叫びは、詩編 22 編からの引用になっています。詩編 22 編の叫びの中心は、その 4 節にあると思います。つまり「しかし私は虫けら、人間ではない。すべての人にあざけられ、人々から捨てられた」です。苦悩と悲惨の中に置かれた人々が、無視されている。これが福島の惨状です。この惨状をもたらす現実、証言者となることで、私たちは抵抗するのです。惨状の中を生き抜く人々の声なき声に寄り添い、福島にとどまる牧師たちがいます。その人々を紹介できますことは、私の喜びです。その牧師たちこそ、傷と弱さを伴いつつ復活したイエスの御体としての教会を私たちに示してくれるお一人お一人なのです。

未来からくる希望が、私たちに必要です。この講演の最後に私は一つの聖句を引用したいと思います。

約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。(ヘブル人への手紙 10:23-25)

私たちが礼拝をし、集会をする、そのときに、福島の惨憺たる状況をも乗り越えて、希望がやってくる。そんな出来事を私たちは何度も目撃してきました。地域に根差したエキュメニカルなネットワークにこそ、現実に対抗するリアリティーがある。そのことを私は証ししたいと思います。暗闇の中に輝く希望をここでお分かちできましたことを、本当にうれしく感謝に思います。



講演をする川上直哉牧師と、熱心に聞き入る参加者



主教 ライ ロンシン **ダビデ 賴 榮信**

米国聖公会第8管区台湾教区（台湾聖公会）

2019年5月29日

発題要旨

1. 台湾は亜熱帯に位置する山の多い島であり、急こう配の多い地形のため水力発電の開発に限界があった。しかも人口密度が高く、台湾の「タイガー エコノミー」の発展につれ、家庭用・産業用ともにエネルギー需要は急増している。
2. エネルギー源の98%は輸入に頼っており、そのほとんどは電力用である。電気料金は安価であるため、浪費が多い。夏季は湿度が高く蒸し暑いので、エアコンディショナーのための家庭用電力需要が高いが、その夏季には水の供給が最低になる。そのため、政府にとっては大きな課題となっている。安価で信頼性の高いエネルギー源への需要には終わりがなく、今までのところ、小型の風力と太陽光発電のプロジェクトも行われている。
3. 原子力発電を導入したのは1972年のことで、安価で信頼性の高いエネルギー源として導入した。現時点では稼働可能な原子炉が4基あり、他に建設工事が停止中の原子炉も2基ある。原子力は、台湾の総エネルギー消費の7.28%を供給している。（2016年の数値）
4. 核廃棄物の処理は台湾政府にとって深刻な課題であり、台湾南東部の蘭嶼（ランユー）という孤島に低レベル廃棄物を埋めてきた。しかし、1982年からその島の住民主導の下、その撤去を求める運動が広がっており、台湾長老教会もそれを支援している。
5. 2011年の福島災害は、環太平洋諸国にとって方針転換のきっかけとなった。それには、台湾も含まれる。地形的特性や原子炉の構造そして沿岸配置など、類似点多すぎる。しかも、運営管理の体質やリスク評価にも問題があるため、台湾でも似たような原発事故が発生するという可能性については、不安はぬぐえない。市民の憂慮と反原発抗議活動が発生し、それを受けて政府は2014年に第四原発の建設を中止する決断を下した。
6. 現政権が権力の座に就いたのは2016年のことで、反原発層を支持母体にしてきた。最近の住民投票では原子力の利用継続を望む市民が59%を占めていたが、政府は原発を廃止していくという方針を変更しないと発表した。今後も課題は、安価で豊富、安全で信頼性の高いエネルギー源を見つけて台湾の抱える巨大な産業用・家庭用電力需要に対応することである。



発題 韓国

さらば、核発電所 核なき世界を求めるキリスト者の連帯

キム ギソク
司祭 アモス 金 基錫

聖公会大学校総長 大韓聖公会

2019年5月29日

○ 韓国の脱核運動の歴史と成果

◇ 反核？脱核？

- ・「脱核」は福島核事故（2011年）以後に生じた単語
- ・反核（Anti-nuke）運動が持っている否定的なイメージを払拭させ、代案的な運動としての姿を示すための努力

◇ 草創期（1985～1989）、主要事件（チェルノブイリ原発事故、1986年）

1. 地域運動

- ・1985年霊光核発電所の周辺住民の被害保障運動
- ・1988年霊光原発3、4号機建設に対する反対運動「同時多発デモ」と「産業連帯闘争」

2. 市民社会運動

- ・1989年全国核発電所追放運動本部を結成

◇ 反核運動の発展（1990～2004）

1. 廃棄場反対運動

- ・1990安眠島、1994堀業島、2003-2004扶安
- ・建設白紙化の成果

2. 原発反対運動

- ・1998蔚州郡新古里原発建設誘致の推進
- ・新規原発建設反対運動の失敗

3. 核政策の転換運動

- ・核発電に対する公論場の構想を推進→失敗

4. エネルギー転換運動

- ・2000年代以後、核発電の代案運動として推進
- ・エネルギー節約、および再生エネルギーの補給拡大のための多様な努力に傾く

◇ 反核運動の衰退期（2005～2007）

- ・2005年以降原発と廃棄場は、忌避嫌悪施設から誘致競争施設へ劇的に転換
- ・2005年破格の補助金を提示、および住民投票という新たな順序を投入、慶州を中低準位の廃棄場の選定地にすることに成功
- ・以後、韓国の反核運動は、大きく萎縮し暗黒期へ

◇ 反核運動の暗黒期（2008～2010）

- ・李明博政府は、2008年「低炭素グリーン成長」政策を国家の「新発展パラダイム」として明らかにし、気候変化とエネルギー安保危機に対応するために原子力発電を拡大しなければならないと主張
- ・この時期に反核運動は大きく後退し、政策の変改に対して効果的な対応ができなかった

◇ 韓国の脱核運動

- ・2011年3月16日、市民社会団体、政党、労働組合、宗教団体など40あまりの団体、およそ80

名の代表者が緊急に集まり、「東日本大震災、核事故被災支援と核からの安全な社会を願う市民共同体（核市民行動）」を決議

- ・核市民行動は、以後「核なき社会のための共同の動き（核共同運動）」として名称変更し今日まで活動を継続
- ・古里1号機廃棄および脱核を社会のアジェンダとして想起させる活動を通して一定の成果を得ている

◇ 主要な議題

- ・老朽化した核発電所の閉鎖（寿命延長の中止）
- ・新規核発電所の建設白紙化
- ・使用後、核燃料関連、新規核施設の建設撤回
- ・高準位廃棄物の空論化
- ・脱核エネルギー転換の基本法制定
- ・再生エネルギー支援および拡大
- それ以外にも多様な地域的要望が存在する

○ 核なき世界のための韓国キリスト者連帯

◇ 核キ連

- ・核なき世界のための韓国キリスト者連帯（核キ連）
- ・2012年3月1日、核なき世界のための韓国キリスト者の信仰宣言を発表
- ・2012年4月23日、核なき世界のためのキリスト者連帯の創立を宣言
- ・「核なき世界のため韓国キリスト者信仰宣言書」を私たちの信仰告白として含み韓国教会が「核なき世界のための平和教会」として自らを告白し、韓国キリスト者が韓国と東北アジア、全世界が核兵器と核発電所を廃棄し、いのち、正義、平和の世界を造ることに寄与する目的として造られた

◇ 核キ連 主要活動1

- ・古里1号機廃炉のための活動
- WCC古里リレー 40日断食祈祷会（2013）
- WCC古里核発電所懇談会及び祈祷会（2013）
- 脱核からいのちへ 40日の巡礼（2015）
- ・蜜陽送電塔反対運動
- 蜜陽送電塔建設白紙化と核のなきいのちの世界のためのいのち平和祈祷会（2013）
- 蜜陽住民とともに降誕礼拝（2013）

◇ 核キ連 主要活動2

- ・脱核礼拝及び祈祷会活動
- 福島核事故（3月11日）を記憶する脱核連合礼拝を実施（2013年から2017年まで毎月）
- ・政策協議会及び集会
- ・総会（2012—2017 毎年4月ごろ）

◇ 核キ連 主要活動3

- ・さらば、核発電所10万署名 キリスト教本部の活動
- 発足式（2016年12月22日）
- 脱核教会運動：300教会目標（121の教会が申請）
- さらば、核発電所署名運動参与（計26,348名）
- 青年キリスト者と共にする脱核トークコンサート（2017年1月 主催：EYCK）
- 慶州月城脱核巡礼（2017年2月、主催：イエス暮らし）
- 大齋節脱核断食祈祷会（2017年3月～4月、40日間）



発題 日本

いのちを守るために～原発のない世界を求めて

司祭 ヨハネ 相澤 牧人

日本聖公会

2019年5月29日

「あの時」の出来事は、私たちに大切なことを物語っていると思います。イエスのたとえ話は、「私たちが何者か、どのような人間にならなければならないかを再発見するために読まれる」という理解があります。それと同じように、「あの時」に起こった出来事が物語ることを通して再発見していくことが大切であると思います。その様な思いから「いのちを守るために～原発のない世界を求めて」と題して話させていただきます。

私は原子力発電のことを科学的に、技術的に知る者ではありません。それは門外漢です。しかしキリスト者として、人間として生きるためには、これは関心を寄せていかなければならないテーマであると思います。「いのちを守るために」信仰者としてどのように考えていけばよいのかということに焦点を当てていきたいと思えます。

すべての人に神様から平等に与えられているものが三つあります。命と時間と死です。この三つのものは、まさに平等に与えられています。多い少ないはありません。これは荘厳な事実で、このことについて話し出すなら、与えられた時間は終えてしまいますので、この事実を心に留めて置いていただきながら、その一つの「いのち」に焦点を当て、原発問題を考えていきたいと思えます。

すべての人に神様は一つのいのちを与えて下さった。故に私たちは生きています。正確に表現するなら、生かされているということです。そしてそれが、一つしか与えられていないということは、いかに大切なものであるかということ想像することが出来るでしょう。

そして、別の視点から考える時、その大切ないのちを破壊することは許されないのだと思います。その行為に関しては「否」ということでしょう。いのちを破壊するものは、戦争であり、誹謗中傷であり、無視することであり、共に生きることを否定することがあげ

られます。その他にもまだまだあると思います。そして、2011年3月11日に起きた東日本大震災によってもう一つのこと気づかされたのです。東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故は、危険な放射性物質をまき散らしました。この出来事によって私たちの生活様式と思考が根本的に変化してしまったと言われています。

原子力発電というシステムを、今、私たちはどのように考え、理解していけばよいのでしょうか。

創世記第2章16節と17節に「主なる神は人に命じて言われた。園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」と神の命令が記されています。

意味深い神の命令です。私たちは「食べてはいけないものがある」ということを知ることです。つまり、私たちにはしてはいけないことがあるということです。このことを再度思い起こしたいものです。そして、問題になっている原子力発電を考える時、この神の命令は、私たちの立ち位置を教え示してくれているのではないのでしょうか。「食べると死んでしまう」ということが、起きているのではないのでしょうか。正確には、あの出来事によって気づかされたということでしょう。

脱原発の哲学（さとうよしゆき たぐちたくみ佐藤嘉幸・田口卓臣著 人文書院）という本があります。その中に、原子力発電の問題点について記している箇所があります。

「原子力発電の問題点は、生命にとって極めて危険な放射性物質（いわゆる「死の灰」）を必然的に作り出し、してしまうことにあるのです。原子力技術開発の初期には、放射性廃棄物を無毒化できるという期待がありましたが、現在では、技術的困難や費用対効果ゆえに、その見込みはほぼなくなったと言ってよい、と言われます。放射性廃棄物の処理あるいは保管問題は、脱原発を実現しても残り続ける重大な問題です。放射性廃棄

物の半減期は数万年から数百万年とされます。数万年から数百万年という時間は私たちが想像もできないほど長い時間です。これほど長期間にわたって、極めて危険な放射性廃棄物を安全に保管できるかどうかは疑問です。とりわけ、日本は地震多発地帯に位置しており、放射性廃棄物を地中に埋めて数万年にわたって安全に保管することは、ほぼ不可能でしょう。また、これほど長い期間にわたって、発電による直接の恩恵を受けない未来世代へと極度に危険な放射性廃棄物を押し付けることは、倫理的な観点からも許されることではない。(脱原発の哲学 59頁)」と。

その通りではないでしょうか。

ウラン鉱の放射能半減期は45億年。

使用済み核燃料の毒性は10万年間の隔離が必要。

人類はどれくらい前に誕生したか。ホモと名付けられたのが180万年前、ホモ・サピエンスは20万年前。

また、「原子力発電とは、それを稼働させればさせるほど、長期的な管理を必要とする大量の放射性廃棄物を発生させずにはおかないシステムです。このシステムにおいては、現代世代の電力消費のために原発を維持し続けたその分だけ処分不可能な放射性廃棄物が増大し、その管理とそれに起因する大きな危険性が未来世代へ押し付けられることになります。現代世代の幸福が未来世代の犠牲の上に成立している、という構造を認識することでしょう。(脱原発の哲学 405頁)」とも記されています。

そして、「原子力事故は戦争とのみ比較可能である」(脱原発の哲学 33頁以降)ということ。他とは比較できないほど過酷なものということです。

つまり、原発や原子力施設で原子力(核)事故が起これば、広大な土地が居住不可能となり、数万人規模の人々が死の危険にさらされる。その意味で、戦争とのみ比較可能である、というのです。

例えば、チェルノブイリ原発事故では、

①死者数

チェルノブイリ・フォーラムは、チェルノブイリ原発事故の被害を受けた3か国(ベラルーシ、ロシア、ウクライナ)のうち比較的被曝量の多い60万人を対象として、ガン死者数を4,000人としている。

グリーンピースは全世界を対象にガン死者を93,080人としている。

ニューヨーク科学学会は、がん以外も含めた死者数を

985,000人としている。

②移住

土壤汚染によって1万平方キロメートルの地域から40万人が移住を強いられた。

③経済的損失

ベラルーシにもたらされた損失は、国家予算の32年分。これらは一つの事故としては桁外れに大きく、戦争とのみ比較しうる規模である。

福島第一原発事故では、

①避難

福島県の約154,000人が他の土地への避難(2013年3月時点)。戦争・内戦による難民出現に酷似。

②居住不可能・管理区域

原発周辺の約1,000平方キロメートルの居住不可能地域。14,000平方キロメートルの放射線管理区域。事故が原因でここまで広大な土地が居住不可能になることはない。あるとすれば戦争によってのみ。

ここでイエス様のみ言葉に耳を傾けたいと思います。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」(マルコ福音書8章33節)

これはイエス様がペトロに向かって言われた叱責です。この叱責の意味することは、人間のことを思っていないかというのではなく、忘れてはならない順序があるということに気づくようにということではないでしょうか。

神のことを思わず、人間のことを思う。原発事故から考えさせられることを思い巡らしたいと思います。

忘れてはならない順序とは、いのちを大切にすること。これを第一に置くということです。この思想は、ほとんどの人の共通項でしょう。しかし、「神の存在を全く考えていないか、たとえ神を信じていても、人間は怒りやねたみ、独占欲や支配欲に突き動かされたり、金銭や物に心を奪われてそのとりこになったりする時、神を忘れ、理性を失い、他の人のいのちさえ奪ってしまうことがあります。神なしだと人間は、権力、体力、知能、所有物などの点で自分より劣っていると思う人に対して、そのいのちを自分より軽く見る傾向がある」(「非暴力による平和への道」13頁より)とされています。

「神のことを思わず、人間のことを思っている」というイエス様の言葉を現代の状況の中で考えると、「いのちのことを思わず、経済のことを思っている」と言い換えることが出来るのではないかと思えてきます。

理論経済学者と言われる宇沢弘文^{うざわひろふみ}さんは、人が生きる土台となる大気や水、森林、土壌などを市場原理にゆだねるべきではない、と発言しておられたと聞きました。それは、生活の糧の海を大企業の利益のため汚され、健康と命を「換金」させられた水俣の人びとや、国策による開発で先祖伝来の地を「換金」させられた人々がいるということ、また今もそのようなことが行われようとしていることへの警鐘となっているのではないのでしょうか。人が生きる土台となるものを市場原理に委ねてはならない、と言われます。大切な視点を私たち与えてくれているのだと思います。

哲学者の梅原猛^{うめはらたけし}さんはある講演で、「草木国土悉皆成仏^{じょうぶつ}」という思想を語られました。この考え方は、動物はもちろん、草木すなわち植物や、国土すなわち鉱物にも仏性が存在し、成仏可能であるということです。つまりこれは、自然と共生する生き方を示しているものだという事です。今回の福島原発事故から、明らかになったことを通して、人間は、科学技術文明を「草木国土悉皆成仏^{せいぶつ}」という立場、すなわち自然との共生という立場で考え直さなければならないのではないかと問いかけられました。

イエス様が言われた永遠の命を生きることを私たちが実践するとき、この自然との共生ということをも加味しなければならないのではないかと思います。創世記の天地創造物語の神話が教えることは、まさに自然との共生であり、自然を治めることです。支配するのではなく、治めるのです。神が造られたものを、その本来の姿を発揮して行くことが出来るように治めることが、人間に与えられている任務であるということをお忘れはなりません。

放射性（核）廃棄物の無害化の技術は、人類は持っていません。それがもとのウランと同じ放射能になるまで10万年以上の時が必要と言われています。核燃料から生じる危険な廃棄物の安全な処理方法が見出せない現実ひとつとっても、原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではありません。それをしようとするのは、経済が優先である、利益が優先である、という思いからなのではないのでしょうか。

人のいのちよりも経済成長を優先するのではなく、神のことを思い、人のことを思う、いのちを貴ぶ社会を作り上げていくことに力を発揮していくことが、私

たちの生きる道なのでしょう。

そのことを思う時、2014年5月21日に、福井地裁の大飯原発3、4号機の運転差し止め請求事件の判決で、原子炉の運転をしてはならないという判決が下されました。この判決文は学ぶものが多いのではないかと思います。

殊に、その中で国富の喪失ということに関して語られていることは聖書の理解と同じではないかと思えます。

「国富の喪失」ということで、次のように言っています。

被告（関西電力）は本件原発の稼働が電力供給の安定性、コストの低減につながると主張するが、当裁判所は、極めて多数の人の生存そのものに関わる権利と電気代の高い低いの問題等を並べて論じるような議論に加わったり、その議論の当否を判断すること自体、法的には許されないことであると考えている。我が国における原子力発電への依存率等に照らすと、本件原発の稼働停止によって電力供給が停止し、これに伴って人の生命、身体が危険にさらされるという因果の流れはこれを考慮する必要のない状況であるといえる。被告の主張においても、本件原発の稼働停止による不都合は電力供給の安定性、コストの問題にとどまっている。このコストの問題に関連して国富の流出や喪失の議論があるが、たとえ本件原発の運転停止によって多額の貿易赤字が出るとしても、これを国富の流出や喪失というべきではなく、豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富であり、これを取り戻すことができなくなることが国富の喪失であると当裁判所は考えている。

また、被告は、原子力発電所の稼働がCO2（二酸化炭素）排出削減に資するもので環境面で優れている旨主張するが、原子力発電所でひとたび深刻事故が起こった場合の環境汚染はすさまじいものであって、福島原発事故は我が国始まって以来最大の公害、環境汚染であることに照らすと、環境問題を原子力発電所の運転継続の根拠とすることは甚だしい筋違いである。

これは残念ながら、名古屋高裁金沢支部でこの判決が逆転し、再稼働されてしまいました。

文芸評論家の齋藤美奈子^{さいとうみなこ}さんという方が、原発をな

ぜ止められないのか。その理由を分析されました。

- ・ やっと再稼働にこぎつけたのにそう簡単に止められるかという意地。
- ・ ここで止めたら二度と再稼働できなくなるという不安。
- ・ 危機を乗り切れば日本の原発の安全性が立証できるという期待。
- ・ 停止を求める声に屈したら負けだという面子。
- ・ 停止に伴うリスクを負いたくないという自己保身。

意地、不安、期待、面子、自己保身、もしこれが本当のことであったなら、たまったものではありません。でもなんだかそうなのではないかと思えるような気がしてきます。

メルケル首相は2011年4月に「安全なエネルギー供給のための倫理委員会」を設置しました。そして、2011年5月30日に倫理委員会は、「10年以内に原子力エネルギーから撤退できる」とする報告書を提出したのです。要点は、

- ① 原発の安全性が高くても、事故は起こり得る。
- ② いったん原発事故が起きると、他のどんなエネルギー源よりも危険である。
- ③ 次世代に廃棄物処理などを残すことは倫理的に問題がある。
- ④ 原子力より安全なエネルギー源が存在する。
- ⑤ 地球温暖化問題もあるので、化石燃料を代替として使うことは解決策にはならない。
- ⑥ 再生可能エネルギー普及とエネルギー効率化政策で、原発を段階的にゼロにしていくことは、将来の経済のためにも大きなチャンスとなる。

水力、風力、波力、地熱、太陽光……。また、揚水発電は大きな蓄電池の役割を持つのだ、ということに気がついてきました。方法はたくさんあるのです。

故に「決断」なのだろうと思います。原発を無くすと決断すれば、それに対してさらに研究し、知恵を出し合い、方策を見出していきます。それは再生可能エネルギーの普及に前進します。小さな技術が様々に開発されているようです。

「豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富である」ということを再確認していきたいものです。

2006年に97歳で逝去された仏教詩人の坂村真民^{さかむらしんみん}という方がおりますが、その方が「あとから来る者のために」という詩を書かれました。

あとからくる者のために
あとからくる者のために
苦勞するのだ
我慢するのだ
田を耕し
種を用意しておくのだ

あとからくる者のために
山を 川を 海を
きれいにしておくのだ

ああ あとからくる者のために
みんなそれぞれの力を傾けるのだ

あとからあとから続いてくる
あの可愛い者たちのために
未来を受け継ぐ者たちのために
みなそれぞれ自分でできる何かをしてゆくのだ
(坂村真民詩集『詩国』より)

最後に、2014年5月6日に東京都江東区夢の島の第五福竜丸展示館前で行われた「2014年原水爆禁止国民平和大行進〈東京～広島コース〉出発集会」の中で、福島県いわき市から東京に避難している11歳児の訴えが参加者の胸を打ちました。全文をご紹介します。

ぼくは、原発事故の次の日に、福島を離れてから、一度も自分の家を見ていません。2年生の3月に、急にぼくは東京の子になりました。家も学校も友達も、楽しかった事が急にみんな消えて、ひなん所から知らない学校へ行く生活が始まりました。

弟も、ぼくも、泣いたり吐いたりしながら、ただ、しなければならぬことをがんばりました。

ぼくたちは、くいきがいひなんだから、ばいしょう金がほとんどもらえないので、みんなたいがい貧乏です。そして、ほとんどの子が、お父さんと離れ離れの生活をしています。お父さん達が福島で働かないと、ぼくたちは避難を続けられないからです。原発事故さえなければ、ぼくらはみんな、自分の家で、家族そろって普通に暮らせたはずです。ぼくも、1年半はお父さんと離れ離れでした。たまにお父さんに会える日はす

ごく嬉しかったけど、お父さんが帰るたびに、弟が布団にもぐって泣くので、すごくつらかったです。ぼくも弟と同じ気持ちだったから。

ぼくのお父さんは、一人で福島の家に残ってがんばったけど、心と体が壊れて、仕事を辞めて東京へ来ました。やっと一緒に暮らせるようになったけど、今でもいろいろ大変なことがあります。

広島や長崎の原爆のことは、話には聞いたけれど、まさか69年もたって、自分の家の上にも同じ様なものが降ってくるなんて、そして、その見えない毒が、ぼくたちの生活をめちゃくちゃにってしまうなんて、夢にも思わなかったです。

ぼくたちは、原発事故でたくさんものを失いました。自分の家や家族の笑顔や、たくさん楽しい事が、みんな消えてしまいました。

こんなことを二度と繰り返してほしくないから、どうかぼく達が政治を動かせる日まで、この国を守っててください。そしてぼくたちに、原爆も原発も無い、安全な未来を渡してください。ぼくたちは、それを引き継げるように、一生懸命勉強してついでいきます。よろしくお願いします。

いのちを守るために、私たちはその視点を明確にし、生きていきたいものだと思います。私たちは、いのちの問題として、全体として何が最善か、をしっかりと見極め、選び取っていききたいものです。経済活動の一つに過ぎない原発の再稼働を優先する道理はどこにあるのか、ということでしょう。キリスト者として(人として)しっかりと生きていきたいものです。

私たちの生活において電気は必要です。電気を使い続けられる安心感があります。大切なことは、その電気を作る方法です。原発は電気を起こす手段の一つでしかありません。現在は安全性、環境維持、コストのどれをとっても原発よりも優れている再生可能エネルギーの世界が手に入ろうとしています。このことを再確認し、いのちを守るために原発のない世界を求めていきたいものです。

最初の問いに戻ります。私たちは何者か。それは、神から命を与えられ、生かされているというものではないでしょうか。どのような人間にならなければならないか。それは、原子力発電をはじめとして命を破壊することに対して否としていく生き方をするではないでしょうか。

グループシェアリングで話し合われた事柄

協議会の2日目と3日目に参加者を7グループに分け、分かち合いの時を持ちました。グループ構成は、2日目と3日目それぞれ違います。分かち合いの中で出された、さまざまな言葉が声明文に反映されました。下記は、分かち合いのメモを書き写したのですが、分かり難いものには多少加筆をしました。

グループシェアリング① 5月29日

<グループA>

- 日本聖公会のこうした反核発電の動きは、今までの聖公会にあまりなかったもので、評価できる。→ 一步を踏み出すこと。
- 以前、英国国教会の、ある主教が原発推進の立場をとったことがあったが、実は原発業界との共通利権があった → 利権構造。
- 国連の「難民」定義に、「環境難民」という条項がない。これから、追加すべきでは？
- 環境をもっと社会制度の中に反映させる。経済格差はエネルギーの選択にも影響する。環境的正義 (Ecological Justice)。
- 放射性廃棄物は、やはり深刻な問題。人類が登場してから今までよりも長い年月、保管せねばならない。神戸港には、英国の使用済み核燃料再処理工場で再処理された高レベル放射性廃棄物を積んだ貨物船が2隻、到着する。2隻の内1隻はデコイ。
- 「クリエーションケア (Creation Care)」。
- サンフランシスコでは、「グリーン チャーチ イニシアティブ」。今後、脱原発も追加したい。
- 具体的に、教会はどのような活動を開始できるのか？ たとえば、ソーシャルメディアやYouTubeなどでの情報発信や、被災地の現状（特に、福島の子どもたち）の紹介など。→ 具体的な行動を。
- さらに、Repentance Tours とか・・・被災地をじかに視察し、自分のライフスタイルを改めるきっかけに → 具体的な行動と反省。
- テクノロジーに伴う責任の自覚。

<グループB>

◇感想

- どのようにして日本聖公会は、脱原発という 이슈 で一致できているのか、教えて欲しい。
- ある専門家の信徒さんは、「反対は、もちろんそうだが、廃炉するための研究を継続的に行わなければならない、と。原発ムラで働いている信徒が多い教会、付属幼稚園もあるため、発言に気をつけなければならないことがある。福島の教会においても、同じ状況である。放射能の危険性について話を出すことが非常に難しい。原発の安全神話を信じている信徒もいる。
- 実践可能な課題 ①情報、手段の確保、技術力を取得する。②政党の公約にする。社会的な力を持つ。
- 原発の危険性を知らせる。チェルノブイリ、福島を知らせる。韓国では古里や月城に関することも、信徒レベルで情報共有。
- 政府の情報は限定的。私たちが支払っている電気料金の中に廃炉費用が入っていることは、ほとんどの信徒は知らない。『フクシマのウソ』という映画がある。
専門家でない聖職が「原発は必要ない」と言った時、専門家ではないために、納得が得られない。明確な根拠を示す必要がある。

- 原発の推進。ソウル大学の原子力研究者 24 名の中で、1 名以外は原発を賛美しているような状況がある。ソウル大学のような大学の知識人は、市民に対して影響力があるため、一般市民が反対するのは難しい環境がある。日本の中ではキリスト教人口が少ないため、社会に影響を及ぼす難しさもある。
原発マフィア。原発を止めると、電気料金が上がるという脅し。
- ミランダさんの話の中で、再生可能エネルギーが、5 年間に投資できる新たな主流になるという話があったが、それに関する具体的な内容も欲しい。
- 過去の日韓聖公会青年セミナーのなかで、核や原発に関する問題が取り上げられたが、真剣に聞き、議論する青年の姿が希望であった。
- 国際協議会の意味：このような会議が開かれることに感動している。国際的な連帯とし、一緒に解決しなければならない問題であると認識している。日本としては負債を抱えた国として情報発信をする義務がある。また国家は、原発事故を忘れさせようとしているため、記憶する必要もある。
- 反対デモの必要性。日本はもっとデモを展開する必要がある。自分たちの声を出す。
- 脱核運動。核武器とも合わせて語る必要がある。そうすると平和問題であるため、信仰者は扱いやすい問題として落とし込める。
- 福島での活動。震災後いっしょに歩こうプロジェクトのスタッフとして津波の被災地域において働いた。放射能の危険性が、福島の子どもたちへどのような影響があるか、心配をしていた。
郡山では、外で子どもたちが遊べない状況がある。幼稚園での働きを通して、保護者との関係性もでき、ある時、放射能について保護者と話す機会があった。夏休みは一歩も外に出られない家庭があることを知り、地元の九州に来てもらい、外で遊べるプログラムを作った。毎回、10 家族ぐらいが参加した。
- 祈りと実践。暮らしの中でどう実践するのか。自然が好きのため、山の麓で生活したいと元々考えていた。今は借りている民家で五右衛門風呂を使ったりしながら、薪で生活している。電気は来ているが、節約的な暮らし。教会で何ができるか。自分の欲望をどのように節制するかという課題がある。実際にスローライフをしている方に会うと、自分の生活を見つめ直す鏡として、振り返る機会になる。
- 被災者を対象にしたリフレッシュプログラムには、財政的な補助も含め管区・教区が支援をしている。人材面、金銭面での助けが必要。
- 私たちに忘れさせようとする、政府の力が働いている。私たちが記憶していく、その継続性が必要である。どうすれば、共に忘れずに歩むことができるか。被災者の中には、フィリピン人女性を含め、外国人も多くいる。時間が経つにつれて忘れていく、その不安があるし、自分の中の反省もある。証言していくことの重要性。
- 阪神大震災。献金を集め、専門家との勉強会を行った。しかし、継続していくと「いつまでやるのか」という質問も一方で浮上する葛藤がある。東北震災の際も、ボランティアで行っているときは、顔と顔の付き合いで覚えているのだが、時間の経過とともに忘れるため、聖公会のネットワークを通して共有していくことが必要。

◇ 声明文を意識して

- 核兵器の廃絶は、宗教界においても大きなイシューとして取り扱われている。核兵器廃絶批准に向けて動いている。「核は人権を守らない存在」としての平和運動を展開できれば。
- 正義と平和委員会が自然エネルギー 100 パーセントの賛同団体になった。「賛同」だけでは実践は伴わなくてもいいが、「声明」にした場合、実践が必要。
- 自然環境エネルギーを実際に使う教会。
- 太陽熱温水器などを使うことは、電気とは異なるが、電気の節約が可能。
- 欲望を捨てる運動。節制運動。楽しくできるシステムを考える。
- 韓国は変化を恐れない、日本は変化を恐れる。
- 環境運動をする人が少ない。神学教育の中で環境問題、気候変動、プラスチックフリーなどを宣教的使命として教育する。また宣教的使命として共有していく。聖職養成の過程として、自然神学的な部分、例えば、生態学的神学の学びを深める。

- 韓国は環境主日がある。日本聖公会と同じ。
- 技術（石炭、原発）に隷属する世界からの脱出。そして、すべて二酸化炭素、放射能の問題を第三国に任せる、帝国主義的な世界の社会構造の解消。貧しい国への押し付けに反対する勇気。原発技術の輸出、廃棄物の押し付けへの反対。
- 代替エネルギーへの転換に対するバックアップ（管区からの補助？）。
- 地域住民に受け入れられる、環境のための開かれた教会。

<グループC>

- ・ 倫理的な問題として捉える。
- ・ 現状認識(懺悔含む)→目標、希望→具体的な方策。
- ・ 命の課題。
- ・ 日本聖公会としての、連続性の中で 宣教協議会、戦争責任。
- ・ 世界の聖公会に対する、日本聖公会の使命(広島、長崎、福島)。
- ・ 平和憲法とも関連させなくては。
- ・ 限られた人の問題としない、共通の課題としていく努力を。
- ・ 無関心の罪。
- ・ ソーラーパネル導入基金、グリーンチャーチ基金があると良い。
- ・ 日本は、素朴な疑問を持つ人々の参与を棚上げしてきたのではないか。
- ・ 気づけなかったことに対する懺悔を声明文に。
- ・ 想像力、忘却しない。
- ・ 大企業主導の再生可能エネルギーには問題が多いのでは。
- ・ 教会で、再生可能エネルギーで作られた電気を購入するなど、日々出来ることを実践する。諦めない。
- ・ ファクトチェック(事実の確認)、情報を積極的に求める。
- ・ 対話の出来る関係性の構築。
- ・ 言葉が出ない、出せない社会を作ってきたのではないか。
- ・ 自分が使用している電気について、専門家任せで責任、関心を持ってこなかった。
- ・ リアリティを持って覚える、という事を忘れていた事実に気がついた。
- ・ 「あとから来る者に」負債を負わせている。未来を生きる者のために。
- ・ 声明を作るだけでなく次の一步を、私たちは何が出来るのか具体的な模索を。
- ・ 環境教育。
- ・ 脱原発だけではなく、脱温暖化の重要性、再生可能エネルギーの導入。何故今、原発に反対するのかを意識する必要性。

<グループD>

- ・ 民主主義になっていない日本が残念。
- ・ キリスト者としての運動で聞かれる Exodus（出エジプト）。為政者を含めたエクソダスに向かわせることが必要。
- ・ 忘れずに問い続けることが必要。そのために、教会にソーラーパネルを置いてみる事で示せるものがある。
- ・ 教会は、何故脱原発を主張するかを明らかにする。
- ・ いのちにかかわる事として、一緒に乗りこえる。
- ・ 生き方を変えてゆくことが必要。
- ・ 相手は電力会社ではなく国。
- ・ 管区から教区への伝え方が重要。

- ・ 訴え方の工夫が、誰にも必要。
- ・ キリスト者にとっての“いのち”が光りかがやくものとして。

<グループE>

- ラマで叫びが聞こえる。
- 私たちには、触ってはいけないものがある。
- 11歳の男の子の言葉（相澤司祭発題最後）に心打たれた。難しい言葉ではなく、簡単に正直な言葉で分かりやすく語る。心に響く（声明に反映させて）。
- ドイツは、電気代を上げることによって、効率化をはかるようになった。
- 私たちは何ものか？
- 子や孫から見て、私たちは何ものか？子どもたちに生き方を示すために、何が出来るのか？
- 少数政党「みどりの党」を選んだ。少数派だった国民が選んだ行動が、国を動かした。
- ネームプレートを首にかけながら、積算線量計を首にかけている福島の子どもたちが忘れられない。
- 「ポーと生きてんじゃねーよ」と、チコちゃんに叱られるのではないかと思うぐらい、今回の話を聞いて衝撃を受けた。
- 「わたしたちは奴隷」（解放されていない）、「前のほうが良かった」（エジプトの民）⇒人間の本质。
- 引き出しの中にある計画がすすんでいく。
- ドイツの、脱原発までの長い歴史を知った。
- 足下の声を聞いていない。聞いてこなかったことへの反省。
- 神は人間が無能であることを赦している。
- 大きな出来事の片隅で起きている出来事を、見落としてはいけない。
- 福島の事故が世界にショックを与え、世界を転換させたのに・・・日本は？
- 北海道胆振東部地震によるブラックアウト。人々はお互いに助け合っていた。
- 太陽光発電設備のためにローンを支払わないといけいない。太陽光発電はいいと最初は思ったが・・・。
- 日本人の生活習慣がおかしくなっている。
- 生活習慣を昔のように？本当にそれが出来る？それが問題解決にはならない。
- 自由と安全は裏腹ではないか。
- 原発をやめても、石炭を使ったら意味がない（ミランダさんの講演）。
- 小回りがきく地域の生活に根ざしたお店は、震災後でも営業を続けられた（北海道 セイコーマート）。
- 地域のつながり（小さな力）が、「いざ」という時に強い。
- 原発は電気を生み出す手段にすぎないのだから、選択の問題である。
- 電力会社の独占を崩すチャレンジ⇒例）神サボ電気、電力の自由化。
- 原発が生み出す電気を使わないようにしよう、生活習慣を昔に戻しましょう、と言うことは簡単だが、実際に具体的に何が出来るのか。一步踏み出していかないと。
- 日本の企業は自然エネルギーにシフトしていっているのだから、脱原発に向けての希望はある。
- 広島、長崎の原爆で一体何が起きたのか、チェルノブイリ原発事故で何が起こったのか、学んで来なかった。過去の出来事ではなく、現在のことである。
- 具体的な提案。なるべく多くの人が学び続ける、聞き続ける（私たちも子どもたちも一緒に）。日本聖公会「フクシマ週間」の設置はどうだろうか。証言を添えて。
- 地球環境のために祈る主日に信施協力を加えて、フクシマ週間のプログラムに用いるのはどうか。
- 核廃棄物処分場が「わたし」の町に来たらどうか、という思いで考えていく。
- 福島原発事故から「今日で〇〇日」とカウントしていく。忘れないために。

<グループF>

- 子どもを傷つけている。社会的に小さくされている者が傷ついている。
- キリスト教教育は命の教育。子どもたちの命。命を考える重い責任。
- 健康被害は現実に起こっている。隠されている。
- 原発は今を「幸せ」にするために、未来を壊すもの。
- 立教大学が原子炉を持っている→日本聖公会も関わっていた。自分達の問題。
- 原発には、廃棄物や危険対策の技術を伴わない。大きな発見。
- 被災中に、原発事故の問題をきいた。未来のために考える必要がある。
- 発信すること。学びをどう活かすことができるか。
- 2025年までに原発を撤廃する等、日本で具体的な脱原発の機運を作る。
- 関心を持つこと。当事者意識、想像力がなければ何も生まれない。
- 私達の使う電力について考える。代替の電源はある。原発に頼らずとも電力は足りる。
- 人間にとっての本当の幸せを考える。決して、効率や便利さとは同じではない。
- 生活に、電気は必要。エコカーや電子タバコは良いイメージ。本当？
- 私達の生活、便利だが、傷つけたものの方がはるかに大きい。命を傷つけている自覚。
- 格差の問題、都会と小さな農漁村。
- 原発の不都合な事は隠されている。高額。アメリカとの関係。核兵器との関係。
- 事故が起こった時には、沢山話し合った。諦めないで言い続ける。模索し続ける。
- 「真の祈りは絶望をも抱え込む。」クリスチャンとして信仰を問われる。聖書の祈り。
- シャローム＝平和が完全であること。教会の使命は壊すことではない、創ること、回復すること。時間がかかり、大変な作業ではある。
- 被災者の声を聞く。この悪い状況の中で、どうやって祈るか。
- 自分にとっての神さまよりも、神さまにとって自分がどうあるのかを問う。
- 神の声を聞く。嫌でも都合の悪い事でも。自分の十字架。他の誰かに背負わせている。
- 教会の問題なのに、議論にならない。根底を問い直す。エネルギー問題は私たちの生活の問題。環境破壊。環境問題、命の問題、様々な問題の中でどう生き方を変えていくか。
- 生活と信仰の問題として考える。なぜ信仰の問題なのか。生活の問題なのか。なぜ、イエスさまは教会をこの世にお創りになったのか。原点はそこから。
- キリスト教は命と関係性の宗教。
- 悔い改め、それがなければ次に続かない。アクションは起きない。
- キリストを頭とする教会。教会というものの意識の再考。
- 原発行政へ向けて、私たちの意思を反映したい。
- 命を守ること。廃炉には日雇い労働者が駆り出されるだろう。その危険を思う。
- 気候変動、格差。広い範囲で考えなければならない。

<グループG>

- 福島、第一次産業の落胆。線量の高い山菜の取り扱い、折り合いをつけ、話題にしない。
- 福島市、地震と放射能被害。放射能が見えない。従妹がリンゴ園を持っている。食べ続けるが、孫たちに与えるには躊躇がある。元気がなくなって来るが、日々つないでいる。
- 6号線、モニタリングポストを見ている。自分の立ち位置は？
- 離れているので、申し訳ない思いがある。
- ドイツ、脱原発、政治を変える必要。日本、原発の危険性は分かっている。
- 言論統制、自主規制、関西では新聞報道されない。報道の問題。
- 大きな問題。日本がなぜ原発に向かうのか。ドイツ、民主主義。

- ・ 地裁判決から高裁判決で逆転。
- ・ 日立の教会、チェルノブイリ事故、当時、東海ツユクサの異常遺伝の論文。
- ・ 大学の紀要、冷却水の影響、温度・量、遺伝子操作、安全崩壊。
- ・ 茨城県、ヨウ素配布。
- ・ 原発関連事業従事者への配慮。園長の旗色を出せない。原発の停止後、職を失う人もいる。
- ・ 若狭湾原発、新しいエネルギー、アピール館。外国人技師の子どもが地域の学校に。
- ・ JR小浜線、駅、公共施設が立派。
- ・ 舞鶴、ヨウ素剤配付、モニタリングポストがあった。
- ・ 原子力、人類がコントロール出来ない。
- ・ 2014年名古屋高裁金沢支部判決（樋口判事）。希望はある。
- ・ 福島県民は、原発事故がなかったことになっているかのように感じている。大飯原発再稼働にからめて。
- ・ 日本における原発電力、12パーセントくらい。日本からの輸出がだめになった。
- ・ 原発を動かすと儲かる（電源3法）の問題。このシステムを変える。
- ・ 被害者の声を聞く、WCC声明へ。
- ・ 第二被害者の存在と、第一被害者からの謝罪。水俣病訴訟問題の広がり。
- ・ 第一原発事故汚染水、100万トンを超えている。
- ・ 問題の大きさから逆算、半減期から今オフグリッドへ。
- ・ 司法も行政のいいなり。高裁が問題。
- ・ 哲学、手段から欲望、欲望から手段。
- ・ 100%自然エネルギーで出来る。原発を止めるまでの道筋をどのように作るのか。
- ・ 管区事務所は、原発保持の企業に投資、融資しない。
- ・ 消費電力を減らす。
- ・ 女川市民共同発電所、小回りの利く発電、地産地消。
- ・ 上水道の勢いを使った発電。
- ・ 全国の教会に太陽光発電を作り、発電所開設。バイオマス、おがくず等を使う発電も考える。
- ・ 次の世代がエネルギーのことに取り組めるように、聖公会奨学金を創設。
- ・ 放射性廃棄物、子ども、あるいは乳幼児、胎児への影響。
- ・ ハンドブック（資料）を各教会に配る。

グループシェアリング② 5月30日

〈グループH〉

- 声明文を教会に貼ることを考えて、詩を入れるなど、読みやすい工夫をして欲しい。
- 声明文は4部に分けられると思われる。これまでの実績、課題、気づき、これからの提言をまとめる。
- 自分の教会に帰った時にどうするのか、実践しやすい内容にして欲しい。
 - 電力会社を選ぶことから始めるなど、具体的な方策を促す。
- 「いのち」のイメージを膨らませる。皆が、共通のイメージを持てるようにする。
 - 一人ひとりのいのち、その全存在を大切に（シャローム）。
- 2012年宣教協議会の「いのち尊厳限りないもの」という到達点を基盤にして考えるべきではないか。
 - 度々変えては、足場がしっかりしない。
- 海外への発信を大切に。イギリスなどは、原発を「問題」と捉えないことが多い。そのような所に発信出来るチャンスでもある。
- 核発電所・福島第一原発の被害者であるというだけでなく、放射能を世界に拡散した加害者でもある。その

無反省と無力を顧みるべきである。

→ 気付かなかったことに対する、反省と懺悔。

- 外に向けての大きなメッセージと同時に、自分達が実践できるような、身の丈にあった声明文にして欲しい。
また、自分達の「決意」に繋がるものにもして欲しい。
→ 「世界」や「政府」というと、教会の皆は身近に感じない。「遠い問題」である、と感じさせる言葉は使わない方が良い。
- だれに向けてのメッセージなのかを明確にする（未来の子ども達に等）。
→ 教会信徒、全聖公会、全ての人に向けた、普遍性を込めたメッセージにする。
- 原発を作った大人によって、今苦しんでいる人々や子供達がいる。自分達が傷つけている、そのことを、皆が考えられるものにして欲しい。
- 投げかけや提言が、しっかりとあることが望ましい。
→ 教会がシンボリックな存在になるような取り組みを示す。教会教育でエネルギー問題を取り上げる、福島週間を設ける等の、具体的な提言を含める。各教会に持ち帰って検討、話し合いができるような内容にする。
- 経済的な合理性だけでなく、原発の「倫理的」な側面を強調する。一部の人に痛みや悲しみを強めている構造を問題にし、その一部にでも寄り添うという誠実さを、しっかりと出すべきではないか。
- 直接自分の目で見なければ分からない。そうでなければ、どんなに大変だと言われても、心で分からない。
- 原発は子ども達の「笑顔」を奪った。その子ども達を沖縄等に招待して、一時でも放射能から自らを解放してもらった活動をしたおかげで、原発問題を自分のこととして落とし込めた。そのことをどう声明文に反映できるか考えたい。
→ イエスは、子ども達を招かれている。
→ 子ども達の笑顔を取り戻していくこと、そして、未来の子ども達の笑顔を奪わないことを、大切な指標にしたい。
- 生き方を変えていくことが必要、とよく言われるが、どのように変えるのか？
→ 極端な節約といったことではなく、意識とライフスタイルを変えていくということ。
→ 謙虚な気持ちで、神が創造した世界を生きていく。
- 世界の聖公会とどのように繋がっていけるのか。環境問題の担当者を福島に呼べれば、世界レベルでの意識が変わるのではないか（環境ネットワーク等）。
- どうすれば良いかということ、模索していくことが必要（単純にソーラーパネルを設置すれば良い、ということではない）。
- 次の世代のために、マテリアルを提供できるように。
- 日本社会の限界（市民が参加できない）を感じる。
→ 参加型の教育や運動を作らなければ、情緒に訴えても持続しない。
- どんなに小さくても教会は「世界を変える力」を本質的に持っているはずである。
→ 各教会が社会に発信していく。太陽光パネルをつける等、小さなことでも実践していくことが大切。
- 実践できることが具体的に書かれたハンドブック等があればいいのではないか。
→ 自然エネルギーを買うのに、それ程ハードルは高くない。
→ そこには信仰的（倫理的）なモチベーションが必要。
- 自分達の今の生活を全て続ける必要性はない。新しいライフスタイルに変えて、エネルギーを見直す方が早いのではないか。
→ 持続するのは、大量エネルギー消費型ではない。
→ 自分にとっての「幸せな生活」を見つめ直す機会を持つべきではないか。
- 実際の生活の場でも、冷房、ペットボトル、フードロス等を意識するようになっていく。
- 福島の問題は、普遍的に「世界的な」問題であることを主張する。
→ すべては「自分自身のこと」になる可能性がある。
→ 原発は、「怖く」感じて貰う必要のある問題である。

<グループI>

- 全聖公会の代祷に加えて貰えるような働きかけをしたい。祈りこそ、私達が共通して大切にしていること。祈りはアクションである。
- 読んでリアリティが感じられる声明文にしたい（他人事になりがちなので）。
- 脱原発を訴える側は、そうでない人達と対話する際、様々な議論が出来るよう知識の蓄えをすべき。ディベートではなく、相手を理解した上で、脱原発の理由を明確に説明できるようにする。
- ワールド ニュークリア アソシエーションなどの原発推進派は、原発の安全性を上手に訴えている。こういったことを知った上で、賢く脱原発を訴える。
- 河北新報に、震災から3000日目という記事があった。その数字を見た時、新たな気づきを得た。意識を向けることが大事である。
- 情報提供をする際、ニュートラルな専門家がいると良い。
- 日本ならではの再生可能エネルギー、地熱発電への転換の可能性を考える。
- ここに集まっていない方、クリスチャンではない方と共通の言葉を使う等の配慮が必要である。一方、教会ならではの、霊的な言葉を使うことも大事ではないか。
- 証言を聞くこと、現場に行くことの重要性に触れる。
- 思想を先行させるだけではなく、自分の身についた感覚を備えたい。
- 情報を得ることや継続した発信が大事である。
- 「今、わたし達、あなた達にできること」を模索する。
- 声明は誰に向けたものなのか、読み手によって表現も変わるのでは。

<グループJ>

- 構造的に原発、米軍基地問題は同じと感じている。
- 除染は、本当に除染になっているのか、違和感がある。風評被害などの言葉によって、本領があいまいにされているのではないか。正確な表現が必要。
- 平和利用と軍事利用はコインの裏表。
- 核兵器の利用を考えていることを、声明の中で表現して欲しい。
- お母さんの声や子どもの詩のような、わかりやすい言葉で表現することが大切。
- 声明文の中には、福島週間（沖縄週間）等インパクトのあるものが提案されると良いのではないか。
- 沖縄に原発がないと言いつつも、原子力潜水艦が入ってくる。それを知っただけでも良かった。
- 2012年5月23日の声明をもとに、これを強めるものとして！
- エネルギーの問題は生活の問題。自分の生活を変えなければならない。
- 禁欲的なものを要求したい。

<グループK>

- 福島の事故が、ドイツや台湾では大きなエネルギー政策の転換点になったが、日本ではそうっていない。
- いかにも何も知らないか。1日でも早く行動しなくてはいけないと焦っている。
- いのちの大切さを伝えるため、日本聖公会の役割はとても重いと思う。
- 原発を稼働し続けるにしても、廃炉にするにしても、放射性廃棄物の問題からは逃れられない。
- イギリスでは、炭素排出量ゼロや化石燃料を止めるための話し合いがなされて来たが、原発の話題は少ない。脱炭素のために原発に依存している。原発は、クリーンで安全なエネルギーだと教えられて来た。脱炭素に向けて、という理由で原発を推進する社会に対して警告を発していくべきだ。

- ・放射性廃棄物の問題は、宣教の5つの指針と強く結びつくものだ。日本聖公会では、今まで意識して来なかった。
- ・福島の実験は、終わっていない。今も続いている。被害は拡大し続けている。終わらない災害となっている。それは台風などによる災害とは全然違う。
- ・経済優先ではなく、持続可能な世界や倫理の問題について、宗教者が一丸となり発信すべき。生活のあり方を変える。
- ・いのちの大切さを教える教育が不十分。若者への希望。
- ・原爆後、核の平和利用として日本聖公会も原発を受け入れた。その後、原発が建設され続けて来た。こんな事故が起こっても、政府は経済の理由で原発の再稼働を開始した。
- ・原発の話には絶望感を持っていたが、ミランダさんの話を聞いて希望を持った。
- ・反原発は、経済成長を妨げるものという考えではなく、新しいものへの転換と考えたら良い。単に反対というのではなく、代替エネルギーを考える。
- ・代替エネルギー、地域のための発電、地域経済の発展を考えていけないか。オルタナティブな生き方。
- ・巨額の投資によって発電するよりも、再生エネルギーで地域発電へと変えていく。平等でみんなが使えるエネルギーへの転換。グラスルーツによる、持続可能エネルギーへの転換。
- ・地域に基づく教会として、小水力発電、太陽光発電、小規模風力発電、水を守る、森林を守る、等々全てのことを同時に考えることで、地域を大事にできる。
- ・エネルギーの問題を、それぞれの教会、教役者・信徒がどう考えていくか。
- ・学ぶこと。神が創造された美しい被造物について、教会が周囲に呼びかけるべき。
- ・今の時代に、地球環境の話なしに、私達は公正・正義を語ることができない。
- ・環境政策部門を設置することにより、各教会が再生可能エネルギーへの転換に向かっている（英国）。
エコチャーチプロジェクト：教会の庭に、花を植えたり、緑化を促す。典礼や祈祷、地域へのリーチアウト。環境監査の実施など（英国）。
- ・国や地域の行政を、積極的に話し合う場を作っていくことが大事。同じ言葉を使って協力し合い、少しずつであるが合意点を作っていく。平和的な言葉での対話が大切。
- ・Key words：放射性廃棄物 / 環境への配慮 / Legacy = 未来へ向けて、世代を超えて、公正・正義をすること / いのちを破壊するものは絶対にいない / 代替エネルギー / 原発はなくてもエネルギーはある / 再生可能エネルギーへの学び / 社会の中の教会；社会の中でどう働くか。日本の教会の問題。宣教の5つの指標。

<グループL>

- ・心と身体が汚染された。時間が過ぎるほど、信頼関係が大切になる。被災者の苦しみも内面化していく。
- ・ワンファミリープログラム（郡山市内の幼稚園での保育支援）、祈り。
- ・チェルノブイリのことを忘れていた、ボランティアに行くことによって忘れない。
- ・何を自分がしたらいいのか？
- ・弱いものに向かって、自分のうっぷんをはらす社会。
- ・子どもの頃、福井県原発立地地域の近くに住んでいたことがある。
- ・原発稼働停止による失業。ヨウ素剤配付。労働者。
- ・再生可能エネルギーで生活できるかどうか、不安。
- ・水俣水銀公害、新潟でも公害。水俣の方が新潟の方へ謝罪。感銘。
- ・福井地裁、樋口裁判官の判決に希望が持てる。
- ・2011年東北教区120周年記念礼拝が行われた。郡山聖ペテロ聖パウロ教会のイングリッシュガーデンが放射能汚染のため壊され、コンクリートになってしまった。悲しさ。
- ・今住んでいる所から出るべきという意見、留まらざるを得ない人、様々な立場がある。色々な意見を聞く機会が大事。

- ・ 泊原発、立派な施設。サロベツ原野、最終処分場の案がある。
- ・ 事件が起こると、そこは差別の起こる地域になる。このことをいつも覚えておき、その時には、互いに思い起こすことが大切。
- ・ 震災時、家族全員で仙台に来た。怖い思いをしたが、今も日本に住んでいる。
- ・ 仙台から来たと言って、いじめられた。福島から放射線を持って来たと殴られた。同じ痛みを持っているのだから、互いを大切にしてほしい。
- ・ 母の言葉、「あなたは、日本に残りなさい」。
- ・ いっしょに歩こうプロジェクトではなく日赤に募金を送る、なぜならいっしょに歩こうプロジェクトは原発のことを扱っているから、という司祭がおられた。それへの応答が大切。
- ・ 計画停電の嘘が後から分かった。騙された部分である。
- ・ あの日、どこにいて何をしていた、と問われる。距離を感じている人からの問い。
- ・ 東北の人は、「あの日」ではなく「あの日から」という言葉を使う。痛んだ人は忘れられない。
- ・ 復活したイエス様、十字架の傷、脇腹の傷、痛みを負った私の痛みを忘れるな。思い出し続けて来た経験。あなたのために傷ついた、この傷を忘れるな。
- ・ 東電福島第一事故のことを忘れ、大飯原発再稼働。福島の怒り。忘れられていることへの怒り。
- ・ 心の傷。思い出したくない出来事。
- ・ 信頼できるから話せる。
- ・ 神の創造ではない原発。危ない物。
- ・ IAEAの友だちと連絡も取らなくなった。大田に最終処分場がある。慶州には原発がある。
- ・ 日本聖公会の使命、パイロット的な働き。アジア諸国と共に。罪責告白が基盤。一緒に歩く。

<グループM>

- ・ 電力会社を巻き込んでいく。対立構造ではなく、一緒にエネルギー転換をしていけないだろうか。
- ・ 「いのち」の問題、付随してくる経済、利権、政治的なことも切り離さずに考えて行くことによって、一步踏み出していけるのではないか。
- ・ 忘れないで、覚えて祈り続けていきながら、もう一步踏み出して行ければと思う。
- ・ 各国の政治家やリーダー達に現状がきちんと伝われば、世界は変わる。福島訪問を実現させましょう。
- ・ 各自が、生活の中で環境のために出来る事を行っていく。
- ・ なぜか、タブーではないのに原発事故のことを友人と話せない。
- ・ 声明文は、教会の分かち合いの中から生み出されるものであってほしい（専門的な点ではなく）。
- ・ 声明に、実践出来るものへの示唆を含んで欲しい。
- ・ 「原発」の話がタブーになっている現実がある。
- ・ 大きな力は「福島」の記憶を消そうとしているので、私達はなおさら覚え続けなければならない。
- ・ 「いのちの尊厳」。
- ・ 「エネルギー転換」という提言を、声明に入れば賛同が得られやすい。
- ・ 「正義」という言葉を使う時には、自制的な表現も一緒に盛り込んでほしい。
- ・ 声明を詩で表せないか。
- ・ 声明作成の3つのポイント、「悔い改め」「未来への希望」「具体的に何が出来るか（アクション）」。
- ・ 「後からくる者のために」「来たときよりも美しく」。
- ・ 小学生・中学生にも分かる声明にして欲しい。
- ・ 日本聖公会から、「フクシマを忘れない」主日を、世界の聖公会へ発信する。
- ・ 3月11日を覚え続けることは大きなポイント。
- ・ 「被爆された方と連帯してください」とのメッセージに反対する人はいないと思う。
- ・ 打ち上げ花火ではなく、山から山へ飛ぶ（小さくてもいいから、次へつながっていく）ことが大切。

- みんなが共感出来るテーマ設定が必要。
 - 各教会が、エネルギー転換について舵を切れるような財源補助や、モデル教会があると良い。
 - ソーラー発電も屋根にのせるだけではなく、今後、別の方法も出来てくる。
 - 「オフグリッド」（独立電源）のための初期投資がペイされるためには現時点では15年かかる。しかし、これからは技術が進み、もっと短縮される可能性がある。
 - 声明の文言に、「モデル教会（オフグリッド教会）を設定する」（理想を掲げる）を入れる。
-

<グループN>

- 「福島週間」の設置。
- 「福島週間、主日」を設けることで毎年思い出し、考えるきっかけになる。広島の記事と同様に、核の影響を受けていることをしっかりと認識する必要がある。
- 3・11の祈りも大事だが、どうしても津波のイメージを持ってしまう。他の災害も同等に扱うことも必要かもしれない。
- 「原発をなくす」ではなく、自然エネルギーや再生可能エネルギーを積極的に用い、原子力に頼らなくてよい世界を作ることが大事。
- 原発が地球温暖化に優しい、という認識の間違いを正し、撤廃に向け動くことも大事だが、根本を理解することは難しい。また意見の対立から、立場の対立を招くことになるため、全面に打ち出すのは難しい。
- 現地の人や被災者だけが考えるのではなく、社会全体で考えていくことが大事。
- 福島だけの問題になっている、国は隣県でさえも蔑ろにしている。
- 教会で議論をすることはなかなか難しく、また結論を急いでしまうことがある。プロセスを大事に、反対意見も聞きながら一致を目指すことが教会的である。
- 「いのち」の大切さを訴えるべき。
- 「いのち」の表現に関し、感じ方は人それぞれなので、相澤司祭の発題に出た「詩」を掲載してはどうか。

礼拝説教／メッセージ

開会礼拝

主教 ナタナエル 植松 誠

(日本聖公会首座主教 北海道教区主教)

5月28日

今日からこの場所で行われます「原発のない世界を求めよう国際協議会」に、皆様ようこそお出でくださいました。日本聖公会の諸教区、諸教会からお集まりになられた方々、主キリストにあるエキュメニカルな教団、教会の皆様、また、基調講演者のミランダ シュラーズさん、世界の聖公会のパートナーとして今日、ここに遠路お出でくださいました皆様に深く感謝いたします。さらに、この協議会のために長い間、いろいろな準備をしてきてくださった実行委員会、東北教区、そして管区事務所の皆様にもお礼申し上げます。

2011年3月11日に発生した東日本大震災から8年3ヶ月が経とうとしています。被災地では目に見える形での「復興」は進んでいるように思えます。津波によって大きな被害を受けた地域は、土砂をかさ上げして、新しい土地を整地し、街づくりが始まっています。仮設住宅での生活をされていた方々の多くが、復興住宅や、また新しく整備された元の市街地に移って生活を始めています。しかし、そのような被災地であって、「目に見えない」部分では、まだまだ被災者、特に高齢者や独居者、生活困窮者など、所謂「社会的弱者」の方々は、「復興」から取り残され、たくさんの困難を抱えておられることも確かです。そのことを忘れてはならないと思います。

今回の東日本大震災の被害の中で、今もほとんど手を付けられていないのが、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって引き起こされた災害です。大量の放射性物質が広大な地域に降り注ぎ、その除去もまだまだできていません。今もいたるところに除染で排出された土などをいれたフレコンバッグが山積みとなっていますが、一時的な保管として、被災地に野積みされているこれらのバッグが、8年を過ぎた現在、それらが破れて中の土砂が外に漏れだしているケースもたくさんあると聞いていますし、その最終処理場がどこになるのか今も決まっていないのが実態です。福島第一原発から遠く離れた郡山のような市街でも、今まで除染を繰り返してきたにもかかわらず、雨が降り風が吹

くと、場所によっては放射線値が急激に上昇する「ホットスポット」が今現在でもあります。このように、原発事故によってもたらされた被害は今も進行中ですし、事故を起こした原発のメルトダウン現場での廃炉作業は、これから何年かかるかまるで分らない状態です。原発の周囲には汚染された水を入れるタンクが増え続けています。安倍晋三首相は、福島第一原発からの放射能汚染は「完全にコントロールできている」と言い、また政府は居住制限区域の部分的解除を宣言して、放射能の被害をことさら低く宣伝していますが、現地で見える限り、被害の深刻さはほとんど軽減されていません。居住制限区域では、未だに多くの住民が故郷に戻れず、家族が離れ離れの生活を余儀なくされ、家庭や地域社会の崩壊も深刻です。また放射能汚染による健康被害に怯える人々にも、安心させる手立てが何もないというのが現実であるばかりか、将来的な健康被害を恐れる被災者にとって最も知りたいことがらながら、きちんと公表されていないことで、住民はますます不安に陥っているとされています。また、被災地では地域社会の中で、教会の中で、教会付属の幼稚園の中で、家族の中で、放射線被害を話題にすることによって、不信と分裂、崩壊をもたらしている事例もたくさんあります。

2012年5月の定期総会で、日本聖公会は「原発のない世界を求めて～原子力発電に対する日本聖公会の立場～」という声明を採択しました。この声明は海外でも大きな反響を呼び起こしました。地球環境の保護保全は気候温暖化に対する全世界的な課題として十数年前から各地の管区・教会で取り組まれています。しかし、「原発反対」を明確に打ち出したのは、あまり前例のないことであつたと思います。

この声明では、今回の福島第一原発の事故は、周辺地域のみならず広範囲にわたって放射性物質を飛散させ、人々の命を脅かすとともに、原子力発電そのものが危険極まりないものであるという事実を私たちに突き付けたことを述べています。そして、この声明の中で、

これまでの私たちの原発に対する意識の低さ、無理解、誤解に対する深い反省も述べられています。原発の事故が起こるまで、「原子力の平和利用」の名のもと、私たちは「安全神話」を信じて、原発が生み出すエネルギーを享受してきました。多くの方々が震災以前から原発の持つ問題性を訴えてきたにもかかわらず、私たちの多くはそれに聴こうとしてこなかったことを私たちはまず反省しなくてはなりません。

取り返しのつかない罪というものを人間は歴史の中で何度も何度も数えきれないくらい繰り返し犯してきました。人間に与えられた能力を、同じ人間を破壊するために用い、繰り返される戦争……。過去の戦争においては、高い知能を与えられ、知識に溢れた科学者たちが開発した原子爆弾によって、日本ではどれだけ多くの命が、生活が、家族が破壊されたことでしょうか。そしてそれは、ただ過去のことでなく、苦しみは様々な影響を及ぼしながら70数年たった今も続いているのです。

そしてその強大な破壊力が、今度は形を変え、「原子力発電」という別の姿をとって我々の生活に踏み込んできたのです。私たちはその姿の美しさ、便利さにのみ目を留め、そこに希望をさえ見出してきたように思います。電力という、今の生活に欠かすことのできない、これさえあれば何でもできると過信しているものを、際限なくふんだんに使える世の中になることに皆が心躍らせたのではなかったでしょうか。あるいは、心から賛成はしなかったものの、その便利さに埋もれ、いつしか恐ろしい被曝の可能性や、使用済み核燃料というゴミが蓄積されることにも気付かなかったのです。しかしそんな時でさえ、その原発の本当の姿に気づき、学び、警鐘を鳴らしてきた人々もたくさんいたのは事実です。

ただ、私も含め、多くの人々は、少しの不安を抱きながらも、その警鐘に耳を貸さず、自分たちの生活にとって有益であることに目が移り、真の姿を見ようとはしなかったと思うのです。その結果、震災においては、原発の甚大な被害が多くの人々を苦しめ、未だなんの解決もないまま、それでも尚、命を揺るがす恐ろしい現実から目を逸らしています。何の解決もなく時間だけが経っていく中で私たちの危機感も薄れ、人々は原発の恐ろしさを心に封じ込めようとしているのです。

そのような中で、私たちキリスト者がこの現実を目を向けようとすれば、残念ながら自分たちの力のあまりにも小さいことに気付かされます。この莫大な問題

に、私たちがいったいどのように関わられるのか……。神さまは私たちを、この時、平和の器として、いったいどのように使おうとなさっておられるのか……。

これから育つ子どもたち、生まれてくる子どもたち、その親となるであろう若者たち、その子たち、若者たちに負の遺産を残してはならないのです。もし、それぞれが本当に家族に残したいと思うものがあるとしても、それが原発のゴミであってはならないはずで、神さまからいただいた、この美しい大地を、自然をこれ以上汚すことは許されないし、汚されることに目をつむり、仕方がないとあきらめて今まで通りの悪の恩恵を望むことが、どれほど大きな罪であるかを覚えなければなりません。

それでは私たちにいったい何ができるのでしょうか？ 使いたい放題に使うことをやめることは、分け合うことにもつながるでしょう。「便利」というものから少し離れて、一人一人がほんの少しの不便さを選択することもできるでしょう。特に私たちの年齢、60代以上の方たちが、子どもの頃の生活を思い出していたら、限りある資源をもっと大切に使えるはずで、私たちキリスト者は、何を基準に自分の生活を営んでいけば良いのか、それは、「わたしはあなたたちの神、主である」と、繰り返して言われてきたことばに他ならない、私達の生活の基準は天地を創られた神のもとにあること、これに尽きると思います。

神の創られたこの世界を、どんどん破壊していつている、この現状を、少しずつでも変えていくことが、私たちキリスト者に課せられた捧げものであることを心に留めたいと思います。キリスト者だけではありません。神の愛はすべての人に注がれています。神から良心を与えられている多くの人々が、大地を、水を、海を汚すまいと懸命に働いているのです。私は傍観者ではなく、自分自身の生活も振り返りながら、自分に言い聞かせて話しています。決して簡単なことではないと思いつつも、やはり、私の生活自体が、神に喜ばれるように、創造主のみ心に反しないように願っています。隣り人の命を守るため、これから生まれてくる子どもたちの命を守るため、私たちは何かを捨て、何かを犠牲にしなければ神の国の実現は得られないと思うのです。

主よ、この協議会に集った私たちに新たな悔い改めの心を与え、あなたのお創りになった世界、そしてあなたが愛しておられるすべてのいのちを尊び、守る勇氣と力と知恵をお与えください。キリストの聖名によって、アーメン

夕の祈り

主教 モーセ ^{ユ ナクジュン} 兪 樂 濬

(大韓聖公会 議長主教)

5月29日

世の中に主の平和を立てる日本聖公会に祝福がありますように。

明日は昇天日です。昇天日を迎えるために、3日間の祈りの期間を「昇天前祈禱日」といいます。大田教区では昇天日直前の3日間、全教会がお祈りをします。私たちのために死なれた主と別れる直前のこの期間に、私たちの聖化のために祈ります。自分自身のために、家庭のために、そして神の人々の共同体のために朝と夕に祈ります。今日は3日目で、神の人々の共同体である教会のために祈る日です。特に「原発のない世界を」というテーマで、長い期間活動をしてきた日本聖公会のため、神の助けを求める祈りを捧げます。

痛みを憂容させる福音で生きるために、神の人々に最初に必要な行動は祈りです。「祈りの香のいっぱい入った金の鉢を主にささげます」(黙示録5:8)、「苦しんでいる人は、祈りなさい」(ヤコブ5:13)、「病気の人のために教会の長老はお祈りしてください」(ヤコブ5:14)、「主がその人を起き上がらせてくださいます」(ヤコブ5:15)。これが今日の朝のみ言葉です。

私たちの時代は、原発の世界です。だから「痛みと悩みの時代」とローワン ウィリアムズ前カンタベリー大主教様は私たちの世代を説明しました。「コンパスを失った世代」と見ることができます。道を失ったということです。「体と魂を統合することに失敗した現代の世界について」日本聖公会は「原発のない世界を求めて」声を出しました。人々の利己心と欲望を拡大する利便性と効率性によって存在せず、神の人々の日本聖公会は、「愛で働きます」と自己のアイデンティティを長い期間宣言してきました。まるで預言者のように。

「神の人々が神を礼拝する司祭の王国を作ってくださいる子羊」というように(黙示録5:10)。人間中心ではなく、神を中心に住む神の国を立て、神の被造物とそれぞれ本来の価値を立てて生きることを日本聖公会は叫ぶ過程にあります。神が喜ばれるでしょう。

神がすべてのものを6日間創造し、そのたびに「喜

んだ(カルロス)」と言いました。カルロスは「カール・レオ」(呼ばれた)と語源が同じです。神を喜ばせる場に私たちを召されたのです。「原発のない世界」これがまさに神を喜ばせるための場だと思います。紀元前5世紀の記録された人間の必要よりも自然が優先であり、それぞれ独自の価値を持つというのが創世記1章の意味だと思います。

神の創造を話しているヨブ記は、「人間が創造の中心におらず、すべての創造は、人間の要求から独立した本来の価値を持つ神がすべての被造物を見守ってくださる」と主張します。

紀元前10世紀に記録された創世記2章では、アダムとエバを創造し、エデンの園に住まわせました。「二人の目は開け」突然、状況が変わりました。自然と分離された瞬間、人間は自分自身を忘れたのです。楽園からの追放がまさに自然の搾取、原子力発電所です。エデンの園を回復するために、神の人々の日本聖公会が「原発のない世界を」と宣言したのです。

罪人を悔い改めさせ、無知な者を教え、悲しむ人々を慰め、間違った人々を忍耐し我慢し、すべての損傷を許し、生者と死者の両方のために祈る活動をしている日本聖公会に恵みがあふれることを、若い世代とその親たちに痛みを遺産として残すことはできない、という植松首座主教様の昨日の説教のように、私たちの未来の世代に、主の恵みが豊かにありますように。

※本稿は、韓国語でご執筆頂いたものです。筆者の意図が正確に伝わるよう、韓国語と日本語の特徴から可能な限り原文に忠実に翻訳いたしました。

主教 アンデレ 磯 晴久

(大阪教区主教)

5月30日

大阪から新幹線で仙台へ参りました。その間私は何のために、仙台、茂庭荘に向かっているのだろうか、思いを巡らしていました。最近目にした小熊英二さん、歴史社会学者ですが、彼の「わたしたちの国で起きていること」と、もう一冊ドイツの首相アンゲラメルケルさんの「わたしの信仰」という本からヒントを頂きました。小熊英二さんからは、「人間の尊厳を軽んじている国日本、そのことがこの国の現在の停滞と閉塞感の根底にある」ことを学びました。たとえば、大阪は生活保護受給者が日本で一番多い。もちろん人口も多いですから。けれども、今こともあろうか国や大阪府は、生活保護費を下げようとしています。皆さんは理由をご存知かもしれませんが、財政を圧迫していることあるでしょうが、一番の理由は、生活保護費以下の給与で生活している人が急増しているから、引き下げるといいます。貧富の差が大問題なのです。極端ですが、1割の満たされた人々とそうでない9割の人々という構図に向かって日本社会は進んでいると言います。

メルケルさんから教えられたことは、彼女はキリスト者の政治家として、政教分離は堅持しつつ、自分の生き方・信条・活動の根底を流れているのは、「神様から与えられている命の尊厳、人間の尊厳である」と言うことです。それはある民族のことだけでなく、すべての人々のこと、すべての命を守ることだという信念をもって、メルケルさんは政治家として活動しておられるとありました。

私はこのお二人の言葉をヒントに、「人間の尊厳、命の尊厳を守るメッセージを発信するため」に、仙台、そして茂庭荘に集められているということ、心に納めることができました。

2019年5月で東日本大震災そして東京電力福島第一原子力発電所事故が起こって8年と2ヶ月が過ぎました。復興は進んでいるようにも見えますが、目に見えないところで、被災者、特に高齢者や社会の狭間の中で小さくされている方々は取り残され、困難を抱えている方がまだまだたくさんおられます。何よりも東京電力福島第一原発での大事故によって引き起こされた被害は、ほとんど手つかずのままです。深刻さは何も

軽減されていません。

以前青森の六ヶ所村を訪れた時、六ヶ所村核燃料再処理工場をPRするための施設でパンフレットを貰いました。「安全への配慮」とありまして、丈夫な、密封、頑丈な、気密性の高い、ぶ厚い、遮蔽という言葉の羅列で、危険性は封じ込められているとありました。しかし原発は、いったん事故になると人間には制御できないのです。安倍首相はコントロールできていると言いますが、そうではありません。実はよくわかっていないのです。さらに、廃炉のため福島では危険な中、働いている沢山の労働者がいます。外国からの労働者も危険にさらされているかもしれません。原発の廃炉、高レベル核廃棄物の毒性がなくなるには何百年、何百万年かかります。私たちは、未来に大変な「負の遺産」を残してしまいました。

今日は昇天日、いよいよ復活節が終わりに近づいています。この季節、私たちは「主は生きておられる」という福音の核心的メッセージを繰り返し味わってきました。主は死と、死を生み出すものに打ち勝たれた、これこそが私たちの希望の源泉であります。そして、私たちは、このことを悟るだけではなく、復活のいのちに生きることが求められています。しかし原発事故は、いのちとは真逆の死のイメージです。

今日の使徒言行録、復活のイエスは弟子たちと食事を共にされて、こう命じられました。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父から約束されたものを待ちなさい」(使徒言行録1:4)と言われました。お恥ずかしいですが、私は原発事故を遠くのことと感じている自分を正直告白しなければなりません。また、安倍政権は原発事故のことを忘れさせよう、忘れさせようとしているとも感じます。しかし私たちは、この協議会を通して、忘れてはならない、離れてはならないことがあることを学んでいます。困難のうちにある人々の声をしっかり聴いて、それを伝えていく役割を担っていることを学んでいます。

この後弟子たちは、これから起こることについてイエスに尋ねます。これからどうなるのかわからない私たちと弟子たちの姿が重なります。あなたがたが希望

をもって歩みだす時、あなたがたの上に聖霊が降る、上よりの神の力を頂けるとイエスは言われます。

最初にお話ししたドイツの首相メルケルさん、彼女の政治活動の根底を支えているものは、神からのミッションである「人間の尊厳・いのちの尊厳を守ることだ」と語っています。彼女の難民政策、原発からの撤退、この信念から出ています。それは神からのメッセージだとも語っておられます。神からの使命に従って「人間の尊厳・いのちの尊厳を守ること」、その実現のために歩み出すことが、今回の国際協議会のテーマです。

アルバート シュバイツァー、医師であり、神学者であり、音楽家でもあった彼の言葉に、「今手を抜いたことを、未来で修復することはできない」とあります。

未来に大きな「負の遺産」を残してしまった私たちは、未来のために今新しく生きる時がきています。未来の人から、「いい仕事をしたね」と言われる仕事をするように招かれています。

宮本常一さんという民俗学者がおられます。日本中を歩き、人々の生活に根付いている伝統、習俗、歴史、文化を調査し、膨大な資料をまとめられた方です。彼の文章の中に、「石工」のことが紹介されていました。住宅や川辺、湖畔に石を積む仕事をする人々のことです。彼らは修復を依頼された時、まず先人たちの仕事を見つめるのだそうです。「いい仕事だなあ」、自分もこれからの人々のためにいい仕事をしようと決心するのだそうです。誰に言われたのでもない、自分で恥ずかしくないいい仕事をしようと決断すると言うのです。原発の廃炉、途方もない時間がかかります。私たちは仕事にとりかからなければなりません。未来の人々が、「いい仕事だなあ」と受け継いでくださり、自分たちもいい仕事をしようと思ってくれる取り組みを開始しなければなりません。

震災後、日本の原発は全部停止しました。私は原発に異議を唱える人々の声が、そうさせたと信じています。残念ながら、今少しずつ再稼働していますが、私たちは無力ではありません。小さな力を持っています。その力を集めたいと思います。

最後に、前カンタベリー大主教ローワン ウィリアムズ師が、2007年南アフリカ・ヨハネスブルグ アングリカン・コミュニオン宣教会議において、世界の紛争 貧困 災害 暴力 環境 難民 飢餓……を憶えて、の説教の中の「聖歌隊のたとえ」で、「聖歌隊の指揮者

にとって最も重要な任務は、大声を出して歌う人や、音を外している人に注意を与えることではない。その任務とは、声の出ている人、聴き取れないほどの小さな声の人の存在を、敏感に感じ取ることだ。そして、『あなたの声が聴こえなければ、この聖歌隊はない方がよいのだ』と語りかけることなのだ」と話されました。

原発で苦しむ人々の声を聴くことを大切に、そして声の出ている人、聴き取れない声をしっかり聴いて、私たちが遣わされている場に伝えることを大切に歩み出しましょう。

父と子と聖霊の御名によって、アーメン

夕の祈り

主教 ルカ 武藤 謙一

(九州教区主教)

5月30日

マタイ 28章 16節～20節 「弟子たちを派遣する」

¹⁶さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。¹⁷そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。¹⁸イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。¹⁹だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、²⁰あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

十主よ、わたしの岩、わたしの贖い主よ、わたしの言葉と思いが御心に適いますように。アーメン

今日の夕の礼拝の新約聖書はマタイによる福音書の最後の箇所ですが、イエスが天に昇られたとは記されていません。弟子たちはガリラヤの指示された山のうえでイエスに会い、宣教するようと命じられます。

マタイは、弟子たちが「イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」と記します。ヨハネでは復活の主に出会い、「弟子たちは、主を見て喜んだ」と記されているのは対照的です。疑う者がいることを知りつつ、イエスは弟子たちを遣わす。この「疑う」について、カトリックの雨宮慧神父は、その著書で、「疑う」という語は新約聖書では2回だけしか使われておらず、この箇所ともう一箇所、14章31節、湖のうえを歩いてイエスにむかって歩むが途中で怖くなっておぼれかけたペトロを助けたイエスが「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた箇所です。「疑う」(〔ディスタゾー〕「ディス」「二度」「二つ」と「ヒステーミ」「立たせる」「立つ」という語からなっている)は「二つの方向に進む」、心の中に二つの想いがあり、一方はこちらに他方はあちらにと分裂した状態、心の想いが二つに分かれて動揺している状態のことだとのこと。

そのような弟子たちにイエスご自身が「近寄って来て」、イエスが天と地の一切の権能を授かっていること、また世の終わりまであなたがたと共にいることを宣言し、すべての人を弟子にしなさい、と命じられるのです。

この箇所を読んで二つのことを思います。

一つは「疑う者もいた」という点です。何の疑いもなくかたい信仰をもった弟子たちに宣教命令が出されているのではなく、心が二つに分かれている者も含まれていることにホッとするのは、イエスの方に向かって湖のうえを歩みながら、イエスから目をそらせ「風を見て怖くなり」沈みかけたペトロのように、福音宣教に、正義と平和の課題に、教会の働きに取り組みながら、時として圧倒的なこの世の力の大きさ、壁の厚さに怯え、立ちすくむ、無力さを感じ、また絶望感にとらわれることもあるからです。そんな時にイエスが近寄ってくださり、大丈夫、わたしは一切の権能を授かっている、わたしは世の終わりまで、あなた方と共にいると励ましてくださるのです。イエスのその声によって再び一つの心に整えられてこの世へと送り出され遣わされるのです。わたしの信仰生活はこの繰り返しです。

もう一つ考えさせられたことは「弟子とする」ということです。「彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」それは何を意味するのか。マタイは「行い」を強調する福音書ですが、何を行えと言うのでしょうか。「原発のない世界を求めるとの関連で考える時、それは神の創造のみ業に参与することです。「被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること」は世界の聖公会の宣教の5指標の一つでもあります。教皇フランシスコは、これを「神の創造の完成」と言っています。

『福音宣教』2019年2月号に「食といのちを分かち合う」というタイトルで荒川朋子さん(アジア学院職員)がアジア学院の「Foodlife」という理念と実践について記しています。食べ物を一緒に育て、収穫し、屠殺し、調理し、共に分かち合い、残飯をリサイクルして肥料を作ることを通して、有機農業、食べ物の大切さ、労働の尊厳、食糧自給の必要性について理解を深める機会があたえられることを具体的に語っています。その中である神学者の言葉を紹介し「本来、土は神と人との間に位置付けられるものであり、人は土に仕え、土を守ることを通して神に仕える者とされていると言い換えてもいい」、神が人間に最初に与えた名前はアダムですが、これはもともと「土」を意味する「アダマ」

から来ている。「人間はその生命存在を土と神にまったく依存している」と記しています。

人は神が創造された自然、土を守り仕える役割と責任を与えられていることを改めて思わされます。最近、わたしは土に触れる機会がほとんどなくなりました。食料はスーパーやコンビニで手軽に買うことができます。「食べることに真剣でない者は、命を生きることに真剣でない」というアジア学院の創設者の言葉はわたしへの警告として響きます。都市生活のなかで、土の塵で造られ、土を耕すことを求められている者としてどうあるべきかを問われているように思います。そこに真の平和と喜びがあるように思えるのです。

「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ち溢れさせてくださるように。」(ローマ 15:13)

閉会聖餐式

主教 ダビデ 上原 榮正

(沖縄教区主教 国際協議会会長)

5月31日

父と子と聖霊のみ名によりて、アーメン

「原発のない世界を求める国際協議会」の最終日を迎えました。今までの活発な論議に心から感謝します。原子力発電に対する考えは、原子力というエネルギーに対する考え、原発の功罪等、置かれている立場によって夫々異なります。では私たちクリスチャンは、この問題にどう取り組んだらよいのか、そのことを中心に会議は行われてきました。

原発に関しては、次のような共通の認識があると思います。20世紀、人類は核分裂を発見し、そのエネルギーを最初に原爆として戦争に利用し、次に原子力発電に利用してきた。しかし、水力、火力の代替エネルギーとして期待をされていた原子力発電は、当初から放射能汚染や放射性廃棄物の問題を抱えていた。

でも、先進諸国は発展途上国より多くのエネルギーを使っているのに、省エネと自然にやさしい、環境破壊を起さない再生可能エネルギーの開発と利用が求められており、その延長に原発がある、ということです。

しかし、私たちクリスチャンが問題を考える時、基本は聖書です。

創世記 1:26 神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」²⁷ 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。²⁸ 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

「支配せよ。」は、人間が何でも自由にしてよろしいという意味での支配ではなく、統制と秩序のある、調和のとれた、全てのものが共存できる世界としなさいと、云う意味での「支配」です。

しかし、人類は生物の頂点に立つものとして、好き勝手に振舞っています。神さまは、「産めよ、増えよ、地に満ちて、地を従わせよ」と仰せになり、そうなりま

した。でも人間が繁栄して行く中、多くの動植物が絶滅し、今も絶命しようとしています。歴史上には、抹殺で息絶えた人種もあります。

世界の総人口は約73億人ですが、2050年には約100億人と予想されています。そうすると問題は、食料とエネルギーです。今、世界の人口の約9%、約8億人が貧困にあり、毎日約25,000人、年間では約900万人の人が栄養不良や不衛生な環境によって死んでいくとの報告があります。

その原因に、先進諸国で捨てて余るほどの食事をし、多くのエネルギーを使っていることにもあります。また人口増加とエネルギーや資源開発の増加は地球温暖化を招き、異常気象、環境破壊を加速しています。

神さまが望む世界は、人々が互いに愛し合い、助け合い、平和に生きる世界です。そのために、神さまはご自分に似せて造られた人間に委ねられました。

マタイによる福音書 21章 33節以下に、ぶどう園のたとえ話があります。農夫たちが、主人から預けられたぶどう園を自分たちのものにしようとして、主人が送った僕や跡取り息子を殺したというお話です。

現代では、経済が優先され、力を持つ国や企業が弱い国や貧しい人たちから、お金、力、軍事力で食料、資源を奪い、神さまから預けられた世界を支配し、コントロールしようとしています。

これは、神さまのみ心ではありません。人間が「支配」を取り違えている結果です。元々、国家間の境界線も領土も曖昧でした。近代化と共に、境界線が引かれ、領土、領海争いが起き、今では宇宙の奪い合いも起きています。

ぶどう園は世界で、主人は神さま、雇い人は私たちです。ぶどう園の主人は、雇い人に、ぶどうの収穫を求めたとありますが、それは私たちに「税金を納めよ。」

という意味ではありません。「わたしがもとめるのは憐れみであって、収穫ではない。」(マタイ12:7)とあります。

求められている収穫は憐れみ、愛です。あなたたちはこのような素晴らしい大地に住んでいるのだから、お互いに愛し合い、赦し合い、平和に暮らさなさいと、いうことです。

神さまは、世界が神の国になることを望んでいます。しかし、人は領土や資源、食料、エネルギーを奪い合い、経済と軍隊で他者を支配し、君臨しています。

マタイ20:26 しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、²⁷いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。とイエスさまは、仰います。

イエスさまの弟子たちが、1番偉いのは誰かと言い争ったように、世界も、1番偉い人は誰か、1番強い国はどこかと争っています。原発はその延長上にあります。

原発と核兵器は「コインの裏表」だと言われます。原発の技術も放射性廃棄物も核兵器に転用できるからです。原発の作動は原爆の材料を造るため、原発の技術開発は核兵器の開発にも転用できるそうです。原発は原子力の平和利用だと言われますが、原爆を造り、保有するためにも、原発があります。

原発事故により、放射能被害に遭い、命を失い、町が破壊され、住む人がいなくなり、未だに放射能の被害に怯えながら、生活をしている人たちがおられます。

ところで、沖縄には広大な米軍基地があり、基地から発生する問題に県民は苦しんでいます。それでも、日本の安全保障のために米軍基地は必要だと言います。暮らしのためには原発も必要だという人たちと同じ発想です。原発も米軍基地も弱い、貧しい地域や人々に重い負担を負わせています。

基地問題で、命が脅かされている人たちがいます。沖縄には、「ヌチドウタカラ」(命こそ宝)という言葉があります。聖書には人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。(マルコ8:36)

とあります。大切な命を守るために、何が出来るのかが、問われています。

今回、「原発のない世界を求める協議会」では、以下のことが提言されました。

- 東日本大震災がもたらしているさまざまな出来事を見つめ、証しし続けること。
- 原発事故が起きれば、取り返しのつかない事態になることを認識し続けること。
- 日本聖公会に「福島週間(仮称)」を創設し、“あの出来事”が語ることを聴き、学び、いのちを尊び、平和に生きる社会の実現へと歩み続けること。
- 脱原発のための国内外のネットワークを強化・充実させること。
- 未来を受け継ぐ次世代のために、原発による負の遺産をこれ以上残さないこと。
- 各教区に自然エネルギーによるモデル教会をつくり、方向性を指し示すこと。
- 各個教会が自然エネルギーへ転換する時の融資制度を、日本聖公会に設けること。
- 宣教の5指標の一つである「被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること」に具体的に取り組むこと。

原発についての議論が、会議に参加した国だけでなく、日本聖公会の力不足で、招待できなかった国でも討論がなされますように、また日本聖公会の内外の教会でも議論が広がるように努めたいと思います。

協議会を開かせて下さった神さまに、ご苦労下さいましたスタッフの皆さまに、またご参加下さった皆さまに心から感謝します。

どうぞ、皆さま、お元気でお帰り下さい。明後日は主日です。今日までの出来事を、皆さまのご家庭、教会、教区でも、分かち合って頂きたいと思います。エネルギー問題は、生活に関わる身近な問題です。自分の問題として、日々の暮らしの中で、考えてみましょう。

父と子と聖霊のみ名によりて、アーメン



礼拝を通して、参加者一人ひとりの想いが一つになったように感じられました。



3. 関連資料

- 3-1. 5月27日 海外ゲストのフィールド・ワーク
- 3-2. 5月30日 被災地巡り
- 3-3. 参加者の声
- 3-4. パネル展示
- 3-5. スライド
- 3-6. おさらい資料「東京電力福島第一原子力発電所事故、そして今」
- 3-7. 持続可能エネルギーに関するアンケート結果報告書
- 3-8. 記事掲載
 - Anglican Communion News Service
 - キリスト新聞
 - 日本聖公会 教区報
 - 日本聖公会 管区事務所だより
- 3-9. 東日本大震災から国際協議会までの歩み
- 3-10. 声明、他



5月27日 海外ゲストのフィールド・ワーク

[報告：司祭 矢萩新一] 2019年5月27日（月）、翌日から始まる国際協議会に備え、海外ゲストの皆さまには、26日の夜までに東京入りしていただき、福島県内の被災地をフィールド・ワークしながら仙台入りする計画を立てました。フィールド・ワークのメンバーは、7名の海外ゲストと4名の通訳・事務局の総勢11名、ガイドは東北教区の越山健蔵司祭、通訳は東京教区のサイモン クレイさん、中部教区の金善姫司祭、管区渉外主事のポール トルハースト司祭にお願いしました。

早朝8時に日本橋の宿泊ホテルを出発し、通勤ラッシュの地下鉄で上野駅へ向かい、福島県南部の常磐線「泉」駅まで約3時間の列車旅、泉駅からはバスに乗り換えて常磐道を北上しました。「四倉」パーキングエリアのトイレ内にある放射線量の数値が表示された掲示板を確認し、弁当昼食をとった「天神岬」展望台では汚染土の仮置き場が見渡せました。バスの車内でもガイガーカウンターの警告音がけたたましく鳴り響く中、国道6号線を浪江町に向けて走り、帰還困難区域を通り抜け、地震と津波が襲った当初から時間が止まっているような街並みや、汚染土の入った黒いフレコンバッグ、除染中という幟をいくつも目にしながら、餓死や殺処分を免れた「希望の牧場・ふくしま」の牛たちを遠目に見て、「南相馬」パーキングエリアで休憩。15時半には新地町の磯山聖ヨハネ教会に到着、牧師の加藤主教さんたちがお迎えくださいました。教会の現在までの歩みを概略した冊子もご準備くださり、原発避難者の方の経験をお聞きする時間を持つことができました。震災当初から現在に至るまでのご自身の思いや状況をとつとつとお話くださる言葉に誰もが聞き入り、北上してきた常磐道沿岸の景色と重ね合わせていました。かつての磯山聖ヨハネ教会が建っていた場所は、現在祈りの庭として整備され、思いを寄せてくださる方々の寄付によって重ね合わせられた祈りの煉瓦で囲われ、石造りの祭壇や祈りの鐘が設置されています。ここで私たち一同は、東日本大震災を覚えて共に祈り、鐘の音を響かせました。

17時半頃には協議会の会場である茂庭荘に到着し、先着の実行委員と共に、夕食を囲み、次の日に備えて温泉で疲れを癒しました。



畑に残る汚染土が入ったフレコンバッグ



加藤主教（左）のお話



原発避難者の証言



かつての磯山聖ヨハネ教会

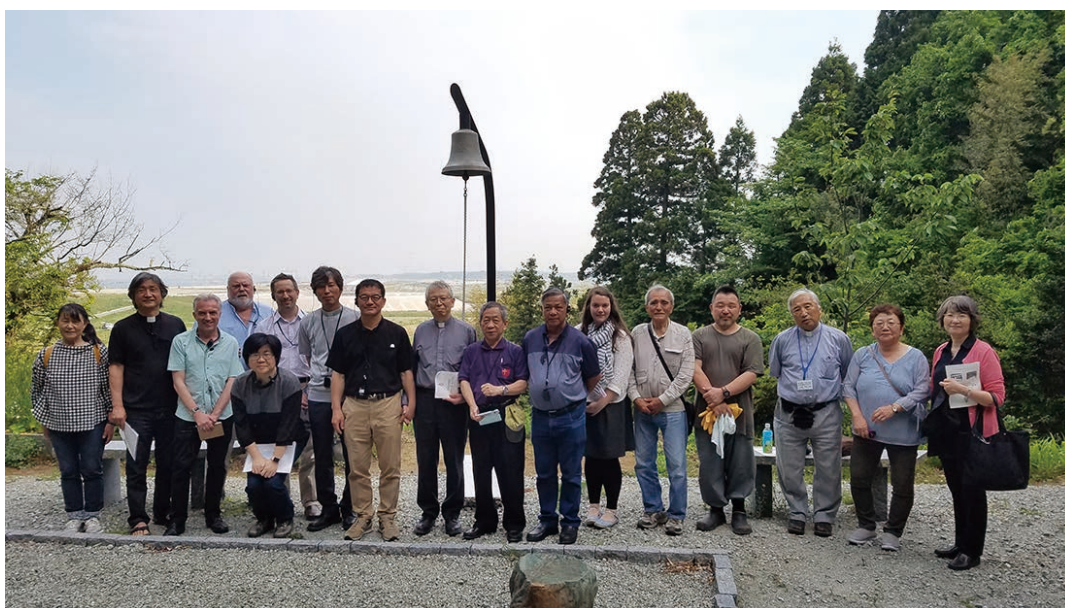


祈りの庭にて祈る

越山健蔵司祭は、東日本大震災発生時から現在に至るまで福島県内で司牧しておられ、この間、さまざまな被災者支援活動に関わって来られました。司牧教会や関連幼稚園で、或は地域での支援活動を通して、被災者に寄り添い共に歩む中、被災者の切実な声を直接聴いて来られました。越山司祭ご自身が聴き、感じられたことを、フィールド・ワーク参加者のために書き記していただきました。報告書を手にする皆さまにもぜひ分かち合っていたいただきたいとのご意向ですので、以下に掲載させていただきます。

8年2ヶ月が経過して福島の人たちが、今思うこと

- ① 8年目を迎えて、福島はもう日常ですよ、という言葉の裏に、言えない不安感が見え隠れしている。
- ② 福島は安全です、危険地域とは言わないで、と言いつつながら内心本当の姿を知って欲しいとも思っている。
- ③ 風評被害に苛まれながら、どこか真実だと感じている（特に仮設住宅での人々の想い）。
- ④ 放射能の危険はない、と言わないと地域の仲間から外される（自主避難した人は殆ど戻っていない）。
*帰還困難区域から解除された町の帰還者は、平均2割程度（ライフラインが回復整備されていない…学校・幼稚園・病院・銀行・スーパーマーケット・通勤バス・職場等）。
- ⑤ 地元の人々の心模様の変化…自分にこれでいいのだと言い聞かせて生活する（諦め）。
- ⑥ 故郷を捨てた人にしか辛さが伝わらないジレンマ…諦めの無力感（生きる希望が見つけられない人が増えている）…自死者は福島県でダントツに多い…東北6県の震災関連死合計3,701人の内福島県が2,267人（全体の80%）。
- ⑦ どこから来たのと聞かれて、すぐ堂々と福島からと言えない後ろめたさと悔しさ…自分が罪を犯したわけではないのに。
- ⑧ 「福島がんばろう」の文字が色あせてきた（絆の文字も消えた）。忘れられる不安。
- ⑨ ヒロシマ・ナガサキ・フクシマとカタカナで呼ばれたくない（漢字の福島を使って…福の島・福音の福島と呼んで欲しい）。



祈りの庭にて海外ゲストとともに

5月30日 被災地巡り

〔報告：司祭 長谷川清純〕協議会の3日目、海外ゲストや講師を含む参加希望者約30名が、津波による被災地を訪れました。現地ガイドや被災者から直接話を聴き、あらためて被害の大きさを実感しました。

震災遺構・荒浜小学校（仙台市若林区荒浜）

概要：児童や教職員、地域住民ら320人が避難し、2階まで津波が押し寄せた。被災した校舎のありのままの姿と被災直後の写真展示等により、防災・減災の意識を高める場とすることを目的に、校舎を震災遺構として公開している。

- ・ 案内は、震災遺構専属ガイドの若い男性。
- ・ 津波に破壊された建物内外を見て、参加者は息を呑んだ。その威力の凄まじさを感じ、あまりの波の高さに信じられない様子だった。
- ・ 荒浜地区が震災前とまったく変わってしまった様子をお聞きした。かつて地域一帯にあった住居はほぼ皆無となった。住民は内陸部へ集団移転を行った。現在は災害防災林の再生に取り組み、公園やスポーツ会場として再興を進めている。
- ・ 震災前の地域を模型で再現し、自分たちのアイデンティティーを残そうとしている。
- ・ お祭りや運動会といった住民が集まる機会をつくり、住民たちが交流をすることで次の世代へと繋いでいる。
- ・ 東日本大震災の記録ビデオを見た。ビデオに登場して、当時を思い出しながら語る被災者の言葉に、参加者の中には涙する方々がいた。



①天井まで浸水した校内 ②津波に襲われた校舎 ③案内版を読むミランダさん ④説明するガイドさん ⑤震災前の町を再現した模型



日和山（名取市関上）

概要：名取市の中心部から7kmほど離れた港町。8.4mの高さの津波が町を襲い、深刻な被害を受けた。標高約6mの「日和山」は海から500m程の距離にあり、関上地区一帯を見渡すことができる。

- ・ 立派な災害復興公営住宅をバスから見たが、忽然と建っている分、孤立感を覚えた。
- ・ 参加者の背景にあるのは、津波の最高位置（8.4m）と同じ高さに作られた記念モニュメント。一同、その高さに圧倒された。（写真上）
- ・ 三陸地震（1933年）に押し寄せた津波を記録する石碑の一つ。「地震があったら津波の用心」と刻まれている。東日本大震災で倒されてしまったが、その後造設された「震災メモリアル公園」に改めて設置された。他に、三陸津波の標柱が4本あったが大震災前に失われ、現存する1本を除いては確認されていない。後世への警告は、こうしていつしか薄れ忘れ去られてしまう。強烈なメッセージだった。（写真右）



参加者の声

参加者一人ひとりが、三々五々思ったこと、感じたことをポストイットに書き、会場の「木」に貼りました。日程が進むにつれ、増えていった「実」や「葉」に書かれた感想や思い、希望、願いをみんなで共有することが出来ました。※原文のまま掲載しています。



原発は反いのちです。

人、命、倫理
本質
不都合

完全なる
幸せ!!

じっくり考えるより、動かないとなー

命は一人につき一つ。
いかに大切なものであるか。
現生世代の幸福が未来世代の幸福の
上に（犠牲）成り立っている
「忘れてはならない順序」、「命」
原発は経済活動の選択肢の一つで
しかないことの確認。
キリスト者として命を。

Pastures of Hope for People.
(みんなの希望の大地)

いのちが宝
ぬちどう宝
これが大事

하느님이 지으신 아름다운
세상 지킵시다
(神様の造られた美しい世界
を守りましょう)

聴くこと
伝えること

「いのち」を「いのち」
として生かして下さる
主の御力によって
脱核の世界が切り開かれ
未来の子供たちにつながり
ますように

Green Church を作る！と
いう目標は、UCCJでも
公的に語られたけれどまだ
その具体化は見えない…！

原発のない世界を神様は
求めているのだから。

녹색교회 만들자!
(グリーンチャーチ作ろう!)

宇沢弘文さんの言葉、今、
本当に鋭く響きます

「あきらめない」と
決意しなければならない。
帰りたいのに帰れない
多くの人を思うと。
「脱原発を」と勇気をもって
言っていこう。

子どもたちが笑顔で
いられるように
新しい生命のために

いのち、この授かりものを守り抜く

5 marks of mission
and No-Nuke

ぎせい者・被災者の声を聞く
ことが必要だという川上先生の
言葉が印象的でした。

原子力に依存しない政策を

痛みを負いつづける方々の
為に祈りつづけます。

難民問題として
フクシマの避難者がいる。
フィリピンと、欧州と、
私たちはつながっている。

私たちが変えること…習慣
→くらし方、生き方

正しい現実を
正しい情報を

子どもたちに
核のゴミを
残したくない

ドイツの「脱石炭」、台湾の
「国民投票」等、世界中で
同じように苦闘が続いている
ことを知り励まされ“も”
しました。

この会またやろう!!

「福島でつらいこと」に鈍感でした。

再生エネルギーを教会
から発信しよう!

Thy kingdom come
み国が来ますように

子どものいのちをまもろう!

脱原発は皆でやらなきゃ進まない

여기 있는 모두가
하느님의 일꾼
(ここにいる皆が
神の働き人)

Exodus 解放された
生き方を求めたい。経済や
テクノロジーに操られるの
ではなく、“生きる”ための
“くらし”を豊かにしたい。

原発反対
原発廃止を訴えます!!

子どもたちのために。
(あるいは未来の子も
たちのために)

私たちにできること、
みんなと探しつづけたい!

녹색교회 만듭시다
(グリーンチャーチ、作りましょう)

離れた場所でも、
共に十字架に向き合うこ
とができれば…
maybe Network

11才の児童の声に感動!
この声を1人でも多くの
人々に伝えたいです。

信徒・聖職・教会も
変わるほどの姿勢も
必要では。

「世界で最も厳しい安全
基準」(に適合したら再稼
働していく)という
“新しい安全基準”という
おためごかしに
だまされたくない。

罪のどれいから解放
されますように

全世界オフグリッド教会

悪を止める。

かくされる事実…

薄れていく関心に立ち向かう「証言者となる」
勇気と忍耐と覚悟が必要

テクノクラシー (テクノロジー+支配)
→ “トップの欲望” の奴隷「カルフォルニア」
エクソダス!! 解放
被ばく者の声を聞く
シャローム=幸せが完全であること
エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ
教会が出来ること→証言者となること

自己と他者とを根底にて通底させる
主の御力によって
脱核の世界が切り開かれますように祈りたい

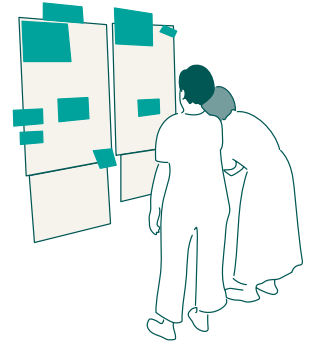
ここ東北教区で
年一回は原発の
話を聞きたい。

負債ある者
神にも世界にも
完全な幸せ
シャローム

電力会社さん、原発なしで
やっていけるよう応援するし、
大丈夫ですよ。代案あります。
(ガスコンバインド)

パネル展示

スライド（本書P76～91）と資料（本書P92～101）を掘り下げたパネルを、日本語・英語で常時展示しました。空き時間などに足を止め、熱心に読む姿が見受けられました。本ページ掲載の写真は小さくて読むことができませんが、手作りのパネルが廊下に展示された様子を感じ取って頂けたらと思います。



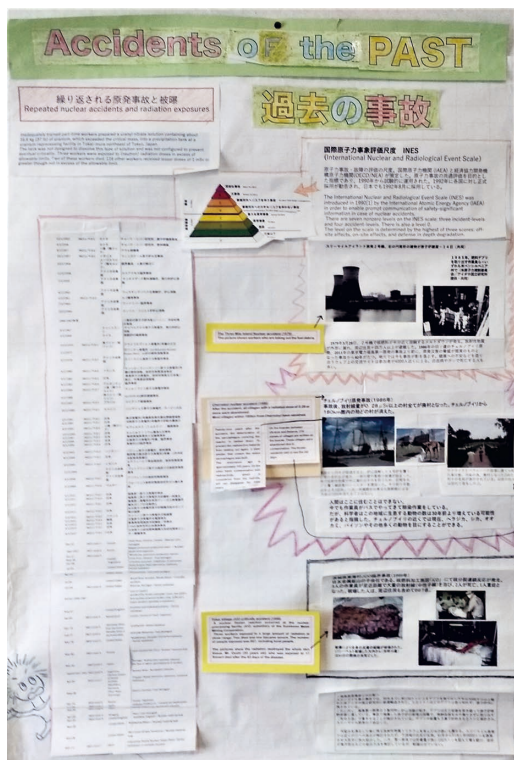
① History of Nuclear Energy 原子力発電の歴史（左）

米国は世界に先駆けて原子爆弾の開発に成功し、広島、長崎に原爆を投下した。その後、冷戦構造の中で、米国と旧ソ連が原水爆の軍備拡大競争を展開した。

米国のアイゼンハワー大統領は1953年、「平和のための原子力 (Atoms for Peace)」という演説を、国連本部で開催された原子力の平和利用に関する国連総会でを行った。これ以降、原発の開発は世界に拡大。本質的には原爆と同じ技術であるが、危険な兵器というイメージとは分離され、開発が進んだ。

② Accidents of the Past 過去の原子力発電所事故（左下）

原発の事故は各国で繰り返されている。大きな事故としては、米国・スリーマイル島原発メルトダウン事故（1979年レベル5）、旧ソ連・チェルノブイリ原発爆発事故（1986年レベル7）、日本・東海村核燃料処理施設JCO臨界事故（1999年レベル4）。



③ 東京電力福島第一原子力発電所事故（右下）

福島第一原発の爆発事故は、1985年には既に予測されていた。巨大地震と15.7mの巨大津波発生の可能性があるという情報があったにも拘わらず、何ら対策がなされなかったことにより、被害が未曾有のものとなった。2019年5月現在、当時の経営トップ3名の責任を問う裁判が行われている。





④破綻する原子力政策（左）

原発を柱とするエネルギー政策は根幹から破綻している。核燃料サイクル政策も、「高速増殖炉もんじゅ」や「六ヶ所再処理工場」の事故や不具合が度重なり機能せず、実質的に破綻。環境に優しい、電気料金が安い、など原発の様々な「嘘」が明らかになってきている。

⑤転換するエネルギー（下）

世界は、再生可能エネルギーを中心としたエネルギー政策、持続可能な社会への転換を図ってゆく必要がある。ドイツは原発、石炭火力発電所ゼロの計画を進めている。日本でもエネルギーの地産地消などが注目されつつある。

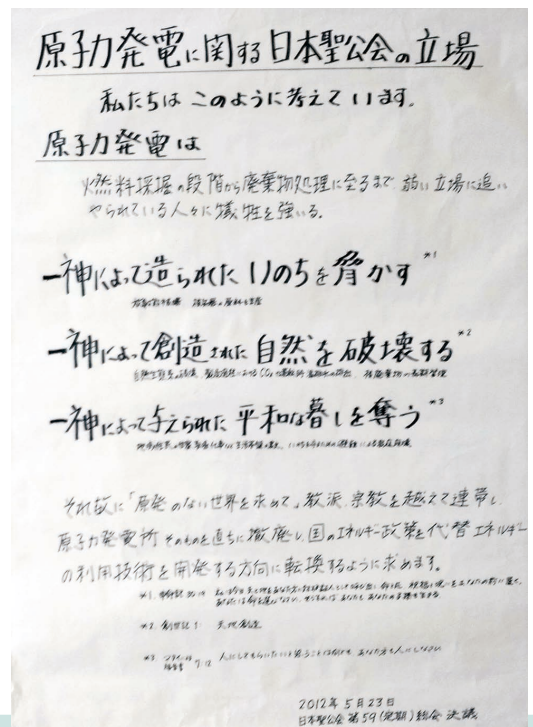


⑥いのちの問題として（上）

原子力発電は、燃料となるウラン鉱石の採掘から、発電所のメンテナンス、使用済核燃料や放射性廃棄物の処分・管理に至るまで、全てのプロセスにおいて、それに関わる人々と、電気を使う人々との間に分断や差別をもたらしている。

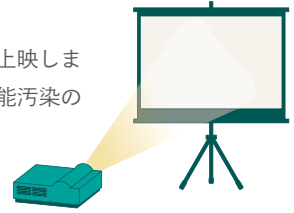
⑦日本聖公会の立場（右）

日本聖公会第59（定期）総会において、「原発のない世界を求めて一原子力発電に対する日本聖公会の立場」を決議した。その立場が「いっしょに歩こう！プロジェクト（パートI、II）」、「原発問題プロジェクト」などの展開、「原発のない世界を求める国際協議会」の開催に繋がっている。



スライド

限られた協議会日程の中では、十分な情報を提供することが出来ないと考え、常時、補足のスライドを上映しました。原子爆弾や原子力発電の開発の歴史・経緯、過去の原発事故から福島第一原発事故、そして放射能汚染の状況に至るまで、多岐に亘る問題点や課題が資料と共に盛り込まれています。折に触れ、実行委員が直接スライドの説明をしました。質疑応答などもあり、活発な意見交換の場にもなりました。



1

原発のない世界を求める 国際協議会

2019年5月28日～31日

仙台：茂庭荘

原発は**いのち**と**人間の尊厳**を破壊する

主催：日本聖公会 原発のない世界を求める国際協議会 実行委員会

2

この写真は私たちに何を問いかけているでしょう。

こんな悲しみをもたらした原爆はその後、更にもたらしたか？

長崎に原爆が投下され町が破壊された後、被爆して亡くなった弟を背負い、茶毘に付す順番を待つ少年。

1945年 米軍カメラマン
ジョー・オダネル撮影
「焼き場に立つ少年」



3

① 原発が作られた経緯

原発は原子爆弾の開発から始まった

適宜、展示パネルをご参照ください。

1945年7月、米国ニューメキシコ州アラモゴードで、人類最初の核爆弾の実験が行われ成功した。原子爆弾の圧倒的な威力を見て、「全能の神に属する力」を人間が手懐ける事と畏れを表明する者も少なくなかった。

しかし、「千の太陽よりも明るく」（ユンク）、「トリニティ（Trinity；三位一体）」（R.オッペンハイマー）との認識。

→ 1945年8月6日、9日 この時制作された3発の原爆のうち2発が広島、長崎に投下された。

米国は、あまりにも凄まじい威力の原爆を、既に戦力を失った日本に投下したことは罪悪感もあったのではないと思われる。（その後の展開から推察）

4

広島・長崎への原爆投下



1945年8月6日
リトルボーイ広島に投下
人口35万人
死亡17万人

5



原爆により破壊された広島市

被曝者（被曝健康手帳保持者）数の推移

S/32年	200,984人
S/55年	372,264人
H/24年	201,779人
広島	64,302人
長崎	37,564人
北海道	398人
韓国人被曝者	約7万人
広島・長崎全被曝者数	691,500人

6

長崎への原爆投下 1945・8・9



1945年8月9日
ファットマン長崎に投下
人口24万人
死亡7万4千人

7



逃げまどう長崎市民



被爆し全身やけどを負った14歳の少女
1945年8月10日大村海軍病院にて

8

広島も長崎もたった1発の爆弾によって破壊され、
多くの市民が一瞬のうちに死んだ。

想像を絶する、途方もない破壊力を持つ兵器が戦争
で初めて使用された。

9

**そして世界は核兵器の開発を背景にした
冷戦時代に突入した。**

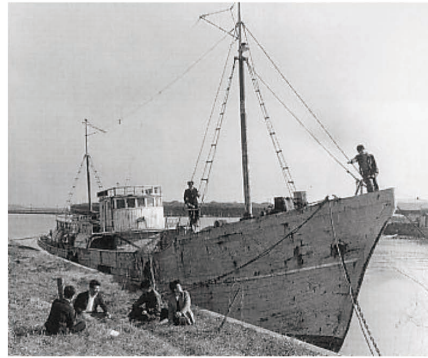
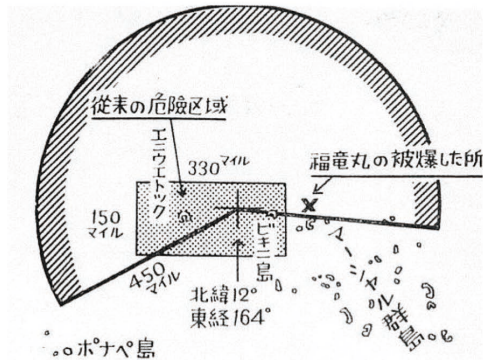
一般の市民はまだ、原子爆弾の本当の怖さについての認識は
希薄だった。

そのため、太平洋上ビキニ環礁付近で行われた水爆実験の至
近距離で操業していた沢山の日本漁船が被曝した。

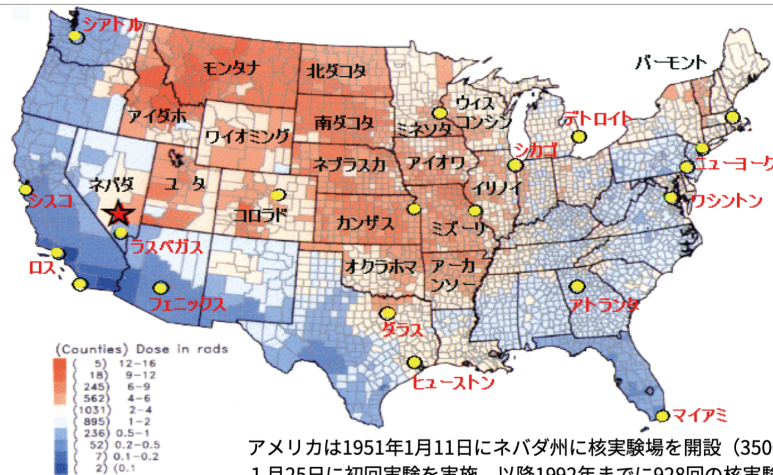
10

被爆の歴史

第五福竜丸 1954年3月1日 太平洋ビキニ環礁でのアメリカ軍の水爆実験による放射性物質の降下により23名の乗組員が被曝した。無線長の久保山愛吉さんは半年後の9月23日死亡。



11



アメリカは1951年1月11日にネバダ州に核実験場を開設 (3500km²鳥取県全域に相当) 1月25日に初回実験を実施。以降1992年までに928回の核実験を行った。被曝被害も出ているが放射能との関連性は不明としている。

上記はこの核実験によって拡散したヨウ素131の甲状腺蓄積推定量を示す分布図である。

12

被爆の実態

原爆によって死亡した人の数については、現在も正確にはつかめていません。しかし、放射線による急性障害が一応おさまった、昭和20年(1945年)12月末までに、約14万人が死亡したと推計されています。

爆心地から1.2キロメートルでは、その日のうちにほぼ50%が死亡しました。それよりも爆心地に近い地域では80~100%が死亡したと推定されています。また、即死あるいは即日死をまぬがれた人でも、近距離で被曝し、傷害の重い人ほど、その後の死亡率が高かったようです。

② 原爆と原発

原爆と原発は、その基本原理において同じものである。しかし、原爆は大量破壊兵器であるが、原発は「クリーンエネルギー」で、経済繁栄の道具であり、その活用は「神の善き計画に合致する」「20世紀の人類に『驚異的な善』をもたらすに違いない」として積極的に受け入れられていった。

ウィリアム・ポラード博士（オークリッジ原子核研究所理事で物理学者、米国聖公会司祭（Atomic Diecon とも呼ばれた）は、1955年10月31日 来日し、原子力平和利用博覧会の閉会式に出席。米国聖公会の意向を伝えた。米国聖公会は敗戦に苦しむ日本に原子炉を寄贈する事を決定したのである。

立教大学：松下正寿総長自らが渡米し、話を進めた。そして設置場所としては横須賀（武山）として、更に、横須賀市議会は満場一致で原子炉誘致を承認。八代斌助首座主教（立教大学理事長）は設置者として官庁にかけあった。設置の推進者（会長：吉田茂、副会長：池田隼人、正力松太郎など）

1961年 GE社のトリガ二型実験炉が臨界に達した。

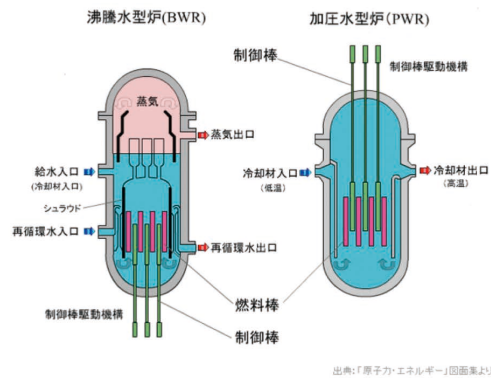
祝福・奉献式：大学チャプレン

八代主教（米国聖公会総裁主教リヒテンバーガーの奉献祈禱の代読）

以降、原発は日本の保守的な政治家を中心に、国家の威信、将来の核武装、日米同盟など複雑な思惑の中で推進された。経済界は米国技術の導入により経済発展を目論んだ。

2001年 立教学院はこの原子炉の廃炉を決定し稼働停止した。2003年使用済み核燃料米国に搬出した。

原子炉（原発）と原子爆弾（原爆）は同じ



出典：「原子力エネルギー」回面集より作成

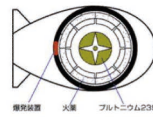


<広島型リトル・ボーイ>

長さ：約3メートル（120インチ）

重さ：約4トン（9,000ポンド）

主体：ウラン235



<長崎型原子爆弾（ファット・マン）>

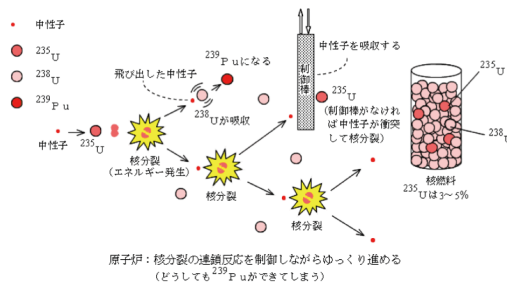
長さ：約3.2メートル（128インチ）

重さ：約4.5トン（10,000ポンド）

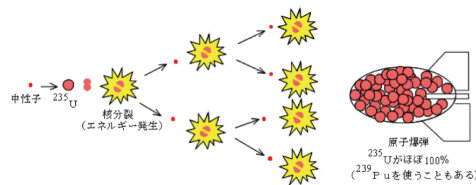
主体：プルトニウム239

出典：「語り継ぐために」-原爆の構造-

原子炉の中で行われる核分裂



原子爆弾の中で行われる核分裂



出典：山賀進のWEB SITEより

1963年日本に初めて原子力発電所が導入された。

(1961年 立教大学に米国聖公会より原子炉 (100kw) 寄贈される (~2001年稼働停止) 廃炉作業中)
 1963年 動力試験炉 (JPDR) 米国より導入 10月23日運転開始 (廃炉作業中)
 1966年 東海発電所 (GCR) 英国より導入 7月営業運転開始 (廃炉作業中)
 1970年 福井県関西電力美浜1号機 (PWR) 11月営業運転開始 (廃炉決定済)
 1971年 福島県大熊町 東京電力福島第一原子力発電所 (廃炉作業中)
 1号機 (BWR) 3月営業運転開始

2004年度末 53基 (BWR 30基、PWR 23基 日本の総発電容量の30%)

2019年現在、9基のPWR原発が再稼働し運転中

③ 過去の原発事故

展示パネルを合わせてごらんください。

米国	スリーマイル島原発事故	(1979年)	炉心溶融	レベル5
旧ソ連	チェルノブイリ原発事故	(1986年)	爆発	レベル7
日本	東海村JCO 臨界事故	(1999年)		レベル4
	福島第一原発 爆発事故	(2011年3月)		レベル7

その他報道されない多くの事故が発生している。

④ 東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故



爆発直後の映像

1号機 2011年3月12日15:36爆発

2号機 3月15日6:00頃

放射性物質大量放出

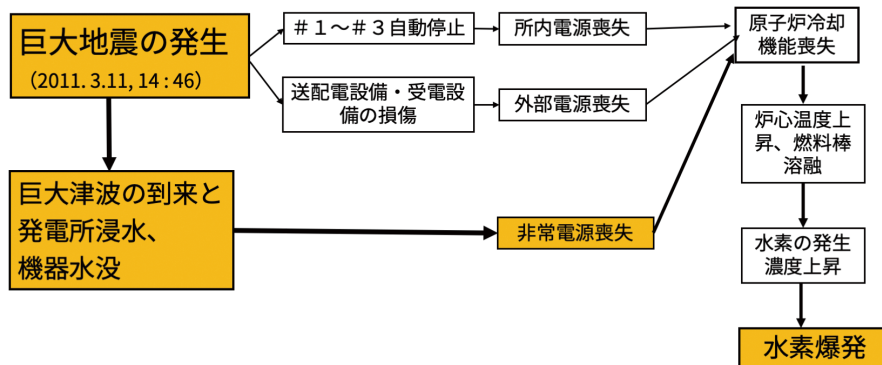
3号機 3月14日11:01爆発

4号機 3月15日6:00頃爆発



19

東電福島第一原発事故発生の経緯



20

⑤ 事故後8年経過した今の状況

展示パネルを合わせてご覧ください。

爆発事故を起した福島第一原発は、メルトダウンした炉心から燃料棒の撤去作業を進めているが、高濃度の放射線量である事やメルトダウンした核燃料や構造物の損傷から予定は4年以上遅れている。

また、廃炉費用は民間シンクタンクの試算では70兆円とも見積もられている。

21



2018年12月時点
タンク数 約900基
貯水量 約112万トン

主に、除去できないトリチウムを含む汚染水とされているが、最近、他の多くの放射性核種を含む事が確認されている。

汚染水の海洋投棄

英国の専門誌の報告

環境中に放出されたトリチウムは、＜放出後＞環境中の有機物に取り込まれる。これらの有機トリチウムは、もとのトリチウムより長く存在する。

有機トリチウムは魚介類や植物に取り込まれ、人間がそれを食物として取り込むことによって内部被曝する可能性がある。

泊原発近隣町村のがん死亡率 (SMR: Standardized Mortality Ratio)

道内の市町村別癌死亡率(SMR)			
2000年～2009年 資料 北海道健康づくり財団			
泊	村		144.9
岩	内	町	125.5
福	島	町	124.0
積	丹	町	119.6
全	国	100	全道 104.8

トリチウムの影響と思われる事象

事故が無くても原発周辺の住民は健康被害を受けている。

表1 通常運転時の健康被害

1	アメリカ ビーテボム原発	運転開始(1974)後のワシントンDCの乳幼児死亡率 1974年には全米平均同等であったが、1985年には全米平均の1.5倍になった。 「死にいたる虚構」J.グールド著 pko 法を広める会発行
2	イギリス トロースネイズ原発	周辺の乳がん発生率は通常の5倍、白血病は8倍 すい臓がんは5倍など 週刊金曜日 2007.8.24
3	ドイツ	各原発から5km圏内の小児がんは通常の1.6倍 小児白血病は2.2倍。 ドイツ環境省発表による (http://saiban.hiroshima-net.org/trial12.html)
4	カナダ ピッカリング 原発	トリチウムの放出により、周辺住民新生児のダウン症発症率が85%増加した。 ト・フェアリー博士「トリチウム災害報告」2007
5	フランス ラーグ再処理施設	周辺の小児白血病の発症率が通常の約3倍。 核燃料サイクル阻止1万人訴訟原告団 HP
6	フランス	各原発から5km圏内の子供の白血病発症率は通常2倍。 フランス国立保健医学研究所発表 2012.1
7	北海道泊村 泊原発	年間がん死亡率(人口10万人当たり)は約800人、全国平均は約300人 北海道健康づくり財団 HP (http://ankei.jp/yuji/?n=1553)
8	青森県 六ヶ所再処理施設	ここ数年の年間の新患者数は、白血病25~40名、悪性リンパ腫70~90名、 多発性骨髄腫15~20名、骨髄異形成症候群30~40名で、東北地方で 最多数となっています。(青森県立中央病院 HP)
9	福井県敦賀市 敦賀原発	風下3集落の悪性リンパ腫発生率は全国平均の10倍 敦賀原発銀座悪性リンパ腫多発地帯の恐怖 明石昇二郎著 宝島社
10	佐賀県玄海町 玄海原発	白血病年間死亡率30人/人口10万人 全国平均は6人 : 2006年 http://www.windfarm.co.jp/blog/blog_kaze/post-4139

原発通信1070 通常運転時の健康被害2 (<http://genpatu-no.jugem.jp/?eid=63>)

25

汚染地域の除染

除染　そして　フレコンバックに詰められた汚染物質は　各地に設置された仮置き場に山と積まれ、行き場もなく放置されている。

8年経過したフレコンバックは劣化し、中から雑草や木が芽を出し、袋が破れ、雨水が流入し、汚染された水が染み出す。それによって周囲を汚染し、被爆をもたらす。

26

2011年3月　東電福島第一原発事故 5年後の影響　福島現状



フレコンバックの中から生えた草が袋を破ってゆく。フレコンバックに浸み込んだ雨水は汚染物質を周囲に垂れ流してゆく。

2016年3月　飯舘村の
フレコンバックの山
10,306,900袋
(2015/12/31)

中間貯蔵施設用地

1%

27

福島は今、再汚染されている可能性がある



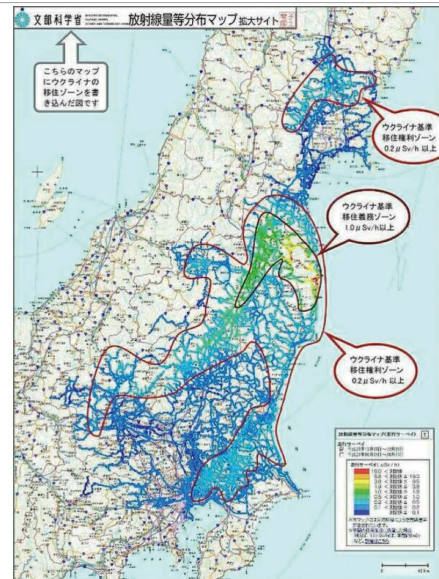
除染した地域が、周囲のまだ除染していなかった山林などからの汚染物質の拡散によって再び汚染されている可能性がある指摘されている。

アーニー・ガンダーセン氏
南相馬各地を計測

28

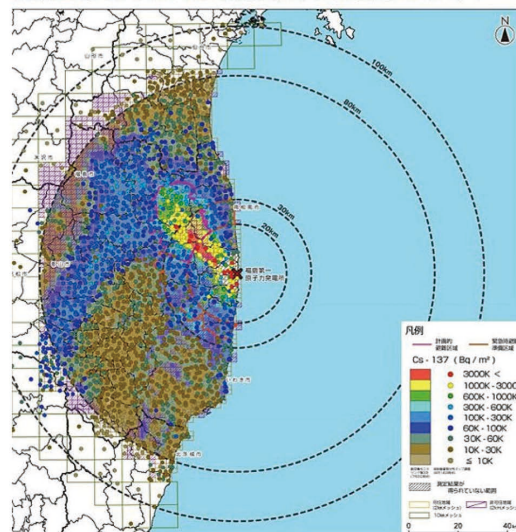
ウクライナとの政策の違い

この違いは何を意味しているのか？



29

結果とセシウム137の土壤濃度マップの比較について 別紙6



30

チェルノブイリ原発事故

事故後、0.28 μ Sv/h以上の放射線量の村が全て廃村になっている。

事故の7年後、あまりに多くの子ども達が甲状腺癌やリンパ癌にかかり、村が閉鎖された。

チェルノブイリから180km圏内の殆どの村が消えた。

31

チェルノブイリ原発4号機のカバー



鋼鉄製 2万9千トン

幅257m、高さ110m 2015年10月完了

WEB: Livedoor blog 「とある原発の溶融貫通」より

32

過去の原発事故

チェルノブイリ原発事故（1986年）



廃村となった216の村々の表示板
ウクライナとベラルーシの国境にある

汚染の為、廃村となった村々の名前が表示
されている。
以前の住人が訪れて昔をしのぶ。

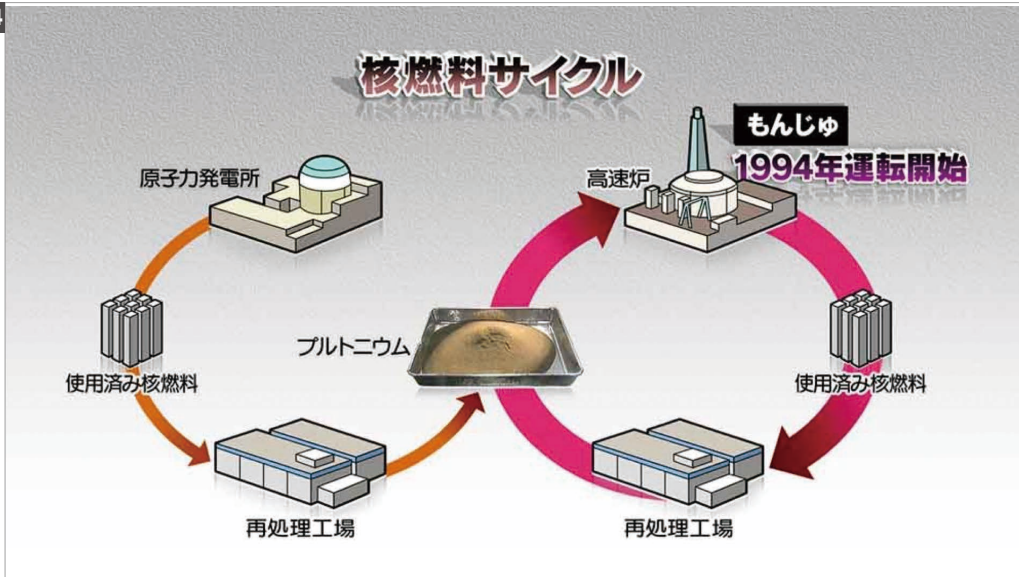
33

破綻する核燃料サイクル政策

エネルギー資源に乏しい日本は、原発で使用した使用済核燃料を、六ヶ所再処理工場にて再処理し、核分裂により発生したプルトニウムや分裂性のウランU235、分裂しないウランU238などを分離し、プルトニウムを含む新たな核燃料（MOX燃料）を高速増殖炉（もんじゅ）で使用するという政策を進めてきた。

しかし、この政策は六ヶ所再処理工場の度重なる不具合（これまで23回も完成時期の延期を余儀なくされている）が生じ未完成、また高速増殖炉「もんじゅ」も、これまで1兆1千億円を超える資金を投入してきたが、不具合や事故が続き完成の目途が立たず、政府は2016年12月に廃炉を決定した。

政府は「核燃料サイクル政策」が破綻しているにも拘わらず、政策を変更していない。そして、プルトニウム削減を意図した小型の新型原子炉の開発を進めている。



核燃料サイクル政策の要・FBR原型炉「もんじゅ」



初運転（1994年4月4日）後、試運転の中で、多くの失敗や事故を繰り返し、2017年12月、日本原子力開発機構は原子力規制委員会に廃炉計画の許可申請を行い、2018年3月に廃炉計画が許可された。

これまでに、1兆1313億円が投じられたが開発計画の16%しか達成できなかった。廃炉費用は3750億円（国の試算）と予想される。

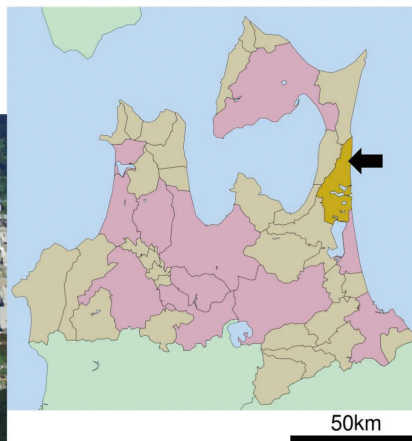
FBR: 高速増殖炉（Fast Breeder Reactor）

六ヶ所核燃料再処理工場

使用済核燃料から、核燃料のウランとプルトニウムを取り出す。1993年着工、2006年より試運転。2009年完成予定であったがトラブルが続き、23回延期されており、2018年時点で完成の見通しは立っていない。2兆9500億円投入した（当初計画7600億円）。



本稼働すれば、空と海に放出される放射能は1日に原発1年分にあたるとの主張もある。



⑥ 原発の倫理的問題

それまで、スリーマイル島（米国）、チェルノブイリ（旧ソ連）などで過酷事故を経験しているが、2011年3月に東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故が起り、「安全神話」は崩壊した。

原発は、国策として進められ、経済発展の原動力として推進されてきたが、一旦事故が発生するとその被害のあまりもの重大さに、世界が政策の見直しを行うこととなった。

特にドイツでは、福島原発事故の直後に、脱原発倫理委員会を開催し、4か月後には2022年には原発ゼロを決定する政策転換を行った。

この決定の大きな力となったのは、

「原発は、政治、経済の問題ではなく、いのちの問題」という認識であった。

福島第一原発事故とは何だったのか

- * 「安全」と言われていた原発が、想像を絶する事故を起した。
- * 事故により放射能が空と海に放出され、多くの人が避難しなければならず、被曝した。
- * 発電所の事故処理は現在も続いており、途方もない時間、お金、人的犠牲（被曝）を余儀なくされている。

原発事故の特徴

- * 他のどんな発電所の事故よりも過酷で取り返しがつかない。
- * 避難困難による被曝を避けられない。
- * 地域の人達のかけがえのない深い関係の破壊。

事故は避けられなかったか

- * 東電は2008年には、福島原発に最大15.7mの津波が押し寄せる可能性があるという解析結果を得ていた。（政府・地震調査研究推進本部〔推本〕調査）
- * この時点で対策に着手していれば2011年3月の原発事故を防ぐことが出来た。
- * この時点から対策を進めていた東海第2原発は事故の発生を免れた。

この事故は避ける事が出来た

- * 当時の経営トップ3人が刑事裁判係争中

これまでのエネルギー資源と環境エコロジー

核エネルギー：全てのプロセスに被曝とそれによる差別が生じる。

事故は広範な放射能汚染と被曝が生じる。

被曝は全ての生態系を破壊する。

使用済核燃料の管理は十万年に及び負の遺産となる。

一旦事故が発生した場合に確実に避難できない。

化石燃料エネルギー：化石燃料は地球温暖化の原因となる。

環境エコロジー：核エネルギー、化石燃料エネルギーの両方の削減

再生可能エネルギーへの政策転換が必要。

⑦ エネルギーシフト

展示パネルを合わせてごらんください。

エネルギーは経済社会を支える為に不可欠である。
そして、同時に、地球環境の維持のための配慮が求められる。

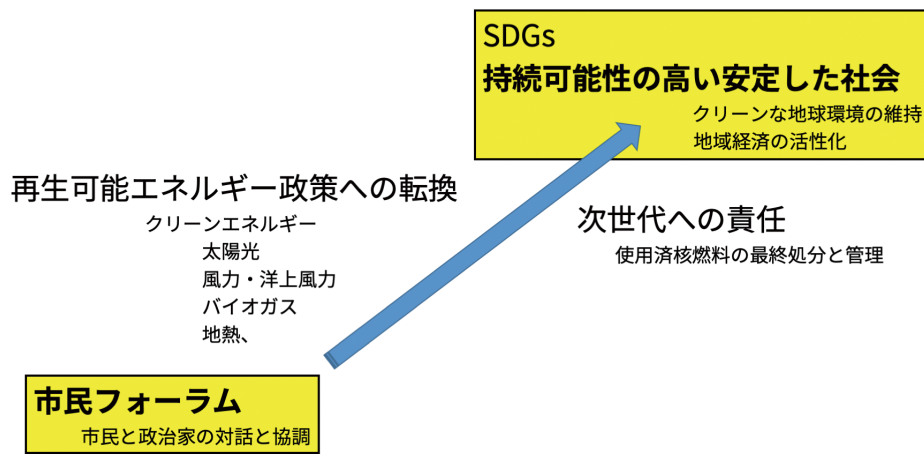
その為の「クリーンエネルギー」と「持続的な政策」の両立が求められる。

- ① 原子力から再生可能エネルギーへ
- ② 持続可能なエネルギー政策を実現

へとシフトする必要がある。

日本の原子力政策は破綻している。
これ以上、原発に依存する経済を続けるべきでなく
再生可能エネルギーへの政策転換をおこない
新たな持続可能経済の道を歩むべきである。

原発のない世界実現への道すじ



43

真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、 村を破らず、人を殺さざるべし



田中正造 (1841~1913)

衆議院議員 当選6回

足尾銅山鉱毒事件の解決を願い、明治天皇に直訴



田中正造の生家

私財を全て投げ打って被災者、被災地の支援を行った。亡くなった時、遺品として残されたのは信玄袋一つで、中には日記と聖書、石ころ3つであったという。

44

原発は私たちに何をもたらしたか

1. 経済的側面
 - ・立地自治体への交付金
 - ・核燃料サイクルへの投資（15兆円）と破綻
 - ・福島第一原発事故と地域破壊 事故処理、汚染対策、廃炉、賠償>16兆円
2. 政治的側面
 - ・プルトニウム大量（47トン、原爆6000発分）保有による国際不安定
 - ・使用済核燃料処分と管理の負の遺産
 - ・「安全神話」の崩壊
 - ・事故発生時対策の不備顕在化
3. 文化的側面
 - ・事故による地域破壊
 - ・被曝による健康被害
4. 倫理的側面
 - ・神が創造し、良しとした世界の破壊
 - ・いのちの尊厳の軽視
 - ・社会構造的差別
 - ・最も大切な「安全管理」の後世代への負の遺産

45

日本聖公会「原発のない世界をもとめて」活動の現状

2012年日本聖公会 第59（定期）総会決議

「神によって造られたいのちを脅かす」

「神によって創造された自然を破壊する」

「神によって与えられた平和な暮らしを奪う」

正義と平和委員会 「いっしょに歩こう！プロジェクト」

原発問題プロジェクト

「神の民として正義を行うことへと召されていることを自覚し、
平和の器として、世界の分裂と痛み、叫びと苦しみの声を聞き
取ることの出来る教会へと変えられることを祈り求めます」

「原発のない世界を求める国際協議会」の開催

カトリック司教協議会 常任司教委員会

2016年「教会は人間のいのちと尊厳に関する問題に沈黙できない」

教会は社会に何を発信できるのか どのような責任があるのか

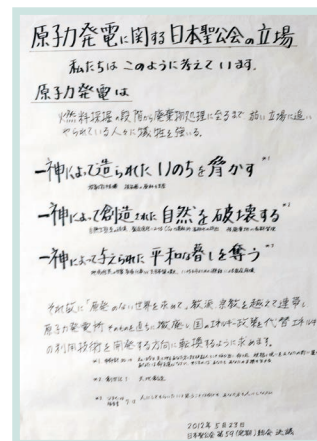
No！原発、No！化石燃料

「いのちと核エネルギーは共存できない」をモットーに、
地球上の全ての生物の掛け替えのない命 人間の尊厳を守る。
すでに、「核エネルギー」「化石燃料エネルギー」に代わる
クリーンな再生可能エネルギー技術が存在する。
集中、大容量発電所から分散電源にシフトする事による地域経済の活性化を実現する。

以上の施策を展開し、**持続型社会の姿を具体的に提示する事**。

⑧ 原発に関する日本聖公会の立場

展示パネルを合わせてご覧ください。



※本書P75参照

私たちは

原発のない世界を求めます。

そのために祈り、行動します。

忘れないあの日、あの時

2011年3月11日2時46分 東日本大震災 大地震、大津波、そして爆発

東京電力福島第一原子力発電所（以下、「福島第一原発」と略）の全電源喪失により核燃料溶融。原子炉建屋やサプレッションプールが水素爆発して放射性物質を大量に放出した。爆発により、1、3、4号機の建屋が崩壊し、写真左から骨組みがむき出しになった3号機や、屋根が吹き飛んだ1号機が確認できる。2号機は、原子炉格納容器につながる圧力抑制室が損傷した。



▲出典：'11/3/15 朝日新聞 DIGITAL ミデジタルグループ提供

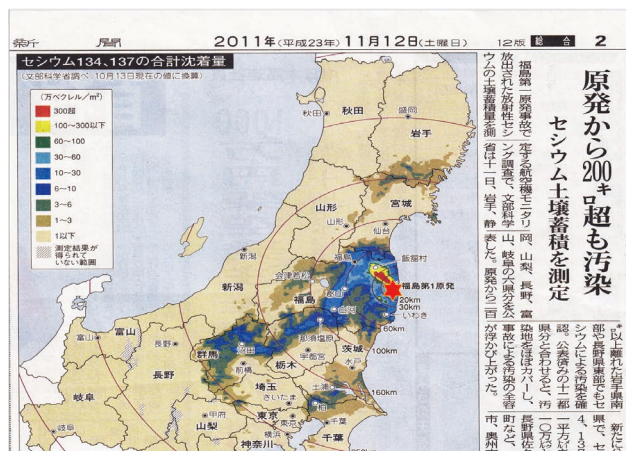
▲3号機の水素爆発（'11/3/14）出典：日テレNEWS24

大気・土壌・海水汚染

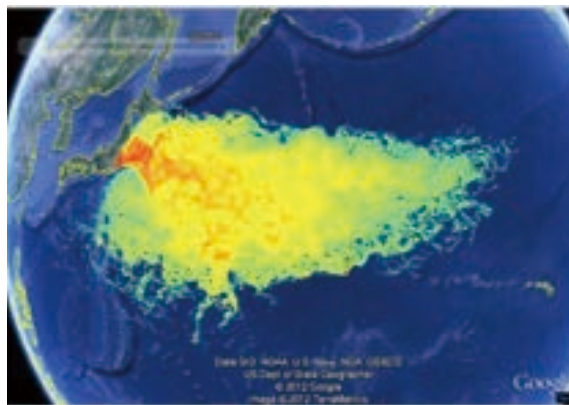
2011年11月、福島第一原発から200km離れた地域でも放射性セシウムによる汚染が確認された。穀物、野菜、果物、家畜、牛乳、飲料水からも放射線物質が検出された。また、ハワイでも大気中のウラン238値の急上昇が2011年4月1日に観測された。

核種名	核種名（元素記号）	物理的半減期
ヨウ素 131	I 131	8日
セシウム 134	Cs 134	2年
セシウム 137	Cs 137	30年
ストロンチウム 90	Sr 90	29年
プルトニウム 239	Pu 239	24000年
ウラン 235	U 235	7億年
ウラン 238	U 238	45億年
トリチウム	T	12.3年

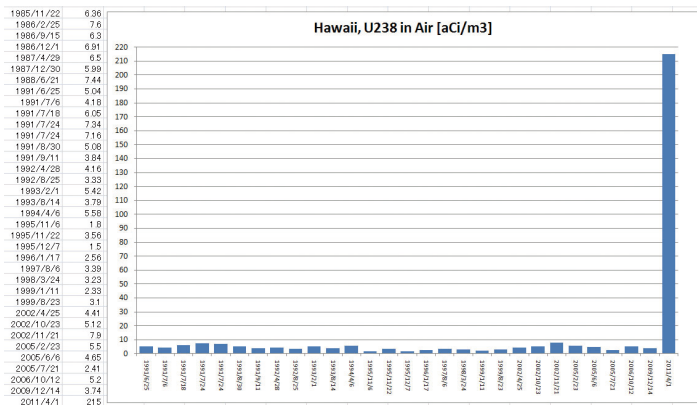
▲原発事故由来の放射性物質と半減期



▲セシウムによる汚染を報じる記事 出典：'11/11/12 中日新聞



▲放射線物質の大量拡散 出典：lh3.googleusercontent.com



▲ハワイでのウラン238の増大（過去20年の比較）

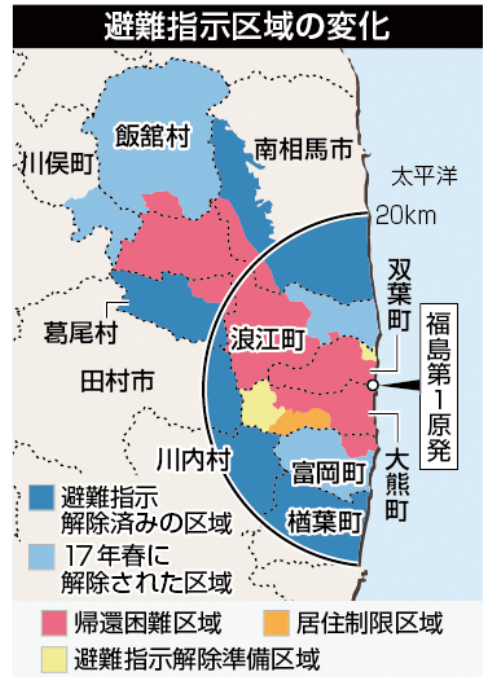
出典：米国環境保護局（EPA）RadNet

避難を強いられる地域住民

詳しいことが知らされないままの避難指示。福島第一原発周辺の地域は、汚染度によって「帰宅困難区域」、「居住制限区域」、「避難指示解除準備区域」に分類され、16万人以上が避難を余儀なくされた。福島第一原発から約10kmの富岡町の住民が、約28kmの川内村に避難したが、その後川内村も避難地域に指定された。そのため再度、約60kmの郡山市に移動させられるというような事態も起こった。大きな混乱の中にあったことが伺われる。2019年2月現在でも、41,299人（内県外避難32,631人、県内避難8,655人）が避難生活を続けている。



▲川内村内の小学校体育館（'11/3/11） 出典：3.11を伝える町『とみおか』



▲2018年3月現在 出典：'18/3/31 時事ドットコム



▲移動先の郡山市内の避難所でスクリーニングを受ける人々（'11/3/16） 出典：3.11を伝える町『とみおか』



▲避難所で放射線量の測定を受ける幼い子ども（'11/3/18） 出典：朝日新聞 DIGITAL



▲原乳出荷停止を受け、牛舎の溝に廃棄する川俣町の酪農家（'11/3/22） 出典：朝日新聞 DIGITAL

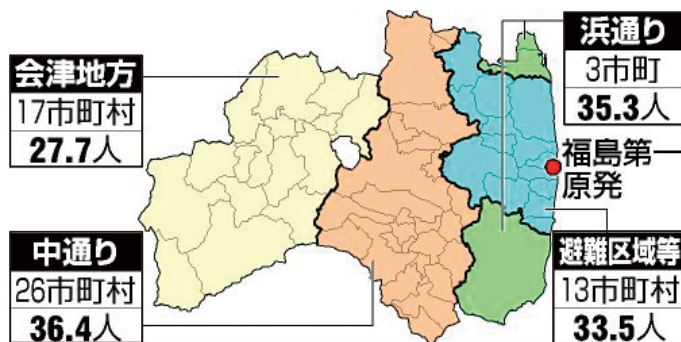


▲帰宅困難区域の前に立てられた迂回指示の看板（'16/9/18） 出典：https://twilog.org/ru_mercury/

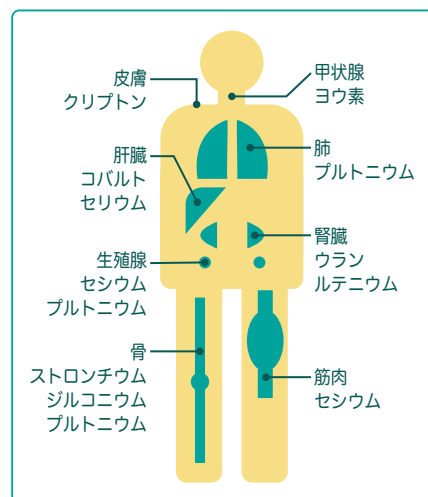
環境への影響と健康被害

福島県では、1992年4月2日から2012年4月1日までに生まれた福島県民を対象に、20歳までは2年ごと、それ以降は5年ごとに甲状腺のエコー検査を実施している。2016年3月末時点の対象者38万1286人のうち131人が甲状腺癌と確定され、福島サポート事業では、2018年3月末には少なくとも272人が甲状腺癌だと診断されたことがわかっている。

放射性物質は植物にも影響を与えている。セシウムを吸収した植物の、異常な成長や葉の変形が街中で見られた。



▲福島県の子どもの甲状腺がん発生率（暫定値）
10万人あたり。疑いも含む。2014年8月時点 出典：朝日新聞



▲体に蓄積する放射性物質
出典：『内部被ばくの脅威』肥田舜太郎／鎌仲ひとみ著
ちくま書房



◀積算線量計を携帯する子どもたち
写真左は、郡山セントポール幼稚園の園児の鞆。積算線量計は、放射線を取り扱う場所（放射線管理区域）に立ち入る医療従事者に義務付けられるもの。 出典右：'11/11/11 カレイドスコープ



▲郡山聖ペテロ聖パウロ教会のアサガオ（上）聖テモテ幼稚園（小名浜）のビワの木（右）
アサガオには様々な形の葉が混在し、巨大な葉は約16cmある。（'14年9月）
ビワの木は幹から直接、大量の葉が生えている。（'12年5月）



8年経った福島の今

住宅支援の打ち切り

一方的な避難指示解除によって、2017年度末で避難区域以外の住民に対する住宅支援が打ち切られた。大熊町、双葉町を除く地域からの避難者への、仮設住宅無償貸与も2019年度末までに全て打ち切られることになった。

モニタリングポストの撤去方針と住民の声

生活空間の放射線量を測定、監視するために、学校や保育所、公園などに設置された3099台（2017年2月現在）のモニタリングポストの撤去方針が、一定の役割を終えたとする原子力規制委員会から打ち出された。多くの住民からは時期尚早、原発事故は現在も継続中、放射線量が分からなくなる、風化が加速する等の訴えと共に、撤去反対の声が広がっている。



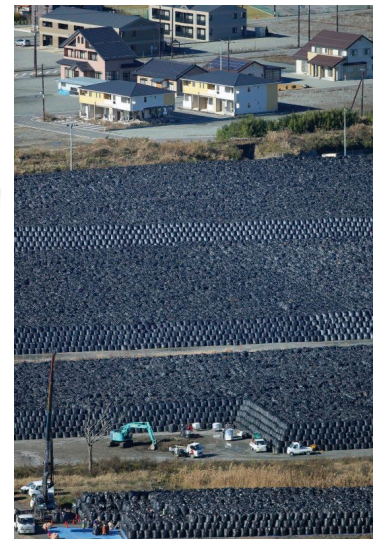
▲モニタリングポスト
出典：http://tokuphoto.sakura.ne.jp/blog/

決まらない放射性廃棄物の最終処分場

避難区域を初め、福島市、郡山市、白河市、いわき市など、福島県内各地からの除染後の放射性廃棄物が仮置き場に保管されている。環境省が建設を進める「中間貯蔵施設」への搬入が進められているが、この後の最終処分場は未だ決まっていない。中間貯蔵施設の地権者は、このまま最終処分場になってしまうのではないかと懸念を示している。



▲中間貯蔵施設 ▶中間貯蔵施設の稼働と地元の疑念を報じる新聞
出典左：'17/10/28 日本経済新聞、中：'17/10/29 日本経済新聞、右：同日 河北新報



▲富岡町の仮置き場に積み上げられた無数のフレコンバッグ（撮影'15/11/27） 出典：週刊エコノミスト

福島第一原発から出される、高レベル放射性物質の最終処分場も決まっていなばかりか、発電所敷地内に増え続ける汚染水の、保管タンクの建設場所も限界に来ている。

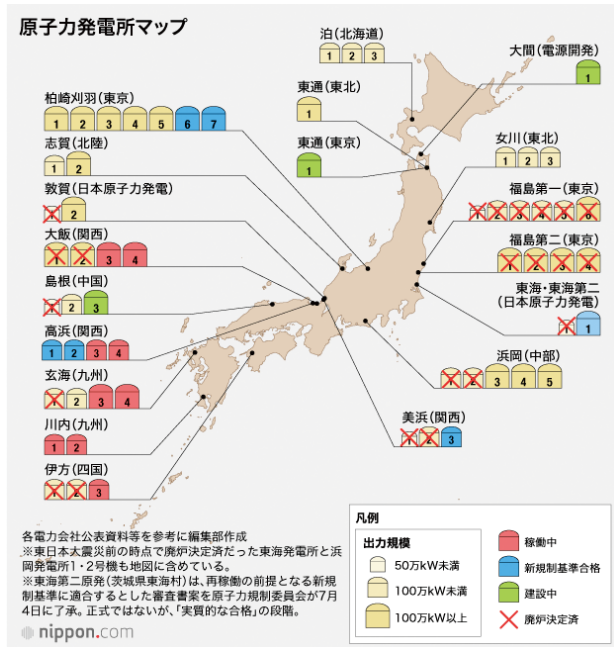
▶汚染水の保管タンク 2017年8月現在、総量約100万t。汚染水は毎日300t～500tずつ増え続け、タンクはもはや原発の敷地を埋め尽くしている。出典左：ウォール・ストリート・ジャーナル、右：TEPCO



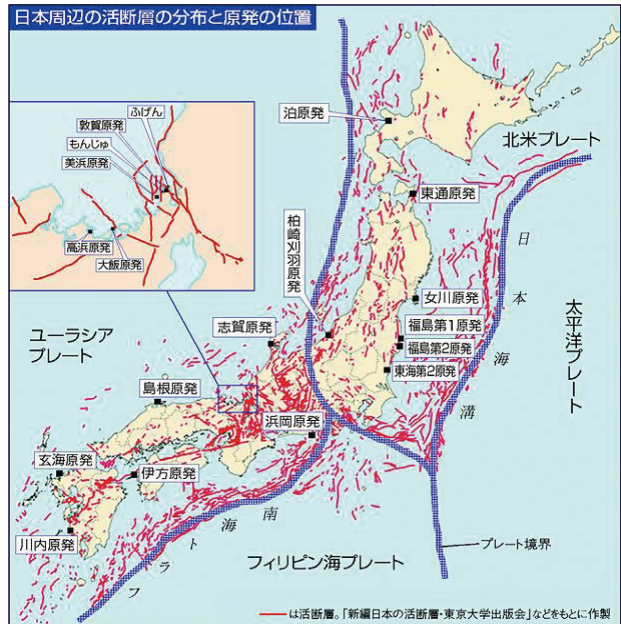
再稼働への動き

事故後、日本国内の54基の原発全てが停止した。その後、切実な反対の声にもかかわらず、2019年3月現在、9基が稼働している。しかし、日本列島は北米プレート、ユーラシアプレート、太平洋プレート、フィリピン海

プレートの境界上にある島国である。しかも、原発の多くがプレートの境界近くや、内陸の活断層の真上やその近くに位置している。ひとたび大地震が発生したら、想像を絶する原子力事故が起きかねない。



▲出典：'18/7/12 nippon.com



▲日本周辺の活断層の分布と原発の位置

出典：i-Mart 日本全国活断層マップ・情報

脱原発・再稼働反対訴訟

これまで、多くの原発関連の訴訟が提起されたが、福島第一原発の事故後、より一層脱原発、再稼働反対の動きが高まった。

以下は、画期的な判決と言われる「関西電力大飯原発3、4号機の運転差し止め」を命じた福井地裁の判決要旨。(その後、この判決は名古屋高裁で取り消され、住民側の請求は棄却された。)

——**人格権** 個人の生命、身体、精神及び生活に関する利益の総体である人格権は憲法上の権利であり、これを超える価値を他に見出すことはできない。生命を守り生活を維持するという根幹部分に対する具体的な侵害の恐れがあるとき、また、多数の人格権を同時に侵害する性質があるときは、差し止めの要請ができる。

——**求められる安全性** 原子力発電所の稼働は経済活動の自由に属するものであって、憲法上の人格権の中核部分より劣位に置かれるべきものである。自然災害と戦争以外で人格権が極めて広範に奪われるという事態を招く可能性があるのは、原発事故の他は想定し難い。

——**国富の喪失** 被告は原発の稼働が電力供給の安定性、コストの低減につながると主張する。しかし極めて多数の人の生存そのものに関わる権利と、電気代の高い低いの問題などを

対象	地裁(右は異議審)	高裁	最高裁	
北陸電力志賀原発2号機(石川)	訴訟 金沢	(2006年3月)	(09年3月)	(10年10月)
中部電力浜岡原発1~4号機(静岡)	// 静岡	(07年10月)	?	
中国電力島根原発1,2号機(島根)	// 松江	(10年5月)	?	
11年3月 福島第一原発事故が発生				
関西電力大飯原発3,4号機(福井)	仮処分 大阪	(13年4月)	(14年5月)	
	訴訟 福井	(14年5月)	(18年7月)	
関電高浜原発3,4号機(福井)	仮処分 福井	(15年4月)	(15年12月)	
	// 大津	(16年3月)	(16年7月)	(17年3月)
九州電力川内原発1,2号機(鹿児島)	// 鹿児島	(15年4月)	(16年4月)	
四国電力伊方原発3号機(愛媛)	// 広島	(17年3月)	(17年12月)	

▲原発差し止めをめぐる近年の主な司法判断 出典：東京新聞

並べて論じるような議論に加わること自体、法的に許されない。たとえ原発の運転停止によって多額の貿易赤字が出るとしても、これを国富の流出や喪失というべきでない。豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富で、これを取り戻すことができなくなることが国富の喪失となる。また被告は、原発は二酸化炭素(CO2)の削減に資して環境面に優れると主張するが、福島原発はわが国始まって以来最大の公害、環境汚染だ。環境問題を運転継続の根拠とすることは、甚だしい筋違いだ。

行き詰まる日本の原発政策

輸出
成長戦略の柱に掲げるも、台湾、ベトナム、英国などへの輸出を相次ぎ失敗。

再稼働
2030年度の原発割合 20～22%（30基程度）を掲げるが、現在は9基。

核燃料サイクル
原子力政策の根幹に据えるが、余剰プルトニウムは約47t。再処理工場の建設費は当初の4倍近くに。

次世代炉開発
実用化目標を「今世紀後半」に先送り。もんじゅ後継炉の建設見直し立たず。

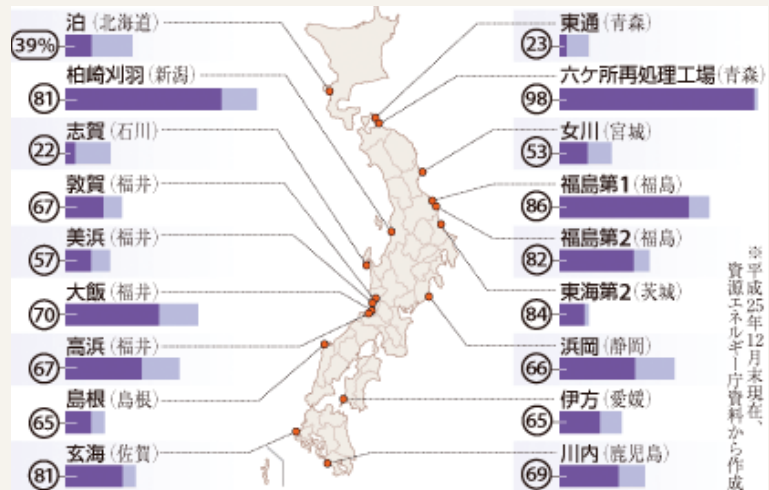
「核のごみ」最終処分場
候補地選定の第1段階「文献検査」入りの自治体なく。

▲出典：'19/1/12 朝日新聞

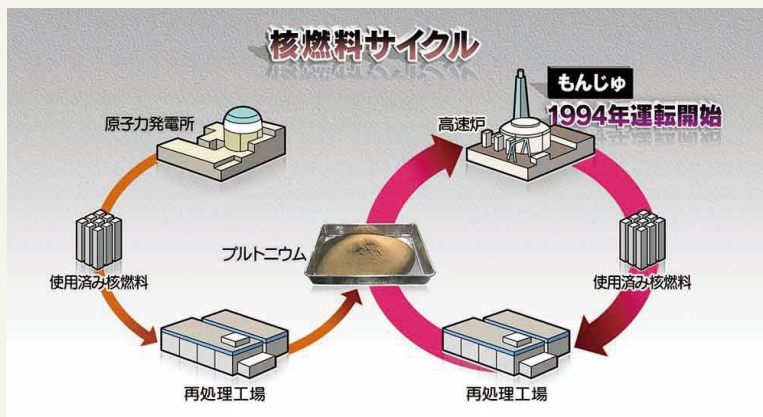
たまり続ける使用済み核燃料

使用済み核燃料は、原子炉建屋内の貯蔵プールで数年間冷やされるが、ほとんどの貯蔵プールに許容限界が来ている。また、冷却後には、主に青森県六ヶ所再処理工場に送られるが、その貯蔵量もすでに2010年現在で94.5%に達している。

日本は、使用済み燃料棒の再処理を、フランス、イギリスに委託してきたが、フランスからは契約終了に伴い、再処理後のガラス固化体1310本が戻ってきており、六ヶ所村の「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」に保管されている。イギリスからは、2010年から10年間かけて計850本が返還される予定である。しかしながら、最終的処分場が決まっていないどころか、目途さえ立っていない。原発を稼働し続ける限り廃棄物は出続けるが、現在、世界に最終処分場として機能している場所はなく、原発が「トイレなきマンション」と言われるゆえんである。



▲使用済み核燃料の国内貯蔵状況 2013年12月時点。数字は貯蔵割合。棒グラフの全長は、貯蔵容量を表す 出典：産経デジタル



▲破たんした「核燃料サイクル」1994年に運転を開始するも、冷却用ナトリウム漏れ事故等のトラブルの続出により、ほとんどの期間が運転停止状態のまま廃炉が決められた 出典：NHK解説委員室

破たんする核燃料サイクル政策

エネルギー資源の乏しい日本は、使用済み核燃料を六ヶ所再処理工場で再処理し、核分裂によって発生したプルトニウムやウラン235、ウラン238などを分離、プルトニウムを含めた新たな核燃料を高速増殖炉（もんじゅ）で使用するという政策を進めてきた。しかし、度重なる不具合や事故により、2兆9500億円投入するも六ヶ所再処理工場は未完成。もんじゅも、1兆1千億円を超える資金投入にもかかわらず完成の目途が立たず、2016年12月に廃炉を決定。

原発を造っては いけない、 その理由

いのちと尊厳の問題として

1954年にアメリカで「原子力の平和利用」が唱えられ、1963年には日本初の原発が導入された。以来、原発は人類にとって画期的なエネルギー資源として、「繁栄」をもたらすものとされてきた。しかし、原発など核エネルギーの利用は生命の尊厳とも鋭い対立関係にあり、いのちの問題として考えなければならない。すなわち、

- 核エネルギーは、絶対的な安全を保障できず、一度事故が起きると取り返しのつかない、最も危険なエネルギー源である。
- 原発は、ウラン採掘に始まり、発電、使用済核燃料の処分など、全ての過程で被曝が不可避である。採掘現場では、労働者のみならず地域住民や環境への被害も深刻である。
- 原発は、事故がなくても高レベル放射性廃棄物の処分と管理など、負の遺産を後世代へ残すものである。
- 核エネルギーは、神が創造し、良しとした世界を破壊し、かけがえのない、いのちとその尊厳を否定するものである。

その上、私たちの暮らしにも、経済的、政治的、環境的、あるいは文化的に大きな影響を与える。

- ・ 原発立地自治体への交付金は、地域経済の衰退を招き、また原発誘致をめぐり、住民を分断するなど、もともとの人々の暮らしを破綻させた。
- ・ 核燃料サイクル政策は、15兆円もの巨額投資にもかかわらず結局破綻した。
- ・ 福島第一原発事故は地域のありようを破壊し、賠償、事故処理、廃炉などの費用は16兆円を超えていると言われているが、今後どれくらいの額になるかは誰にも想像がつかない。
- ・ 日本が保有している47tに上るプルトニウムは原爆6000発分に相当し、国際的な不安定を招きかねない。
- ・ 事故発生時の避難対策に重大な不備がある。
- ・ 地球温暖化問題の解決策にならないどころか、海水温上昇が避けられず悪影響。
- ・ 事故発生による地域の文化、人間関係の分断、破壊。

取り返しのつかない原子力事故

■東海村 JCO 臨界事故

1999年9月30日、茨城県東海村住友金属鉱山の子会社、核燃料加工施設「JCO」にて発生。ウラン燃料の取扱い中のミスにより核分裂が臨界に達した。全身の細胞が破壊され、至近距離にいた3人中2人死亡、1人重症となった他、667名被ばく。

■チェルノブイリ原発事故

1986年、旧ソ連（現ウクライナ）で発生。汚染により216もの村が廃村になった。事故発生から33年経った今も、石棺やそれを覆うシェルターと呼ばれる建造物を造るなどの対応が続けられている。半減期から考えると、1000年は放射能による汚染は消えず、廃炉への道のりは遠い。



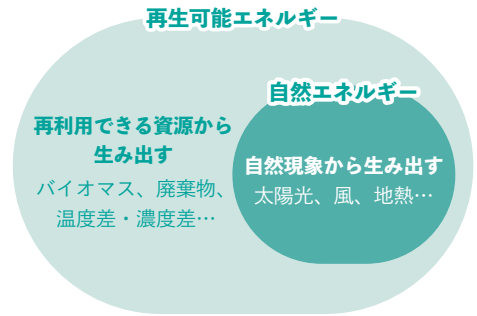
▲東海村JCO臨界事故被害者

出典：https://tocana.jp

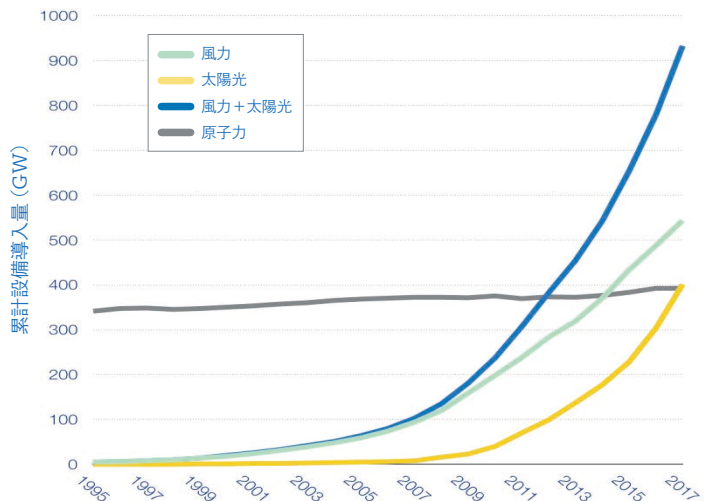
福島第一原発事故以降の エネルギー政策の見直し

世界におけるエネルギー政策

地球温暖化、大気汚染、エネルギー資源の枯渇など環境問題の解決策として、また安全性、経済性などの観点から、自然エネルギー、特に太陽光発電、風力発電への変換が進み、一時的にせよ自然エネルギーだけで100%の電力を賄う国も出て来ている。近年は、水力、地熱、バイオマス発電など、再生可能エネルギーに対する急速な技術の進歩が見られ、その開発費も含めて建設にかかる費用の著しい低下が実現しつつある。



順位	国名	2011年1月	2018年1月
1位	米国	104基	(▲5) 99基
2位	フランス	58基	58基
3位	日本	54基	※(▲12) 42基
4位	中国	13基	(+24) 37基
5位	ロシア	28基	(+3) 31基
6位	韓国	20基	(+4) 24基
7位	インド	19基	(+3) 22基
8位	カナダ	18基	(+1) 19基
9位	ウクライナ	15基	15基
10位	英国	15基	15基
11位	スウェーデン	10基	(▲1) 9基
12位	ドイツ	17基	(▲10) 7基



▲世界の原発の稼働可能な原子炉数（稼働中・運転停止状態）
※ 2019年3月現在、日本で稼働中は9基 出典：一般社団法人 日本原子力産業協会

▲世界の太陽光、風力および原子力発電の累積設備容量の推移
2017年現在、すでに太陽光と風力だけで原発の2倍以上の発電能力がある 出典：認定NPO法人 環境エネルギー政策研究所

■**ドイツ** 福島第一原発事故から10日ほどで、政府は「安全エネルギー供給のための倫理委員会」を発足、同委員会の答申のもと、2022年までの原発完全撤廃を、議会の8割以上の賛成多数で可決した。

■**スイス** 福島第一原発事故直後から年月をかけて慎重に新法の策定を進めてきた。原発の新設を禁止し、風力や太陽光、水力などの再生可能エネルギーを推進する、新エネルギー法の是非を問う国民投票が2017年5月に行われ、賛成多数で可決された。新法は「エネルギー戦略2050」と呼ばれ、2050年までに脱原発を達成するため、公的補助金を通じて2035年までに太陽光、風力の発電量を現在の4倍に引き上げることなどを目指している。

■**台湾** 2017年1月、立法院（国会）は「原子力発電設備の運転を2025年までに全て終了する」との条項を含む、新しい電気事業法を可決。脱原発の法制化はアジアでは初めて。但し、その後の国民投票により「2025年までに原発を全廃する」と定めた条項は撤廃された。

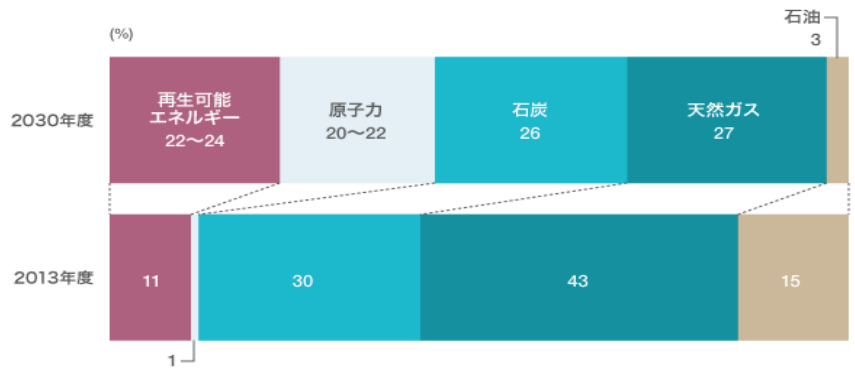
■**ベトナム** 日本とロシアからの受注が決まっていた初の原発建設計画について、福島第一原発事故を受けたコスト増加や財政難に加え、住民の反対運動もあり、原発の建設を撤廃する政府決議案を賛成多数で承認した。他にも、**リトアニア、トルコ**などが原発建設を撤回している。



画像出典：Google MAP

日本のエネルギー政策

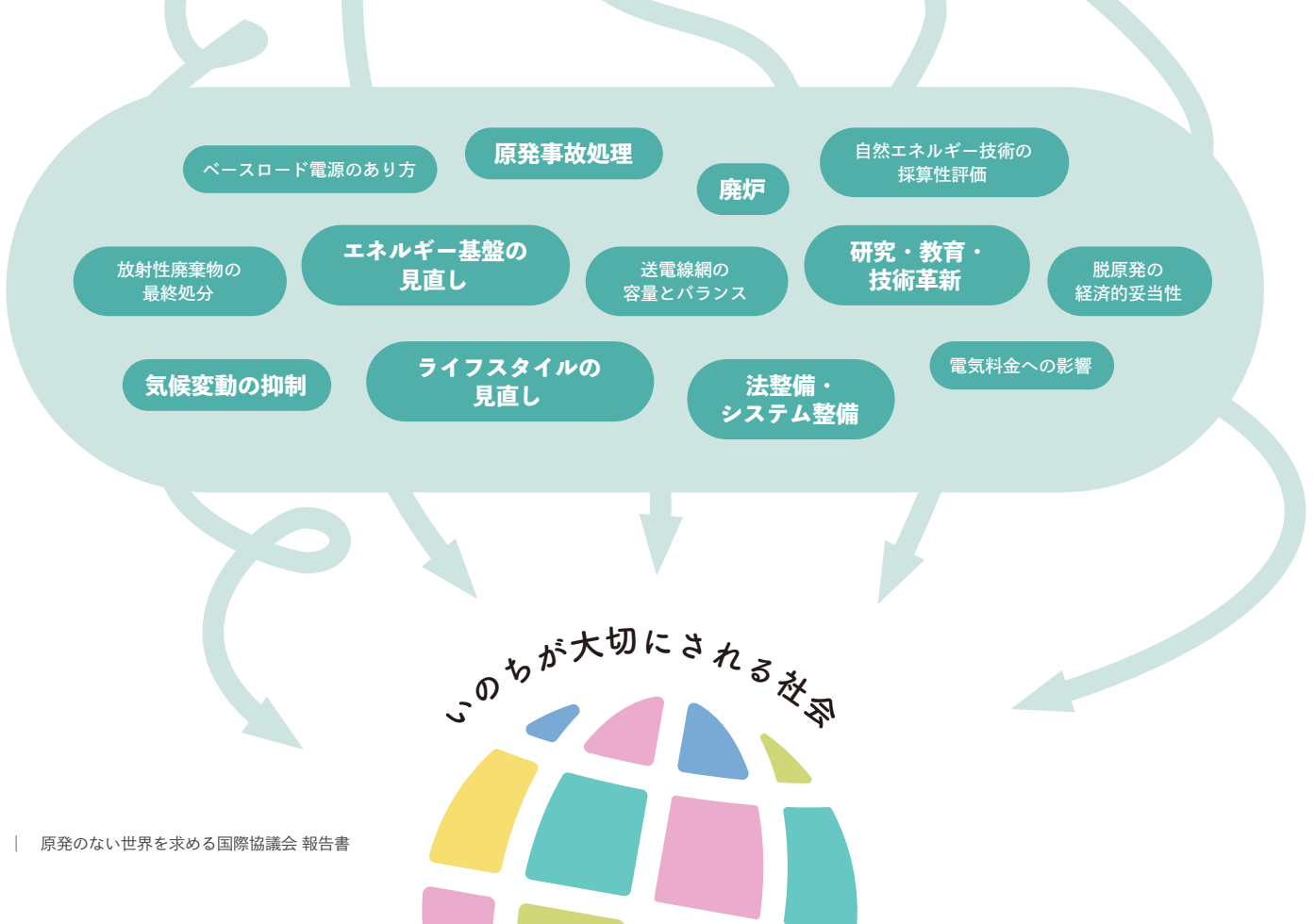
日本政府は、2018年7月に『第5次エネルギー基本政策』を閣議決定。原子力を「重要なベースロード電源」とし、2030年の電源構成で原子力比率20～22%を目指すとした従来の方針に変化はない。一方、コストの引き下げなどにより、今後再生可能エネルギーの「確実な主力電源化」を目指すとしている。



▲第5次エネルギー基本政策に基づく2030年の電源構成案
出典：REN21『自然エネルギー世界白書 2017』

わたしたちは どこへ向かうのか？

- 「原発安全神話」の崩壊
- 取り返しがつかない原発事故を経験して…
- 次の世代に廃棄物処理などを残すことの倫理的問題
- より安全なエネルギー源に代替可能
- 再生可能エネルギーの普及は経済的にも大きなチャンスとなる
- 被ばくと汚染の影響や実態
- 化石燃料もNO などなど…



広がる、エネルギーシフトのための取り組み

個人や企業、自治体などを対象として、新たなエネルギービジョンを共有すべく、国内外で様々なネットワークが広がりを見せている。その中ではエネルギー自給の取り組み事例が共有されたり、自治体や企業が極めて具体的なエネルギー計画を発信している。(例えば、福島県南相馬市は、今後30年以内に地域エネルギーの100%を再生可能エネルギーで賄う計画を立てている。)

以下、一例として紹介

自然エネルギー100%プラットフォーム：自然エネルギー100%の実現を提唱する国際イニシアチブ。教育機関や自治体も参加。

自エネ組(自給エネルギーチーム)：エネルギーをみんなで自給しよう!がモットー。エネルギー自給のノウハウなどを共有。

eシフト(脱原発・新しいエネルギー政策を実現する会)：脱原発と持続可能なエネルギー政策を実現させることを決意した、団体・個人の集まり。55以上のNGO、NPO団体('14年10月現在)と個人が参加中。

RE100プロジェクト：事業運営を100%再生可能エネルギーで調達することを目標に掲げる企業が加盟する国際イニシアチブ。世界の企業144社(日本ではソニー、リコー、イオンなど。'18年9月現在)が加盟。

100%再生可能エネルギー実現に向けた都市・地域間ネットワーク(ICLEI)：持続可能な社会の実現を目指す世界各国の1,500以上の自治体で構成された世界最大の自治体ネットワーク。

諸教派の宣言・声明文

宗派・教派を超えて多くの宗教人が、ニュアンスの違いこそあれ、原発に対する反対の姿勢を明らかにしている。

WEB上で公開されている声明文・決議の一部

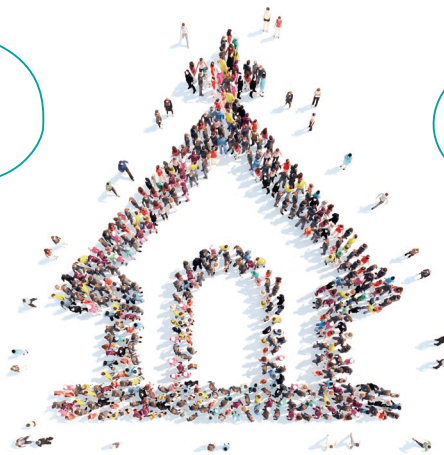
- ・ **真宗大谷派宗議会一同** 『すべての原発の運転停止と廃炉を通して、原子力発電に依存しない社会の実現を求める決議』('12/2/23、宗議会〔臨時会〕において、日本語 <http://www.higashihonganji.or.jp>)

- ・ **立正佼成会** 声明『真に豊かな社会をめざして——原発を超えて』('12/6/18、日本語 <https://rknetwork.org>)
- ・ **日本バプテスト連盟** 公害問題特別委員会『「フクシマ」を生きる私たちの原発再稼働を許さない声明』('14/3/11、日本語 <https://www.bapren.jp>)
- ・ **日本カトリック司教団** メッセージ『原子力発電の撤廃を』('16/11/11、日英韓、他5ヶ国語 <https://www.cbcj.catholic.jp>)
- ・ **国際青年会議 in 京都** ステートメント('17/3/31『国際青年会議 in 京都』参加者一同、日英語 <https://www.facebook.com/uccj.kyoto/>)

「教会」は社会に何を発信できるのか、私たちの責任は？

いのちと核エネルギーは共存できない。地球上の全ての生物の掛け替えのないいのち、人間の尊厳を守る。

集中する、大容量発電所から分散電源にシフトする事による地域経済の活性化を実現する。



核エネルギー・化石燃料エネルギーに代わるクリーンな再生可能エネルギー技術の存在を発信する。

No! 原発
No! 化石燃料

**私たちは原発のない世界を求めます。
そのために祈り、実行します。**

持続可能エネルギーに関するアンケート結果報告書

このアンケートは「原発のない世界を求める国際協議会」の取り組みの一つとして行ったものです。

持続可能エネルギーに関するアンケート 結果報告書

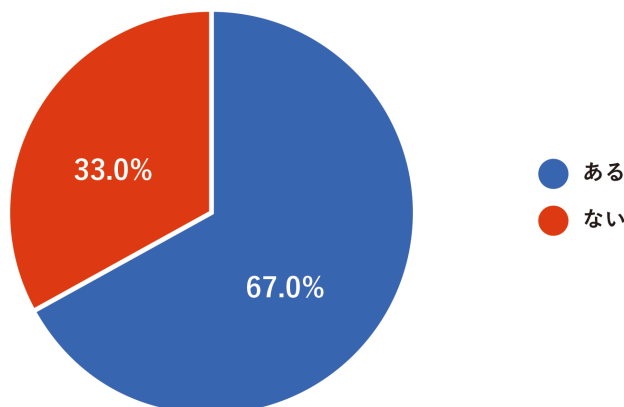
作成：原発のない世界を求める国際協議会 実行委員会

アンケート実施期間：2018年7月～12月



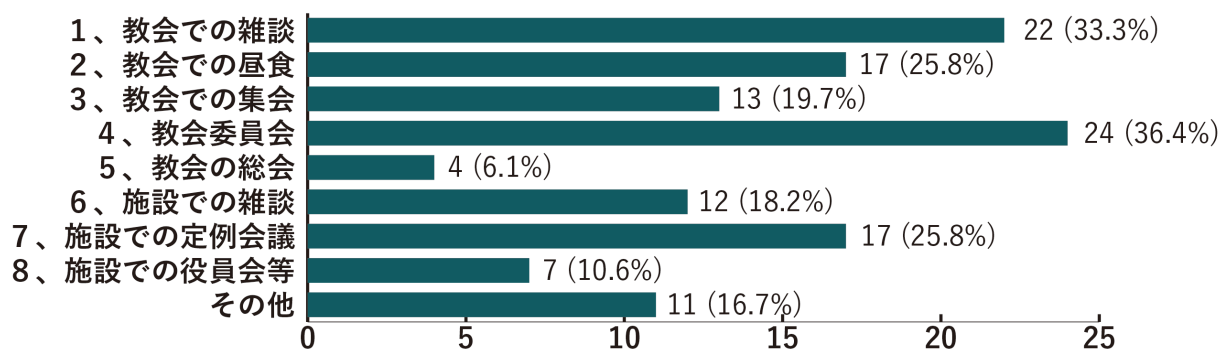
【Q1】貴教会、貴施設におきまして持続可能エネルギーについて話し合ったことはございますか

97 件の回答



【Q2】Q1であるとお答えになられた場合、どのような場で話題となったのでしょうか

66 件の回答

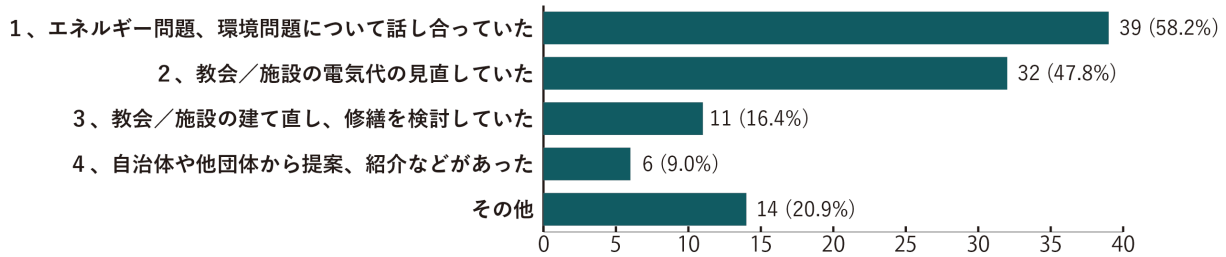


以下 回答 1

- 法人の定例会
- 神学生たちと昼食時の会話、また聖研の折など
- 法人創立 125 周年事業
- 脱原発学習会（教会での）
- 原発反対の立場から講師を招き 2 回学ぶ
- 複数回の講演会等を実施
- 牧師館/幼稚園園舎改築委員会
- 震災時の復興計画の際
- 担当課内での打ち合わせ
- 京都教区との合同礼拝でテーマとして取り上げられた。
- 『群』（教会誌編集委員会、原発に関する特集 2 回発行）、「道北 4 教会合同礼拝」の学びの時間に、テーマとして 3 回取り上げた。

【Q3】話題となった経緯は？

67 件の回答

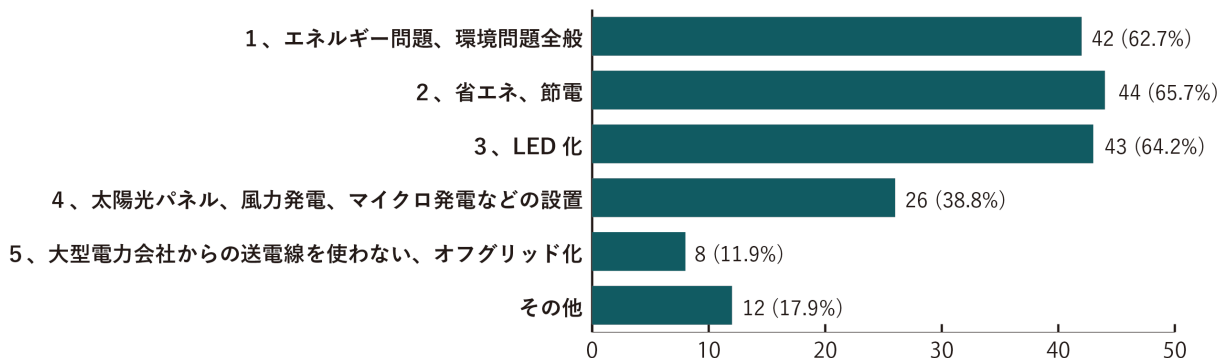


以下 回答 1

●教会内宣教部会の提案による●3.11の原発問題から●福島原発による本園の放射能汚染の状況、その後の食材について、保護者対応について●司祭より日本聖公会では脱原子力、脱炭素の社会を目指す決議があったと報告を受けて、その理由を聞いたところ、地球環境を破壊する。これは神の意志に反しているからだと言われた。一方的な報告であり、深い話し合いはなかった。●管区から今回のアンケートの依頼が来た●8月15日の終戦記念日礼拝で、テーマとして長崎原爆の被爆者をおぼえて祈りをささげました。その中で、エネルギー活用も含めた核廃絶について、思いを新たにしました。●反核・反原発についての講演会を行った●原発事故避難者を招いて話を聞いた●蛍光灯器具が製造中止となる時期が迫ってきたからLEDに変えることを話し合った●中部教区では「いっしょに歩こうプロジェクト中部」という組織あり。継続的に原発問題に取り組んでいる。●教会委員の一人がソーラーパネル工事の業者●国や大阪府からの指導に基づき省エネルギーを推進していく必要があるため●聖餐式の代祷項目に「原発事故の処理のため危険な作業に従事している人々のため」を入れる話し合いのとき●福島原発事故による様々な被害・風評が未だにあることから

【Q4】話題となった場合、具体的にどのような内容のことが話し合われたのでしょうか

67 件の回答

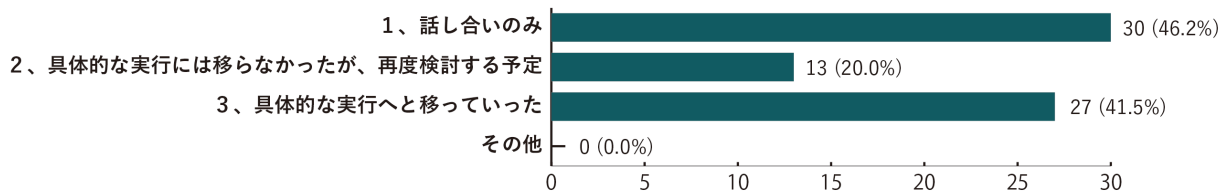


以下 回答 1

●脱原発 ●電力会社の検討 ●保育園の環境の整備 砂、土の入れ替え等々 ●司祭から省エネ節電について関心を持つようにと言われた ●持続可能エネルギーによる発電企業からの電力購入 ●太陽光パネルなどの設置は、定住牧師不在の教会には不要 ●国の原子力政策について ●3.11の前後の日曜日に話題となった。●原発問題 ●原発事故が起きた時の危険性、処理などについて。●原発に依存することの危険性 ●大規模災害時の園としての対策について

【Q5】話し合いの結果

65 件の回答

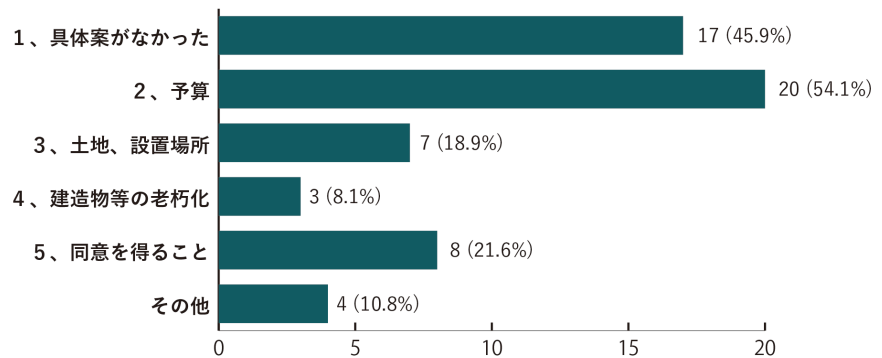


以下 回答 1

●「いっしょに歩こう！プロジェクト中部」主催の5回の講演会において、一般の参加者も含めて意見交換を行い、身の回りですぐに取り組める課題として、教区内施設での再生可能エネルギーの導入の検討に入った。
●環境の整備 砂、土の入れ替え等々 ●LED化については設備入替時に順次実施中。省エネ、節電は具体的取組は不十分（学生への節電は紙程度） ●検討したが実現性がなかったのですね断念した ●電球が切れた場合、LED球に取り替える。 ●講演会の開催、機関紙で取り上げる、日常的な話題にのぼることが増えた ●NHK EV特集やNHKスペシャル福島原発事故関連の録画DVDの貸出し

【Q6】Q5で1、2を選択された方の場合、実行に移らなかった理由は何でしょうか

37 件の回答



以下 回答 1

●固定観念が問題 ●時間をかけて検討する必要があった ●学校設備のため ●多額な投資に対し効率的な活用が見込めなかったため

【Q7】持続可能エネルギー利用に向け、提案や計画がなされた場合、具体的に教えてください。

- 経費削減の側面が大きいですが、蛍光灯のLED化と東電から民間電力会社への変更を行った。
- 先ずは節電に努めるため施設課で毎日の電力消費量をチェックするとともに、人の使命として省エネ促進を掲げ、今後、適宜LED化も進めてゆきたい。
- 「いっしょに歩こう！プロジェクト中部」主催の5回の講演会において、一般の参加者も含めて意見交換を行い、身の回りですぐに取り組める課題として、教区内施設での再生可能エネルギーの導入の検討に入った。早期導入を目指して、複数電力供給機会社（業者）との面談を検討中。
- 教会、園舎施設をLEDに改修
- 太陽光パネルの設置。教会と施設の送電の一本化。
- 省エネ、節電のためブレーカーを取り付けたり、施設内の蛍光灯をLEDに取りかえた。
- 専門家へ相談した。地域や他施設での取り組みのリサーチをした。震災からの復興時、ドイツからの助成金を頂く際に、省エネルギーについて求められたことがきっかけで、現在のアジア学院の建物の多くが様々な対策を施されている。

建物の特徴（コイノニア・教室棟）

1.フェアトレード床材（世界初使用）

わかちあいプロジェクト松木傑先生のご紹介により、フェアトレードとFSC（Forest Stewardship Council®）の両方の認証を受けた床材を世界で最初に使用。*Forest Stewardship Council®は、「環境的に適切で社会的便益を満し、経済的に発展可能な世界の森林経営を推進」する森林資材に適用される認証制度。

2.太陽熱床暖房システム

食堂と教室棟の床は、太陽熱床暖房システムで暖められます。

太陽熱で暖められた不凍液が床の下に張り巡らされたパイプを通して、床をほんのりと暖めます。このシステムの経費は経産省の「再生エネルギー熱利用加速化支援対策事業」によって半額補助されています。

3.太陽光発電

主に天井のファンを回すためのエネルギーを発電するための太陽光パネルを設置。

4.ナチュラル・エコ・クーラー

夏、食堂の隅に建つ太いパイプから食堂内の温かい空気を取り込まれ、それが常時15度ほどに保たれている床下を通して冷やされ、ファンに持ち上げられ天井近くの穴から冷たい空気を出し部屋を冷やします。

5.玄関の壁面

旧本館からスリランカの女性画家ナリニ・ジャヤスリさんの描いた絵を旧本館の思い出として設置しました。

6.黒羽刑務所製作の家具

新たに導入した家具類は、ほとんど黒羽刑務所に依頼しました。黒羽刑務所では矯正活動として木工の政策、販売をしています。その他、地域の木材を建材として使用。

7.自然照明

屋根から光を取り込む特殊な採光照明を昼でも暗い廊下など3箇所に設置しました。

- 持続可能エネルギー主体の発電企業からの電力購入は、今後検討する。設置については、予算も全く目途がなく、無理とを感じる。
- LED化については設備入替時に順次実施中。省エネ、節電は具体的取組は不十分（学生への節電は紙程度）

- 教会施設の長寿命化のためと教会内省エネのための外断熱を兼ねた壁補修を実施した。また、太陽光パネルを教会上部に設置出来ないか検討したが、構造的に困難であったため断念した。
- とりあえず、電球は交換時にすべてLED化することとした
- 電球が切れた場合、LED球に取り替える。
- 新園舎を建築するときは、すべてLEDにすること。
- 太陽光発電について検討したが予算が足らず実現しなかった。無理してでもやっておけばよかったと後悔している。
- 節電や自然・再生エネルギーの議論の前に、建て替えの時に第一候補でオール電化を提案されることが多いような気がします。そのほうが安全であるとか、導入とランニングの費用が安くできるとか、さまざまなメリットを言われることが多いかと思います(都市ガスのガス管が古くから使われている市街地などでは、地震でガスが止まると復旧に時間がかかる、間取りの関係でキッチンの位置が奥まっていると熱かこもって熱い、などの理由でお勧めされることが多いような気がします)。オール電化と自然再生エネルギーの活用がセットで話し合われたらいいのですが、費用と工期に限りがある場合、なかなか難しいものがあります。実際に建て替えを経験して、保育園など大きな施設を抱える教会で建て替えたら、オール電化にする方が「余計な」費用が抑えられるような仕組みになっているような気がします(牧師館をオール電化にしなかったために、この費用が発生したのでは?と考えられる請求があったので。確認しても、どこでもこの費用は請求されます、との回答があったのですが、いまいच्छりきいていません。)
- 太陽光発電設備の設置を検討した
- 講演会の開催、機関紙で取り上げる、日常的な話題にのぼることが増えた
- NHK EV 特集やNHKスペシャル福島原発事故関連の録画DVDの貸出し
- 関電から大阪ガスに変えた。
- 勉強会に参加
- 質問の主旨とはズレると思われますが、・毎主日、放射能汚染にさらされる人びとを覚えて代祷を捧げている。・毎年「3月11日」の期間は「忘れまい!」との主旨のポスターを地域向けに掲示している。
- LED化は実行に移った
- 沖縄に赴任してすぐ、県議会議員や県の主だった方々に太陽エネルギーの活用を訴えたが、当時(今も)は政府が原発による比重を重要視していたため、補助金が得られないとの返事が多かった。たぶん今も変わらないでしょう。
- LED化はしている。原発立地場所ということもあり、原発事故等の場合の対策が園に要求されて来るが、そもそも逃げることもすら困難なので、私たちにとっての持続可能という意味は、町全体の人々が安心して生きていける環境を整えるということを意味しています。そのための意識付けと話題化から始めています。

【Q8】「原発のない世界を求める国際協議会」開催に向けてあなたが期待する事をお書きください。

- 自分たちが少しがまんすれば、生かせるいのち、守ることのできるいのちがあることを発信していきたい。
- 福島第一原子力発電所爆発事故を風化させない取組を期待いたします。
- 子孫のためには原発廃止が must と思うので、原発の代替エネルギー源を早急に確定し、計画性をもって（含むタイムスケジュール）取り組んで欲しい。
- 「教会」内にとどまらず、日本社会全体への発信度を高めたい。
- 原発避難地域からの避難者は、原発で働く人と重なる場合があります。教条的な原発反対ではなく、具体的な聖公会の活動による出会いからの発信を基に提言、行動願います。
- 「原発のない世界を求める」ことが、実際に利用可能で持続可能な代替エネルギーについてや、これまでの消費社会とは異なる新たな生活様式や価値観の提案やヴィジョンを指し示すことにつながればと思います。
- 子どもの未来を考える責務のある私たちです。常日頃から節電をはじめ環境保護について、私たちができること、子どもたちに伝えるべきことを考えています。“聖公会”が組織として指標を示してくれると幸いです。
- 原発の行き着先は福島での事故が人間の営みを根底から奪うことになった現実を直視。改めて人が生きる心の豊かさに何が大切であったかを原発事故は明確に答えを出してくれた。人はパンのみに生きることは出来ないとつくづく思います。
- 原発の廃止を強く求めるとともに持続可能エネルギー利用を積極的に取り組む。
- 原発による放射性廃棄物が処理できないにも拘らず、原発を継続することは、未来に対して無責任極まりないものと思います。原発そのものの危険性ととも、このことを、経済的な側面も含めてとらえ、決して人類に寄与するものではないことを明らかにしていってほしいと考えます。
- 1. 原発の即時停止 代替エネルギー開発の本格化
2. 核エネルギーへの副産物及び原発による放射線物質の国際的研究と処理方法
3. 市民生活の有り方の提言とそれに伴う産業構造の見直し
- 「地球温暖化」と「より快適な生活」のために、今後益々電気の需要は増えると思います。そのことと原発依存が結びつく側面を考える時、自分たちの足元を見つめるライフスタイルのあり方が一つの大切なテーマになると思います。
- オフグリッドに向けた教会の実践的な行動をすること
- 問題・課題を多く抱える原発の新設、維持をしようとする意図はどこにあるのか解明してほしい。 具体的生活スタイルの提案があると良い。
- 原発のない世界を求め続けていくこと。（アンケートや署名） ひとりの力では弱いので組織として訴えていく。
- エネルギーとは何か、私たちが適切に用いるとはどういうことかをもっと考え、議論する必要がある。
- 電力は必要不可欠なものであるため、ただ単に「原発反対」ではなく、それに替わる具体的かつ実現可能な案を対案として示していただきたい。
- 教会が率先して再生可能エネルギーへの取り組みをするように教会などの建築に補助金を出して欲しい。
- 当学院も 3.11 の際に福島原発事故の影響を受けました。以降、地域の人々と共に現在も放射能問題に取り組んでいます。聖公会の皆さまにも、原発問題、放射能問題についての取り組みを積極的に継続されることを願っております。

- ◆福島県では東日本大震災による原子力発電所事故により被災した経緯があり、原子力災害の脅威を身近な出来事として捉えております。（▶人命尊重、人々の平和という視点を持ち、原子力発電に依存することのない社会を構築すべきであることを訴え続けること）
- ◆エネルギー争奪戦と言われるように、自国の利益のためにエネルギーを奪い合う状況が続いています。（▶自国の利益のために他国を犠牲にし、ひいては戦争の火種となりかねない。平和な世界づくりを訴え続けること）
- ◆2018年夏は電力不足が懸念されていましたが、太陽光発電システムの電力供給により深刻な状況には陥りませんでした。（▶本来あるべき方向性を共有し、人々の意識改革を促進していくこと）
- ◆次世代の人類、人々が暮らす地球環境を保全することは現代社会に生きる私たちの責務です。（▶地球環境保全に係る啓蒙活動を継続的に実施していくこと）
- 現在稼働している原発は59基中の7基。一方で省エネルギー化、持続可能なエネルギーの利用は常識となっているが、これらは地球温暖化対策といった側面が大きい。まずは、協議会開催の目的、必要性を明示し、論点を明確にした上での開催とし、結果として統一したビジョンを打ち出し、具体的な活動内容を提示してくれることを期待する。
- 是非、全体として結果をまとめて、広く発表してほしい。具体的に実行できる案と予算などを明らかにしてほしい。どうすればいいかわからず、実行していない場合も多いと思う。国の持続可能エネルギーへの積極的取り組みを期待する。
- 回答ではありませんが、今まで考える事もなかったもので、討議する機会を与えて下さった事に感謝します。再生可能エネルギーの重要性は痛感しておりますので、小さな教会や信徒レベルでも、できる策があれば教えて下さい。
- ・福島の実現に目を向ける事。人類の力で問題解決できない事（核）を後世に残さない。
・脱原発を果たした、ドイツの例。考え方を広く発信。
- 原発ばかりでなく地球環境の悪化をもっと具体的に把握し、会社などではなく身近な所から対処するための話し合い、小さな行動から始めて欲しい
- 具体的な成果が得られること
- 原発の恐ろしさや、将来に残す負の財産についてどんどん発信して行って欲しい。
- 原発のない世界の実現に向けて、依って立つべき聖書の箇所を挙げつつ、聖公会が果たすべき役割や取り組みについて話し合い、具体化すること。
- 教会、施設の屋根に太陽光発電や、風力発電を備える。災害対応にもなる。
- 日本聖公会の組織全体としての取り組みが少しずつであっても個人レベルにまで響き、原発のない世界へみなが向かって行けるように具体的な提案を各教会、施設、そして個人一人一人へ出せるような協議会となることを願っています。
- 原発のない世界実現に向けての具体的な行動指針の発信
- ①福島の事故以来莫大なお金を使っている排水処理、解体・廃棄作業を勘案するとそれを国民に負担させることに反対。すなわち事故を100%起こさない原発は作れないのなら新たに作るのをやめなさい。
②稼働後に出る核廃棄物の処理問題を解決できないうちは作らない、稼働もさせない。
- 原発がなくなり、再生可能エネルギーが安定的に供給されるようになるための具体策が検討され、実行へとつながっていくことを期待します。
- *「原発のない世界を求めて」発信し活動する場合、聖公会の諸教会やキリスト教会のみでなく、他宗教、市民グループ、自治体など、一般社会とのより広い連携・協働を十分に視野に入れること。
*同時に、キリスト教信仰に裏付けられた発信や活動を展開するため、聖書にその裏付けを求め、キリスト者としてその理解を、世界観・人間観として共有できるように努めること。

*老若男女など、できる限り、さまざまに立場の異なった顔ぶれの参加が得られること。また、「原発のない世界を求めない」立場の主張やその理由に耳を傾ける機会を設けること。

*協議会の一つの実りとして、参加者自身による「声明」を文書に表わし、公表すること。その声明文において、可能な限り、具体的な提言を掲げること。その提言の中に、自分たちの日常生活や、教会・教区・日本聖公会の日常的な運営と活動に関わるものが含まれること。（以上、個人としての回答）

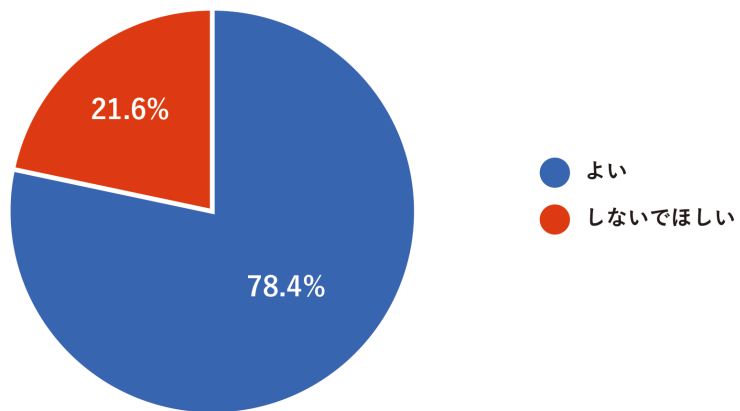
- 日本の国の原発再稼働がなされないよう、国内外にアピールをする
- 主日礼拝で指定日を設け、当日の信施等の協議会への開催献金で信徒の意識付けを図れたらと思う。
- 現在の気候変動は緊急の課題となっている。原発がなくても気候変動を抑えることができることをわかりやすくアピールしてほしい。
- 災害発生時に教会が地域への支援・貢献としてオフグリッド拠点となるための具体的な方法の提案や事例紹介などの情報提供
- 東日本大震災による福島第一原発事故という世界的な事故を起こしてなお、トップセールスで原発を海外に売り歩く日本政府の姿には失望しか感じません。日本の事故を目の当たりにしてドイツなど脱原発に舵を切る国もある中、日本の未来によりいっそうの不安を感じる次第です。脱原発を叫ぶ団体は数多くありますが、それぞれが別々で行動を起こしている気がします。同じ考えを持つ者同士を集結できるような国際協議会となることを期待しております。
- 未来の「いのち」にかかわる課題であり、教区・教会で話し合えるわかりやすい提言やミッションステートメントが表明されることを期待します。
- 原発事故被害者の実情を知り（話を聞き）苦難の中にある人々とともに考えていくこと
- 再生エネルギーについて話し合ったことがないので指導を受けたいと考える。とくに教会建て替えを考えている中で、アドバイスがほしい。
- 水力発電（揚水型発電）所を増やす。太陽光発電の設置を勧める。
- 一回限りで話題を作り、メディアに取り上げてもらう事で終わるのではなく、その協議会をベースに各教会、各個人が出来ることを提案し、そのフォローを10年間は最低情報提供してゆくような地道な継続活動が大切。結果を各教会、各家庭、個人レベル迄落として情報を共有し、継続していくことが必要。10年くらいはとりくむつもりで、かつ、教会組織内にこもらずに社会へどう発信してゆくかも考えて。
- 一刻も早く、この地上から原発が一掃されますよう、貴協議会、並びに聖公会が世界を牽引し、主導的に原発廃止へと導いていって頂きたいです。先ず、日本聖公会が日本政府へ積極的に働き掛け、世論の渦を引き起こして頂きたいと思います。私達も出来ることがあれば喜んで協力を致します。宜しくお願い致します。
- ・1996年の日本聖公会の戦責告白を前提にしたい。・その上で、「スリーマイル」「チェルノブイリ」「ヒロシマ、ナガサキ」「フクシマ」「核兵器」を視野に入れたい。・核保有国の聖公会代表を必ず招聘したい。・他宗派、他宗者にも参加を呼びかけたい。・日本聖公会全教会、信徒に開催費用のカンパを呼びかけたい。
- ①確実に反原発の運動につながる協議会出会うほしい。②幌延の核廃棄物貯蔵施設建設問題にも目を向けてほしい。
- （あくまで個人的な意見ですが）発展途上国、特にアフリカでの再生可能エネルギー利用の促進、アフリカの各聖公会との協力。各教会、信徒レベルでの再生可能エネルギー利用を促進するプログラムの検討。まず、教会として実際に取り組んでいることを示すことも大切。
- 福島での原発事故の処理の現実が報道されない現状の中で、多くの作業員が危険な作業に従事していると思います。その現実を伝えることは大きな役割の一つになるのではないのでしょうか。

- とにかく世界中から原発をなくすこと。代替案として、それぞれの立地条件の中で検討し、実現に向けて国連を中心に協力体制を整えていくことを夢見ています。
- 持続可能社会の実現のために、教会がそのモデルとして、オフグリッド教会を実現するために知恵を出し合う。また世界の聖公会が持続可能教会としての教会の在り方を模索し実践できるように協力して取り組む
- 原発立地場所にある教会として、原発の危険性を肌で感じています。教会が、持続可能社会の実現のために、個々の教会が果たすべき役割について分かち合えたらと思います。また世界の聖公会が、地域教会の苦悩を知り、持続可能社会に向けて、オフグリッド教会実現を実行できるよう協力し合えたらと思います。
- 乳幼児と共に過ごす施設は、原発の危険性を一番シビアに認識しなければいけません。福井では関心が低いのが現状です。教会施設として、積極的にオフグリッド化し、持続可能社会の実現に向けて、世界中の教会、施設と協力していければと思います。
- 世界規模の問題であり、原発立地地域の問題なので、全世界の教会、施設がオフグリッド化し、持続可能社会の実現を目指す中で、乳幼児の命を守ってほしい。そのために協力し合いたい。

ご回答の公表について

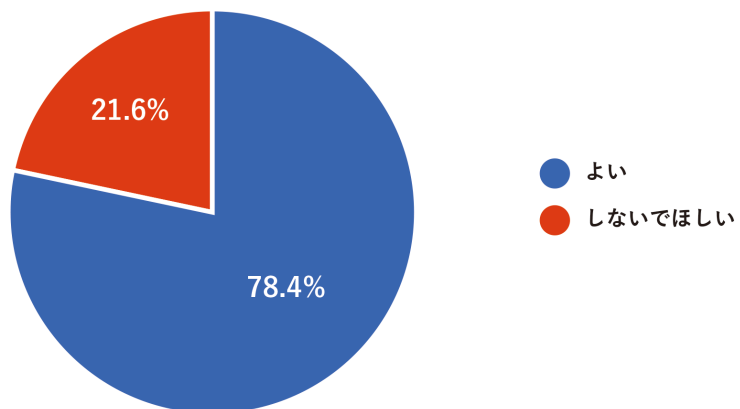
【教会、施設名を公開しても】

97 件の回答



【Q7、8について、支障の無い範囲で公表しても】

97 件の回答



<アンケートにご協力くださった教会・施設> *順不同

旭川聖マルコ教会／日本聖公会管区事務所／社会福祉法人新生会 榛名憩の園／公益財団法人 聖バルナバ病院／日本聖公会中部教区センター／深川愛の園／土浦聖バルナバ教会／ウイリアムス神学館／京都聖マリア教会／大津聖マリア教会／社会福祉法人聖救主福祉会／釧路聖パウロ教会／聖ニコラス天使園／小名浜聖テモテ教会／松本聖十字教会／聖十字幼稚園／横浜山手聖公会／函館聖ヨハネ教会／松戸聖パウロ教会／聖光幼稚園／社会福祉法人 神愛会／日本聖公会 長崎聖三一教会／川越基督教会／聖アンデレ保育園／立教新座中高聖パウロ礼拝堂／学校法人 アジア学院／学校法人 聖公会神学院／佐世保復活教会／郡山聖ペテロ聖パウロ教会／千葉復活教会／甲府聖オーガスチン教会／直方キリスト教会／小倉インマヌエル教会／徳島聖テモテ教会／社会福祉法人鈴鹿聖十字会／聖マーガレット教会／聖パトリック教会／小金井聖公会／新生礼拝堂／深川聖三一教会／聖光教会／八戸聖ルカ教会／釜石神愛教会／仙台基督教会／（宗）東豊中聖ミカエル教会／神田キリスト教会／学校法人立教学院／聖ルシヤ教会／名古屋ステパノ教会／名古屋学生青年センター／四日市聖アンデレ教会／桑名エピファニー教会／米子聖ニコラス教会／葛飾茨十字教会／京都教区／帯広聖公会／川口基督教会／大阪聖ヨハネ教会／大阪教区／鳥取聖ルカ教会／高槻聖マリヤ教会／石橋聖トマス教会／尼崎聖ステパノ教会／愛知聖ルカ教会／鴨川聖フランシス教会／プール学院短期大学／名古屋聖ヨハネ教会／旭川聖マルコ教会／東京聖テモテ教会／新宮聖公会／名護聖ヨハネ教会／福井聖三一教会／敦賀キリスト教会／幼保連携型認定子ども園聖三一幼稚園（福井）／清明保育園

上記のほか、非公表希望の方にもご協力いただきました。ありがとうございました。

<お礼の言葉と総評>

アンケートにご協力頂き感謝いたします。ご回答いただきました中で、施設整備に伴うLED化等の節電が多く見られました。また電力会社の切り替えなど、経済的側面からの事例もいくつかありました。脱原発と自然エネルギー化を広く、強く発信することの重要性も提案されていました。そしてまた具体的な取り組みの提案が期待されていることを感じる事が出来ました。

持続可能な自然エネルギーの自給教会、施設の重要性について更に学び、具体的な取り組みを目指していく必要性を感じるアンケート結果となったように思います。2019年5月に開催される「原発のない世界を求める国際協議会」開催に当たり、このアンケート結果が生かせるように準備したいと思います。

(2019年1月 原発のない世界を求める国際協議会 実行委員会記)

記事掲載

協議会の関連記事が、いろいろな機関紙やウェブサイトに掲載されました。転載します。

Anglican Communion News Service

『アングリカン・コミュニオン・ニュースサービス』（原文は英語） <https://www.anglicannews.org/>

1. 「原発のない世界を求めて」

日本聖公会がキャンペーンを開始

投稿：2018年12月3日 16:50



地震と津波によって破損した東京電力福島第一原子力発電所の様子。2011年3月16日に撮影された写真にはっきりと写っている。（写真：デジタル・グローブ）

日本聖公会では、仙台市において、原発のない世界を求める国際協議会を開くための準備を進めています。2011年3月に起こった大地震と津波によって、福島県沿岸に位置する原発で複数の爆発が起きました。その結果、広い範囲に放射性物質をまき散らし、人々の健康や環境に深刻な影響を与えています。この国際協議会では、爆発によって被害を受けた地域のフィールド・トリップも計画しています。

この協議会には、日本聖公会の全ての教区からの代表者が参加する予定です。また日本と繋がり深い韓国、フィリピン、台湾、アメリカ、カナダ、イギリスの各聖公会からも代表者が派遣される予定です。「私たちは皆、原発の危険や脅威からの解放のために、原発のない世界に向けて、希望の内に一つにされています」と、協議会実行委員会からの招待状に書かれています。

また招待状には、「巨大地震と津波が日本を襲い、東日本の多くの町や村が破壊された2011年3月の

あの日から既に8年経ちました」とあり、「多くの地域で今日も復興作業が続けられ、故郷に戻り、生活を取り戻すことが出来るようになった人もいます」と続きます。

また、「原発のない世界を求める国際協議会実行委員会は、世界中から寄せられた多くの支援と協力に心から感謝いたします。日本聖公会は、これまで被災者への支援を続けると共に、被災者と共に歩んで参りました」とあります。

2012年の日本聖公会の総会において、「原発のない世界を求めて — 原子力発電に対する日本聖公会の立場 —」が採択されました。これは、原子力エネルギーの利用をやめようという日本聖公会からの呼びかけです。以後、日本聖公会は、この目的を達成するために様々な活動に取り組んできました。来年の国際協議会はその一つです。2019年の国際協議会の開催は、2018年の日本聖公会総会で決議されています。

この国際協議会は、2019年5月27日から31日の開催を予定しています。参加者は東京電力福島第一原子力発電所の周辺地域を訪問します。また、ドイツの脱原発政策への転換に大きく貢献した、ミランダ シュラース教授の基調講演を聞く予定です。協議会期間中には、それぞれの考え方や専門知識を分かち合い、共に“原発のない世界をつくるための具体的な行動”について協議します。

招待状にはこうあります。「私たちは、この協議会が、原発のない世界に向けた大きなうねりとなって、国内外の境界を超えて取り組み続ける機会となることを、心から願っています。」

2. 福島原子力発電所事故の被災者の声が 原発の廃止を強く呼びかける

投稿：2019年6月6日 14:57

〔ACNS レイチェル ファーマー記〕先週、仙台で開かれた原発のない世界を求める国際協議会で、日本の教役者たちから福島原発事故によって困難を強いられている被災者の現状報告を受け、分かち合いました。協議会の声明は来月発表される予定です。そこには、原発のない世界を求めることへの強い呼びかけと、この動きに教会が参与することへの期待が込められています。

日本聖公会はこの協議会に先立って、2012年の総会で「原発のない世界を求める日本聖公会の立場」を決議しました。この決議においても、脱原発と核のない世界の実現に向けた動きへの協働を呼びかけています。

2011年に発生した東日本大震災の巨大地震と津波によって、沿岸にあった東京電力福島第一原子力発電所が複数回にわたり爆発を起こしました。これは、広範囲に及ぶ放射能汚染と、人々の健康や自然環境に深刻な影響をもたらしました。協議会実行委員長長の長谷川清純司祭は次のように述べています。「原子力発電所のメルトダウンにより、人々と自然環境に及ぼされた被害は未だに終息していません。この人為的な災害は、これから先何年も計り知れない数の人々を苦しめることになるでしょう。今でも故郷に帰りたいのに、帰ることができない多くの人があります。自分の家に帰るのをあきらめた人々もいます。」

仙台キリスト教連合被災者支援ネットワーク・東北ヘルプ代表の川上直哉牧師は、自身の教会も津波の被害にあいながらも、どのように困難な状況にある被災者を支援しているのか、また、支援活動に携わる仲間の牧師たちから聞いたことを次のように話しました。「私はこれまで、被災者から700回以上の相談を受ける中、180人以上の母親と約20人の父親に会いました。その人々は皆2011年以降、自分の子どもの健康に異変を感じています。これ迄、273人以上の子どもの甲状腺がんが見つかっていて、母親の多くは大きな不安を抱えています。」

「状況が悪化すればするほど、牧師たちは自らの、大切な使命や役割を自覚します。この使命や役割とは、ここに起きている出来事の証人となることです。…『声なき被災者』と共に福島に生き続ける牧師たちは、傷を負い、弱い姿でありながらも復活をされたイエスの御体としての教会を、私たちに示してくれています。…苦難の中にある者たちは、常に無言で苦難に耐え、ほとんどの人は、その声なき声に決して耳を傾けることをしません。」

協議会には、日本国内全教区の主教、教役者と信徒の代表、米国聖公会、USPG、フィリピン聖公会、台湾聖公会、大韓聖公会のそれぞれの代表と、他教派からの参加者が集まりました。世界で活躍する専門家も参加し、被災地で働く聖職者たちは、被災者の個々の現状を報告しました。

協議会の初めに、ドイツのミュンヘン工科大学教授、ミランダシュラーズ氏が、東北教区主教座聖堂・仙台基督教会で、基調講演を行いました。シュラーズ氏は、ドイツの安全なエネルギー供給のための倫理委員会の委員を務め、脱原発を決めたドイツのエネルギー政策の転換に大きな貢献をした方です。台湾聖公会のデビッド ジュン シン ライ主教、大韓聖公会のアモス キム ギソク司祭からも発題がありました。

協議の合間をぬって、海外からの参加者は事故を起こした原発周辺の地域への訪問ツアーを行いました。訪問先の一つとなった福島県新地町の磯山聖ヨハネ教会と「祈りの家」では、震災で犠牲となった全ての人のために祈りを捧げました。

日本聖公会渉外主事のポール トルハースト司祭は、今回訪れた現地の実情を、自分の住んでいる地域の人にも伝えたいと述べました。そして、「周囲のゴーストタウンを見ながら原発の近くを通り過ぎている時に、ガイガーカウンターの数値がどんどん上がっていきました。この様子は、決して忘れることはありません」、「それはまるで、時を忘れた町のようなでした。ここに住んでいる人にとって原発事故

はまだ終わっていません。日本の他の地域では、時間はどんどん進んでいるにもかかわらず…」と話しました。

日本聖公会のヨハネ相澤牧人司祭は、発題の中で原発の廃止を強く訴えました。「宗教的な立場からも、倫理の問題からも、私たちはこれ以上原発の稼働を許すことは出来ません。原発はいのちの危険をもたらす廃棄物をつくり出しますが、今の私たちは、それを安全に処理する方法を持っていません。」

「このようないのちの危険をもたらす廃棄物に含まれる放射性物質が、元のウラン鉱物に含まれていた時と同じレベルに戻るまでには、少なくとも100,000年がかかります。これだけで、原発を止め

るのに十分な理由となります。より多くのお金を生み出し、利益を得たいという考えから、原発の再稼働が主張されています。」

「私は原子力発電の研究者でも技術者でもありません。私は専門家ではありません。それでも、クリスチャンとして、そして人として生きるために、これは絶対に無視できない問題だと思っています。」

間もなく発表される協議会からの声明は、再生可能なエネルギーへの転換を目指すことへの呼びかけと、原発のない世界へ向けた取り組みのためのネットワークの構築、そして教会がその役割を果たすための提言が盛り込まれる予定です。

3. 国際協議会から

原子力エネルギーの開発を終わらせるための取り組みが世界の教会に呼びかけられる

投稿：2019年7月26日 11:21



日本の廃炉計画を検証するため、2013年4月17日、IAEAの2名の専門家が、東京電力福島第一原子力発電所の4号機の上で行われている復旧作業を視察した。(写真：Greg Webb / IAEA)

[ACNS：レイチェル・ファーマー記] 今週、日本聖公会が開催した国際協議会の声明が発表されました。声明では、脱原発と自然エネルギーへの転換に向けた取り組みに参加するよう、世界の教会に呼びかけています。

この、5月に開かれた国際協議会で決議された声明には、次のように述べられています。「2011年3月11日の東日本大震災によって発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故や、それに次ぐ惨事は、それまでの安全神話を完全に打ち砕き、原子力発電は極めて危険なものであるということを、私たちに気づかせてくれました。」

また、「原発が稼働する限り、危険な放射性廃棄物をつくり続ける。そして、原発は現代の技術によってすぐにでも核兵器への転用が可能であり、私たちが平和に生きる権利を脅かすリスクを持っている」と訴えます。

更に、「これ以上原子力発電に依存する経済優先の社会を続けるべきではなく、そのためには節電・省エネに取り組むことはもちろん、再生可能エネルギーへの政策転換を行い、新たな道を歩むべきでしょう。…また、原発事故は一度起きると取り返しがつかず、他のどんなエネルギー源よりも危険であることを私たちは再認識しました。8年経った今

も深刻な影響が残る一方、時が経つにつれ被災された人々の痛みや苦難を忘れがちな私たちがいます。」と続きます。

日本聖公会は、原発に関する問題に対して明確な立場を示してきました。それが、2019年5月、仙台基督教会および茂庭荘（仙台市）を会場とした、「原発のない世界を求める国際協議会」の開催へとつながったのです。協議会には、英国、米国、韓国、台湾、フィリピンからの信徒と聖職者の代表、日本キリスト教協議会平和・核問題委員会、そして日本聖公会正義と平和委員会のメンバーを含む68名が集まりました。

米国聖公会、アジア太平洋パートナーシップの担当者で、この協議会の参加者の一人、ブルース ウッドコック司祭は、「事故現場から50km以上にも渡る広大な土地の汚染、また、それを上回る被害は、放射性物質を保管、輸送、そして使用している場所どこにでも起こり得ることで、この現実、人々を目覚めさせるための警告であり、また、警告とされなければなりません。巨大な袋に詰められた放射性汚染土が辺り一帯に積まれた地域 - なぜなら、この汚染土を今後30年以上の間保管する場所が他にないからです - を一目見れば、原発事故がこのような広大な大地に汚染の危機をもたらすものであると、十分理解できます」と述べ、また、「日本聖公会は原発のない世界と核兵器のない世界を求めることをアングリカン コミュニオン全体に呼びかけ、環境を守るためのネットワークを構築、強化、充実するという非常に重要な使命を果たしている」とも述べています。

そして、「教会に集う私たちは、再生可能なエネルギー資源の利用を促進し、世界的に増大するエネルギー供給のニーズに応えるため、より安全なエネルギー開発を支持するよう求められています」と続け、「私たちの祈りと行動によって、神によって創られた全ての被造物を守ることができますように」と結んでいます。

声明は「フクシマの出来事の証人」として様々な形での支援を求めています。また、証言者であり続けると共に、東日本大震災で起こったことの全てを証しし続けること、原発事故がひとたび起これば、

取り返しのつかない事態になることを認識し続けることを求めています。

また、日本聖公会の中に「福島週間」の創設を求めています。“あの出来事”が語ることを聴き、学び、いのちを尊び、平和に生きる社会の実現へと歩み続けるためです。

更に、国内および国際的な非核化の強化を求めています。更に、原発をこれ以上増やしてはならないと訴え、各教区に自然エネルギーによるモデル教会をつくること、その転換への融資制度を提案しています。

この声明は、「被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること」というアングリカン コミュニオンの宣教の5指標の第5の使命にそうものです。

声明の中には、「原発のない世界を求める国際協議会」のために会議中捧げられた以下の特祷も、入れられました。

「神よ、

わたしたちはあなたによって委ねられた被造物を治めよとのご命令に背き、自然資源を乱用し、原発事故によって自然と人びとの生活を破壊しています。どうか、これらの罪をお赦しください。わたしたちがあなたの愛に立ち帰り、苦難の中にある人びとをおぼえ、あらゆるいのちと共生出来る原発のない世界を造りだす知恵と力をお与えください。」

2019年5月27日から31日まで、仙台市にて、日本聖公会主催「原発のない世界を求める国際協議会」が開催された。各教区主教をはじめとする全国からの日本聖公会関係者をはじめ、韓国、台湾、米国、フィリピンそして英国の聖公会関係者、さらに日本キリスト教協議会から68名が集まり熱心な議論を交わした。会議に先立って福島県原発被災地現場をめぐるフィールドスタデイが行われ、会議の中ほどでは津波被災地の視察が行われた。基調講演はドイツの「脱核」政策策定・施行に直接関わっているミュンヘン工科大学教授ミランダ・シュラーズさんが担当し、その講演会は公開で行われ、会場には日本基督教団や日本バプテスト連盟、保守バプテスト連盟などの諸教会に所属するキリスト者が集まった。筆者も公開講演会から参加し、二日目の講演を担当した。以下、その会議の報告をまとめる。

1. 教会の協議会：三回の礼拝

キリスト者の会議であることの特徴と強みは、祈りと礼拝に支えられているということにある。その開会礼拝はルカ福音書11章によって導かれた。すなわち「求めなさい。そうすれば、与えられる」とのことばを聞き、この会をはじめられた。「被ばく地フクシマ」の現場に立って、幾度となく期待を裏切られ、何度も絶望へといざなう声を聞いてきた私に、この開会礼拝は力を与えた。二回持たれた聖餐式は、主にあって私たちが一つの家族であることを体感させた。毎回祈られる「特祷」は、私たちの悔悟と神の赦しの力動へ参加者を招き入れた。この協議会は、確かに、教会の協議会であった。

2. 講演と発題と説教

ミランダ教授の講演は堪能な日本語行われた。巷間充分に語られる通り、ドイツは「脱原発」の実践を進めている。また、再生可能エネルギーの技術革新は目覚ましく、人類は原発の代替手段を手にしたが、私たちの国はなお「脱原発」へと進み出すことができない。ミランダ教授の講演は、そのことを再確認させるものであった。それに加え、筆者は新しい知見を得た。ドイツは、確かに「脱原発」へ進みながら、しかし、「脱石炭」が進まないこと。つまり、気候変動を引き起こし続けるシステムを止めることに苦労していること。また、フランスから「原発由来」の電気を輸入していると報道されるが、それは偏っていること。つまり、近年はフランスこそが「再エネ由来」の電気をドイツから輸入していること。この二つがミランダ教授から語られた。「ステレオタイプ」の議論から脱するために、とても大切な示唆が与えられた。

筆者の講演は、「核の平和利用」を巡る議論となっていた。もし「平和」を「シャローム」と理解するならば、「核の平和利用」という言葉は成立しない。なぜなら「シャローム」とは「幸せが完全であること」を意味するからだ——このことを、世界教会協議会(WCC)が2014年7月に声明「核から解放された世界へ」を採択するまでの歩みを辿りつつ、筆者は語った。WCCの声明は原発被災者の「声にならない声」に聴くことを求めている。原発事故の被災者、放射性廃棄物を引き受けさせられる未来世代、そしてウラン鉱山から廃棄物処理までの各段階で被ばくする労働者。そうした人々の犠牲を必要とする原発。そこには、「偽物の平和」しかない。その「核の平和」の欺瞞を一つ一つの現場で目撃し、その犠牲者と苦しみを共にしつつ証言者となること。今、福島県内の教会は、そのことを神からの使命と信じ、取り組んでいる。そこに希望がある。それが筆者の講演であった。

二つの講演を受けて、台湾・韓国・横浜から、三つの発題が行われた。また、朝夕の祈禱会においてフィリピンと韓国と大阪から説教者が立てられた。また閉会礼拝では沖縄から説教者が立てられた。その一つ一つが、原発事故被災者と自らの現場との連帯を語るものであった。教会が持つ愛のつながりが、そこに確かに立ち現れていた。

3. 声明の採択、そして次の展開へ

二度の分科会を経て、会議の声明文が検討され採択された。その議論は真摯で、あるいは危険なものでもあった。起草委員会は夜を徹して議論を重ねた。全国・全世界のキリスト者に伝わる言葉、そして、原子力災害の被害者に寄り添う言葉が求められた。形だけ取り繕った言葉では、到底採択されない。そして最終日、私たちの足りなさをも用いられる神の御業が、そこに現れた。出席者は確かにそれを見た。

世界教会協議会の会議に参加した中で、先輩諸氏から厳しく聞かされたことを思い出す。国際会議が成功するかどうかを判定する二つの指標があるという。まず第一に、その会議に「出来事」が起こるかどうかが。不思議な出来事が人為を超えて起こるとき、その会議は「成功」とされる。そして第二に、その会議が次につながるかどうか。どんなに大きな会議であっても「打ち上げ花火」となって終わると、それは「失敗」とされる。今回の国際協議会において、確かに「出来事」が起こった。それを「次」につなげることができるかどうか。参加した私たち一人ひとりが、できることを探し始めている。韓国からの参加者は次の具体的な会議の可能性を語っていた。「原発のない世界を求める国際協議会」は、その次へとつながる運動を開始したのだと思う。

(日本基督教団石巻栄光教会 牧師 東北ヘルプ 事務局長 川上直哉
「キリスト新聞」寄稿原稿)



11教区の主教と司祭と信徒、及び韓国、台湾、フィリピン、英国、米国からの参加者など総勢68人で開催された。

イサク 寒河江研司

オープニングは仙台基督教会でドイツから「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」委員を務められたミランダ・シュラーズさんを迎えて基調講演が一般公開された。「エネルギー政策の大転換したドイツから」と題しての講演では、チェルノブイリの事故を受けてなお、原発利用を延長するとしていたドイツが高度技術力で安全と思われていた日本での事故を受け、原発の閉鎖と2022年までに原子力エネルギーを廃止すると決定した。原発はどんな優れた技術を持ってしても安全を守れない事は明確になった。次世代に何万年も危険であり続ける放射性廃棄物を残し続けてはならない。原子力より安全なエネルギー源がある。これらの事が背景にあったと語

られた。その後会場を移し、東北へルプ事務局長で日本キリスト教団の川上直哉牧師の講演が持たれた。多くの子供にガンが見つかっていいる事実、原発事故との因果関係はないとされる事。現実を見る、忘れないう事が私達教会にできる事だと、放射能に苦しむ被害者の声を聞き続ける事の大切さを

語られた。また、台湾聖公会の頼榮信主教、大韓聖公会の金基錫司祭が、台湾、韓国でも日本の原発事故を受けて、脱原発を決定したり、それに向けての運動が再燃し、これからも残り続ける放射性廃棄物の保管、処理や再生可能エネルギーの移行への課題を語られた。そして、相澤牧人司祭が、命よ

りも経済成長を優先するのではなく命を尊ぶ事が優先される大切さを語り続けていく事が私達の生きる道であると発題された。これらを受けてグループシンエアリングで意見を分かち合い、一同での会議で活発な意見交換がなされ、声明が採択された。

この大きな事故を受けても、
(次頁4段目につづく)

(前頁よりつづく)
なお原発を再稼働させていく政策、命の尊厳を脅かす行為をこれ以上見過ごしつつける事はできないのではないだろ

うか。
(さがえ けんじ・大阪聖三一教会信徒)

「原発のない世界を 求める国際協議会」に 参加して

2019年5月28日(火)から31日(金)まで、宮城県・仙台市において「原発のない世界を求める国際協議会」が開催された。2012年の定期総会において日本聖公会は「原発のない世界を求めて」原子力発電に対する日本聖公会の立場「」を採択し、その翌年から、原発との関わりは様々な形で発展してきた。今回の協議会はその一連の繋がりの中で実現したものである。協議会には世界各国から68名が集った。初日の基調講演では、ドイツで「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」の委員を務められた、ミュンヘン工科大学のミランダ・シュラーズ先生のご講演をお聞きした。ご講演では、この委員会がドイツ政府にエネルギー転換への対策を提言したことや、その影響について、丁寧に紹介された。日本における



再生可能エネルギーの可能性については、実際に倫理委員会のメンバーであった先生ご自身の言葉で語られた故に、説得力があった。2日目の講演は、日本基督教団牧師の川上直哉かみなおや牧師のお話をお聞きした。ご講演の中では一貫したテーマがあったと思う。それは「平和のための核」とは何か？であった。先生は、2014年に世界教会協議会で採択された声明「核から解放された世界へ」の誕生のプロセスについて言及しつつ、「核兵器」と「原子力発電所」が

表裏一体であると表明したその声明の意義を語られた。原発の犠牲者の声を聴くことに徹底した先生の純真な訴えからは、改めて、我々に平和利用のための核など無いことを突きつけたように思う。併せて発題が行われた。発題者は台湾からライ・ロンシン主教、韓国からキム・ギソク司祭、そして日本からは相澤あいざわ牧人司祭の各師であった。各国が抱える課題について共有しながら、フクシマの出来事が草の根の運動として、各国の原発に対する態度に影響を与えた

ことがシェアされた。またこれらの講演と発題を受けてグループシェアリングが行われた。それぞれのグループは「現実」に向き合い、いま、ここから私たちに「何が」できるのかについて議論したと思う。協議会の詳述は紙面の制約上できないので、最後に一番心に残ったことを綴って、まとめとさせて頂きたい。最終日の前日、希望者だ

けで被災地巡りをした。荒浜地区にある小学校へ行くこと、ガイドの方が震災当時の実際の映像や展示の説明をして下さった。ある模型の紹介にこうあった。「失われた街」。それは、時間の経過とともに忘れ去られていく当時の記憶を留めておくために、模型を作ることによって「記憶の街」としての姿を表現した模型に記された言葉だ。私たちは、声明を採択した。それは、「失われた街」を、「記憶の街」として忘れさせない作業であったように思う。失われた街にある犠牲者の声を聴くことの大切さは、川上牧師から教えられた。そして、言葉化不可能な「ことば」があることも協議会を通して実感させられた。その声を聴くために、私たちは原発については、はっきり否を唱えなければならぬ。今できることを、今を生きる我々が、未だ生まれていない、未来を生きるいのちへと繋いでいくために。

(岡谷聖バルナバ教会
アンデレ 川島かわしま創士そうし記)

原発のない世界を求める

国際協議会参加報告

報告者 帯広聖公会信徒 ダニエル 尾 関 敏 明

五月二十八日(火) (三一日)

(金)の四日間、日本聖公会「原発のない世界を求める国際協議会」が東北、仙台市近郊の茂庭荘にて開催されました。北海道教区からは、植松主教、大町司祭、丸山悦子姉、およびスタッフとして尾関が参加しました。基調講演には、ドイツ・ミュンヘン工科大学教授の、ミランダ・シユラーズさんが招かれました。

講演者として、日本基督教団石巻栄光教会の川上直哉牧師、海外からの発題者として、台湾聖公会・頼榮信主教、大韓聖公会・金基錫司祭、日本聖公会・相澤牧人司祭が招かれました。その他、米国、韓国、フィリピン、英国など海外聖公会関係者が参加する国際色豊かな協議会でした。日本聖公会は各教区の主教、司祭、信徒の三名の参加が要請され、それに管区、正義と平和委員会、管区主事、など一七名のスタッフ、スチュワードなど総勢六八名の参加により

開催されました。

二〇一一年三月一日の東日本大震災に引き続き発生した東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故の収束ままならない東北で、このような国際会議が開催される事は大きな意義があると思います。ミランダ・シユラーズさんは、福島原発の事故の発生直後、メルケル首相とドイツ連邦が召集した「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」(通称、脱原発倫理委員会)の一七人の委員の一人です。ドイツは、優れた技術を持つ日本でこのような過酷事故が発生したことには強い衝撃を受け、「原発は技術や政治・経済の問題ではなく、倫理の問題である」として、現役政治家や専門技術者ではなくキリスト教会代表や知識人による協議を行ったのでした。そして四か月後には、二〇二二年に原発をゼロにするという政策を決定したのです。その決定の背景には、事故直後に

行われた、一〇〇万人を越える国民の脱原発を要求する抗議行動がありました。ドイツにはこのような問題を徹底的に議論するという文化があるそうです。そしてこの大きな政策転換を行う根拠として、①原子力発電所の安全性は高くても、事故を完全に防ぐ事は出来ない。②事故になった場合はほかのどんなエネルギー源よりも危険である。③次の世代に廃棄物処理などを残すのは倫理的問題がある。④原子力より安全なエネルギー源がある。⑤地球温暖化問題もあるので化石燃料を使うことは解決策ではない。⑥再生可能エネルギー普及とエネルギー政策で原子力を段階的にゼロにしていくことは将来の経済のためにも大きなチャンスになる。などを上げています。

は、日本での脱原発の運動は中々進まないが、「立ち止まってはならない」、「核兵器」と「原子力発電」は「一つのコインの表と裏」、福島にはまだ多くの苦悩と悲惨の中に取られ残された方々がいる。私たちはこの惨状をたらす原発に抵抗する者であり続けたいと述べられた。日本聖公会の相澤司祭は「いのちを守るために、原発のない世界を求めて」と題する発題をされました。その中で紹介された「あとから来る者のために」という詩が心に強く残っています。

あとからくる者のために 苦勞するのだ
我慢するのだ 田を耕し 種を用意しておくのだ
あとからくる者のために 山を 川を 海を きれいにしておくのだ
ああ あとからくる者のために
みんなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとが続いてくるあの可愛い者たちのために
未来を受け継ぐ者たちのために
みなそれぞれ自分でできる何かをしてゆくのだ

坂村真民 「詩集・詩国」より
参加者はこれらの講演のあと、二つのグループ討議を行い、その思いは声明として纏められました。その中で、今後、取り組むべき七つの項目が提言されました。各教区はこれらをもとにそれぞれの方法で取り組むことになりました。(この声明は今後、常議員会の審議を経て公開される予定)



原発のない世界を求める国際協議会参加者

「原発のない世界を求める国際協議会」に参加して

仙台聖フランシス教会 ヘレナ 佐藤 由美子



澤牧人司祭

「ぼくは原発事故の次の日に福島を離れてから、一度も自分の家を見ていません。2年生の3月に急にぼくは東京の子になりました。……楽しんで……」

の年に大人だった私たち、私はどう謝ればいいのか、どうしたらいいのか。今回の国際協議会に参加して最も忘れ難く、あの出来事を決して忘れない、できることを見つけてやっていくのだ、と決意させてくれたのはこの少年の言葉。



去る5月28日から31日、仙台で「原発のない世界を求める国際協議会」が開催されました。参加者はドイツ、台湾、韓国、フィリピン、英国、米国からと日本からは11教区の聖職・信徒。総勢68名。28日午後「『原発はやめよう』の最初の声が次第に忘れられ記憶が失われている今、もう一度思い出し考えよう」との開会の祈りの後、基調講演が一般公

が紹介した11歳の少年の作文のこのフレーズが忘れられない。「お父さんは一人で福島の家に残ってがんばったけど、心と体がこわれて……」こんな目に合わせてしまった。そ

開で行われました。仙台基督教会の礼拝堂が人で埋まりました。そのあと茂庭荘に移り、祈りと学び、話し合い、中身の濃い時間を与えられました。そして最終日には「原発のない世界を求める国際協議会声

明文」が熱心な話し合いの末に採択されました。

基調講演者はミランダ・シュラーズ氏。環境政策などの研究者で、東京電力福島第一原発事故直後設置されたドイツ政府「原発問題倫理委員会」委員として政府がエネルギー政策を大転換する道筋を作ったお一人でした。日本語でわかりやすくその話をしてくださいました。

ドイツは難しいことが起こると委員会を立ち上げるそうです。メルケル首相が原発稼働延長は間違いかもと考え立ち上げた諮問委員会に、倫理委員会と命名したのは、これが次世代に問題を残すという倫理面の問題を内包しているから。キリスト教聖職者が消費者問題研究者らとともに委員を務め原子力関係者は入っていない、という話には政治のなんとこの彼我の差異かと驚きました。ドイツが選

日本でもやればできる、ということではないでしょうか。毎日朝夕の祈り、発題があり、シェアリングが行われました。惨禍の中でどう祈るか神学的に問いつつ支援を続ける「東北ヘルプ」、全原発を廃炉にしていく台湾、脱原発を求める運動がある韓国などの発題がありました。ミランダ氏が語ったこと「事故が起こったとき政治は姿勢を決めなければならぬ。危機があつて窓が開く」を各国が真剣に行っていることを知りました。

フィリピンのパチャオ主教は放射能からの避難の想像を絶する苦しみを思いヤコブ書を引いて、聖書は苦難の中にあつても「主への信頼に立つよう勧めている」「祈りは強い」と話しました。どんな場合でも祈ることがキリスト者のしるし、しかし単に膝をついてではなく再発しないように「手」でも祈っていきましょう。温かい連帯の言葉でした。

延べ14グループでのシェアリングも熱のこもったものでした。私は内心ドキドキで参加したのです。でもシェアリングの場には私の小さな意見

も危険、10年以内に自然エネルギーを増やし脱原発することでした。それが現に進められているということですが。

「死ぬまで私の復興はありません」という方がいます。またあの少年の言葉。その重さを思い、祈る、手でも祈る（具体的に学び考え行動する）ようでありたいと、参加させて

いただいたことを感謝しつつ決意しています。

日本だけに留まる問題ではない
ということを意識させられた。

沖縄教区の上原榮正主教から
は、沖縄には原発はないが原子
力艦などがやってくるとおっ
しゃっていった。原発が建つてい
ないから安心というわけではな
い。原子力艦は日本のいたるところに寄港しており、その移動
範囲は広い。新たな角度から原
子力、核問題を考えさせられた。

シェアリングの中で皆から出
されていた言葉が、「痛みを遺産
として渡さない」というもので
あった。今を生きる私たちだけ
が安心安全であればよいのでは
なく、未来に対しても今の私た
ちは責任を負っているのではあ
り、未来に向けた歩みをしてい
かなければならない。

3日目の夕方と最終日に声明
について全体での討議が行われ
た。参加者の中から声明の起草
委員が選ばれ、そこで作成され
た声明原案を基に様々な立場か
らの意見が出された。福島にい



頼榮信主教

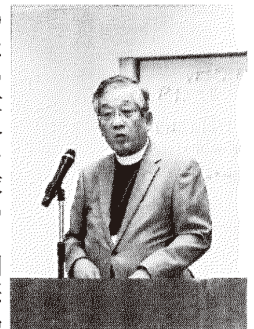
る人々の立場、沖縄の経験を経
た上での立場など、それぞれの
地域が持つ立場や背景などが語
られ、活発な議論がなされた。
時間内で声明文はまとまらず、
最終的な形は実行委員に一任さ
れたが、様々な立場を踏まえた
上での声明が出されることにな
るのであろう。

最終日、聖餐式をもって協議
会は終了した。この協議会は序
章に過ぎず、私たちはまだまだ
スタートラインにさえ立ててい
ないのではないかと思う。各教
会で自分たちに何が出来るかを
考え、行動する時初めてスター
トラインに立ち、そこから行動
していくことであろう。進み始
める。神がよいものとして創ら
れたこの世界を守り、次の世代
に負債を残さないようにするた
めに私たち教会が出来ることは
何かを考え、行動していくこと
が求められている。

(執事 柳原 健之)
やなぎはら たけゆき

「原発のない世界を求める 国際協議会」に参加して

原子力発電所という言葉を聞
くとセンシティブな話題が始ま
ると感じていた。5月28日から
31日まで仙台で開かれた「原発



相澤牧人司祭

のない世界を求める国際協議
会」に参加させていただいた。

参加者は日本各地からだけでな
く台湾・韓国からもやって来ら
れており、原発の今後について
自国だけの問題ではなく地球規
模で考える協議会であった。特に
基調講演としてあったドイツの
大学からお招きしたミランダ・
シュラーズさんのお話は、私自
身の「原子力」への知識を総入
れ替えさせるものであった。

2011年福島第一原子力発
電所での事故が起きて間もなく
ドイツは2022年までに原発
を段階的に廃止することを決
め、さらに再生可能エネルギー
へと移行していくために石炭の
利用を減らしていくことも決め
た。原発への安全性という問題
だけでなく地球温暖化という問
題にまで挑んだのだ。ではなぜ
日本はできないのか。原発を部
分的に停止させているものの、
未だ9基は稼働中である。

ミランダ先生は広島、長崎、

そして福島と経験したはずの日
本がなぜ原発を使うのかとおっ
しゃっていた。悲しいことにそ
こには核兵器の問題が含まれ
ているのではないかという見解
があった。さらに再生可能エネ
ルギーの普及は電力の不安定さ
やコストなどの問題により困難
であると思っていたが、ドイツ

の実践例から段階的な導入によ
り可能であるということが分
かった。また原発の電気効率
が良いというのも原料のウランを
再処理する際の問題などを含め
ると決してコストが低いとも言
えなかった。私は様々な原発神話
を信じ、のうのうと暮らしていた
ことに恥ずかしささえ感じた。

さて冒頭で原発の話題に触れ
ることがセンシティブであると



シェアリングの様子

感じると言ったが、それがなぜ
かを期間中考えていた。結論は
おそらく思考から逃げていたの
だろう。原発をなくすときに考
えなければならぬことは、代
替電力や資源についてだけでな
く、政治的な側面も同時に考え
なければならぬ。今私たちが
置かれているのは複雑化してし
まった社会であり、その分問題
の解決の糸口も簡単に見つから
ないようになってしまった。その中で思
考することを諦めてしまうと無
関心という状態に陥ってしまう。

現在の青年は、少なくとも私
の周りの青年はあまり注意を払
えていないように感じる。最近
よく持続可能性という言葉を目
にする。生物資源を長く維持で
きるように条件を満たすことだ
と言われるが、これは資源だけ
でなく地球に住む動物として長
く心地よく住み続け、次の世代
に受け継いでいくことだと思
う。そのためには全ての世代が、
特に若い世代が、次世代を意識
していくことが必要である。自
己本位の生き方は無関心につな
がり負の連鎖を起こしてしま
う。渦中にいる身として思考を
続けたい。

(彦根聖愛教会 菊地 玄)

原発のない世界を求める国際協議会

5月28日(火)〜31日(金)

「原発のない世界を求める国際協議会」が仙台で開催された。参加国は日本、アメリカ、イギリス、ドイツ、フィリピン、台湾、韓国。日本からは11教区の信徒・聖職・主教、日本キリスト教協議会平和・核問題委員会、管区



正義と平和委員会、管区事務所各主事、実行委員、スチュワードを含めて総勢68名の参加であった。

1日目、仙台基督教会を会場にドイツのミュンヘン工科大学教授であるミランダ・シュラーズさんを招いて、「エネルギー政策の大転換をしたドイツから」という題で基調講演が行われた。ミランダさんはドイツの政府によって設置された「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」の委員を務められ、その豊かな経験を基に原発について、またエネルギー政策について語ってくださった。

基調講演後は会場を茂庭荘へ移し、開会礼拝を持って協議会が始められた。開会礼拝の説教は植松誠主教で、「原発の被害は現在進行形である」と述べておられたが、次の日からの講演を聞いていく中でその現状を再確認させられた。

2日目午前、日本基督教団石巻栄光教会の牧師で、東北へルプの事務局長でもある川上直哉

牧師から「十字架ヲ通ツテ光へく苦難の中からの声・惨禍の中での祈り」と題して講演が行われ、福島現在の様子や震災直後の様子などを語って下さった。話の中で、私の中でもまた皆の中にも特に心に残ったのは原発直後を過ごされた母親の詩である。原発事故に近い場所子どもたちと過ごさねばならず、その中で苦悩や不安が『福島でつらいこと』と題して詠われてる(『福島でつらいこと』で検索すると読むことが出来ます)。この母親の苦悩を想像する時、事故によってこのような悲しい思いをする人を作り出す可能性のある原発が本当に必要なのかを考えさせられる。



ミランダ・シュラーズ氏

午後からは3人の発題を聞くことが出来た。始めは台湾の賴榮信主教から。台湾での原発を導入した経緯、そして反原発へ向かう経緯を話して下さった。台湾が反原発へ方針転換したのはやはり福島での原発事故がきっかけであり、地形的な特質や、沿岸への原子炉配置など日本との類似点が多く、同じような事故が発生しうる可能性があるためであった。安心安全なエネルギー源を見つけることが課題となっている。

韓国の金基錫司祭からは、「さばらば、核発電所く核なき世界を求めるキリスト者の連帯」との題で発題をしてくださった。韓国の「反核」から「脱核」までの歴史、また核をなくすためにキリスト者が連帯して活動されていることについて話して下さった。

日本からは相澤牧人司祭が「いのちを守るために、原発のない世界を求めて」という題で発題された。お話の中で、仏教詩人である坂村真民の『あとから来る者のために』という詩が紹介されたが、これが多くの人の胸を打っていた。著作権の問題などにより声明に入らない



川上直哉牧師

ことになったが、今の私たちに必要なことを教えてくれている詩である(『坂村真民』「あとから」で検索すると出てくるのでぜひともご一読していただきたい)。

講演、発題を聞いた後、グループに分かれてシェアリングが行われた。私のグループにはNCの平和・核問題委員会委員長である内藤慎吾牧師がおられた。内藤牧師は、「核兵器と原発はコインの裏表の関係である」ということや、「原発は反いのち」であるということ、特に記憶に残っている一言は、「原発事故の際に放出した放射性物質は成層圏まで登り、今現在もそこに滞留し、いつかは雨などとともにまた地上に降り注ぐ」というものだった。しかも、それは世界中のいどこに降るかは分からないのである。原発事故は決して事故直後で終わった問題ではなく現在進行形であり、また、

「原発のない世界を求める国際協議会」に参加して… 「あの時」は終わった過去ではない

東京教区災害対応デスク 松村 豊

5月28日から31日、日本聖公会「原発のない世界を求める国際協議会」が仙台市で開催されました。

この協議会は、2018年の日本聖公会第64（定期）総会の決議を受け開かれたもので、各教区から主教・司祭・信徒の3名、そして海外5ヶ国の聖公会、日本キリスト教協議会などから総勢68名が集まりました。東京教区からは高橋宏幸教区主教と私が参加しました。



活かされました。事故を起こした当事国である日本の政策取り組みが、ドイツのそれと何故こんなにも違うのか、聴衆の茫然とした思いに会場は包まれました。

近郊の宿泊地に移動し翌日には、福島県の母親ら200名以上との700回におよぶ面談の声と実状について、日本キリスト教団牧師の講演がありました。

師は東北ヘルプ事務局長として2011年から継続して今も仙台や福島で被災者に寄り添っています。この瞬間にも原発事故による健康への不安、家族や地域の分断など様々な苦しみや悲しみのうちにある人々が居ることに胸が締め付けられました。次いで海外の聖公会から台湾の原発廃止や韓国の脱核運動の現状が報告され、そして日本聖公会から「いのち」を守るため原発のない世界を求めることについて

て発題がありました。

会期中、参加者は熱心に聴き入るだけでなく、2度のグループシェアや時間を延長しての全体討議で活発な意見を交わしました。また、津波被災地を巡るバスの中、食事や入浴の際、交流会や部屋で過ごす時にも真剣に語り合う様子が見られました。

原発・放射能の問題は、あまりにも膨大な事柄です。私たちが日本聖公会は8年前の「あの時」以来、「いっしょに歩こうプロジェクト」はじめ管区をあげて一連の取り組みを続けてきています。しかし、私たちに来るような如何なる取り組みも役に立たないのではないかと、私たちはそのような無力感を感じたり、時の経過を理由にこの問題への関心を失いがちです。

今回のように原発・放射能問題を巡って、一堂に介して語り合える機会などそうあることではありません。この協議会は外部の識者や他教派牧師の知見や体験を聴き考えるものでした。日本聖公会が環太平洋の国々と連帯して徐々にはあっても具体的な行動指針を見出し、いこうとする意義あるステップであったと私は思います。日程を調整して参加した方々の、原発・放射能問題に対する思いや関わり

り方などは一人ひとり違うと思います。しかし、皆さんに共通していたのは原発の持つ問題性を認識し、難しくても克服し変わっていかねければならないという気持ちでした。

原発事故への国の対処は、いまだに手探り段階にしかなく何ひとつ終わっていません。しかし、私たちは終わったかのように、あるいは何も無かったかのように「あの時」を忘れようとしません。

現実には「あの時」は決して終わった過去の出来事ではありません。原発事故は「あの時」からずっと今も、さまざまなる形で被害者を苦しめています。更に先々将来に亘って私たちの子も孫も、命あるもの全てを巻き込み続けます。



科学による人災的な側面を浮き彫りにし、日本社会の矛盾や傲慢さを露呈した出来事でした。自分たちがこれまで当たり前のように享受してきた生活を同じように求め続けるよいか、多くの人が利便や経済効率を追い続ける自分の姿を見つめ直すことや価値観を変える必要に気づかされた、それが「あの時」です。近々、協議会の声明が世界に向け発信されると伺っています。協議会の内容が各教区に伝えられ、原発・放射能問題についての話し合いの新たなスタートになるものと思います。電力エネルギーを多く消費する首都圏にあって、原発施設の無い教区として特に考えていかねばならないと思います。

冒頭の基調講演では、ミューンヘン工科大学教授による「ドイツの脱原発転換プロセス」が語られました。この講演は一般に公開され、会場の仙台基督教会には約150人が集まりました。協議会メンバーだけでなく少しでも多くの人に問題を知って貰う機会として

「あの時」心に留めた思いを忘れないこと、祈ること、聖職・信徒が意見を交わしながら、この問題と誠実に向き合うことが信仰生活を送る私たち一人ひとりの責任であることとを、協議会に参加して改めて感じさせられました。

自然災害大国と云われる日本にあって、東日本大震災は、被災地の自然による災害の激甚さに加え、日本全土におよぶ原発・

原発のない世界を実現させませんか？

私が遣わされている三原教区とナザレ幼稚園の間には那覇の中心へ抜けられる道が通っています。毎朝、通勤時間帯になると道路の幼稚園側のほうが渋滞になります。そして必ずタバコの吸い殻をポイ捨てしていく人達がいまほほとんど毎朝、幼稚園の前にタバコの吸い殻が投げ捨てられている状態になるわけです。それを私達職員が拾っているわけですが、もしもそれを職員も大人も拾わない、見なかったことにする、そして自分で自分で拾って帰りなさい」と言っていたとすれば、皆さんはどのように思われるでしょうか。(〴〵もしも〴〵の話です。沖縄教区の園では決してそのようなことはありません。)

5月28日〜31日まで仙台で行われた「原発のない世界を求め国際協議会」に参加させていただきました。日本聖公会の全教区、韓国、台湾、フィリピン、アメリカ、英国、国内の他教派からおよそ70名が集まって原発事故のこと、地球環境の問題、被災者支援

日本聖公会「原発のない世界を求め国際協議会」報告



のこと、他の国の原発の状況など、たくさんの方を聞き、そして参加者みんなまで話合ってきました。

クリーンエネルギーと言われている海水は、冷却のために海水を使っており、排出された水は海水の温度を上げていて、地球温暖化対策に原発

は効果が無いどころか、逆に悪影響を与えているわけです。そこに加えて震災で爆発事故が起り、多くの命が傷つき、今もなお困難の中にいる方がいらつしやいます。この世界を上手に管理するように神様から言われた私達は、このことをどのように考えていけば良いでしょうか。

全国各地で異常気象が起こっています。これは「異常」なのか、あるいは地球温暖化されている現代では「これが普通」になってしまおうのでしょうか。原発事故は「たまたま」起こったのであり、「もう決して起こらない」と、何をもちて言えるのでしょうか。そして今現在も出し続けている「核のゴミ」。タバコの吸い殻は燃やせるゴミとして処理できますが、燃やすことはおろか近づくことすらできない「核のゴミ」は大人だけでなく子や孫、そしてもつともつ後の世代にまで「触れることのできない問題」として残っていきます。植松誠首座主教さんが開会の際に言われていた「仕方がないでは済まされぬ」ということをよく認識したいものです。私達の住む沖縄には「原子力発電所」はありませんが、これまで放射能漏れを起こしたままの「原子力潜水艦」が入港してきました。また放射性物質を搭載していたヘリが大学に墜落したこともあります。私達にとつても決して遠くのこと、他人事ではありません。

この協議会の中で私が希望を持てたことは、脱原発の政策に切り替えたドイツの大学で教鞭をとられているミランダ氏の講演でした。ドイツでは環境問題を考える「緑の党」という政党があり、最初は小さな政党、すなわち支持者も少数だったのですが、今では大きくなり多くの支持を得て脱原発の政策に切り替えることができたようです。日本では「私が何を言っても無駄」という雰囲気がありますが、決してそんなことはありません。「私」が変われば日本が、世界が変わるのです。犠牲になられた人達のために、今も苦しんでいる人達のために、これから大人になっていく人達のために、「私に何ができるのか」を一緒に考えてみませんか。神様が創られた命輝く世界を守るために。

司祭 イサク 岩佐直人

原発のない世界を求める
国際協議会 報告

司祭 サムエル 北澤 洋
五月二八日(火) 〓三二日(金)まで、仙台基督教会と茂庭荘を会場に「原発のない世界を求める国際協議会」が開催されました。十一教区の信徒と教区主教を含む聖職、イギリス、アメリカ、韓国、台湾、フィリピン、および日本国内の諸団体から総勢六八人が一堂に会しました。



基調講演では、ドイツからミランダ・シュラーズ氏(ミュンヘン工科大学教授)を招き、「エネルギー政策の大転換をしたドイツから」をテーマにお話を伺いました。ドイツでは、どのような経緯でエネルギー政策が原発重視から「再生可能エネルギー」推進へと移行したのか、シュラーズ氏は順を追って説明されました。福島第一原発事故

の衝撃が大きなきっかけでしたが、ドイツではそれ以前にチェルノブイリ原発事故のインパクトがあり、脱原発への機運がありました。原発をやめ火力発電に戻すことも考えられましたが、ドイツでは石炭による火力発電の割合が大きいいため、このことは即、二酸化炭素排出―地球温暖化という別の問題呼び込みます。このためドイツでは、原子力発電・火力発電の割合を徐々に減らしつつ「再生可能エネルギー」による発電の割合を拡大させていくという、慎重な舵取りがなされています。

第二講演では、川上直哉氏(日本基督教団石巻栄光教会牧師、東北ヘルプ事務局長)から「十字架を通って光へ―苦難の中からの声・惨禍の中の祈り」と題するメッセージをお聴きしました。その中で、特に次のような言葉が印象に残りました。「被ばく者に、まず聴くこと―それこそが、原子力の問題を解決したいと願う私たちにとって鍵となる事柄です」、「大惨禍の源にあると目される運命に対して、あるいは摂理に対して、あるいは私たちの神に対して、私たちは、その犠牲者と共に、赦しを与えなければなりません。そうする時、私たちは祈



りを新しく始めることができるでしょう。自分の人生に取り巻く不条理へと燃え上がる怒り。その怒りから解放された時初めて、私たちは「世界に負債ある者」である自分に気づくのです。「私たちは地球と未来に対して罪責ある者となりました。このことを告白しなければなりません」、「犠牲者による罪の告白は、テクノクラシー(テクノロ

ジーの支配)がかぶる『偽物の平和』の化けの皮を剥ぎます。ここに希望があります」、「苦悩と悲惨の中に置かれた人々が無視されている。これが福島の惨状です。この惨状をもたらず現実には、私たちは『証言者』となることで抵抗するのであります」。この他、台湾のライ・ロンシン主教、韓国のキム・ギソク司祭、日本の相澤牧人司祭の発題を受け、二度にわたるグループシェアリングを通し

て、原発のない世界を求めるための学び、話し合いの時間が持たれました。

最後に、話し合われた内容をもとに、「声明」を採択するための全体会議が開かれました。作成された声明案がスクリーンに映し出され、意見交換がされました。原案の最後には、一つの詩が付けられていましたが、私のすぐ隣におられたある東北教区の司祭から、疑義が呈されました。「この詩は、福島の人たちの心に寄り添っていない」。そのような意見でした。はっとなりました。私は、その詩に何の違和感もなく、むしろとてもよい詩だと思っていました。が、現地におられる方の見方・感じ方は違うのです。福島におられる方の現状は、簡単に「詩」で語るようなことが許されないほど切迫しているのです。川上牧師は、「被ばく者に、まず聴くこと―それこそが、原子力の問題を解決したいと願う私たちにとって鍵となる事柄です」とおっしゃいました。本当に痛み・苦しみのただ中にいる人々に寄り添うことの難しさと大切さを、肌で感じた出来事でした。この詩は、最終的に声明案から削除されました。

(鎌倉聖ミカエル教会牧師)

「原発のない世界を求め」

国際協議会「報告」

サムエル 廣瀬 清

東日本大震災から3000日目の2019年5月28日より31日迄4日間、宮城県仙台市で日本聖公会主催「原発のない世界を求め」国際協議会が開催された。昨年日本聖公会定期総会より実行委員会が組織され、11教区の各主教、教役者、信徒の33名が全国から参集し、韓国、台湾、フィリピンの各主教、英国、米国の代表者、管区各主事や実行委員会スタッフを含め総勢68名参加の国際協議会となった。北関東教区からは広田主教、小野寺司祭、私の3名が参加し、スタッフとして管区宣教主事の谷川誠さんが準備段階から参加された。初日午後から東北教区主教座聖堂の仙台基督教会で開催の祈り後、ドイツの脱原発政策に深く関与されたミュンヘン工科大学のミランダ・シュ

ラーズ教授の基調講演「脱原発のドイツに学ぶ」が一般公開で行われた。講演は日本語で行われ英語と韓国語の同時通訳が付いた。その講演ではドイツでは福島原発事故を受け「安全なエネルギー供給のための倫理委員会」を設置し政府に政策提言をし、政府は「原発の閉鎖と2022年までに原子力エネルギーを段階的に廃止する」ことを決定したこと、また再生可能エネルギーへの移行とその現状として石炭の利用を2038年迄に段階的に減少し解消すると決定したことや、高レベル核廃棄物処分場に関する最近の動きと展望が語られた。講演会終了後参加者は協議会場の仙台市郊外の茂庭荘に移動し、越山哲也司祭の司式で開会礼拝が行われ植松誠首座主教が説教された。夕食後には

交流会が行われた。

2日目は小野寺司祭の司式の朝の祈りから開始され、フィリピン聖公会首座主教ジョエル・パチャオ主教のメッセージが語られた。午前中は日本基督教団石巻栄光教会牧師で東北ヘルプ事務局長川上直哉師の「十字架ヲ通ツテ光ヘー苦難の中からの声・惨禍の中の祈り」と題した講演が行われ、川上師自身の先達との深い神学的対話と震災被災者の方々に徹底的に寄り添って来られた証言が語られ、参加者に深い感銘を与えた。午後台湾聖公会頼榮信主教、韓国の聖公会大学校総長金基錫司祭、日本の相澤牧人司祭による発題が行われ、特に相澤司祭の発題「いのちを守るために」原発のない世界を求めて」は後の声明文に繋がる問題提起がなされた。それらを受けて参加者全員が7つのグループに分かれてグループシェアリングを行った。北澤洋司祭司式の夕の祈りでは大韓聖公会議長主教鄭榮澹主教のメッセージが語られた。礼拝後、日本

福音ルーテル稔台教会牧師内藤新吾師より原発反対運動の問題提起があった。夕食後持ち寄りパーティが行われた。

3日目は昇天日の聖餐式が吉田雅人東北教区主教の司式で行われ、磯崎久大阪教区主教が説教された。午前中は前日と別のグループ構成によるシェアリングが行われた。午後は自由時間で希望者は荒浜地区と閉上地区の被災地を巡って被災地の現状を確認した。この間、声明文起草委員会は2回のグループシェアリングの内容を踏まえた声明文の起草に着手し、被災地巡りを終えた参加者と共に全員で声明文の全体討議を行った。ウィルソン・ウォーレン司祭の司式による夕の祈りでは武藤謙一九州教区主教が説教された。夜はフェアウェルパーティが和やかに開催されたが、起草委員は途中から声明文起草作業に戻り深夜迄その作業を行った。

最終日朝、声明文採択の最終討議により今回の国際協議会の声明文が採択され最後に起草委員会に託された。植松誠首座主教司式による閉会聖餐式が行われ、上原榮正沖繩教区主教が説教された。聖餐式後4日間の国際協議会は閉会し参加者一同は解散した。日本聖公会は2012年の第59定期総会決議「原発のない世界を求めて」原子力発電に対する日本聖公会の立場」および同年の日本聖公会宣教協議会「いのち、尊厳かぎりないもの」で原子力発電に対する視点を明確にした。今回の国際協議会はその具現化のために開催された。8年余の時を経て未だに癒えない東日本大震災の傷を負った東北の地で、全国と世界から参集した教役者と信徒の群れが、共に祈り、求め、学び、語り合いつつ「いのちの尊厳を認め、そのいのちを生きるために、原発のない世界を求め」声明文の採択に至る、あたかも「出エジプト記」の「エクソダス」のような「いのちを求め」旅を歩んだことを心に深く刻みみたい。

(下館聖公会)

原発のない世界を求めて

五月二十八日から三十一日まで「原発のない世界を求め国際協議会（日本聖公会主催）」が仙台市で開催され、全国の信徒、各教区主教、聖職と、英国・米国・韓国・台湾・フィリピン各聖公会から総勢68名が集まりました。

基調講演はドイツからミランダ・シユラーズ氏「エネルギー政策の大転換をしたドイツから」、第二講演は川上直哉牧師「十字架ヲ通ツテ光ヘキ苦難の中からの声・惨禍の中の祈り」、また、台湾の賴榮信主教、韓国の金基錫司祭、日本の相澤牧人司祭からの発題を受け、原発のない世界を求めるための学び、語り合いの時を持ちました。

ミランダさんの講演の内容は、ドイツが脱原発の決断をしたいきさつや新しいエネルギーの開発、地球温暖化の問題と多岐におよびました。その中で新しいエネルギーを追い求め続ける事よりも、まずは人間のライフスタイルの転換が必要ではないか？ という呼びかけはとても共感できるものでした。期間中のグループシェアリングの中でも

度々話題にあがった「ライフスタイルの転換」は、教会としても取り組む必要がある。個人が課題としてとらえ、今すぐにでも小さな事からでも実行しなければ地球環境にとって手遅れになるという意見がありました。

私は四年前から宮崎県の霧島連山の麓で暮らしています。お風呂は五右衛門風呂で薪を使ってお湯を沸かしています。薪で湧かしたお湯は柔らかく、お風呂から出た後も身体の芯まで温まっています。でもポカポカです。その残り火は七輪に移して、鉄鍋を使ってどんな料理もします。目の前で料理しながら食べるので毎日美味しい食事をし、豊かな時間を過ごしています。薪や七輪を使い自然の中からエネルギーをいただくことで、日々感謝しながら生活を送っています。「昔の暮らし」不便」と思われがちですが、これが「新しい暮らし」のモデルになるのではと「ライフスタイルの転換」を実践しています。

（久留米聖公会 山本尚生）

原発のない 世界を求め 国際協議会



あの東日本大震災からちょうど3000日目になる5月28日から31日まで、仙台基督教会と茂庭荘を会場に

「原発のない世界を求め国際協議会」が開催され、II

教区の信徒・聖職・主教と英国、米国、韓国、台湾、フィリピン各聖公会からの参加者、日本キリスト協議会平和・核問題委員会、管区正義と平和委員会、管区事務所各主事、実行委員・スタッフを合わせて68名が参加されました。神戸教区からは小林主教、瀬山会治司祭と私が参加させていただきました。

ドイツから招かれたミランダ・シエラーズ氏による基調講演「エネルギー政策の大転

換をしたドイツから」では、ドイツが脱原発を進める背景には核拡散に対する恐怖、平和が脅かされることへの懸念があり、そのため再生可能エネルギーへの転換が進められているということをお聞きしました。そして第2講演では、日本基督教団牧師で「東北ヘルプ」という被災支援活動を続けておられる川上直哉氏が「十字架ヲ通ツテ光ヘク苦難の中からの声・惨禍の中の祈り」と題し、日頃の活動から見た被災地の現状を話されました。さらに台湾から頼主教、韓国から金司祭、日本から相澤司祭がそれぞれ発題され、それを受けて2回にわたるグループシェアリングを行ない、その後全体会で活発な話し合い、意見交換の時間をもち、声明を採択しました。

広島・長崎と原爆の恐ろしさはよくわかってはいるつもりでも、核の平和的利用とされている裏表であるとの認識が不足していたこと、原発は事故がひとたび起こった時に、その影響が自国だけでなく世界的規模になること、次世代にまでも影響する放射性廃棄物の問題、福島でも200人を超える子どもたちに甲状腺がん

が見つかったこと等、この3日間で知った重要な情報が私たちにいかにも知らされていないかと恐ろしくなりました。一刻も早く原発のない社会を目指していかなければならないと思っています。

（難波美智子・
神戸昇天教会信徒）

特集・原発のない世界を求める国際協議会を開催 《速報》

東日本大震災による福島原発事故から8年を経たが、その後の重い現実をふまえて、日本聖公会は「原発のない世界を求める国際協議会」をこの5月28日～31日にわたり仙台市で開催した。容易ではない現状を打開し、未来への道筋を討議した協議会の模様を速報する――。



写真・協議会最終日の礼拝
(協議会記録係撮影)

《総合報告》

「いのちの尊さを確認し、そのいのちを生きるために」

実行委員長 司祭 フランシス 長谷川清純

「原発のない世界を求める国際協議会特祷」
すべてのいのちの源である神よ、わたしたちはあなたによって委ねられた被造物を治めよとのご命令に背き、自然資源を乱用し、原発事故によって自然と人びとの生活を破壊しています。どうか、これらの罪をお赦してください。わたしたちがあなたの愛に立ち帰り、苦難の中にある人びとをおぼえ、あらゆるいのちと共生できる原発のない世界を造り出す知恵と力をお与ください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

去る5月28日から31日まで、東北教区主教座聖堂(仙台基督教会)と仙台市太白区にあるホテル茂庭荘を会場に「原発のない世界を求める

国際協議会」を、参加者68名で開催しました。本会には、全国の各教区からは主教と教役者と信徒1名ずつの計3名、その他、日本聖公会の正義と平和委員会、管区の各主事と、海外から大韓聖公会、台湾聖公会、フィリピン聖公会、米国聖公会、USPG(英国)、さらに日本キリスト教協議会(NCC)平和・核問題委員会からの参加者を得ました。講演者はドイツからと日本基督教団から、その他スタッフは実行委員に加えて英語と韓国語の通訳者、東北教区の青年スチュワード2名、管区事務所職員でした。

大会では、2講演と3発題が行なわれました。東北教区主教座聖堂(仙台基督教会)で一般公開されたミランダ・シュラーズさん(ミュンヘン工

科大学教授)の基調講演には、日本聖公会、日本基督教団、日本バプテスト連盟、保守バプテスト連盟などの牧師と信徒ら、また女川原発問題に取り組む数団体の関係者らなど約150名が集い、その関心の大きさが分かり、勇気づけられました。

流暢な日本語によるミランダさんの講演で、確実に脱原発へと政策転換したドイツ政府の長期的ビジョンによる、人間としての倫理が優先される点、高レベル廃棄物処分に解決策がない点、また国民一人一人が率先して自然エネルギーを選択していく重要性等を再確認しました。他方、ドイツが石炭への依存からは中々抜けられない



ミランダ教授(ミュンヘン工科大学教授)の基調講演

でいる現状は、初めて知りました。

NPO法人被災者支援ネットワーク・東北ヘルプ事務局長で日本基督教団石巻栄光教会牧師・川

上直哉さんの講演は、宮城県、福島県という現場にいるからこそその迫力ある内容でした。犠牲の上に立つ原発、非常に悲痛な福島のお母さんの詩、犠牲者・被災者たちを隠蔽しさらなる葬りに向かう体制と「水俣」の再来、東日本大震災10年が一つの分岐点、等々が私たちに明らかにされました。最後に、被災者と共に居て、抜け出せないような苦悩の中でも証言者となるのだ、それが福島県内の教会の使命と信じて取り組んでいる、その現実がそこにある希望だ、と強調されたところに心がうごめきました。

2つの講演を受けて後、台湾聖公会・^{ライロイン}頼榮信^{キムギツク}主教、大韓聖公会・金基錫司祭、日本聖公会・相澤牧人司祭の3人から発題が行なわれました。台湾と韓国における脱原発の取り組みと、いのちの視点で原発と向き合う考察が語られました。

その後、参加者全員が2回にわたってグループシェアリングをして、そこで出された様々な声を反映させて、声明文起草委員会が声明文を草案して、全体会で検討されました。全体会は日を跨ぎ2回行なわれましたが、起草委員会はフェアウエルパーティーをそこそこに引き上げ、警備員に部屋を追い出されるまで夜を徹して議論を重ねました。声明文が放射能に苦しむ被災者の心に寄り添ったものであるかどうかで、全体会は苦悩しつつ劇的に採択しました。フクシマの出来事の



協議会の最終日に

「証言者」であり続けていくために、呼びかける声明です。

採択された声明文は近いうちに公表されま
す。また報告書は整い次第発行する予定で
す。声明文は意を尽くし足りないものがあるか
もしれません。それでもそこに描かれたいくつ
かの提言に沿って、今後の具体的な歩みが期
待されます。また今回の国際協議会が海外聖
公会へと広がり、次へとつながるようにも
期待されます。私たちは、世界の聖公会と
他教派と共に脱原発、反核に取り組みを進
め、再生可能エネルギーの世界へシフトし
たいのです。

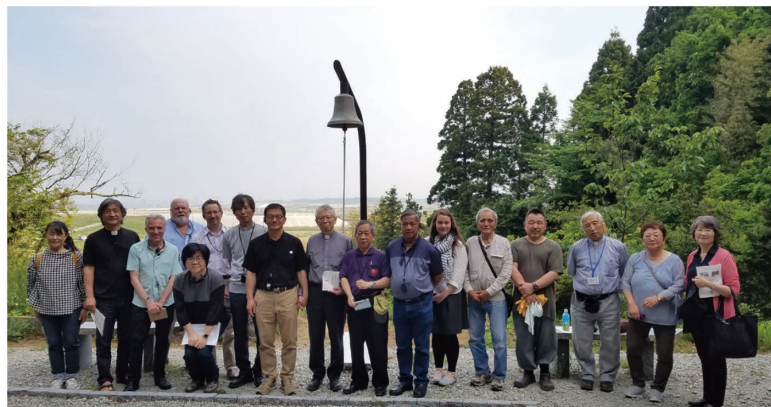
3泊4日間の会期は、礼拝によって力強く支
えられていました。開会礼拝から始まって、
毎日の朝・夕の礼拝と昇天日聖餐式と閉会
聖餐式までのすべての礼拝が、私たちを導
きました。それぞれでの説教は、植松誠首
座主教、ジョエル・パチャオ首座主教（フ
ィリピン聖公会）、ユ・ナクジュン議長主
教（大韓聖公会）、磯晴久主教（大阪教
区）、武藤謙一主教（九州教区）そして上
原榮正主教（沖縄教区、国際協議会会長）
がなさいました。それぞれに神の民の愛と
一致、被災者との共生を説きました。礼拝
は希望の源となっているのを実感しました。
国籍、文化、生活環境、立場、意見、言
語の違いを超えてなお一つになるのを可
能にするのは、聖霊によります。祈りは個
々人の思いを超えて、神のいのちを生んで
いきます。特に実行委員会で作成した（冒
頭に掲載した）特祷は、会期中の参加者の
精神を強力にリードしました。「懺悔して
立ち帰り」原発のない世界を指向する祈
りが、そこに集った人々の心を常に支配
していたのです。

大会に先立つ前日の5月27日は、海外
からの皆さんが、マイクロバスで東京電
力福島第一原子力

発電所のある大熊町や浪江町等現地をフ
ィールドトリップしました。一行はほとん
ど外に出られず、車窓から放射性汚染物
を回収した大きな入れ物＝フレコンバ
ックの山積みと、突然一斉に鳴り出した
ガイガーカウンターのはっきりとした音と
、その場所で働く作業員のマスクもせず
無防備な姿に衝撃を受けたと、私に感想を
語ってくれました。その公にされない、
隠されている、伝えられていない現実
は、もっともっと日本の皆さんは知るべ
きであり、伝えるべきである、と叱責に
近い訴え掛けがなされました。それは
、私たちのしなければならない使命の一
つです。

一行は福島県新地町で磯山聖ヨハネ教
会と「祈りの庭」に立ち寄りました。原
発避難者で現在は町内に住み、東日本大
震災被災者支援プログラム「水曜喫茶」
に毎回来られるKさんによる事故当時
から現在までの10数分の証言は、大き
なインパクトを与えました。原発爆発事
故後、最終となった新地町がん小屋仮
設住宅に来るまで避難に避難を重ねるこ
と8回は、一行にはよほど痛切でした。
29日朝の礼拝説教でパチャオ主教はこ
れに言及しました。原発事故に翻弄され
た、故郷を追われた人の痛みと心労を
強烈に感じ取ったのでした。

ある方は、来年も必ず再び被災地を訪
ねたいと要望しました。海外の間は訪
問し見るべきだとの意見でした。私
たちは、それらの発言を受け止めて、
原発事故被災者と私たちと共に、を
求め続けるあり方を要求されたので
す。



海外から参加したゲストと共にフィールドワークの様子

「原発のない世界を求める国際協議会に参加して」

— 神様からいただいた命を大切にするために —

沖縄教区 小禄聖マタイ教会 エリザベツ 真栄城美子

自然災害の恐ろしさをみせつけられた8年前の東日本大震災。防災に対する人間の力には限度があるのか?と疑問と悲しみでいっぱいでした。さらにその直後に起こった原子力発電所の事故。自然災害がきっかけだとすれば否定はできませんが、広大な被害は発電所がなければ起こらなかったことではないでしょうか。

30数年前のチェルノブイリの原発事故「その土地には人間は住めなくなる」という報道に衝撃を受けましたが、実態はよくわからないまま遠い地のこととしてとらえ話題にもしなくなったように思います。その事故を語り継ぐことなく高エネルギーである原子力に頼る生活を私たちはしてきたのです。

大量の放射性物質の拡散による被害に8年余も苦しんでいる地域の方のことを私たちは忘れてはなりません。

私は2014年から郡山市にあるセントポール幼稚園に保育支援として関わっています。子どもたちと先生方にリフレッシュする機会を作ろうという趣旨があります。「一緒に歩こう!プロジェクト・パートII」のもと沖縄教区から職員派遣のプログラムですが、お手伝いをする私が毎回子どもたちからパワーをもらっていることに感謝する次第です。セントポール幼稚園の子どもたちは素直で明るくけなげです。先生方は一所懸命保育を

しています。室内あそびが多い以外なら普通の幼稚園です。ただ親御さんは将来のことを考えると不安になるようです。

2014年に出会ったあるお母さんが「悩み苦しみながらこの地で生活をしていくことを決めました。将来の心配がない訳ではない。今は何もわからない我が子が大きくなって、恨みごとを言われられないか」と。私はこのお母さんの言葉が忘れられません。特定の地域ではなくこの言葉が今の日本の現状だと思います。

3.11原発事故の後にドイツは原発をやめました。日本は再稼働や、それに向けての準備が進められています。協議会ではミランダシュラーズさんからエネルギー政策の大転換をしたドイツの実状を伺いました。エネルギーの転換、脱原発。

私たち人間は神様からいただいた命を脅かすものになるものを作ることに加担してはいけません。

この度、同室になったお三人とは初対面でしたがそれぞれの教会の話題から財政的なことそして、光熱費の話題になりました。地域によってかなり差があるものの贅沢な楽な生活に慣れてきた事を反省。日頃から省エネについて意識し、行動することの必要性を大いに感じました。

感謝

東日本大震災から国際協議会までの歩み

- 2011年 3月 11日** **M9.0の大地震と大津波の発生**
- 2011年 3月 12日** **東京電力福島第一原子力発電所事故発生**
被災地にある各地の教会に災害対策室が置かれ、信徒の安否確認と緊急支援の動きが始まる。
- 2011年 3月** 国内外からお祈りと支援が寄せられ始める。
神戸教区による3ヶ月間の東日本大震災緊急救援活動が始まる。同年6月に終了。
- 2011年 5月** **日本聖公会東日本大震災被災者支援「いっしょに歩こう！プロジェクト」開始**
原発事故による被災者への支援では、小名浜聖テモテ教会に「小名浜聖テモテ・支援センター」、福島県新地町に「被災者支援センターしんち」を開設。東京電力福島第一原子力発電所の爆発により、故郷を追われ、仮設住宅に住む人々を支援。未曾有の事故によって放射能がまき散らされ、大気汚染、海洋汚染、大地や植物に堆積する汚染が今後どのように拡がっていくのか予想さえできなかった。避難を強いられた人、自主的に避難をした人、さまざまな事情で避難をしない人、できない人。それぞれ違う立場にある人々の思いに、どのように寄り添い、どのように共に歩むのか、模索し続けた。

九州教区の協力による長崎県高島や、仙台市内、新潟県山古志での保養支援「リフレッシュ・プログラム」開始。
- 2012年 3月 11日** **主教会メッセージ『東日本大震災から1周年を迎えて』を配布**
- 2012年 5月 23日** **日本聖公会 第59（定期）総会**
「原発のない世界を求めて—原子力発電に対する日本聖公会の立場—」を決議。
- 2012年 9月** 「つきしまキッズデイ」が、東京教区月島聖公会によって立ち上げられ、福島県から自主避難をして来た家族の支援を開始。
- 2012年 9月 14日～17日** **日本聖公会 宣教協議会**
「いっしょに歩こう！プロジェクトからの報告」として、長谷川清純司祭と越山健蔵司祭より、被災者や被災地の状況、そして様々な支援活動が報告された。この協議会で、「これからも、東日本大震災の被災者に寄り添い、ともに歩み、祈り続けます」と、改めて確認された。

2013年6月

「いっしょに歩こう！プロジェクト」活動終了

「いっしょに歩こう！プロジェクトパートII」へ活動引き継ぎ

「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」開始

リフレッシュプログラムを岐阜県や沖縄県でも開始。福島県内幼稚園の園外保育支援、母親のための放射能から子どもを守るための講座やコンサートなどのイベント、幼稚園の教職員のための保養プログラムなどを実施。仮設住宅に暮らす人々への支援を継続。

- ・ ニュースレター『命の川』発行（全10号）。
- ・ 『原発問題についてのQ&A』を日本語、韓国語、英語で発行。

2014年10月23日

日韓聖公会宣教協働30周年記念大会

共同声明にて今後の宣教協働の課題として、以下を決議。

『両聖公会は、世界聖公会の「宣教の5指標（The Five Marks of Mission）」を共有し、そのひとつである「創造秩序の保存と地球生命の回復と維持」のため、原発と放射能（核エネルギー）問題の深刻さを認識し、信仰の課題として取り組む。』

2016年5月

「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」の働きを「正義と平和委員会・原発問題プロジェクト」に移行

- ・ ニュースレター『いのちの海と空と大地』発行。

2018年4月

ミランダ シュラーズ師講演会開催協力（東京）。

2018年6月5日

日本聖公会 第64（定期）総会

『決議第29号（第28号議案可決）「原発のない世界を求める国際協議会」開催の件』を決議。

原発のない世界を求める国際協議会実行員会を発足。

2019年5月28日～31日 「原発のない世界を求める国際協議会」開催

東日本大震災から1周年を迎えて

2012年3月11日(日)

日本聖公会主教会

イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。

(ヨハネによる福音書 21 章 12 節)

東日本大震災から1周年を迎えた今日、日本聖公会に連なる全ての人たちがそれぞれの教会に集い、心を合わせて、今なお困難な状況下におかれている被災者のため、被災地の一日も早い復興のため、そして大震災犠牲者のために、祈りをお献げくださいますようお願いいたします。

1年前の今日、東日本を襲った大地震は、多くの家屋を倒壊させ、大地震によって引き起こされた津波は、東日本の海岸線を襲い、家屋や工場を押し流し、多くの尊い命を奪い去りました。津波に襲われた福島第一原子力発電所は、制御能力をすべて失うという最悪の事態に陥り、原子炉内の核燃料融解、原子炉建屋の水素爆発による破壊によって大量の放射性物質が空気中に飛散し、土や海、建物を汚染し、住民は避難を余儀なくされました。1周年を迎える今も、多くの被災者が恐怖と不安におびえながら、仮設住宅や避難先での生活を送っておられます。

この大震災に対して、日本聖公会は、大震災発生から1か月後、被災者支援のための方策と救援物資集積場設置を協議し、仙台に本部を置く、「いっしょに歩こう!プロジェクト」を設立しました。「いっしょに歩こう!プロジェクト」は、東北教区被災者支援組織と協働しながら、南北500キロ以上の、広範囲にわたる被災地域の主だった地点に拠点を設け、被災者支援、地域社会復興のための活動を開始しました。教区・教会・日本聖公会関係団体は、このプロジェクトの働きを支援し、今日まで、様々な活動を実施してきました。この活動のために捧げられました皆様からの祈り、献金、救援物資、ボランティアの働きなどに対して心から感謝いたします。

今回の大震災では、日本聖公会各教区・関係諸団体だけではなく、海外の聖公会からも、多額の義捐金が寄せられました。その義捐金は、大震災被災者支援活動のため、犠牲者のご遺族、家屋が全壊・半壊した日本聖公会関係者のお見舞いのため、被害を受けた教会・関係施設の復旧費用のためなどに有効に用いられております。

東日本大震災は私たちに多くの教訓を残しましたが、その中でも今私たちが避けて通れない問題があります。世界で唯一の被爆国である日本は、原爆の悲惨さと核兵器廃絶を世界に訴え続けてきました。その一方で、原子力の平和利用の名のもと、原子力発電所が日本各地に建設され、より多くの電

力を消費することで、私たちは、快適で文化的な生活を享受してきました。しかし、東日本大震災は、原子力の平和利用を標榜した原子力発電の安全神話を粉々に打ち砕きました。今後は、原子力に依存するエネルギー政策の転換と、私たちのライフスタイルの転換が強く求められています。

二千年前、人生における師と仰いだイエスが十字架上で悲惨な死を遂げ、失意のどん底に落とされた弟子たちはガリラヤに行き、以前漁師であったペテロが先頭に立って、夜、漁に出かけます。しかし、魚は1匹も捕れませんでした。無力感と絶望感に襲われ、朝、陸に戻ろうとした時、イエスが岸辺でたき火を起し、焼いた魚とパンを用意して、弟子たちが岸辺に戻るのを待っておられたのです。弟子たちは、その人がイエスだとは気づきませんでした。イエスが示す場所に網を入れますと、おびたしい魚が網にかかりました。岸辺での、復活したイエスとの再会は、今までとは全く違った生き方を弟子たちにもたらしめました。復活のイエスは弟子たちに、どのような状態におかれても主は彼らを決して見放さず、生きるために必要なものを常に備えてくださることを示し、愛の絆で結ばれた人びとによる新しい世界を創造するよう、弟子たちに命じたのです。

東日本大震災から1年、大地震・大津波で打撃を受けた町々、村々では復興への槌音もまだまだかすかにしか聞こえてきません。そして放射能汚染地域の被災者には、いまだに解決への見通しは立っていません。被災した方々、また、身近な人を失った方々が穏やかな生活を取り戻すには、さらに多くの歳月と困難を伴うことになるでしょう。そのような苦しみの中にあっても、神様がお一人お一人に寄り添って心と体をお支えくださり、生きる勇気と希望が与えられますよう切に祈ります。

東日本大震災1周年にあたり、私たち教会に集う者が、被災地での神様のお働きを担っていく者として、引き続き、被災者支援と地域社会復興のために、より充実した活動を続けていくことを改めて心に刻みたいと願います。

原発のない世界を求めて

—原子力発電に対する日本聖公会の立場—

東日本大震災における東京電力福島第一原子力発電所の事故は、周辺地域のみならず広範囲にわたって放射性物質を飛散させ、人々のいのちを脅かすとともに、原子力発電そのものが危険きわまりないものであるという事実を私たちに突きつけました。被爆体験を持ちながらも、これまで原子力発電と放射能の問題について十分な認識を持つことができなかった私たち一人ひとりにとって、それは神からの警告であるといっても過言ではありません。

しかしそもそも、原子力発電そのものが、燃料採掘の段階から廃棄物処理にいたるまで、弱い立場に追いやられている人々に犠牲を強いるものであり、たとえ発電所の事故がなくても、それは神から与えられたいのちを脅かすものであることは否定できません。また、人々の犠牲の上に成り立っているという点で、イエス・キリストの教えに反するものだと言うことができます。

にもかかわらず、私たちは「原子力の平和利用の名のもと、原子力発電所が日本各地に建設され、より多くの電力を消費することで（…）快適で文化的な生活を享受してきました。しかし、東日本大震災は、原子力の平和利用を標榜した原子力発電の安全神話を粉々に打ち砕きました。今後は、原子力に依存するエネルギー政策の転換と、私たちのライフスタイルの転換が強く求められています。」（2012年3月11日・日本聖公会主教会メッセージ）

日本聖公会は、その深刻な反省に立って、改めて、次のような点で原子力発電には重大な問題性があると考えます。

神によって造られたいのちを脅かす

福島第一原子力発電所事故は、生きとし生けるものすべてのいのちを脅かしています。とくに、子どもの被曝は、将来の世代の健康を蝕んでいます。処理技術もないまま大量に生み出された放射性廃棄物は、長期にわたって人々のいのちにとって脅威になり続けます。しかも、日本のような世界有数の地震多発国における原子力発電所の存在は、将来にわたって事故を引き起こす危険性がきわめて高いものであるということは誰も否定できません。

さらに、海外のウラン鉱の採掘・精錬においても、先住民をはじめ労働に携わる人々を被曝させ、国内では原子力発電所の維持・管理にあたる原発労働者のいのちを危険に晒しています。また、原子力発電所から生み出される大量のプルトニウムは、直ちに核兵器の原料となりうるもので、原子力の平和利用と軍事目的とは表裏一体の関係にあります。また、戦争や紛争によって外部からの攻撃に晒された場合、危険性はきわめて大きなものとなります。

神によって創造された自然を破壊する

神は天地万物を創造され、最後に人間を創造されて、被造物すべてを保全する責任を委ねられました（創世記第1章）。原子力発電は、神による委託の範囲を超えて自然を破壊する行為です。長い時間を経て安定した状態にされた放射性物質を発掘し、自然界には少量しか存在しないウラン235を濃縮して核分裂を起こすことによって巨大なエネルギーを引き出す原子力技術は、自然生態系の安定

性を破壊し、重大な結果を引き起こしています。また、原子力発電は二酸化炭素を排出しないクリーンなエネルギーだとされてきましたが、実際には精錬の過程や維持管理において化石燃料を用いて大量の二酸化炭素を排出するのみならず、二次冷却水の温排水によって莫大な熱を環境に排出しているのです。

さらに原子力発電によって生み出された大量の廃棄物は、安全に処理することも保管することもできず、未処理のまま将来の世代に残されることとなります。それらの廃棄物の処理に対する責任は私たちにあります。

私たち一人ひとりが、つくられたすべてのものを見て「良しとされた」神のもとに立ち帰らなければなりません。

神によって与えられた平和な暮らしを奪う

原子力発電所は「絶対に安全だ」というふれこみのもとで、経済的疲弊を余儀なくされてきた地域に押し付けられてきました。それは雇用を創出し繁栄をもたらすと宣伝されてきましたが、実際には地域間格差を更に拡大しました。今回の事故によって周辺住民は住む家を失い、職場を失い、漁業や農業などの仕事も奪われ、生活基盤が確立できないために、子どものいのちを守るための避難もままなりません。さらに、広範囲の人々が、放射能汚染の脅威のために不安定な生活を余儀なくされ、精神的なストレスも深まっており、家庭崩壊さえもたらします。このような状況も私たちは深刻に受け止めていかなければなりません。

原発のない世界を求めて

このような点を踏まえて、日本聖公会において信仰生活を営む私たちは、まず、現在の事故において脅かされている人々、そしてこの地上のすべてのいのちを守るために祈り、イエス・キリストに従う者として公に発言すべきだと考えます。

なによりも、今回の原子力発電所事故がもたらした破壊的結果を、日本という国が責任をもって収束させるように求めるとともに、私たち一人ひとりがその責任を分かち合います。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」(マタイによる福音書第7章12節)というイエス・キリストの教えは、私たちが原子力発電所の危険性と被曝を人口過疎地に押しついたり、原発を他国に輸出することによって、その地に新たな危険性を創出したりすることを許さないからです。

私たちは教派・宗教を超えて連帯し、原子力発電所そのものを直ちに撤廃し、国のエネルギー政策を代替エネルギーの利用技術を開発する方向に転換するように求めます。そのために、利便性、快適さを追い求めてきた私たち自身のライフスタイルを転換することを決意します。苦しみや困難を抱える人々と痛みを分かち合い、学び合い、愛し合い、支え合って生きる世界を目指します。

神がこの地を祝福し、地の平和を取り戻してくださいますように。

2012年5月23日
日本聖公会第59（定期）総会

日本聖公会第 64（定期）総会・2018年6月

決議第 29号（第 28号議案可決）

「原発のない世界を求める国際協議会」開催の件

提出者 正義と平和委員会

「原発のない世界を求める国際協議会」を下記のように開催すること。なお、実行委員会を組織し、その実施にあたらせること。

記

名 称：原発のない世界を求める国際協議会

目 的：脱原発、脱核に向けた共同への道を探る。国内外のネットワークの強化・構築。共同声明の作成・発信。オプションとして福島フィールドトリップ、証言など。

日 程：2019年5月を目途に開催する。

人 選：正義と平和委員会と管区事務所主事会に委ねる。

費 用：参加費（一人3万円）と一緒に歩こうパートⅡ資金より支出。

【提案理由】

2012年日本聖公会第 59（定期）総会決議第 13号「原発のない世界を求めて～原子力発電に対する日本聖公会の立場～」に基づき、近隣諸国との共同で、総会決議の具体化のために開催する。2011年3月11日の東日本大震災によって発生した東京電力福島第一原子力発電所事故による被害に対し、日本聖公会は「いっしょに歩こう！プロジェクト」「いっしょに歩こう！プロジェクトパートⅡ」「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」「正義と平和委員会・原発問題プロジェクト」と組織を変えながら、その支援活動を継続してきた。

日本聖公会の総会決議としての脱原発を求めることはさらに重要なこととなっている。そのために国際協議会を開催し、情報交換、いのちを脅かす原子力発電の課題、行動指針などを協議し、風化への歯止めとし、いのちを尊ぶ社会の構築へと向かいたい。

協議会収支報告

2018年1月1日から2019年12月31日まで

【支出の部】		決算額
		円
1	実行委員会費 会議費、作業部会、下見	3,051,796
2	事務局費	322,116
	アンケート関係	49,885
	ハンドブック関係	132,170
	広報関係（ポスター、チラシ等）	29,574
	式文関係 日本語版 100部、英語版 40部、	19,250
	パネル関係	3,386
	事務用品費、印刷代、通信費、雑費	57,151
	傷害保険料	30,700
3	海外ゲストプログラム	736,535
4	講師感謝、会場感謝、ガイド感謝	139,000
5	スタッフ旅費交通費 車両提供感謝を含む	586,500
6	参加者旅費交通費	949,826
7	交流会	48,450
8	茂庭荘 宿泊、会議室と設備使用、食事、会議ペットボトルとコーヒー、 バス送迎、被災地巡りバスチャーター	2,748,084
9	その他支出	0
10	閉会礼拝信施金～「東北ヘルプの働きのため」	69,260
11	報告書作成費用一式および送料として	400,000
20	支出合計	円 9,051,567

【収入の部】		決算額
		円
31	参加費収入	930,000
32	献金収入	127,253
33	その他収入	0
34	閉会礼拝信施金	69,260
35	原発問題プロジェクト資金より受入	7,925,054
40	収入合計	円 9,051,567



あとがき

原発のない世界を求める国際協議会から歩み出す

司祭 フランシス 長谷川 清純

原発のない世界を求める国際協議会
実行委員長

東日本大震災が起きて、東京電力福島第一原子力発電所が爆発事故を起こして8年経った時に、今回の協議会を開催出来ましたお恵みに、私はまず感謝致します。日本聖公会のみならず、海外および諸教派の方々と共に被災教区の仙台に集えましたことは、大きな意義があったと確信しています。会議だけでなく、海外からの参加者は被曝地である福島県内を、さらに半数以上の参加者は津波被害に遭った宮城県内の被災地を、実際に歩き、見て、触れられたのは、重い体験になったものと思います。

それらの体験と期間中の講演と発題、また礼拝における説教は思考を刺激し、2回のグループシェアリングでは率直な意見交換がなされ、次いで時間が足りないほどに熱心な討論の後に、最終的に声明が採択されました。それは、故郷を追われ避難生活を強いられている人たち、帰宅困難な人たち、被災前と同じ場所で暮らす人たち、様々な人々の複雑な心境に思いを馳せるとき、言葉で表現することの難しさを痛く味わい知るものでもありました。そのことも含め原発事故から派生する様々な課題を整理し、行動指針とするための貴重な資料になれば、本報告書は意味を見出すでしょう。

さて、声明を受け取った私たち日本聖公会の信徒・聖職は、ここからの生き方が信仰的に問われていきます。地球に生きる私たちの生き方・生活そのものが根本的に問われているのだと思います。私たちは、声明に盛り込まれた聖公会の宣教の5指標の一つ、「被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること」に具体的に取り組んでいくように促されています。

昨年9月6日に発生した北海道胆振東部地震によって引き起こされたブラックアウトで、全道295万戸が停電しました。今年9月9日、千葉県に上陸した台風15号によって93万軒が停電し、9月28日現在でも110軒が復旧していません。これらの被害から考えると、電源は小分けされた地産地消型に移行するようにとの啓示のようです。ミランダ シュラーズ博士が紹介されたドイツの地産地消に移行した住民の、信念と推進力と笑顔が繰り返し私の目に浮かんできます。

個人レベルではもちろん、教会や家庭においても、地球環境に配慮する視点で全ての物事を考えていくように促されています。ミランダさんが力説された省エネが一番です。電力もそうですがプラスチック消費についても削減が求められており、飲料水も食料も無駄遣いなく分配が求められています。今や、私たちそれぞれの今後の具体的な歩みが期待されています。世界中の人々と教会との連帯も期待されています。「いのちの尊さを確認し、そのいのちを生きるために」と人類全体が呼び出されたと、私たちが宣べ伝えていくように神様に命じられた、と私は感じています。

最後に、とても実り多き本国際協議会を開催するに当たり、ご尽力くださいましたすべての同労者・関係者に、心の奥深くから感謝申し上げます。有り難うございました。

(2019年9月記)

原発のない世界を求める国際協議会 報告書

2020年3月31日発行

編集：報告書制作部

発行：日本聖公会 原発のない世界を求める国際協議会 実行委員会

住所：〒162-0805 東京都新宿区矢来町65 日本聖公会管区事務所

電話：090-1983-7244（池住 圭）

メール：ikezumi-nyc.chubu@nssk.org

各言語の和訳は、国際協議会翻訳グループがその任にありました。

